

## 設置の趣旨等を記載した書類

国立大学法人埼玉大学大学院理工学研究科



## 目 次

1.	設置の趣旨及び必要性	
1-1	社会的な背景及び設置の趣旨	p. 1
1-2	設置の必要性	p. 4
1-3	改組の目的	p. 5
1-4	専攻及び教育プログラムの特色	p. 8
1-4-1	養成する人材像	p. 8
1-4-2	学生定員	p.16
2.	研究科、専攻等の名称及び学位の名称	
2-1	研究科、専攻等の名称	p.19
2-1-1	研究科名	p.20
2-1-2	専攻名	p.20
2-1-3	プログラム名	p.20
2-2	学位の名称	p.21
3.	教育課程の編成の考え方及び特色	
3-1	教育課程の編成とその特色	p.21
3-2	理工学研究科博士前期課程の教育目的と教育目標	p.25
3-2-1	教育目的	p.25
3-2-2	教育目標	p.28
3-3	修了認定・学位授与の方針	p.32
3-4	ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)	p.33
3-5	カリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針)	p.36
4.	教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件	
4-1	教育方法、履修指導	p.43
4-2	研究指導	p.44
4-3	博士前期課程の修了要件	p.44
4-4	学位論文審査	p.45
4-5	研究倫理審査体制	p.45
4-6	6年一貫型教育のタイムテーブル	p.46
4-7	履修モデル	p.47
4-8	企業実習の具体的計画	p.56
4-9	社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	p.56
5.	基礎となる学部との関係	p.57
6.	取得可能な資格	p.58
7.	入学者選抜の概要	
7-1	入学者選抜の基本方針	p.59

7-2	博士前期課程のアドミッション・ポリシー(入学者受入れの方針)	p.60
7-3	各専攻及び教育プログラムのアドミッション・ポリシー	p.60
8.	教員組織の編制の考え方及び特色	
8-1	組織の概要	p.63
8-2	教員配置	p.65
9.	施設・設備等の整備計画	p.67
10.	管理運営	p.69
11.	自己点検・評価	p.70
12.	情報の公表	p.71
13.	教育内容等の改善のための組織的な研修等	p.71

## 1 設置の趣旨及び必要性

### 1-1 社会的な背景及び設置の趣旨<sup>1)</sup>

内閣府総合科学技術・イノベーション会議の審議を経て政府により策定された第5期科学技術基本計画では、現在の社会情勢として、「情報通信技術(ICT)の進化等により、社会・経済の構造が日々大きく変化する「大変革時代」が到来し、国内外の課題が増大、複雑化する中で科学技術イノベーション推進の必要性が増している」と認識されている。また、同基本計画では、**i)** 未来の産業創造と社会変革に向けた新たな価値創出の取組、**ii)** 経済・社会的な課題への対応、**iii)** 科学技術イノベーションの基盤的な力の強化、**iv)** イノベーション創出に向けた人材、知、資金の好循環システムの構築、の4つを柱と位置づけている。これらの柱の中で、**ii)** では、「科学技術イノベーションの基盤的な力の強化」が謳われており、「科学技術イノベーションの根幹を担う人材の力」や「イノベーションの源である多様で卓越した知を生み出す学術研究や基礎研究」が重要であると述べられている。そのためには「若手人材の育成・活躍促進と大学の改革・機能強化を中心に、基盤的な力の抜本的な強化に向けた取組」を進める方針が示されている。また、**iv)** では、「イノベーション創出に向けた人材、知、資金の好循環システムの構築」が謳われており、「国内外の人材、知、資金を活用し、新しい価値の創出とその社会実装を迅速に進めていくことが、今後の我が国の競争力を左右する。」との認識の下、「企業、大学、公的研究機関の本格的連携とベンチャー企業の創出強化などを通じて、人材、知、資金があらゆる壁を乗り越え循環し、世界を先導する我が国発のイノベーションが次々と生み出されるシステムの構築を進める。」との方針が述べられている。これらの方針の中に記載されている取り組みの中で、我々国立大学の理工系学部・研究科が直接的かつ強力に推進すべき重要な取り組みとして、“科学技術イノベーションの根幹を担う人材”及び“イノベーションの源である多様で卓越した知を生み出す学術研究や基礎研究”がある。

このような背景から平成30年度の工学部改組において、学科横断型の文理融合プログラムである「イノベーション人材育成プログラム」を導入し、社会に関わる課題の分析・理解、工学的課題の設計・デザイン、課題解決に向けた技術総合・システム化、異分野協働での社会実装といったプロセスに取り組む工学系人材の育成を図ってきた。

次に文部科学省の取り組みとの関係についてみると、文部科学省科学技術・学術審議会に設置された総合政策特別委員会において、第6期科学技術・イノベーション基本計画策定を見据えた検討が行われ、令和2年3月には「知識集約型の価値創造に向けた科学技術イノベーション政策の展開－Society 5.0の実現で世界をリードする国へー」(最終取りまとめ)が報告された。本取りまとめでは国立大学法人及び国立研究開発法人に求める役割として、「価値創造の源泉となる基礎研究・学術研究拠点・学術研究・人材育成拠点」、「産学官のセクター間の知の循環の中核拠

---

<sup>1)</sup> 「」内は内閣府HP(<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html>)及び第5次科学技術基本計画本文(同HPよりダウンロード可能)より引用。

<sup>2)</sup> 特集「知識集約型の価値創造に向けた科学技術イノベーション政策の展開(最終取りまとめ)」について、文部科学省科学技術・学術政策局企画評価課、文部科学広報、No.246, Vol.5, 2020.

点]、「国際頭脳循環の集積拠点」、「データ集積・分析拠点」を挙げている。さらにそれらを実現するための具体的施策として、「産学連携活動の進化」、「カーブアウトベンチャーの創出を促進」、「経営資源の戦略的活用のための規制緩和と現場の意識改革」、「法人の多様性・強み・特色を生かした地域の新たな価値創造」等が挙げられている。<sup>2)</sup>

さらに、令和3年3月に第6期科学技術・イノベーション基本計画が閣議決定され、Society5.0の実現に向けた科学技術・イノベーション政策や科学技術・イノベーション政策の推進体制の強化が掲げられている。Society5.0の実現に向けた科学技術・イノベーション政策においては、国民の安全と安心を確保する持続可能で強靱な社会への変革として、サイバー空間とフィジカル空間の融合による新たな価値の創出、地球規模課題の克服に向けた社会変革と非連続なイノベーションの推進、レジリエントで安全・安心な社会の構築、価値共創型の新たな産業を創出する基盤となるイノベーション・エコシステムの形成、様々な社会課題を解決するための研究開発・社会実装の推進と総合知の活用などについて、具体的な取組が示されている。これら一連の報告書では知の拠点としての大学の役割について詳細に述べているが、一方でSociety 5.0の目指す社会や人類社会が有限の資源の利用を最適化し持続的に発展するための開発目標であるSDGsを実現するためには、科学技術イノベーションにより社会課題を解決し、世界の持続的発展へ貢献することが可能な人材の育成が急務である。また、このような人材の育成こそが、本来、国立大学法人に求められる最も重要なミッションであることは明らかである。

本学では、平成25年に制定した「国立大学改革プラン」<sup>3)</sup>における機能強化の方向性を踏まえて、第3期中期目標・中期期間において、“地域活性化の中核的拠点”を目指し、“地域のニーズに応じた人材育成拠点”及び“イノベーション創出による地域活性機関”を選択し、埼玉大学 ACTION PLAN 2016-2021(図1)<sup>4)</sup>を策定した。文系、理系、教員養成系の多様な学部・研究科が、1キャンパスに集まる利点を生かして、大学としての普遍的な知の府としての基盤強化と、地域活性拠点として首都圏埼玉に根ざした本学の個性化を目指して、3つの戦略と11の取組を策定し、

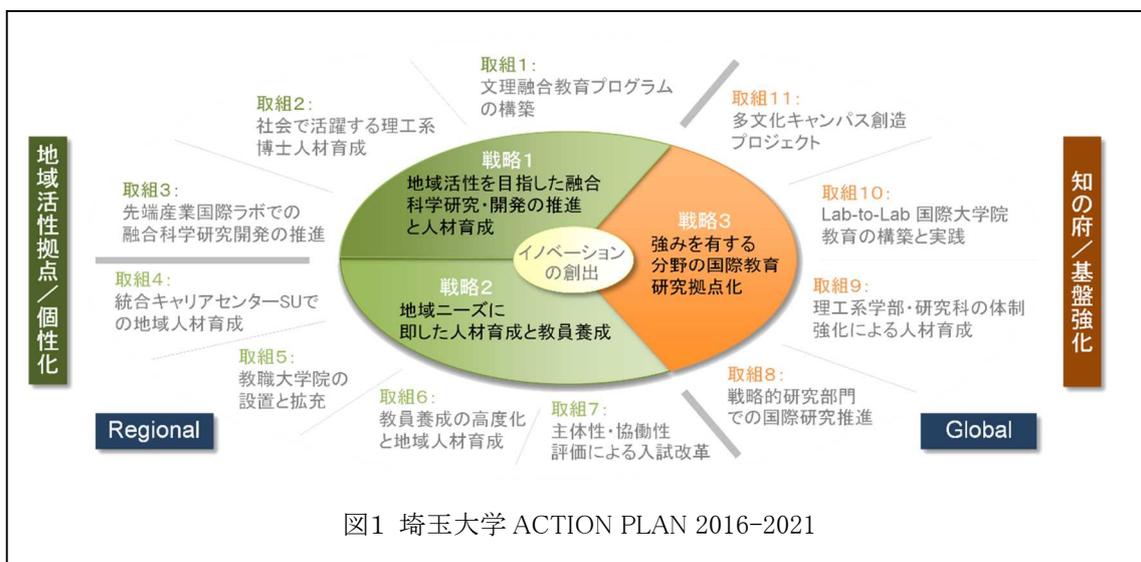


図1 埼玉大学 ACTION PLAN 2016-2021

改革を進めてきた。機能強化の戦略的方向性を示す3つの戦略として、具体的には【戦略1】地域活性を目指した融合科学研究・開発の推進と人材育成、【戦略2】地域ニーズに即した人材育成と教員養成、【戦略3】強みを有する分野の国際教育研究拠点化、を掲げている。

これらの戦略の中で、理・工学部及び理工学研究科における教育に関連した取組としては、【戦略1】における[取組1]文理融合教育プログラムの構築、[取組2]社会で活躍する理工系博士人材の育成機能強化、及び【戦略3】における[取組9]理工系学部・研究科の人材育成機能強化、である。特にこれら3つの取り組みは本改組に繋がる内容である(詳細については、“1-2設置の必要性”参照。)

本学が立地する埼玉県は、産業大分類従業者数の平成28年度における製造業従業者数は、46万人で、全国シェア5.2%、全国順位4位であった。建設業従業者数は、16万人、全国シェア4.5%、全国順位第6位、情報通信業従業者数は、2.1万人、全国シェア1.3%、全国順位第10位となっている。また、近隣都道府県の状況を併せて見ると、製造業の首都圏における従業者数は、東京都59万人、神奈川県44万人、千葉県24万人となり、埼玉県を含む1都3県を合わせると174万人にもなる(全国シェア20%)<sup>3)</sup>。このように首都圏は、国内における製造業従業者数の20%を占める地域であり、この傾向は今後も大きく変わることないと考えられ、将来においても首都圏の産業界に優秀な理工系人材を安定して輩出することは、埼玉県の産業界を支えることのみならず日本の産業界を支えることにも繋がり、本学の理工系学部・研究科の非常に重要なミッションである。

このような観点から、令和元年度における本研究科博士前期課程修了生の就職先業種をみると(図2)、修了生の81%が製造業、情報通信業、建設業に就職しており、本研究科が産業界を支える優秀な人材をコンスタントに輩出していることが分かる。加えて、埼玉県を初めとする公的機関や中・高等学校の教育機関へも優秀な人材を輩出している。

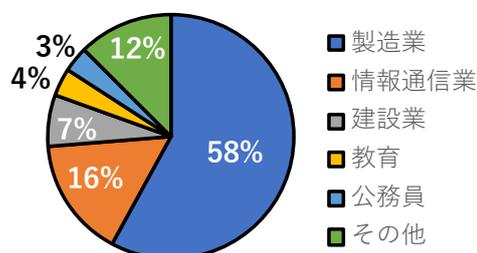


図2 令和元年度 理工学研究科博士前期課程修了生の進路

このように首都圏埼玉に位置する本研究科は、産業界に多彩な人材を輩出することで地域と産業界に対して貢献してきている。一方で今後は第6期科学技術・イノベーション基本計画等で求められる Society 5.0、SDGs といった社会構造の大きな変化を牽引できる人材の育成が必要とされており、従来の専門分野を深く掘り下げる教育に加えて、新しい時代に即した柔軟かつ適切な教育プログラム導入の重要性が求められている。

3) 「国立大学改革プラン」、文部科学省、平成25年11月。

([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/houjin/\\_icsFiles/afeldfile/2019/06/17/1418116\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/_icsFiles/afeldfile/2019/06/17/1418116_01.pdf))

4) 埼玉大学 ACTION PLAN 2016-2021.

([http://p-office.saitama-u.ac.jp/action\\_plan/index.html](http://p-office.saitama-u.ac.jp/action_plan/index.html))

## 1-2 設置の必要性

本研究科では、平成 18 年度の大学院重点化による改組により、それまで理学部、工学部に在籍していた教職員の所属を理工学研究科に一本化した。これにより従来の学科、専攻にとらわれず柔軟な教育活動が可能となった。

その後、産業界からの旺盛な研究者・高度技術者養成の要望に応えるために、本学教育学部入学定員を原資にした学内資源再配分により、博士前期課程の入学定員を平成 26 年度及び平成 28 年度に、それぞれ 50 名増員した。これにより従来の入学定員 308 名から 408 名となり、現在に至っている。この入学定員増は、先に説明した[戦略3][取組9]理工学系学部・研究科の人材育成機能強化を具体化したものである。

さらに平成 30 年度には、産業界のさらなる人材養成に応えるために工学部の改組を行い、7学科(機械工学科、電気電子システム工学科、情報システム工学科、応用化学科、機能材料工学科、建設工学科、環境共生学科)を、教育プログラムの根幹を成す学問分野に基づいた基幹5学科(機械工学・システムデザイン学科、電気電子物理工学科、情報工学科、応用化学科、環境社会デザイン学科)に再編するとともに、入学定員を 440 名から 490 名に増員した(図3)。この工学部改組では、「社会に関わる課題の分析・理解、工学的課題の設計・デザイン、課題解決に向けた技術統合・システム化、異分野協働での社会実装といったプロセスに取り組む工学系人材を育成するため、学科横断型の文理融合教育プログラム「イノベーション人材育成プログラム」を導入した。イノベーション人材育成プログラムは、本学の ACTION PLAN[戦略1][取組1]文理融合教育プログラムの構築、に基づくものである。イノベーション人材育成プログラムでは、工学部全学生が新たに開設した科目群である、“イノベーション科目(代表的科目:技術者のための産業経営論、産業創成論、イノベーションとマーケティング、課題解決型演習等)”を6単位以上の修得を義務づけている。一連の科目の設計・実行においては、クロスアポイントメントを活用して雇用した実務家教員が主に携わり、これまでの大学研究者教員では難しかった産業界との連結を強く意識した教育プ

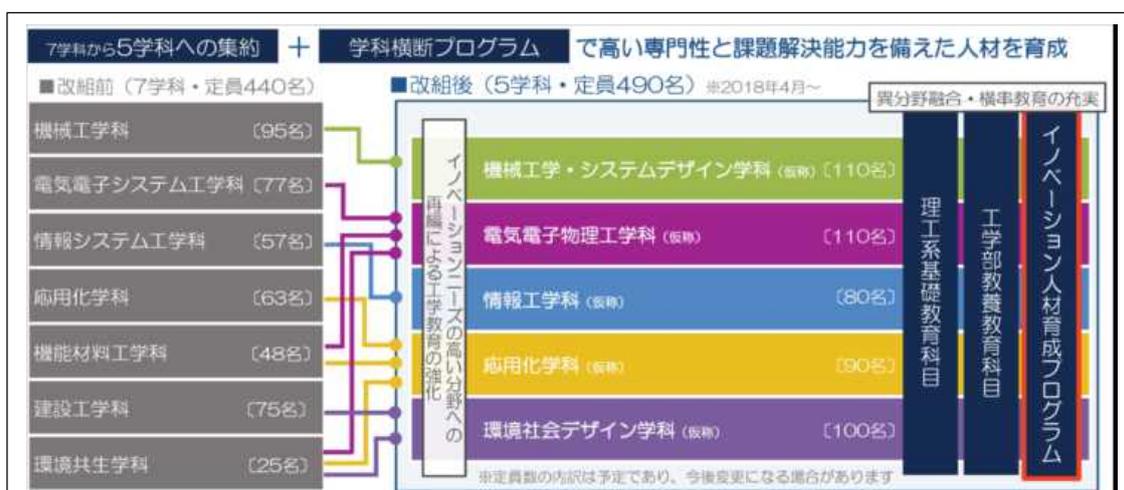


図3 工学部改組及びイノベーション人材育成プログラム導入の概要

5) 文中に用いた数値は以下の資料から引用した。“埼玉県の産業と雇用のすがた(令和元年度版)”

プログラムを構築・運用できている。

持続可能な社会の構築が求められている現代において理工系人材へのニーズが多様化する中、工学部では平成 30 年度の改組によりイノベーション人材の育成を目指した教育プログラムを導入した。一方で、博士前期課程は入学定員増加を経てはいるが、平成 18 年度改組から十数年経過しており、これからの大学院教育を鑑みると、社会のニーズに合わせた新しい教育プログラムの構築が望まれている。特に博士前期課程においては理学系・工学系を問わず科学技術イノベーションを牽引しうる高度職業人の育成を目指した新しい教育プログラムが必要とされており、従来から実施してきた高い専門性を備えた研究者・高度技術者を育成する教育プログラムに加えて、現代的課題を異分野協働で解決しうる研究者・技術者、データサイエンティストとしての素養を備えた研究者・高度技術者及び博士後期課程へ進学して日本の基礎研究の発展に貢献しうる研究者を目指す人材を育成するための教育プログラムが必要であるとの結論に至った。加えて、SDGs に代表される21世紀の到達すべき目標に対して、科学技術の側面だけでなく人文・社会的な視点を持ってリーダーシップを発揮できる人材の育成も必要との結論に至った。

本改組では本研究科博士前期課程を現行の**6専攻**から**5専攻**へ改編する。改編の基本的な考え方として、大学院教育では、各々の専門分野に関する深い知識と実行力を備えた研究者や高度技術者の養成が本質的な目的であり、所属する専攻で学べる専門分野及びそのカリキュラムが学生から分かり易く見えることを重視して、生命科学、物質科学、数理電子情報、機械科学、環境社会基盤の5つの分野を柱とした5専攻に改編する。

### 1-3 改組の目的

本改組の第一の目的は、これまで本研究科で進めてきた教育・研究の理工融合をより一層発展させることである。研究活動を主体としてみると、理学系は基礎研究、工学系は応用研究という色分けで議論されることが多かった。一方、人材育成の観点で見れば、理学系の学生もその多くは企業等での研究活動に携わることになるため、実社会を見据えた人材育成を考えるべきであり、理学系と工学系が同居する物質科学専攻、数理電子情報専攻は本研究科における理工融合の柱となる専攻である。以下、この2専攻設置の意義を簡潔に説明する。

本改組で2専攻を統合して新設される物質科学専攻では、物理と化学を融合した専攻とすることで、特に材料分野における研究活動の進展を期待している。

物理学プログラムでは、極微のスケールから宇宙の巨視的スケールまでを研究対象として活動し、その中でも、多種局限環境下(高圧・低温・強磁場)における希土類金属間化合物などの強相関電子系物質、有機伝導体などに関する物性研究を行っており、また最新の計算化学的手法を用いた物性発現メカニズムの解明など、材料分野の基盤となる基礎的研究を行っているグループがある。一方で理学系化学(基礎化学プログラム)では、超高真空下での層状物質薄膜や有機系分子結晶薄膜調製法の開拓やその物性研究、遷移金属錯体の合成と物性評価やそれらの触媒反応への応用などを研究しているグループがある。また、工学系化学(応用化学プログラム)では、高機能工業材料である酸化物系半導体、セラミックス、固体触媒などの研究を行っているグループ

がある。この3研究グループが同じ専攻においてこれまで以上に連携することで、理学系が得意とする新材料の創製、物性発現メカニズムの解明に関する研究力と、工学系が得意とする材料の産業への応用技術を融合した研究が大いに進展すると期待できる。

一方、同専攻の編成を教育効果の面から見ると、物質科学の基礎は物理学にあり、特に近年の物質科学分野では、創製した新規材料や開発した素子などの特性を評価するにあたり最先端の評価装置を使う必要がある。この評価装置の基本原理は物理学を基礎としていることから、物理と化学が緩やかに連携した本専攻で学ぶことによって、化学系の学生においては「合成の得意な職人」から物性発現メカニズムに基づいた材料設計思想を持つ新しい「合成化学者」を育成できると考えられる。また、物理系の学生においては、化学者の職人的合成技術を学ぶことで、物性発現メカニズムに基づいた新材料の創製をより効率よく実現できる人材が育成できる。このように物質科学専攻では、研究面及び教育面から融合効果が大いに期待できる。

物質科学専攻においては、各プログラムに所属する学生の専門性を高めるために当該プログラムが開講する科目を中心に履修する設計となっているが、連携している外部研究機関の教員が開講する科目を専攻共通科目として所属するプログラムにかかわらず履修しやすくしていること、修了要件 30 単位のうち少なくとも4単位は所属するプログラム外から修得可能な設計とすることで、融合が見込まれる分野の学生が、必要に応じて他プログラムの開講科目を自由に履修できる設計としている。特に化学系においては、理学系である基礎化学プログラムの学生が工学系である応用化学プログラムの開講科目を履修することにより、産業界と密接に関連した工学系の知識を修得できること、応用化学プログラムに所属する学生が基礎化学プログラムの講義を履修することで、化学共通の原理原則をより深く修得できることなどが期待される。さらに、化学系の学生が物理学プログラム開講科目を学ぶことで、物性発現メカニズム等をより深く理解できるようになると期待される。

また、特に改組前後で組織的には変わっていないが、一層の連携が望まれる専攻として数理電子情報専攻がある。経済産業省が平成 30 年度に実施した産業界へのアンケート結果では、今後技術者が不足する分野として、通信・ネットワーク・セキュリティ系や人工知能・機械学習・画像処理などが挙げられている。これらの分野で活躍できる人材には、当然、高い数学的素養が必要であり、数理電子情報専攻における、教育・研究の連携は、当該分野の人材育成に大きく貢献できる。特に、理学部数学科の学生は産業界との接点が少なく、数学の専門知識が産業界にその能力を活かせる場が限定的と考える傾向があり、同専攻内の3プログラムが一層連携することを通じて、数学の専門知識を他分野への展開に向かわせ、高い数学的素養を持った学生を産業界に導くことができるものと考えている。

なお、物質科学専攻物理学プログラム、数理電子情報専攻数学プログラムでは、これまで「インターンシップ」を単位化していなかったが、本改組に伴い、理工融合の一環として専攻共通科目にインターンシップを導入することとした。この取り組みにより、理学系プログラムの学生に対して産業界へ積極的に目を向けさせることで、応用研究のフィールドへも活躍の場を広げられるようにしている。

本改組の第二の目的は、現行の博士前期課程工学系8コースの教育プログラムを、工学部改組

により設置した基幹5学科と整合する新しい6年一貫型教育プログラムに再編成することで、学部一博士前期課程における一貫性をもった人材育成を行う体制を整えることである。平成30年度の工学部改組後に入学した学生は、令和4年4月には大学院に進学することになる。6年一貫型教育を行っている本研究科では、工学部改組により、工学部の学科編成と大学院のコース編成が異なっている(学部5学科 → 大学院8コース)。本学の第3期中期計画では、**理工系の6年一貫型教育を今後も一層発展させる**計画であり、このような不整合は専門性を重視した人材育成の基本となるカリキュラム設計に大きな支障を来すため、工学部改組に合わせた本研究科博士前期課程の改組を併せて行う。これらの改組を通して6年一貫型教育をより発展させることで、学部4年生から博士前期課程までの3年間でフレキシブルに使うことが可能となり、3ヶ月～半年程度の海外留学を比較的容易に実現できることが期待される。現在、6年一貫型教育の利点を活かした研究留学プログラムの立ち上げを計画している。なお、理学部では、従来から学部一博士前期課程による6年一貫教育を行っており、博士前期課程への進学率は過去4年間の平均で67%(平成28年度:66%、平成29年度:68%、平成30年度:65%、令和元年度:67%)である。

本改組の第三の目的は、従来から長年にわたって実施してきた教育・研究における“理工融合”の取り組みを維持しつつ、工学系のみならず理学系プログラムに所属する学生に対しても実社会で即戦力として活躍するための実践的スキルの修得が可能となる新たな教育プログラムを導入することにある。現在、大学に対して Society 5.0、SDGs を牽引できる人材の育成が強く望まれており、その要望に応えることができる新たな教育プログラムの構築が必要とされている。これまで、本研究科博士前期課程では、理学部・工学部の教育を一層深化し、実社会で活躍する企業研究者・技術者、中高教員、さらに大学教員等を目指すハイレベル研究者の育成までを各コースが構築した独自の教育プログラムにより実行しており、一定の成果を上げてきた。しかしながら、21世紀に入り、経済成長一辺倒の社会から、持続可能な社会への変革が求められ、世界的な目標である SDGs に代表される開発目標が制定されたこと、また、日本における産業も重厚長大産業から、ICT や IoT などを活用する新しい産業構造への転換が進みつつある中、従来からの専門教育に特化した大学院教育のあり方も問われている。つまり社会構造、産業構造の劇的な変化により、研究者や高度技術者に求められる能力として深い専門知識だけでなく、①解決すべき課題に対するデータの収集・分析・理解、課題解決方法の設計と実現のための要素技術の統合・システム化などを実現しうる多面的能力の修得が望まれている。また、②専門分野にかかわらず、収集されたビッグデータから有用な情報を引き出し、それらを解析して新しい価値につなげるためのデータサイエンティストとしての能力を備えた人材への要求も高い。一方、③博士前期・後期課程教育によるハイレベル研究者の育成は、日本の先端科学技術を支える高度人材育成の柱であるが、当研究科に限らず日本人学生の博士後期課程進学率は必ずしも高くなく、日本人学生の博士後期課程進学を強く後押しする魅力ある博士前期課程教育プログラムの導入が望まれている。

以上のように、本理工学研究科改組では6年一貫型カリキュラムの整合性の問題に加えて、時代の要請に迅速に応えることができる大学院カリキュラムの構築も大きな目的の一つであり、その目的を達成するために、6年一貫教育の基本となる10の**専門教育プログラム**、文理融合型の教育

プログラムである 1 つの融合教育プログラム、及び副プログラムとして多面的能力を修得する①～③に対応する3つの特別教育プログラムを導入する(図4)。

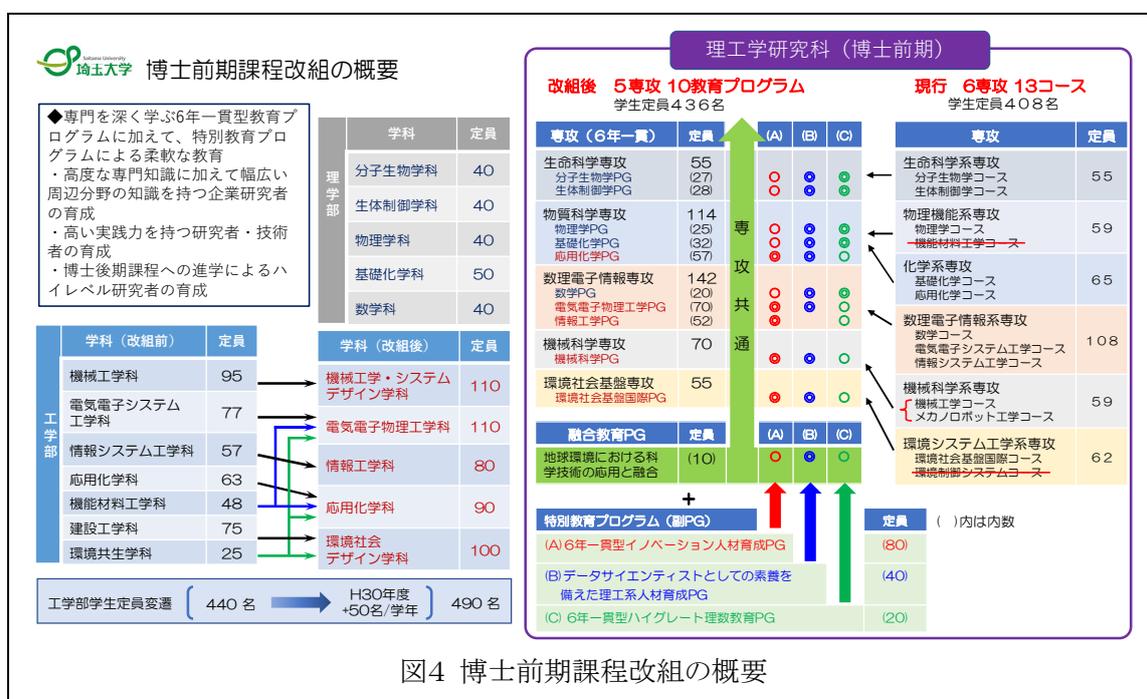


図4 博士前期課程改組の概要

なお、新たに導入する特別教育プログラム①(A)～③(C)により、例えば理学系プログラムに所属する学生が「①(A)6年一貫型イノベーション人材育成プログラム」を履修することにより、民間企業における研究活動に興味を持つことで企業の基礎研究者として日本の産業界の一層の発展に貢献できる人材となることが期待できる。一方、工学系プログラムに所属する学生が「③(C)6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム」を履修することにより博士後期課程へ進学し、学位取得後、民間企業に活躍の場を移して企業研究をリードする研究者として活躍することも期待される。また、これらの特別教育プログラムを通して、10の専門教育プログラムに所属する異分野の学生が幅広く交流することにより、異分野融合を通じた柔軟な論理的思考力を身につけて成長し、科学技術イノベーションに貢献しうる人材へと育つことが期待できる。

#### 1-4 専攻及び教育プログラムの特色

##### 1-4-1 養成する人材像

本研究科博士前期課程では、理学部及び工学部の教育理念をベースとして、各々の専門分野を深く学ぶための学士一貫教育プログラムによる研究者・高度技術者の育成を目指している。さらに専門分野の深い知識の修得に加えて、今後ますます理工系人材への期待が高まる中において、科学技術イノベーションに資する人材の育成が理系、工系を問わず重要となることを念頭に、新しい特別教育プログラムを導入する。特に Society 5.0 や SDGs に代表される社会の要請に

対して、異分野協働による課題解決と社会実装を実現しうる人材の育成が急務となっていることから、副プログラムとしての特別教育プログラムを導入し、従来の専門教育に加えたより実践力を有する人材の育成を目指す。

理学・工学系の研究科・専攻として6専攻・13 コースを5専攻・10 専門教育プログラム・1融合教育プログラム・3特別教育プログラムに再編する。

博士前期課程で養成する学生の具体的な人材像は以下のとおりである。

#### (1) 高い専門性を有する研究者・高度技術者の育成

##### (5専攻、10 専門教育プログラムによる教育)

いずれの専攻においても、理学部、工学部における専門教育をベースとして、6年一貫型の教育により一層高度な専門知識を修得することで、実社会において科学技術をより一層深化させることができる研究者・技術者を育成する。以下、各専攻、専門教育プログラムが育成する人材像を説明する。

#### 生命科学専攻

本専攻は、理学部分子生物学科及び生体制御学科の上位課程として設置するものである。これらの学科では、共通の理工系基礎教育科目に加え学科独自のカリキュラムを構成し、それぞれの分野における基礎学力を修得させている。本専攻では、専攻共通科目とともに、分子生物学や生体制御学の諸分野に関わる専門科目を設定し、生物のゲノム構成とその支配下にある生体分子の構造と機能から生命の仕組みを理解するための教育と、遺伝子、細胞、組織、器官、及び個体レベルにおける生命現象の制御の仕組みを理解するための教育を行うとともに、最先端の研究活動に参加する機会を提供する。これらを通して生命の基本現象を深く理解し、国際的に活躍する研究者や技術者、教育者として、食料・環境・医療など社会が抱える諸問題に取り組み、諸分野の発展に寄与できる人材を育成する。

各プログラムで育成する人材の詳細については以下のとおりである。

##### ・分子生物学プログラム

分子生物学プログラムに先立つ理学部分子生物学科では、生命の基本的なしくみと生理現象を分子レベルで深く理解することを目指し、理工系基礎教育科目、理学部専門科目、分子生物学科専門科目によりカリキュラムの主要部を構成している。これにより、分子生物学の基礎学力、論理的思考力、基礎実験技術の修得を目標としている。同時に、語学力やプレゼンテーション力などの向上により、社会の諸分野で活躍できる準備を整えることも目標に挙げている。

博士前期課程では引き続きこれらの能力を伸ばし、最先端の研究に寄与できる能力を養うことを目指す。学士課程において学修した分子生物学の基礎を土台として、分子生物学における先進技術や専門知識を習得し、これを実践するために独創的な研究活動に参加する。また、海外の教育研究機関との交流を通して、世界を舞台に活躍するための国際感覚やコミュニケーション能力を養う。本専攻において培ったこれらの能力を存分に発揮することで、生物学・医学・薬学・農学・バ

イオインフォマティクスの諸分野において、研究者・技術者・教育者として科学技術イノベーションを牽引し、現代社会が抱える諸難問に対して新たな突破口を見いだせる人材を養成する。

#### ・生体制御学プログラム

生体制御学プログラムに先立つ理学部生体制御学科では、ヒトをはじめとするさまざまな生物における細胞、組織・器官、及び個体レベルでの制御機構に関する幅広い知識と生物科学の実験技術の習得を目指し、理工系基礎教育科目、理学部専門科目に加え、生体制御学に関する講義や野外実習、臨海実習、生体制御学実験などの実習科目を含む生体制御学専門科目によりカリキュラムを構成している。また、卒業研究により先端技術、論理的思考力やプレゼンテーション力の高い人材の育成を目指している。

博士前期課程では、これらの能力のさらなる向上を目的とし、動物の初期発生や脳形成における遺伝子発現制御、性差や学習行動と脳の制御機構との関係、ペプチドホルモンの作用機作、自然免疫と内分泌機構、DNA 損傷修復と寿命、環境変化への植物の応答機構に関する専門科目を修め、また、特別研究において動物・植物・菌類を用いた先端的研究のための専門技術を習得することで、国際的に活躍する研究者や高度専門職業人として生命科学や健康福祉、生物資源の活用などに関わる諸分野の発展に貢献できる人材を育成する。

#### 物質科学専攻

本専攻は、理学部物理学科及び基礎化学科、工学部応用化学科の上位課程として設置するものである。これらの学科では、理工系基礎教育科目を最小限共有しつつ、完全に独立したカリキュラムを構成し、それぞれの分野における基礎学力を修得させる。現代の物質科学は多岐に細分化され、その理解と実践躬行には極めて高度な専門性が必須とされている。専門的能力を十分に備えた人材の育成という目標に鑑みて、基礎の段階からそれぞれの専門に最適化された緻密な教育を、学科から教育プログラムまで一貫して行う。本専攻では、物質科学の各分野の学術的内容を深く理解し、各教育プログラムで修得した能力を生かして学術、産業、教育の発展に寄与できる人材を育成する。

各教育プログラムで育成する人材の詳細については以下のとおりである。

#### ・物理学プログラム

理学部物理学科では、自然科学の基礎となる物理学について、理工系基礎教育科目、理学部専門科目、物理学科専門科目などからなるカリキュラムを通して学ばせる。物理学は、素粒子・原子核や超伝導・磁性などの性質から宇宙の構造及び進化まで、あらゆる自然現象について、その背後に潜む基本的な物理法則を解明する学問であり、単なる断片的知識の集積ではない。そのため、常に基本に戻り様々な視点を身につけるとともに、それらが身の回りにどのように生かされているかを理解することにより、社会における物理学の重要性を認識した、広い視野を持つ社会人を育成することを目標としている。

博士前期課程では引き続きこれらの能力を伸ばし、物理学の最先端の研究に寄与できる能力を養うことを目指す。これには、専攻共通科目によって隣接する分野に視野を広げることも含まれる。

物理学プログラムでは、自然界の多岐にわたる現象をその根源から解明する物理学分野において、講義・輪講を通して種々の物質構造や量子科学について基本的な理解をしていることはもちろん、研究にかかわる計算・観測・実験を通して論理的で柔軟な思考力や広い問題解決能力、情報処理能力を備えた国際的にも通用する人材の育成を図る。より具体的には、基盤的学問の素養と幅広い視野を持ち、国際的に活躍できる先端的な学術的研究能力を持つ研究者、及び、自然の体系的な理解に基づく研究開発能力を持ち、実社会に貢献することができる高度な技術者を育成する。

#### ・基礎化学プログラム

基礎化学は分子レベルの現象を解き明かす学問であり、森羅万象を理解するうえで重要な領域の一つである。このような学問の修得のプロセスにおいて、現在社会において強く望まれている物事を根本から理解する能力が培われる。基礎化学プログラムは、このような能力を有する人材を輩出するため、理学部基礎化学科における専門教育との一貫性を重視し、基礎化学の体系的な教育を行う。

基礎化学プログラムに先立つ理学部基礎化学科では、学士課程を博士前期課程にて行う最先端の研究に携わるための準備期間と位置づけ、量子化学に代表されるような物理的な側面から化学を理解する物理化学、遷移元素や典型元素の性質を学ぶ元素化学、及び炭素を中心とした有機化学を柱とした基礎化学に関する知識を習得したうえで、化学を基盤とした自然科学に関する素養を身につけた人材を育成する。そのカリキュラムの主要部は、理工系基礎教育科目、理学部専門科目、基礎化学科専門科目により構成される。

博士前期課程では、学士課程において修得した素養をさらに深化させ、主に分子を対象とした自然の諸現象の普遍的な法則や基本原理の解明を目指した最先端の研究活動と体系的な講義・演習を通じて、基礎化学を基盤とした理学的見識をもち、幅広い視野を基に未知なる事象に対して総合的判断力を発揮し、課題探究能力及び問題解決能力を十分に備えた高度な人材を育成する。具体的には、先端的専門知識を深く理解し未解決の問題を根本から考えて解決することを可能にする能力、最先端の研究活動を通じて自然科学における問題を発見し、それを解決する能力、化学を基盤とした理学的見識をもち、それを活かしてよりよい社会を構築することに寄与する能力及び高いコミュニケーション能力を有する国際的に活躍できる人材を育成する。

#### ・応用化学プログラム

応用化学は人間社会の持続可能な発展に必要不可欠であり、その高度な専門性を身につけた人材は広く社会全体から求められている。このような要請に応じて質・量ともに十分な人材を輩出するため、応用化学プログラムは工学部応用化学科における専門教育との一貫性を重視し応用化学の体系的な教育を与える。

工学部応用化学科では、人間社会に実際に役立つ化学全般について、その基本原理を修得させることを目指している。カリキュラムの主要部は理工系基礎教育科目、工学部専門科目、応用化学科専門科目により構成されている。これによって、応用を指向した化学の基礎学力、論理的思考力、実践的行動力の修得を目標としている。同時に、化学産業を中心とする社会の諸分野で活躍

できる準備を整えることも目標に掲げている。

博士前期課程では引き続きこれらの能力を伸ばし、最先端の応用化学に寄与できる能力を養うことを目指す。特に応用化学プログラムでは、応用化学の実践的な知識と技能を駆使して人間社会の幸福の増進を工学的に実現する意欲と主体性、専門性、論理性、協調性を十分に備えた高度な人材を、応用化学全分野の最先端の研究活動と体系的な講義演習を通して育成する。これにより、新規機能性材料の創製、先端的解析技術の開発、先進的物質循環制御系の構築などの様々な工学的創造に必須となる広範な知識と技能を修得し、応用化学を基盤とした論理的思考により製品開発や社会問題解決に本質的に貢献する人材を社会へ輩出する。

より具体的な育成の人材像は、プロセス・環境工学・高分子材料・分離分析・生体工学・無機固体材料・工業有機合成・分光計測の 8 つの応用化学領域の高度な知識と技能を有し、産業界で役立つ材料と技術の開発を意欲的に行うことのできる人材であり、同時に、応用化学の専門知識を総合して研究計画を綿密に立案し、最終的な製品開発と問題解決につながる真に有用な研究を行う能力を身に付けつつ、化学産業の中核を担う技術者として応用化学の重要性と社会的責任及び職業倫理を理解し国際的な視野をも有する人材である。

### 数理電子情報専攻

本専攻は、理学部数学科、工学部情報工学科及び電気電子物理工学科の上位課程として設置するものである。これらの学科では、理工系基礎教育科目をのぞき独立したカリキュラムを構成し、それぞれの分野における基礎学力を修得させている。一方、これらの学科の延長にある諸分野には共通する要素が多々ある。例えば、カオス現象は数学の常微分方程式論や力学系における一つのテーマであるが、カオスの物理的な表現には電気回路が用いられ、その解析には情報分野の計算機援用が重要な役割を果たし、疑似乱数生成に応用される。逆に、情報工学や電気電子物理工学において開発される諸技術の信頼性の検証には、数学を用いた数理取扱いが必要とされる。本専攻では、専攻に共通する学術的内容を十分に理解し、各プログラムで修得した能力をこれらの諸分野の発展に寄与できる人材を育成する。

各プログラムで育成する人材の詳細については以下のとおりである。

#### ・数学プログラム

数学プログラムに先立つ理学部数学科では、自然及び社会の数理現象について、基本原理及び基本構造を明らかにすることを目指し、理工系基礎教育科目、理学部専門科目、数学科専門科目によりカリキュラムの主要部を構成している。これにより、数学の基礎学力、論理的思考力、応用力の修得を目標としている。同時に、教育及び情報処理などの社会の諸分野で活躍できる準備を整えることも目標に挙げている。

博士前期課程では引き続きこれらの能力を伸ばし、最先端の研究に寄与できる能力を養うことを目指す。これには、数学に関する能力の向上を図ることは言うまでもないが、専攻共通科目によって隣接する分野に視野を拡げることも含まれる。とりわけ数学を学んだ者に期待される能力は、厳格な論理的思考力である。あらゆる場合と可能性を遺漏のないように検討し最終結論を導くという

思考プロセスは、数学を構築する上で必須なものである。課程においてこの能力を究め、修了後に教育及び社会の諸分野で活躍できる人材、及び、博士後期課程に進学し研究者を目指す人材を育成する。

#### ・電気電子物理工学プログラム

電気電子物理工学プログラムでは、大学4年間の専門基礎教育との一貫性を重視し、学部における専門基礎教育をベースに、電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術分野における最先端の知見を含む高度専門教育を実施し、グローバルに発展する社会・経済の根幹を支える人材を育成することが目標である。このため、物性物理など関連する基盤分野から電子・光・材料デバイス、電磁気学、電気・電子回路、そして電力・エネルギー、ロボット、情報通信などの応用分野までの幅広い知識とともに、課題に対応できる応用能力、技術革新を生み出す柔軟性と論理的思考能力が必要である。本プログラムでは学部・博士前期課程を通して体系化されたカリキュラムを用意し、修了後に、電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術の発展に必要な専門知識と能力を備え、論理的思考能力と幅広い視野を持って、国際的な情報化社会の進展に指導的役割を果たすことのできる高度な技術者、ならびに独創性と社会性を備えた国際的レベルの研究者を育成する。

#### ・情報工学プログラム

情報工学プログラムでは、情報工学科における専門基礎教育をベースとした、学部・博士前期課程を通じた体系化されたカリキュラムに基づき、情報工学に関する最先端の知見を含む高度専門教育を実施することで、情報技術が不可欠な社会において指導的役割を果たすことができる優れた高度情報技術者、及び、情報工学分野における独創性の高い研究者を育成する。具体的には、情報工学に関わる専門分野において系統化された知識を有し理論と実践のいずれにも長けており、情報工学に関わる研究分野に関して高度な知識と能力を有し、自らの着想により技術的課題を解決及び発展させる能力を有し、口頭発表能力、討論能力、論述能力、文献調査能力、学術論文・技術資料の読解能力を含む広義のコミュニケーション能力を有し、技術者としての指導力・統率力を有し、社会的責務を自覚し技術者・研究者としての責任を自ら負うことができるグローバルに活躍できる人材を育成する。

### 機械科学専攻

本専攻は、工学部機械工学・システムデザイン学科の上位課程として設置するものであり、学部4年間及び博士前期課程2年間の6年間の教育を通して一貫したカリキュラムを構成し、基礎学力及び専門的学力を修得させる。本専攻では、学術的内容を十分に理解し、プログラムを通して修得した能力を機械工学分野の発展に寄与できる人材を育成することを目指している。

#### ・機械科学プログラム

人間生活の向上に資するものを生み出すことを通して社会の発展に貢献するための、自然科学に基盤を置く学問分野である工学の基軸をなす機械工学分野は、有効な仕事をなす形あるものを生み出すことが特徴の一つである。そして、機械工学に携わる技術者には機械工学分野における解析と総合の能力に加え、関連する分野との連携を通して進化する柔軟さが求められている。そこ

で、機械科学プログラムでは、人間と機械が共存し、生産性の高度化及び高効率化を目指す豊かな社会を創造するために、先端的専門知識を理解し、専門知識を応用・統合して研究を遂行できる人材を育成する。また、他分野の技術者との協力に必須の表現能力を習得し、工学の中核となる役割を認識した人材を育成する。

### 環境社会基盤専攻

本専攻は、工学部環境社会デザイン学科の上位課程として設置するものであり、環境社会基盤国際プログラムのみからなる。

#### ・環境社会基盤国際プログラム

多様化・複雑化・グローバル化する社会において、地球環境の維持、発展的な国土形成、自然災害への対策、安全・安心・快適な生活基盤の創出を相互のバランスに配慮しつつ実現することは、重要な社会的課題である。

環境社会基盤国際プログラムに先立つ工学部環境社会デザイン学科では、上述の「環境」と調和した持続可能な「社会」の発展に、主に建設工学、環境工学の分野から貢献できる建設系技術者、すなわち、建設・環境工学に関する十分な専門知識・能力を備えるとともに、科学的分析に基づく社会デザイン・地域デザインの能力に長け、異分野協働で社会実装に取り組める、リーダーシップを兼ね備えた技術者を育成することを目的としている。

環境社会基盤国際プログラムでは、高度専門科目と研究を通して、これらの能力を伸ばし、即戦力としての能力にまで引き上げることを目指す。環境と調和した持続可能な社会の発展のためには、多くの複雑な要素が絡み合う問題を解決していく必要がある。これに関わる技術者・研究者には、それらを適切に整理して解決すべき課題を見出し(主体的な課題探求能力の育成)、論理的な思考で課題解決の道筋を立てる能力とともに、技術者・研究者としての社会的責任・使命を自覚し、それを進んで実践できる社会性が要求される。

例えば、災害に強いまちづくりを考える。まず、まちづくりをしようとする場所には、どのような災害が生じる可能性があるのかを知る必要がある。最新の研究情報を踏まえて、過去の災害事例や地形・地質・気候を知り、その場所がどのような地域的特性を持っているのかを把握する。次に、そのような場にこれまでにどのような社会基盤が構築され、また今後どのような社会基盤を整備していけば、災害に強いといえるまちづくりとなるのか、先端技術を応用しつつ、立案する(独創性、創造性、チャレンジ精神の涵養)。実際にまちづくりを実現しようとするれば、そこに居住する住民の意思も尊重することも大事であり、立案者として計画の実行可能性を適切に伝える必要がある(自らの考えや成果を、論理的に第三者に伝えるためのコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の育成)。さらに住民との対話の中で、何が問題なのかを明らかにし、住民を含むステークホルダーとともに最適な解を見出し、計画の実現に導く。

様々な社会的課題に対して、この例のような俯瞰的な視野をもち社会的ニーズの解決に向けた研究・教育を継続的に行うことによって、環境社会基盤国際プログラムで養成すべき人材の育成を目指す。

これに加えて、環境社会基盤国際プログラムでは、博士前期課程のカリキュラムにおいて国際的水準の教育を主に英語で行うカリキュラム体系を組んでいる。国や地域、文化など、多様な背景をもつ学生間での協働した研究の実施や日常生活での会話を通して、英語力を駆使してプロジェクトを実践できる能力を身につけるとともに、国際性を育成する。

以上の実践により、環境社会基盤国際プログラムでは、独創性、創造性、チャレンジ精神、主体的な課題設定能力、論理的思考力を有し、地球規模の環境問題や激甚化した自然災害への防災・減災対策など多様化していく社会ニーズに応え、自然環境と調和した持続可能な社会基盤の計画・設計・施工・維持・管理技術を創造的かつ国際的に担うことができる人材を育成する。

## (2) SDGs 達成に貢献しうる研究者・技術者

### (融合教育プログラムによる教育)

融合教育プログラム:地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

近年では、従来の大学院教育に求められていた研究者、高度技術者の育成に加えて、相互に影響し合う幅広い複数の分野にまたがった SDGs に代表されるグローバルな社会的課題を解決しうる人材の育成が望まれている。そのためには単なる研究者・技術者としての視点だけでなく、専門家としての知識に加えて課題の背景に存在する社会構造なども理解した上で、課題解決に向けてリーダーシップを発揮できる人材の育成が重要である。このような視点から、本改組においては学部の出身学科にとらわれることなく入学可能な文理融合型の新たな教育プログラムを導入する。このプログラムでは、学生の得意とする専門分野に応じて、自然資源の持続可能な管理と効率的な利用、国際的な枠組みに従った製品ライフサイクルを通じた化学物質の管理と大気・水・土壌への放出の削減、再生利用による廃棄物発生量の削減、植物資源の管理・育種・栽培・繁殖・培養技術及び生産システム、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイル等に関する専門的知識を修得し、さらには文理融合教育により国際的枠組みの中で活躍するために必要な社会的枠組みに関する知識を有し、グローバルな視点で SDGs を牽引することができる人材を育成する。

## (3) 各専攻及び専門教育プログラムにおける高度な専門性に加えて、科学技術イノベーションを牽引しうる、研究者・高度技術者の養成

### (特別教育プログラムによる教育)

近年の科学技術は高度化・複雑化しており、企業においても、深い専門知識に加えて解決すべき課題に対するデータの収集・分析・理解、課題解決方法の設計と実現のための要素技術の統合・システム化などを実現しうる、実践力を備えた研究者・高度技術者が望まれている。一方、博士前期・後期課程教育によるハイレベル研究者の育成は、日本の科学技術を支える研究人材育成の柱であるが、日本人学生の進学率は必ずしも高くなく、博士後期課程進学に繋がる魅力ある博士前期課程の教育プログラムが望まれている。このような観点から、専門教育プログラムに加えて、副プログラムとして以下の3プログラムによる教育を導入する。ここで、特別教育プログラム(A)及び(B)は、実践力を備えた企業研究者・技術者の育成、特別教育プログラム(C)はハ

レベル研究者を育成するためのプログラムである。

- 特別教育プログラム(A) :6年一貫型イノベーション人材育成プログラムによる教育  
各専門教育プログラム(1)により高度な専門知識を修得し、解決すべき社会的課題の分析・理解、課題解決方法の設計・デザイン、要素技術を統合・システム化して解決方法を構築でき、異分野共同により成果を社会実装して科学技術イノベーションを実現しうるリーダーシップを備えた研究者・高度技術者を育成する。
- 特別教育プログラム(B) :データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラムによる教育  
各専門教育プログラム(1)の深い専門的知識に加えて、膨大なデータから有用な情報を抽出、さらにデータに内在する本質的構造を見極めて数理的思考に基づいた解析によりデータを正しく判断し、それぞれの分野の専門知識と融合させることで新たな価値を生み出すことが可能な研究者・高度技術者を育成する。
- 特別教育プログラム(C) :6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム(HiSEP-6)による教育  
理数分野で特に高い研究意欲を有し、基礎学力を備えた「研究者の芽」となる人材を育成する。具体的には、理学、工学に関わる広い見識を身につけ、研究活動における企画立案・実施・結果の解析能力等の優れた研究遂行能力を有し、かつ得られた成果を学会発表、論文発表等により公表できる能力を有する人材を育成する。加えて、プログラムにおける学修を通して、博士後期課程進学をめざし、研究においては特殊性と独創性を養うことで日本の科学技術を牽引する基礎研究者としての素養を持ち、かつ研究倫理を遵守して研究に携わる者としての責任を全うできる人材を育成する。

## 1-4-2 学生定員

### (1) 定員増の背景と考え方

本改組に伴い、理工学研究科、博士前期課程における学生定員を、408名から436名に28名増員する。定員増の背景と考え方、学生確保の見通しについて、以下、説明する。改組前後の学生定員の対照表を表1に示す。

表1 学生定員 対照表

現行の専攻	生命科学系	物理機能系	化学系	数理電子 情報系	機械科学系	環境システム 工学系
大学院定員	55	59	65	108	59	62
改組後の専攻	生命科学	物質科学		数理電子 情報	機械科学	環境社会 基盤
大学院定員	55	114		142	70	55
学部定員	80	180		230	110	100
大学院/学部 (%)	69	63		62	64	55

まず、定員増についての全体的な考え方であるが、現在の博士前期課程の定員は工学部改組以前の定員であり、工学部改組に伴って1学年あたり 50 名の定員増があったことから、そのおよそ 60%が進学するものとして算出した新規入学者見込み(30 名)に相当する。また、各専攻の新定員は 60-65%の進学率を想定して設定しているが、教員、公務員への就職者が多い(学部卒での就職者が多い)、数学科及び環境社会デザイン学科の進学率は、実情に合わせて設定している。

専攻毎の主たる定員増は数理電子情報専攻及び機械科学専攻の増員によるものである。この両専攻の定員に関してさらに詳細に見ると、数理電子情報専攻の3プログラム(旧コース)の目安定員の増減は、数学プログラム(20⇒20 名)、電気電子物理工学プログラム(46⇒70 名)、情報工学プログラム(42⇒52 名)となり、電気電子物理工学プログラム及び情報工学プログラムの定員増が要因である。このうち電気電子物理工学プログラムの定員増は、廃止となった物理機能系専攻の担当教員変更などに伴う定員増が主であり、改組に伴う実質的な定員増は情報工学プログラムの定員増である。また、機械科学専攻の定員増は、改組に伴う実質的な定員増(59⇒70 名)である。

以上のように、本改組では情報工学プログラム及び機械科学プログラムの定員増を柱としている。これはもちろん工学部改組における学部定員増がその主たる理由ではあるが、その基本的な考え方としては、社会的要請が高い分野の人材育成、すなわち情報系や機械科学系の高度職業人育成を積極的に強化する方針に沿った定員増である。

## (2) 学生確保の見通し (概要)

まず過去5年間における、志願者数、合格者数、入学者数の推移を表2にまとめるとともに、その傾向から、定員確保の見通しについて述べる。

現行の博士前期課程定員(408 名)に対する充足率は、過去5年間 107-118%であった。年度毎の入学者数等を詳しく見ると、(2016 年度)435 名、充足率 107%、(2017 年度)452 名、充足率 111%、(2018 年度)483 名、充足率 118%、(2019 年度)465 名、充足率 114%、(2020 年度)436 名、充足率 107%、であった。これらの実績から、新定員 436 名(現定員の 107%に相当)は、改組前入学者実績、すなわち学部定員が 50 名少ないときの実績でも達成可能な数値である。

なお、直近3年間は入学者が微減する傾向にあるが、その期間においても 600 名前後の受験者数は確保できている。一方で、合格者に占める辞退者の割合(辞退率)は、2019 及び 2020 年度に急増しており、これは大企業及び首都圏の旺盛な求人により、大学院合格者が進学せずに就職したためである。このように、辞退率の増加により充足率が減少する傾向はあるものの、志願者数は十分多く、28 名増の定員(436 名)は十分確保できると考えている。

表2 過去5年間の志願者数、合格者数、入学者数の推移

年度	2016	2017	2018	2019	2020
志望者数	559	563	604	614	593
合格者数	469	496	523	517	495
入学者数	435	452	483	465	436
辞退率 /%	7.2	8.9	7.6	10.1	11.9
充足率 /%	107	111	118	114	107

次に令和2年度の本学理学部及び工学部の3年次生に実施したアンケートの結果から、学生確保の見通しを議論する。まず、アンケートの回収数と回収率であるが、回答数は640名、回答率は88%であった。表3にアンケートの集計結果をまとめた。

現時点での進学希望者であるが、アンケートの結果、「入学したい」との明確な意思表示をしている学生数は397名であり、この時点での新定員(436名)に対する割合は、91.1%である。例年の傾向から、4年生に進学して研究室における活動が始まると進学希望者が増加するため、内部進学者だけで定員の90～95%は充足できる見込みである。

進学希望者数をプログラム毎に見てみると、数理電子情報専攻の充足率が低い。まず、数学プログラムでは教員志望者の割合が高いために現時点で進学の意志を固めている学生が少ないためと予想される。また電気電子物理工学専攻において「進学希望者」が少ない理由は、本分野の旺盛な人材需要による学卒での就職希望者が多いためと推測している。この傾向は、環境社会基盤専攻においても同じであり、社会インフラ系企業の旺盛な人材需要の影響が大きく、現時点で進学あるいは就職のいずれかに決めかねている学生も一定数いることから、研究活動を通して進学希望者が増えるように、大学院の魅力を発信し続ける。

本アンケートは、令和2年度の理学部及び工学部の3年次生(日本人学生)を対象に実施したものであるが、理工学研究科博士前期課程では毎年度一定数の留学生を受け入れている。令和2年度においては、71名の留学生が入学しており、本アンケート結果に反映されていないため、アンケートで「入学したい」と答えた397名に71名の留学生を加えると468名となる。なお、71名のうち、36名は現行の環境システム工学系専攻に所属する留学生であり、改組後に対応するプログラムである「環境社会基盤国際プログラム」に「入学したい」と答えた日本人学生44名に36名の留学生を加えると80名となり、55名の定員を十分に確保できる見込みである。

表3 在校生進学アンケート結果

専攻及びプログラム名	定員	「入学したい」と回答した学生数		割合(%)
生命科学専攻	55	51		92.7
分子生物学プログラム	27	28		103.7
生体制御学プログラム	28	23		82.1
物質科学専攻	114	106		93.0
物理学プログラム	25	28		112.0
基礎化学プログラム	32	30		93.8
応用化学プログラム	57	48		84.2
数理電子情報専攻	142	119		83.8
数学プログラム	20	12		60.0
電気電子物理工学プログラム	70	57		81.4
情報工学プログラム	52	50		96.2
機械科学専攻	70	77		110.0
機械科学プログラム	70	77		110.0
環境社会基盤専攻	55	38		69.1
環境社会基盤国際プログラム	55	38		69.1
専攻共通	(10)	6		(60.0)
地球環境における科学技術の応用と融合プログラム	(10)	6		(60.0)
総数	436	397		91.1

## 2 研究科、専攻等の名称及び学位の名称

### 2-1 研究科、専攻等の名称

本理工学研究科、博士前期課程の組織・教育改革では、従来の**6専攻13コース(理学系5コース、工学系8コース)**を**5専攻、10 教育プログラム(理学系5プログラム、工学系5プログラム)**、共通1プログラムに再編成する。博士前期課程の改組の新旧移行について図4に示す。

本改組においては、6専攻を5専攻に再編成するとともに、時代の要求に応じた新しい教育プログラムを導入する。そのために、従来から実施してきた研究者・高度技術者を養成するための基本となる10の**専門教育プログラム**に加えて、新しい2つの教育プログラムを導入する。

その一つは**融合教育プログラム**であり、新しい10の基本となる専門教育プログラムが6年一貫型教育であるのに対して、本プログラムは大学院博士前期課程の専攻共通プログラムである。本プログラムでは出身の専門分野にかかわらず、世界が望むSDGsに代表される持続的な開発目標の達成に貢献できる人材の輩出を目指しており、従来の専攻やコース、場合によっては研究科の壁を越えた協力により達成するプログラムであり、改組後の4プログラム(後述)の教員及び人文社会科学研究科教員の参画も予定されており、文理融合型教育を目指している。

また、時代が要求する人材を育成するために、併せて、3つの**特別教育プログラム**を導入する。研究科、専攻、教育プログラム、特別教育プログラムの名称や英語表記は以下のとおりとする。

### 2-1-1 研究科名

理工学研究科 Graduate School of Science and Engineering

### 2-1-2 専攻名

生命科学専攻 Life Science

物質科学専攻 Material Science

数理電子情報専攻 Mathematics, Electronics, and Informatics

機械科学専攻 Mechanical Science

環境社会基盤専攻 Environmental Science and Civil Engineering

### 2-1-3 プログラム名

分子生物学プログラム Biochemistry and Molecular Biology Program

生体制御学プログラム Regulatory Biology Program

物理学プログラム Physics Program

基礎化学プログラム Chemistry Program

応用化学プログラム Applied Chemistry Program

数学プログラム Mathematics Program

電気電子物理工学プログラム

Electrical Engineering, Electronics, and Applied Physics Program

情報工学プログラム Information and Computer Sciences Program

機械科学プログラム Mechanical Engineering and Science Program

環境社会基盤国際プログラム Civil and Environmental Engineering Program

融合教育プログラム

地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

Interdisciplinary Education Program for Applied Science and Technology in Global Environment

加えて、以下の特別教育プログラム(副プログラム)を導入する。

(A) 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム

Education Program for the Development of Innovative Human Resources

(B) データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム

Education Program for the Development of Professional Scientists and Engineers with Data Science Skills

(C) 6年一貫型ハイグレード理数教育(HiSEP-6)プログラム

Education Program for the Development of High-Grade Scientists

## 2-2 学位の名称

学位については、6年一貫型教育による高度専門家を育成する方針に従って、修士論文の内容に基づいて、修士(理学)Master of Science あるいは 修士(工学)Master of Engineering のいずれかを授与する。

なお、融合教育プログラム修了者に関しても同様に修士論文の内容に基づき、修士(理学)あるいは修士(工学)のいずれかを授与する。

さらに特別教育プログラム(副プログラム)修了者に関しては、プログラム修了証を授与する。

## 3 教育課程の編成の考え方及び特色

### 3-1 教育課程の編成とその特色

理工学研究科博士前期課程は、前述のとおり5専攻から成り、基本となる修士課程プログラムとして専門分野に応じた10の専門教育プログラムを設置する(図5)。それぞれの教育プログラムは独自に教育目的と教育目標を定めて教育の質を保証する。一方で専門分野の教育に特化しすぎるあまり、周辺専門分野の知識の修得がおろそかにならないように、いずれの教育プログラムにおいても別プログラムで開講されている科目を一定単位まで履修可能とする仕組みを導入する(これは現在でも各専攻内で実現されている)。また、いずれの教育プログラムも6年一貫型の教育プログラムとし、学部から博士前期課程までを一つの教育課程と見なしたシームレスな教育を行う。具体的には、博士前期課程のカリキュラムの中で、専門科目の入門的な位置づけとなる科目については学部4年次から履修可能とすることで、各研究室における研究活動へ早い段階から興味を持たせて研究者としてのレベルアップにつなげることを目指す。また、博士前期課程の科目を先取りして学修することで、研究活動の一環として、博士前期課程1年次での海外留学も実行しやすくなると

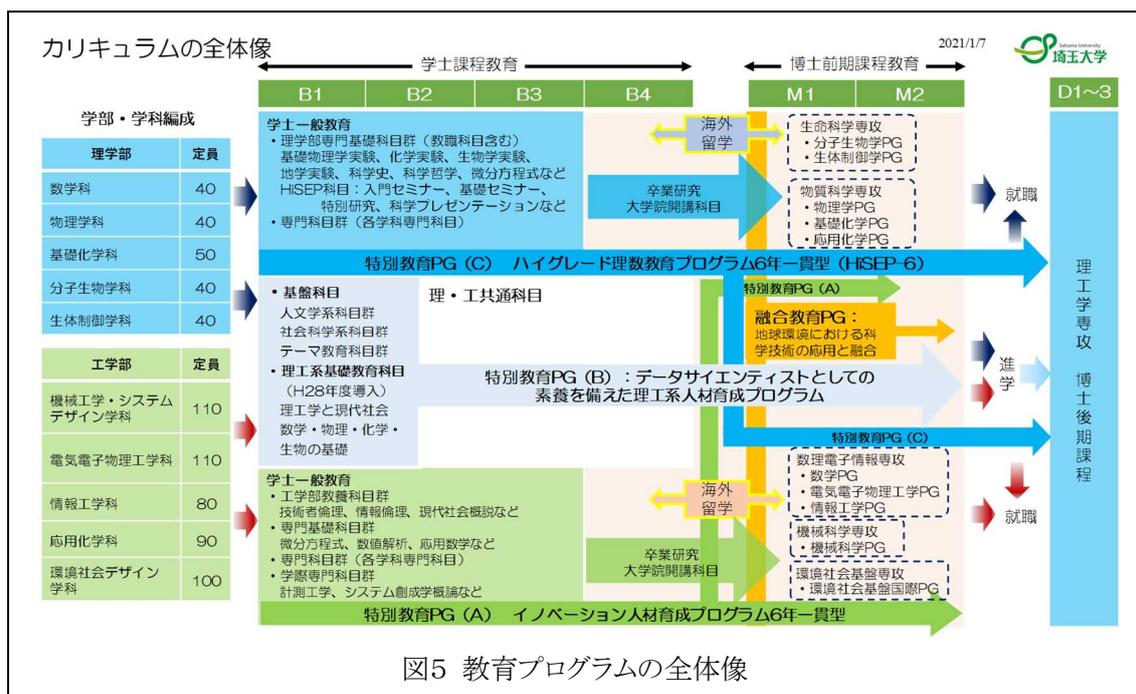


図5 教育プログラムの全体像

考えられる。また、これらの取り組みにより、博士前期課程進学者増につなげる狙いもある。いずれの教育プログラム(修士課程プログラム)も修了要件は修得単位 30 単位以上となる。

10の専門教育プログラムでは、授業科目は3つのカテゴリーに分類されている。以下、それぞれのカテゴリー及び修了要件の考え方を説明する。

**課程共通科目:**本科目群は、現代的な課題への対応能力を養うため理工学研究科の専門教育プログラムに共通の科目である。代表的な科目は、以下のとおりである。

#### 1. 科学技術日本語Ⅰ～Ⅲ

留学生向けの日本語習得のための講義である。専門科目だけでなく、日本の文化・伝統を積極的に学びたいと考える留学生向けの講義である。日本語レベルに応じて複数のクラスを用意している。

#### 2. 特別研修A、B

これらの科目は、いずれも大学間交流協定あるいは部局間交流協定に基づき、海外の研究室との研究交流を行った学生に対して単位を付与する科目である。特別研修Aは、理工学研究科の学生が海外研究室で研究活動した場合、特別研修Bは海外から受け入れた留学生と共同で研究活動した場合に単位を付与する。

#### 3. 課題解決型特別演習A～C

実務家教員が開講するPBL型授業となる。本講義は、実践力向上に直接繋がる講義であり、かつ学生の社会的・職業的自立にもつながることを目的とする、実務家教員ならではの講義である。

**専攻共通科目:** 博士前期課程では、まず深い専門性を身につけ、高度技術者・研究者としての人材を育成することを目標としている。したがって、特に共通性の高い科目はこのカテゴリーに配置するものの、あえて専門性を下げて共通科目を立てることはせず、各教育プログラムの修了要件に一定の余裕(～4単位)を持たせることで、各学生の専門性に合わせて、他の専門教育プログラムで開講している専門科目を履修できるようにしている。

**専門科目:** 本科目群は、高い専門性を身につけるための科目群である。特に重要な科目は以下のとおりである。

#### 1. 特別研究

専門教育プログラムの特徴により単位数・修得方法は少しずつ異なるが、いずれも博士前期課程在籍中の研究活動全般について単位を付与する科目であり、学部教育の「卒業研究」に相当する科目である。

#### 2. 輪講

専門性を高めるために行う、専門書の輪読、最新論文の読解を通して、最新の専門知識、論理的思考力、批判的思考力などを養う。

なお、各専門教育プログラムにおいては、専門性が損なわれないように各専門教育プログラムが開講している科目について修得単位数の下限を設定している。一方で、生命科学専攻、物質科学

専攻の化学系においては、各々の専門教育プログラムが育成する人材像に合わせてカリキュラム設計を行っているものの、専門性の観点から見れば、多くの開講科目が学生にとって有益な科目となることから、プログラムの修了要件により、他プログラム開講科目を履修しやすくしている。

次に融合教育プログラム「地球環境における科学技術の応用と融合プログラム」では、プログラムに相応しい独自の入試を実施して学生を選抜した後、指導教員の所属するいずれかの専攻に所属させつつ、プログラムを特徴づける文理融合型カリキュラムを取り入れた必修及び選択科目による教育を通して、SDGsに謳われている持続可能な社会を構築するための 21 世紀の課題・問題点を把握して理解する力、及びそれらの課題・問題点を解決するための専門性を修得させることを目的とする。本プログラムには、主に4つの専門教育プログラム(分子生物、電気電子物理工学、応用化学及び環境社会基盤国際)に所属する教員が参画するが、加えて教育学部教員、経済学部教員及び埼玉県環境科学国際センターの連携教員にも協力を仰ぎ、文理融合型の質の高い教育を行う。本プログラムの特徴である文理融合型教育実践のために、教育学部、経済学部、埼玉県環境科学国際センター教員 (Center for Environmental Science in Saitama, CESS 連携教員) が開講する科目は以下のとおりである。

環境経済学 (経済学部教員)

Public Policies and SDGs (経済学部教員)

環境地質学特論 (CESS 連携教員)

環境生物学特論 (CESS 連携教員)

水環境工学特論 (CESS 連携教員)

グローバルパートナーシップ (教育学部教員)

農作物栽培技術演習 (教育学部教員)

これらの科目はいずれも指定選択科目となっており、少なくとも3科目は履修することが修了要件として義務づけられている。

最後に特別教育プログラムについて述べる。本改組においては、新たに3つの特別教育プログラム(副プログラム)を導入する。

**特別教育プログラム(A)**は、工学部改組の際に工学部共通プログラムとして導入した、「イノベーション人材育成プログラム」を大学院まで拡張し、6年一貫型の教育とするものである。本特別教育プログラムは、「2018年度、文部科学省、科学技術の社会実装教育エコシステム拠点形成事業」により設計した「経済経営をマイナーとする工学系学士・修士連結教育プログラムの設計」において検討・設計された教育プログラムを、本研究科の実情に合わせて若干の修正を行ったプログラムである。本プログラムの基礎となる工学部に導入した「イノベーション人材育成プログラム」では、機械工学・システムデザイン学科及び環境社会デザイン学科の学生は10単位以上、電気電子物理工学科、情報工学科、応用化学科の学生は6単位以上の履修が卒業要件を満たすために必要となっている。今般新たに導入する博士前期課程に拡張した「6年一環型イノベーション人材育成プロ

グラム」では、博士前期課程において6単位以上、総単位(学部・修士)として12 単位以上修得することで同教育プログラム修了と認定することとする。なお、本プログラムの特性上、履修対象は、主として工学部より進学した学生となるが、本理工学研究科では博士前期課程において学部の講義を履修できるシステムを導入していることから、理学部あるいは他大学から進学してきた学生にも十分、プログラムを履修可能な設計となっている。

**特別教育プログラム(B)**は、「データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム」である。本プログラムも(A)のプログラムと同様に、先の拠点形成事業において設計された「数理・データサイエンス教育プログラム」をベースとしている。このプログラムでは、理工系の基礎教育を充実させる目的で理学部及び工学部の共通科目群として導入した「理工系基礎教育科目」の一つである「確率・統計基礎」に加えて学部2～4単位、博士前期課程において2～6単位(全て必修科目)、総単位(学部・修士)として8単位を修得した学生に対して、同教育プログラム修了と認定する。本プログラムの必修科目となる「確率・統計基礎」は、理学部・工学部の共通科目であり、現時点で両学部学生の64%が単位を取得していることから、学部の教育プログラムにかかわらず理工学研究科、博士前期課程に進学した情報工学プログラム以外の全学生が履修可能な教育プログラムとなる。本プログラムの実行にあたっては、理工学研究科にデータサイエンス教育のカリキュラム担当者として当該分野に精通した実務家教員を配置するとともに、理工学研究科の情報系教員を加えることにより、プログラムを円滑に実施する。

**特別教育プログラム(C)**は、「6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム」である。本プログラムの基礎となる「ハイグレード理数教育プログラム」は既に理学部で導入されており、毎年10名程度が本プログラムを修了している。本プログラムは、いわゆるハイレベル研究者養成のエリート教育に相当するプログラムであり、学部入学時から特別研究、科学プレゼンテーションといった研究者育成を念頭においた質の高い少人数クラスの教育プログラムを構築しており、博士前期課程において必修9単位以上、総単位として13 単位以上を修得することでプログラム修了となる。なお、本プログラムの導入の趣旨としては、先にも述べたとおり6年一貫教育プログラムによる博士後期課程進学者の育成を目指すものである。

なお、これら一連の特別教育プログラムでは、博士前期課程教育の柱となる各教育プログラムの修了要件とは別に、必修科目も含めた修了要件が設定されており、各特別教育プログラム修了者には、修了認定証を授与する。

これら一連の特別教育プログラムでは、就職先企業に対して実施したアンケートにおいて、専門分野にかかわらず大学の教育課程において修得させて欲しい学生の資質として毎年強く要望されている、“コミュニケーション能力や協調性”を涵養させるために、演習系科目、海外も含めたインターンシップ科目も充実させる。そのために、特別教育プログラム(A)及び(B)では、実務家教員をプログラム責任者、理工学研究科教育部長(教育研究評議員)を副責任者として運営し、実務家教員の力が発揮できる環境を整備する。なお、教育プログラムの実施母体となる教員組織との対応であるが、まず、教育の基本となるプログラム(10の専門教育プログラム、融合教育プログラム、特別教育プログラム)の運営を円滑に進めることができるように、それぞれの教育プログラムにはプ

プログラム長をおく。さらに質の高い教育ができるように、教えるべき内容に沿って適切な教員を各プログラムに配置する。本研究科が実施する6年一貫型教育は、学部生への博士前期課程科目の履修を促進することによる教育プログラムのシームレス化を目指すものであり、従来の学部教育の質を低下させる恐れは全くない。

### 3-2 理工学研究科博士前期課程の教育目的と教育目標

#### 3-2-1 教育目的

本研究科博士前期課程においては、学部における専門基礎教育をもとに、専門分野のみならず基礎から応用にわたる広い関連知識の修得を目指す高度専門教育を通して、科学技術イノベーションを牽引することができる、独創性のある国際的なレベルの研究者へ成長するための基礎を備えた人材又は国際的な知識基盤社会において指導的役割を果たすことができる高度専門職業人の育成を教育研究上の目的とする。

#### 生命科学専攻

##### ・分子生物学プログラム

分子生物学プログラムでは、おもに微生物及び植物を実験材料として、ゲノムとその支配下にある生体分子の構造から生命の仕組みを理解するための教育研究を行う。学士課程において学修した分子生物学の基礎を土台として、博士前期課程においては最先端の知見を習得し、これを実践するために独創的な研究活動に参加する。国際性を身につけた研究者や技術者、教育者として、食料・環境・医療など社会が抱える諸問題に誠実かつ着実に取り組み、成果をあげる人材の育成を教育研究上の目的とする。

##### ・生体制御学プログラム

生体制御学プログラムでは、脊椎動物などを用いた神経・内分泌・発生についての細胞、組織、器官、及び個体レベルの研究と教育、DNA 損傷や細胞死、老化など、幅広い生命現象の基礎的研究手法などの教育を通して、基礎から医学的応用研究にまで関わる研究分野で活躍できる人材の育成、及び、生態学や進化生物学的観点から地球規模の生命現象の解明に取り組める研究者の育成を教育研究上の目的とする。

#### 物質科学専攻

##### ・物理学プログラム

物理学プログラムでは、自然界の多岐にわたる現象をその根源から解明する物理学分野において、学部(理学部物理学科)・博士前期課程(物理学プログラム)を通じた体系化されたカリキュラムに基づいた高度専門教育を実施し、基盤的学問の素養と幅広い視野を持つ、国際社会で活躍できる先端物質科学技術領域における専門家の育成を教育研究上の目的とする。

##### ・基礎化学プログラム

基礎化学プログラムの教育研究の目的は、学士課程における基礎教育を基盤として研究活動を行うことにより、基礎化学に関する専門知識と実験技術を有し、幅広い視野をもって自然の真理

を探究する研究者、あるいは自然科学における「化学」の役割を理解し、その重要性を認識した広い視野をもち、化学を基盤とした理学的見識をもち、それを活かして社会を構築することに貢献できる研究者、または、普遍的な化学の法則や基本原理を未来へ継承することができる教育者を養成することである。理学における基礎化学は、主に分子を対象とした自然の諸現象の普遍的な法則や基本原理の解明を目指す学問領域である。これに関する研究活動を通じて課題探究能力及び問題解決能力を高め、未知なる事象に対する総合的判断力を有する人材の育成を教育研究上の目的とする。

#### ・応用化学プログラム

応用化学プログラムの教育上の目的は、我が国の産業界の中核を担う化学技術者の養成である。応用化学は人間社会の持続可能な発展の要諦であり、本プログラムは工学部応用化学科における専門教育との一貫性を重視し応用化学の体系的な教育を行う。これにより、新規機能性材料の創製、先端的分析技術の開発、先進的物質循環制御系の構築などの様々な工学的創造に必須となる広範な知識と技能を修得させ、応用化学を基盤とした論理的思考により製品開発や社会問題解決に本質的に貢献する人材の育成を教育研究上の目的とする。

### 数理電子情報専攻

#### ・数学プログラム

数学プログラムに先立ち、理学部数学科では、自然及び社会の数理現象について、基本原理及び基本構造を明らかにすることを目指し、数学の基礎学力、論理的思考力、応用力の修得を目標としている。博士前期課程では引き続きこれらの能力を伸ばし、最先端の研究に寄与できる能力を養うことを目指す。課程修了後に教育及び社会の諸分野で活躍できる人材、及び、博士後期課程に進学し研究者を目指す人材の育成を教育研究上の目的とする。

#### ・電気電子物理工学プログラム

電気電子物理工学プログラムでは、学部教育との一貫性を重視し、工学部電気電子物理工学科における専門基礎教育をベースに、電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術分野における最先端の知見を含む高度専門教育を実施する。この分野の発展に必要な専門知識と能力を備え、物性物理など関連する基盤的学問の素養と地球環境保全を考慮した幅広い視野を持ち、国際的な情報化社会の進展に指導的役割を果たすことのできる高度職業人の育成、ならびに独創性を備えた国際的レベルの研究者の育成を教育研究上の目的とする。

#### ・情報工学プログラム

情報工学プログラムでは、学部専門教育との一貫性を重視し、工学部情報工学科における専門基礎教育をベースに、情報工学に関する最先端の知見を含む高度専門教育を実施する。学部・博士前期課程を通じた体系化されたカリキュラムに基づき、情報技術が不可欠な社会において指導的役割を果たすことのできる優れた高度情報技術者の育成、及び、情報工学に関わる研究分野において高度な知識と能力を有し独創性の高い研究者の育成を教育研究上の目的とする。

## 機械科学専攻

### ・機械科学プログラム

機械工学分野は工学の基軸をなしており、他の工学分野とも有機的に結びつき、共に進展することが求められている。そのため、生産性の高度化及び高効率化を実現するとともに、人間と機械が共存する豊かな社会基盤の創造を目指す上で必要とされるシステムを構築していく必要がある。機械科学プログラムでは、工学部機械工学・システムデザイン学科における教育研究内容を発展させ、人間を支援するための科学技術について研究し開発する上で中核をなす優れた人材の育成を教育研究上の目的とする。

## 環境社会基盤専攻

### ・環境社会基盤国際プログラム

環境社会基盤国際プログラムでは、われわれを取り巻く自然環境の絶え間ない変化を的確に捉えつつ、多様化していく社会ニーズに応え、自然環境と調和した持続可能な社会基盤の計画・設計・施工・維持・管理技術を創造的かつ国際的に担うことができる人材の育成を教育研究上の目的とする。

## 融合教育プログラム:

### ・地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

融合教育プログラムでは、自然資源の持続可能な管理と効率的な利用、国際的な枠組みに従った製品ライフサイクルを通じた化学物質の管理と大気・水・土壌への放出の削減、再生利用による廃棄物発生量の削減、植物資源の管理・育種・栽培・繁殖・培養技術及び生産システム、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識などに係る研究と教育を、人文・社会科学分野の教員の協力も得ながら理工学の分野横断体制により行う。

## 特別教育プログラム

### ・6年一貫型イノベーション人材育成プログラム

深い専門知識に加えて、解決すべき社会的課題に対する科学的分析・理解に基づいて課題解決方法の設計・デザイン、種々の技術の統合・システム化による社会実装を実現しうる、高度研究者・技術者の養成

### ・データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム

深い専門的知識に加えて、膨大なデータから有用な情報を抽出し、さらにデータに内在する本質的構造を見極めて数理的思考に基づいた解析により、新たな価値を生み出すことが可能な高度研究者・技術者の養成

### ・6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム(HiSEP-6)

特別教育プログラム HiSEP-6 は、理数分野で特に高い研究意欲を有し、基礎学力を備えた「研究者の芽」を育てる目的で理学部において実施している「ハイグレード理数教育プログラム」

(HiSEP)を博士前期課程に展開するプログラムである。HiSEP で培った基礎学力を土台に特別講義・科学プレゼンテーション・海外インターンシップにより、高い専門性と応用力を養う。加えて博士後期課程進学を促し、研究者養成の一翼を担う。

### 3-2-2 教育目標

本研究科博士前期課程においては、専門分野を体系的に深く学ぶことができる専門教育プログラムを通して、理学及び工学に関する高い専門性を身につけた研究者あるいは高度技術者の育成を第一の目標とする。さらに高い専門性に加えて、融合教育プログラムや特別教育プログラムを通して現代社会に内在する種々の問題の解決に貢献し、持続可能な社会の構築に貢献しうる幅広い知識と技能を持つ研究者あるいは高度技術者の育成を目標とする。

#### 生命科学専攻

##### ・分子生物学プログラム

分子生物学プログラムは、微生物及び植物を研究材料とした分子生物学、生化学、生理学、構造生物学、生物物理学を主たる学問分野とし、以下の教育目標を掲げる。

1. 生命の基本現象を分子レベルで深く理解し、生物学・医学・薬学・農学・バイオインフォマティクスの諸分野で、研究者・技術者として科学技術イノベーションを牽引できる人材の養成
2. 分子生物学における先進技術や専門知識を習得し、応用することで、現代社会が抱える諸難問に対して新たな突破口を見いだせる人材の養成
3. 海外の教育研究機関との交流を通して国際感覚を養い、未来への明確なビジョンを有した、世界を舞台に活躍できる研究者の養成

##### ・生体制御学プログラム

1. 遺伝学、調節生理学、発生生物学、形態形成学及び細胞制御学など、生体制御学各分野の高度な知識と専門性を有する人材の養成
2. 生体制御学の最先端知識に裏付けされた 実践的応用力を有し、医学や生物学に関わる現代社会のさまざまな問題の解決に貢献できる人材の養成
3. 生体制御学の新たな分野を開拓し、独創的な研究の展開から、将来にわたり国際的に広く活躍できる研究者の養成

#### 物質科学専攻

##### ・物理学プログラム

物理学プログラムでは自然科学の基礎となる物理学の基本と思考方法の修得を前提に、物理学の研究や科学技術の分野で必要な柔軟な思考力と能動的な問題解決能力を備えうるように教育を行い、高度な技術者及び研究者の養成を目指す。具体的な教育研究プログラムは以下のとおりである。

1. 素粒子間の相互作用を統一的に理解する理論的研究

2. 宇宙線起源や宇宙の進化を実験的に明らかにする研究
3. ハドロン・原子核の構造と反応機構を解明する理論的・実験的研究
4. 最新の量子科学的手法(中性子散乱、 $\mu$  SR、放射光、種々の数値的・解析的理論 計算など)を駆使し凝縮体(超伝導物質や磁性体)の構造やダイナミクスを解明する理論的・実験的研究、新物質の作製とその多重極限環境下での物性の測定に関する研究

これらのプログラムを通して、種々の物質構造の基本や量子科学についての基本的理解はもちろんの事、研究の最前線である計算・観測・実験等の体験を通して課題解決能力を身につけ、情報収集の能力も備えた国際的にも通用する人材養成を図る。

#### ・基礎化学プログラム

1. 先端的専門知識の深い理解と未知なる事象に対応する能力

量子化学に代表されるような物理的な側面から化学を理解する物理化学、遷移元素や典型元素の性質を学ぶ元素化学、及び炭素を中心とした有機化学を柱とした基礎化学に関する知識を習得したうえで、最先端の研究に携わることで未知の事象を根本から考えて理解し、未解決の問題を根本から考えて解決することを可能にする人材の育成

2. 最先端の理学研究を遂行する能力

最先端の研究活動を通じて自然科学における問題を発見し、それを解決する能力を修得した研究者の育成。

3. 化学を基盤とした理学的見識をもち、よりよい社会の構築に寄与する能力

自然科学における「化学」の役割を認識し、その重要性を認識した広い視野をもったうえで、基礎化学を基盤とした理学的見識をもち、それを活かした社会の構築に寄与することが可能な社会人の育成。

4. 高いコミュニケーション能力

研究の成果を文章として表現する能力を有し、口頭で発表する能力も備えた高いコミュニケーション能力を有する人材の育成。また、周辺分野に関する英語の文章を理解し、概要を的確に表現することができる、国際的に活躍できる人材の育成。

#### ・応用化学プログラム

1. 応用化学の専門知識の理解

プロセス・環境工学・高分子材料・分離分析・生体工学・無機固体材料・工業有機合成・分光計測の8つの応用化学領域の高度な知識と技能を有し、産業界で役立つ材料と技術の開発を主体的に行うことのできる人材の育成

2. 応用化学の研究能力の修得

応用化学の専門知識を総合して研究計画を立案し、製品開発と問題解決につながる研究を行う能力を有する人材の育成

3. 社会における役割の認識と職業倫理の理解

化学産業の中核を担う技術者として、応用化学の重要性と社会的責任及び職業倫理を十分に理解し国際的な視野を有する人材の育成

#### 4. 表現能力の修得

学内の研究成果発表会、学外の学会発表でのプレゼンテーション資料や学術論文の作成と発表を通じて、自身の研究内容を他人に理解させるための論理的文章の作成能力とコミュニケーション能力を有する人材の育成

### 数理電子情報専攻

#### ・数学プログラム

数学プログラムでは、学部における専門基礎教育を土台とし、以下の教育目標を掲げる。

##### 1. 高度な数学的知識の修得

学部教育で修得した基礎学力、論理的思考力、応用力を基に、専門性の高い数学的知識の修得を目指す。

##### 2. 抽象的概念の理解力の修得

数学的事象を論理構造として正確に把握できる能力の獲得を目指す。そして、抽象的概念を理解し活用できる能力の涵養を目指す。

##### 3. 論理的思考力、表現力の涵養

論理的思考力を活用し、専門知識を発展させ、事象を正しく表現する能力の涵養を目指す。

##### 4. 社会における数学の役割の理解

数学の知識や思考過程を活かした専門性の高い職業人になるべく、それらを社会に寄与できる人材を育成する。

#### ・電気電子物理工学プログラム

電気電子物理工学プログラムでは、学部・博士前期課程を通して体系化されたカリキュラムによって、高度な技術者及び研究者の育成を目指す。教育目標は以下のとおりである。

##### 1. 電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術分野の最先端の知見や専門知識を有する人材の育成

##### 2. 課題に対応できる応用能力を発展させ、技術者・研究者として技術革新を常に生み出せるように、電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術分野に関する専門知識、専門技術を有する人材の育成

##### 3. 電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術分野に携わる技術者・研究者として社会性を考慮して技術・研究を発展させることのできる人材の育成

##### 4. 論理的思考能力、コミュニケーション能力を備えた人材の育成

#### ・情報工学プログラム

教育目標は以下のとおりである。

##### 1. 情報工学に関わる専門分野において、系統化された知識体系を有し、理論/実践のいずれにも長けた人材の育成

##### 2. 主として修士論文で取り組む情報工学に関わる研究分野、研究課題に関して、高度な知識と能力を有する人材の育成

3. 自らの着想により研究課題や高度な学習課題を発展させ遂行する能力を有する人材の育成
4. 口頭発表能力、討論能力、論述能力、文献調査能力、学術論文・技術資料の読解能力を含む広義のコミュニケーション能力に長けた人材の育成
5. 学部学生に対する講義・演習・実験の補助、各研究室での後輩の指導補助などの経験を通して、指導力・統率力を有する人材の育成
6. 自己に課せられた社会的責務を直視し、情報技術者・研究者としての自覚を持ち、結果責任を自ら負うことができる人材の育成

## 機械科学専攻

### ・機械科学プログラム

1. 先端的専門知識の理解
 

学部教育で修得してきた機械工学に関する知識を発展させ、機械工学に関する先端技術を知識として習得し理解する人材の育成
2. 研究能力の修得
 

専門知識を応用・総合して研究を遂行する能力、研究立案能力、問題解決能力、独創的思考力を有する人材の育成
3. 社会における役割の認識と職業倫理の理解
 

工学の中核をなす技術者・研究者として、社会の健全な発展に対してどのように貢献すべきかを、職業倫理の立場から理解する人材の育成
4. 表現能力の修得
 

機械工学分野に関する内容を口頭で発表する能力、文章として表現する能力を有し、英語の技術的な文書を読みその内容を理解するとともに、概要を適確に説明する能力を有する人材の育成

## 環境社会基盤専攻

### ・環境社会基盤国際プログラム

環境社会基盤国際プログラムの教育研究上の目標は以下のとおりである。

1. 最新の専門知識・技術の理解
 

学部教育で修得した社会基盤整備と防災に関する専門知識を更に発展させ、先端知識・技術を習得し理解する人材の育成
2. 研究能力の修得
 

独創性、創造性、未知のものへのチャレンジ精神、主体的な課題設定能力、論理的思考力を有し、専門知識を応用・総合して研究を遂行できる人材の育成
3. 社会における役割の認識と職業倫理の理解
 

技術者・研究としての社会的責任・使命を自覚し、それを進んで実践できる社会性の涵養
4. 国際性の育成

諸外国の事情を正しく理解し、国際的に活躍できる能力の育成

#### 5. 表現能力の修得

自らの考えや成果を、論理的に第三者に伝えるためのコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、文章として表現できる能力の育成

### 融合教育プログラム

#### ・地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

融合教育プログラムでは、エネルギー・資源・環境を主分野とし、以下を教育目標とする。

1. 持続可能な開発目標 (SDGs) の達成に貢献するためのエネルギー・資源・環境の各専門分野の専門性と分野横断による複合的知識を有し、問題解決能力を身に付ける人材の育成
2. 持続可能な生産消費形態の確保、陸上生態系の保護・回復・持続的な利用促進、森林の持続可能な管理、生物多様性の損失の防止に貢献できる人材の育成
3. 国内の地域特性の理解とともに海外諸国の自然・文化の特性も理解し、豊かな国際性を育む

### 特別教育プログラム

#### ・6年一貫型イノベーション人材育成プログラム

1. 各教育プログラムの高度な専門知識を修得した研究者・技術者の育成
2. 解決すべき課題の分析・理解、要素技術を統合・システム化して解決方法を構築できる研究者・技術者の育成
3. 異分野共同による社会実装を実現しうるリーダーシップを備えた研究者・技術者の育成

#### ・データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム

1. 各教育プログラムの高度な専門知識を修得した研究者・技術者の育成
2. 膨大なデータから必要とするデータを抽出・解析して有用な情報を引き出すことができる技術者・研究者の育成
3. 解析したデータを正しく判断し、それぞれの分野の専門知識と融合させることで新たな価値を創造できる技術者・研究者

#### ・6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム (HiSEP-6)

研究者として必要な以下の能力を養うことを目標とする。

1. 理学に関わる広い見識を身につけ、研究面での企画・実施・解析能力の獲得を目指す。
2. 研究遂行及び公表に必要な国際性と社会性を涵養する。
3. 博士後期課程進学を視野に入れ、研究においては特殊性と独創性を重視させる。
4. 研究倫理を遵守し、研究に携わる者としての責任を全うできる人材を育成する。

### 3-3 修了認定・学位授与の方針

博士前期課程においては、所定の教育課程を修め、所属する教育プログラム、すなわち分子生

物学、生体制御学、物理学、基礎化学、応用化学、数学、電気電子物理工学、情報工学、機械科学、環境社会基盤国際、地球環境における科学技術の応用と融合、のいずれかで専門知識を基に研究を行い、各専攻・プログラムごとに求められている能力を獲得し、資質を涵養した者に修士(理学)、又は修士(工学)の学位を授与する。

### 3-4 ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)

#### 生命科学専攻

本専攻は、分子生物学プログラム、生体制御学プログラムの2つのプログラムで構成されており、修了後に生命科学分野において、教育・研究・技術開発に活躍しうる人材を育てるためのカリキュラムを設計している。これらの2つのプログラムは独立したものでなく、専攻共通科目を通じて有機的に結びついており、隣接する分野における学術的な関連性を含めて広く学ぶことを可能としている。一方で、それぞれのプログラム以外から履修できる科目数を制限し、各プログラムからの履修単位数を 20 以上とすることで高い専門性を担保する。以上のカリキュラムにより、それぞれのプログラムにおける高度な専門性と、隣接する関連分野の幅広い見識を修得し、社会の諸分野の発展に寄与する能力を涵養した者に修士(理学)を授与する。

各プログラムのディプロマ・ポリシーは以下のとおりである。

#### ・分子生物学プログラム

分子生物学プログラムでは、所定の教育課程を修め、分子生物学に関する専門知識をもとに独創的な研究を行うことで、国際性を身につけた研究者や技術者、教育者として、食料・環境・医療など社会が抱える諸問題に取り組み、成果を挙げることのできる能力を獲得し資質を涵養した者に修士(理学)の学位を授与する。

#### ・生体制御学プログラム

生体制御学プログラムでは、細胞レベルから個体レベルにわたる生体の制御機構に関する基礎学問を修め、動物・植物・菌類などを用いた生命の連続性及び生理現象の恒常性に関する先端的な研究を進めるための専門技術を習得することで、国際的に活躍する研究者や高度専門職業人として、生命科学や健康福祉、生物資源の活用などに関わる諸分野の発展に貢献できる資質を涵養した者に修士(理学)の学位を授与する。

#### 物質科学系専攻

本専攻は、物理学プログラム、基礎化学プログラム、応用化学プログラムの3つのプログラムで構成されている。修了後に物質科学を基盤とする分野において教育・研究・技術開発に活躍しうる人材を育てるためのカリキュラムを設計している。それらは独立しつつも、専攻共通科目を通じて有機的に結びついている。共通科目により、隣接する分野における学術的な関連性を学ぶ、一方で、それぞれのプログラム以外から履修できる科目数を制限し、各プログラムからの履修単位数を 24 以上とすることで高い専門性を担保する。以上のカリキュラムにより、それぞれのプログラムにおける高度な専門性と、隣接する関連分野の幅広い見識を修得し、社会の諸分野の発

展に寄与する能力を涵養した者に修士(理学)、又は修士(工学)を授与する。

各プログラムのディプロマ・ポリシーは以下のとおりである。

・物理学プログラム

物理学プログラムでは、自然界の多岐にわたる現象をその根源から解明する物理学分野において、学士課程(理学部物理学科)・博士前期課程(物理学プログラム)を通じた体系化されたカリキュラムに基づいた高度専門教育を実施し、基盤の学問の素養と幅広い視野を持つ、国際社会で活躍できる先端物質科学技術領域における専門家としての能力を獲得し資質を涵養した者に修士(理学)の学位を授与する。

・基礎化学プログラム

基礎化学プログラムでは、学士課程における基礎教育を基盤とし、主に分子を対象とした、自然の諸現象の普遍的な法則や基本原理の解明に関する研究活動を通じて課題探究能力及び問題解決能力を高め、基礎化学に関する専門知識と実験技術を有し、自然科学における「化学」の役割を理解しながら幅広い視野に基づいて未知なる事象を解明することを可能にする総合的判断力を獲得し資質を涵養した者に修士(理学)の学位を授与する。

・応用化学プログラム

応用化学プログラムでは、我が国の産業界の中核を担う化学技術者・研究者を養成する。応用化学は人間社会の持続可能な発展に必要不可欠であり、本プログラムは工学部応用化学科における専門教育との一貫性を重視し応用化学の体系的な教育を行う。その教育内容には、新規機能性材料の創製、先端的解析技術の開発、先進的物質循環制御系の構築などの様々な工学的創造に必須となる広範な知識と技能の全てが含まれる。本プログラムは、所定の単位数を修得し、応用化学を基盤とした論理的思考により製品開発や社会問題解決に実践的に貢献する能力を獲得し資質を涵養した者に修士(工学)の学位を授与する。

## 数理電子情報専攻

本専攻は、数学プログラム、電気電子物理工学プログラム、情報工学プログラムの3つのプログラムで構成されている。専攻として修了後に数理電子情報部門において、教育・研究・技術開発に活躍しうる人材を育てるためのカリキュラムを設計している。それらは独立しつつも、専攻共通科目を通じて有機的に結びついている。共通科目により、隣接する分野における学術的な関連性を学ぶ。一方で、それぞれのプログラム以外から履修できる科目数を制限し、各プログラムからの履修単位数を24以上とすることで高い専門性を担保する。以上のカリキュラムにより、それぞれのプログラムにおける高度な専門性と、隣接する関連分野の幅広い見識を修得し、社会の諸分野の発展に寄与する能力を涵養した者に修士(理学)、又は修士(工学)を授与する。

各プログラムのディプロマ・ポリシーは以下のとおりである。

・数学プログラム

数学プログラムでは、学部教育で修得した基礎学力、論理的思考力、応用力を伸ばし、専門性の高い数学的知識を修得することを第一の目的とする。第二の目的は、最先端の研究に寄与

できる能力の獲得である。更に、課程修了後に教育及び社会の諸分野で活躍できる資質、または、博士後期課程に進学し研究者を目指す資質を養う事が最終目的である。以上の能力を獲得し資質を涵養した者に修士(理学)の学位を授与する。

・電気電子物理工学プログラム

電気電子物理工学プログラムでは、所定の教育課程を修め、研究活動を通して、電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術分野における最先端の知見を含む専門知識と論理的思考能力、技術者・研究者として社会性、コミュニケーション能力を獲得し資質を涵養した者に修士(工学)の学位を授与する。

・情報工学プログラム

情報工学プログラムでは、情報工学に関する幅広く豊かな識見、コミュニケーション能力、情報技術者として社会的責任を自覚しかつ指導的役割を果たす能力、そして、情報工学に関わる研究分野での高度な知識と能力を獲得し資質を涵養した者に修士(工学)の学位を授与する。

## 機械科学専攻

・機械科学プログラム

機械工学分野は工学の基軸をなしており、他の工学分野とも有機的に結びつき、共に進展することが求められている。そのため、機械科学プログラムでは、生産性の高度化及び高効率化を実現するとともに、人間と機械が共存する豊かな社会基盤を創造するため、工学の中核をなす優れた人材を育成することを目的としている。

このようなカリキュラム・ポリシーを鑑み、機械科学専攻では機械工学・システムデザイン学科における教育研究をさらに発展させることにより、以下の能力を獲得し、これらの資質を涵養した者に修士(工学)の学位を授与する。

- ・機械工学に関するさらなる教育及び研究活動をとおして、先端的な専門知識の獲得ができており、職業倫理を理解することができる。
- ・社会に対して果たすべき役割について認識できており、研究活動をとおして課題を解決することができる。
- ・機械工学分野における技術的な内容に関して、他の工学分野の技術者ともコミュニケーションすることができる。

## 環境社会基盤専攻

・環境社会基盤国際プログラム

環境社会基盤国際プログラムでは、修了に必要な履修単位数のうち、24単位以上を本プログラムから履修することで高い専門性を担保する。そのうえで、自然環境の変化を的確に捉え、社会における役割を理解し、長期的かつ国際的な視野を持って課題に対処し、幅広く高機能化する社会基盤の各専門知識を習得し応用できる能力と自らの考えを論理的に表現できる能力を獲得し素養を涵養した者に修士(工学)の学位を授与する。

## 融合教育プログラム

### ・地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

融合教育プログラムでは、自然資源の持続可能な管理と効率的な利用、国際的な枠組みに従った製品ライフサイクルによる化学物質の管理と大気・水・土壌への放出の削減、再生利用による廃棄物の削減、植物資源の管理・分子育種・栽培技術及び生産システムに関する持続可能な開発、及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識など SDGs に掲げられている開発目標に密接に関連する世界規模の課題に対して、文理融合教育による講義と個々の専門分野の研究活動を通して高い専門性と幅広い知識を習得、資質を涵養した者にその専門性に応じて修士(理学)、又は修士(工学)の学位を授与する。

## 特別教育プログラム(プログラム修了認定基準)

### ・6年一貫型イノベーション人材育成プログラム

各教育プログラムにおける高度な専門知識の修得に加えて、現代の解決すべき社会的課題に対して科学的分析と理解及びそれらに基づいた課題解決方法の設計・デザイン、種々の技術の統合・システム化による社会実装までを実現しうる幅広い実践的能力を修得した者にプログラム修了証を授与する。

### ・データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム

各教育プログラムにおける高度な専門知識の修得に加えて、膨大なデータから有用な情報を抽出し、さらにデータに内在する本質的構造を見極めて数理的思考に基づいた解析により、新たな価値を生み出すことが可能な実践的能力を修得した者にプログラム修了証を授与する。

### ・6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム(HiSEP-6)

理数分野で特に高い研究意欲を有し、基礎学力を備えた「研究者の芽」を育てる目的で理学部で実施されている「ハイグレード理数教育プログラム」(HiSEP)において培った基礎学力を土台に、高い専門性と応用力を養い、「研究者の芽」を発芽させる本プログラムを通じて

1. 理学に関わる広い見識と研究面での企画・実施・解析能力の獲得
2. 研究遂行及びに公表に必要な国際性と社会性
3. 研究における特殊性と独創性
4. 研究倫理の遵守

の4点を修得した者にプログラム修了証を授与する。

## 3-5 カリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施の方針)

博士前期課程においては、学部専門教育との一貫性を重視する立場から、学部と連結した6年一貫型の教育課程を編成し、「修了認定・学位授与の方針」にかなう質の高い教育を実施する。そ

のため、理工学研究科に**5専攻**を設置し、以下の**専門教育プログラム**及び**融合教育プログラム**を置く。

### **専門教育プログラム**

生命科学専攻： 分子生物学プログラム、生体制御学プログラム

物質科学専攻： 物理学プログラム、基礎化学プログラム、応用化学プログラム

数理電子情報専攻： 数学プログラム、電気電子物理工学プログラム、情報工学プログラム

機械科学専攻： 機械科学プログラム

環境社会基盤専攻： 環境社会基盤国際プログラム

学生は1年次よりいずれかの専攻に所属し、定められた指導教員の指導の下、高度な専門知識の習得と研究活動を行い、その成果をまとめた修士論文を執筆する。

学生は、6年一貫型教育プログラムの教育目的、目標を達成するために設計された各専門教育プログラムが開講する専門科目の授業を受講する。加えて、専門領域にかかわらず研究者・高度技術者の汎用的能力を学ぶことができる共通科目、専攻共通科目、さらに幅広い専門知識を修得するために所属している専攻外の開講科目についても必要に応じて受講する。

目指す人材像とカリキュラム(科目群)との関係を図6に示す。

高い専門性を修得する専門科目群に加えて、関連する周辺分野の共通的知識を学ぶための専攻共通科目群、現代的な課題への対応能力を養うための課程共通科目群および特別教育プログラム科目群を開講し、実社会で活躍できる人材の育成、日本の基礎科学の発展に貢献しうるハイレベル研究者の育成を目指す。

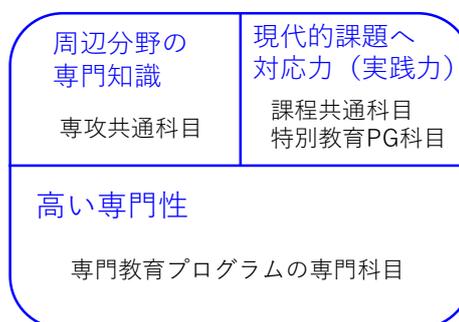


図6 人材像とカリキュラムとの関係

### **融合教育プログラム**

地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

融合プログラムでは、世界共通の開発目標として決定されたSDGsの達成に貢献しうる人材の育成を目指して、文理融合型のカリキュラムを構成する。専門分野にかかわらずプログラムへの参加が可能となるように、プログラムに参加する学生は、10の専門教育プログラムに所属して専門教育課程による教育を受けつつ、本プログラムを特徴づける、文理融合型カリキュラムによる教育を受ける。

### **特別教育プログラム**

所属する教育プログラムにおける専門教育課程に加えて、現代的課題を解決するために必要とされる多面的能力を身につけさせるため、あるいは博士後期課程進学へと繋がるハイグレードな理

数教育を実現するために、副プログラムとして**特別教育プログラム**を置く。

- (A) 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム
- (B) データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム
- (C) 6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム(HiSEP-6)

これらの特別教育プログラムでは、各々のプログラムのディプロマ・ポリシーを達成するために、学部-博士前期課程を通した6年一貫型のカリキュラムを構成し、6年を通した質の高い教育を行う。

各科目の評価は、教員が学生に示した到達目標に対する学生の達成度を基に評価する。評価はグレードポイント(GP)で行い、それらの平均値を GPA として平均成績の評価を行う。また、修士論文は複数教員で審査して可否を判定する。

以下、各教育プログラムのカリキュラム・ポリシーを記載する。

各教育プログラムは、専門性を重視する考え方から、専攻内であっても原則、所属するプログラムの科目を履修することになるが、学生が周辺分野の幅広い専門性を獲得できるように、理工学研究科の「共通科目」、専攻内の共通科目である「専攻共通科目」を4単位程度履修可能なプログラム設計となっている。また、特別教育プログラム(副プログラム)履修の場合にも、一部の単位が修了単位として認められる。

## 生命科学専攻

### ・分子生物学プログラム

分子生物学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 分子生物学に関する専門知識の修得のため、各専門分野の講義を開講する。
2. 独創的かつ実践的な研究を行う資質を育成するために、先端技術を取り入れた実験指導及び最新の論文を用いた輪講を行う。
3. 国際性を身につけた研究者や技術者、教育者として、現代社会が抱える諸問題に取り組み成果を挙げる能力を高めるために、英語教育及び論文作成指導を行う。
4. プログラム修了に必要な知識・能力を確認するため、修士論文を作成させ、口頭発表と質疑応答からなる最終試験を課す。

### ・生体制御学プログラム

生体制御学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 生物現象の制御機構に関する専門性の高い知識の修得のため、各専門分野の講義を開講する。
2. 生命の連続性及び生理現象の恒常性に関する先端的な研究に寄与できる能力育成を目的として、基礎から先進にいたる実験手技の取得のための研究指導、関連分野の論文読解及

びプレゼンテーション能力を磨くための輪講を行う。

3. 国際的に活躍する研究者や高度専門職業人として、生命科学や健康福祉、生物資源の活用などに関わる諸分野の発展に貢献できる資質を高めるため、修士論文を作成させ、その研究成果を研究発表会において報告させる。
4. プログラム修了に必要な知識・能力が習得されていることを精査するため、質疑応答による最終試験を課す。

## 物質科学専攻

### ・物理学プログラム

物理学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 専門性の高い物理学の知識修得のため、専門分野の講義を開講する。
2. 最先端の研究に寄与できる能力のため、論文精読を中心とするセミナーを行う。
3. 実験分野にあっては、最先端の研究に寄与できるような技能を修得するため、実験を行う。
4. 課程修了後に教育及び社会の諸分野で活躍できる資質、または、博士後期課程に進学し研究者を目指す資質の涵養のため、論文指導を行い、修士論文を作成させる。
5. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文発表会とその質疑応答からなる最終試験を課す。

### ・基礎化学プログラム

基礎化学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 専門性の高い基礎化学的知識の修得のため、専門分野の講義及び論文精読を中心とするセミナーを行う。
2. 先端的専門知識の深い理解と未知なる事象への対応力の育成のために、分子の構造・物性や化学反応に関する普遍的な法則や基本原理の解明を目指した研究を行う。
3. 課程修了後に教育及び社会の諸分野で活躍できる資質、または、博士後期課程に進学し研究者を目指す資質の涵養のため、論文指導を行い、修士論文を作成させる。
4. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文発表会とその質疑応答からなる最終試験を課す。

### ・応用化学プログラム

応用化学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 応用化学全分野の体系的な修得のため、専門分野の講義を開講する。
2. 最先端の工学的創造に寄与できる能力を養うため、実践的な応用化学研究を行う。

3. 課程修了後に社会の諸分野で活躍できる資質、または、博士後期課程に進学し研究者を目指す資質の涵養のため、論文指導を行い、修士論文を作成させる。
4. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文発表会とその質疑応答からなる最終試験を課す。

## 数理電子情報専攻

### ・数学プログラム

数学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 専門性の高い数学的知識を修得させるため、専門分野の講義を開講する。
2. 最先端の研究に寄与できる能力を獲得させるため、論文精読を中心とするセミナーを行う。
3. 課程修了後に教育及び社会の諸分野で活躍できる資質、または、博士後期課程に進学し研究者を目指す資質の涵養のため、論文指導を行い、修士論文を作成させる。
4. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文発表会とその質疑応答からなる最終試験を課す。

### ・電気電子物理工学プログラム

電気電子物理工学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 電気・電子・光・情報通信・材料デバイス技術分野の専門知識と最先端の知見を修得するため、幅広い分野の専門科目を開講する。
2. 課題に対応できる応用能力を発展させ、技術革新を生み出す柔軟性と論理的思考能力を獲得するため、特別研究及び輪講を行う。
3. 当該分野に関する内容を適確に表現する能力の習得のため、修士論文を作成させ、修士論文発表会にて口頭発表を行う。
4. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文発表会とその質疑応答からなる最終試験を課す。

### ・情報工学プログラム

情報工学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 情報工学に関する幅広く豊かな識見を得るため、専門分野の講義を開講する。
2. 最先端の研究に寄与できる能力の涵養のため、論文輪講を行う。
3. 自らの着想により課題を解決する能力を身につけさせるために研究課題に取り組ませる。
4. 口頭発表能力、討論能力、論述能力、文献調査能力、学術論文・技術資料の読解能力を含む広義のコミュニケーション能力を身につけさせるために研究発表会を実施する。
5. 課程修了後に情報技術者として社会的責任を自覚しかつ指導的役割を果たす能力、または、

博士後期課程に進学し情報工学に関わる研究分野での高度な知識と能力の涵養のため、論文指導を行い、修士論文を作成させる。

6. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文発表会とその質疑応答からなる最終試験を課す。

## 機械科学専攻

### ・機械科学プログラム

機械科学プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 機械工学に関する先端的専門知識の理解のため、専門分野の講義を開講する。
2. 専門知識を応用・総合して研究する能力の習得と、社会における役割の認識と職業倫理の理解のため、特別研究及び輪講を行う。
3. 機械工学分野に関する内容を適確に表現する能力の習得のため、修士論文を作成させ、修士論文審査発表会にて口頭発表を行う。
4. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文審査発表会とその質疑応答からなる最終試験を課し、複数の教員により可否を判定する。

## 環境社会基盤専攻

### ・環境社会基盤国際プログラム

環境社会基盤国際プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 専門知識及び技術の修得のため、専門分野の講義、PBL 講義、フィールド調査を含む講義を開講する。
2. 最先端の知識と研究能力を修得するため、特別講義及び特別研究を開講する。
3. 英語による講義の開講や、海外の協定校との単位互換制度など、国際性を涵養する仕組みをカリキュラムに導入する。
4. 課程修了後に社会の諸分野で活躍できる資質、または、博士後期課程に進学し研究者を目指す資質の涵養のため、論文指導を行い、修士論文を作成させる。
5. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため、修士論文発表会とその質疑応答からなる最終試験を課す。

## 融合教育プログラム

### ・地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

本プログラムでは、ディプロマ・ポリシー実践のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 主・副の異分野に跨る複数指導教員による論文執筆指導を行う。
2. 科学技術に関する多様な分野の理解のための各専門分野の講義に加え、社会学又は教育

学分野を含む総論の講義、及び現場実習・演習を行う。

3. 2の内容に精通した技術の社会実装を経験している企業や研究所等に所属する学外の様々な技術者による講義等を行う。
4. プログラム修了に必要な知識・能力の確認のため修士論文発表会を実施して質疑応答からなる最終試験を課し、複数教員により可否を判定する。

## 特別教育プログラム

### ・6年一貫型イノベーション人材育成プログラム

プログラム修了要件に挙げられた能力等の獲得のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 6年一貫型教育として、工学部で開講しているイノベーション人材育成プログラムとの連結による一連の科目群を開講する。
2. 企業経営に貢献できる理工系人材や起業家を目指す理工系人材を育成するための科目を開講する。
3. 科学技術イノベーションに貢献しうる実践的スキルを身につけた理工系人材を育成するための演習系科目を開講する。
4. 科学技術の社会実装を実現するために必要な合意形成、社会的ニーズの把握とそれに基づいた新しい価値の創造などを実現しうる理工系人材を育成するための科目を開講する。

### ・データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム

プログラム修了要件に挙げられた能力等の獲得のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 6年一貫教育として、理学部、工学部における基礎的な数学系科目に加えて、大学院におけるより高度な数学系科目とデータ解析手法に関連した科目を開講する。
2. データ解析の基礎となる数学的知識を修得するための科目を開講する。
3. 基礎的な数学的知識を大規模データに適用するためのデータマイニング手法に関する科目を開講する。
4. 機械学習、AIを使ったデータ解析手法を身につけるための科目を開講する。

### ・6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム(HiSEP-6)

プログラム修了要件に挙げられた能力等の獲得のため、以下の方針でカリキュラムを編成する。

1. 理学に関わる広い見識と研究面での企画・実施・解析能力の獲得のために HiSEP 特別講義を開講する。
2. 研究遂行及びに公表に必要な国際性と社会性の獲得のために、科学プレゼンテーションを開講し、海外インターシップを実施する。

3. 研究における特殊性と独創性の獲得のために、HiSEP 特別講義及び科学プレゼンテーションを開講する。
4. 研究倫理の遵守のために、科学プレゼンテーションを開講する。

#### 4 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件

##### 4-1 教育方法、履修指導

本研究科博士前期課程における教育は、研究者や高度技術者を育成するという目的から、専門性を重視したカリキュラム編成をとる必要があることは言うまでもない。そのため、各専攻においても専門分野を重視した教育プログラムを構築する必要がある。一方で、社会で活躍する分野が多岐に渡ることを考えると、今後の人材育成には専門分野を超えた幅広い知識や実践的スキルを学修する必要性も高まっている。更に最も重要な点として、学生がその希望に応じて自由に学ぶことができるカリキュラム設計が必要であることを考慮し、カリキュラムの基本的な設計を行った。

- (1) 専門分野に対応した 10 の専門教育プログラムを設置する。  
入学した学生は、いずれかのプログラムに所属し、高い専門教育を受ける。
- (2) 持続可能な社会の構築に貢献しうる人材を育成するための融合教育プログラムを設置する。  
地球環境における科学技術の応用と融合プログラム
- (3) 実践力を重視した副プログラムを設置する。
  - (A) 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム
  - (B) データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム
- (4) 将来、大学、研究機関において活躍できる人材の育成をめざした副プログラムを設置する。
  - (C) 6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム (HiSEP-6)

各々のプログラム等については詳細な説明は避けるが、10 の専門教育プログラム(＋融合教育プログラム)と副プログラムの組み合わせにより、高い専門性と実践的スキルを備え、さらには科学技術イノベーションを牽引できる高度な人材の育成をめざしている。

次に(1)の専門教育プログラムにおいても、学生がその意思で幅広い知識や実践的能力を身につけることができるように、共通科目群を開講している。この科目群では、専門分野にかかわらず必要となる、文理融合型の科目、実務家教員が担当する実践力養成を重視した演習系科目、知的財産などに関する講義、海外インターシップなどを開講する。

また、複数の専門教育プログラムが存在する専攻では、専攻共通科目を設けることで、学生が学ぶ専門分野の周辺領域についても学修できるように設計している。

履修指導については、教授会で認定された指導教員及び副指導教員の指導、各教育プログラムのカリキュラム教員による履修指導や助言に従って、履修科目の選択や履修時期を決定している。特に毎年度、講義開始前に実施している大学院ガイダンスにおいて、研究科規程の改正や開

講科目の変更等についてカリキュラム委員から適切な説明がなされ、その後、学生が履修登録を行う。

指導教員及び副指導教員は、アドミッション・ポリシーに沿って受け入れた学生について、カリキュラム・ポリシーに従って構築された教育プログラムにより教育を行い、ディプロマ・ポリシーに記載された能力を学生が修得あるいは涵養出来るように指導する。指導教員及び副指導要員は、学生との面談により研究の進捗状況を定期的に確認し、学生の学修状況を把握すると共に、能力向上に向けて必要な助言を行う。博士前期課程2年間においては、概ね1年を終了した時点で中間報告会等を開催し、プログラムを担当する教員団による活動の進捗状況確認により、教育・研究の質を担保する。

#### 4-2 研究指導

博士前期課程学生への研究指導に関しては、入学時に指導教員及び副指導教員2名を決定し、行う。また、学生の研究活動の進捗状況については、各教育プログラムにおいて定められたプログラム長が適切な研究指導がなされるようにチェックし、必要に応じて指導教員あるいは副指導教員へのアドバイスや担当教員の変更等も行う。

副指導教員については、通常、当該プログラムを担当する教員の中から選ばれるが、研究テーマの学術的内容により、他プログラムの教員が副指導教員となることも可能である。特に分野をまたがる研究テーマの場合には、担当プログラムにかかわらず適切な助言が出来る教員を副指導教員として選任する。

なお、本学又は本研究科では下記の研究機関と連携協定を締結しており、学生に対して幅広い知識を習得させるために、これらの機関に所属する研究者と連携することで質の高い研究活動を通じた教育を行う。

- ・理化学研究所(博士後期課程において連携大学院を設置している)
- ・埼玉県環境科学国際センター
- ・埼玉県立がんセンター
- ・埼玉県産業技術総合センター
- ・産業技術総合研究所

#### 4-3 博士前期課程の修了要件

博士前期課程の修了要件は、大学院学則の定めにより、当該課程に2年以上在籍し、30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、当該課程の目的に応じた修士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、教授会が認めた優れた研究業績を上げた者については、1年以上在籍すれば足りるものとする。

教育プログラム毎の修了要件の詳細は、「教育課程等の概要」に記載している。また、修了要件の概要は、4-7 履修モデルの中に記載している。

#### 4-4 学位論文審査

##### ・博士前期課程における学位論文の審査委員会

1. 教授会は、次の各号に掲げる委員をもって審査委員会を組織する。なお、審査委員会に委員長を置く。
  - 1) 指導教員
  - 2) 学位論文等の内容に関連する分野の教員(教授、准教授、講師及び博士前期課程研究指導を担当する助教)2名以上
2. 審査委員会は、学位論文の審査に当たって必要があるときは、他大学の大学院又は研究所等の研究員を審査委員として加えることができる。
3. 審査委員会は、論文審査の一環として、論文発表会を公開で開催するものとする。
4. 教授会は審査委員会の報告に基づき、修士論文の審査及び最終試験の可否を決定する。

##### ・学位論文の審査基準

研究課題に関連した専門分野の十分な知識・知見をもとに、研究の目的、方法、結果、考察等を適切に記述していること。

なお、学位論文の審査は、委員長(指導教員)及び審査委員2名で実施するが、審査員には修士論文の学術的内容に精通した教員が選ばれる。そのため必ずしも当該プログラム担当教員から選ばれるわけではなく、専攻内あるいは専攻外の教員が審査員となる場合もある。また、審査教員は委員長を含め3名以上が原則であるが、境界領域を研究内容とする学位論文を審査する場合には、4名あるいは5名の審査員による審査も行われる。

学位論文等における評価の基準については、年度毎に発行する履修案内により「修了認定・学位授与の方針」として公表している。履修案内は当該年度に入学した学生全てに配布し、ガイダンスなどにより周知徹底を行っている。

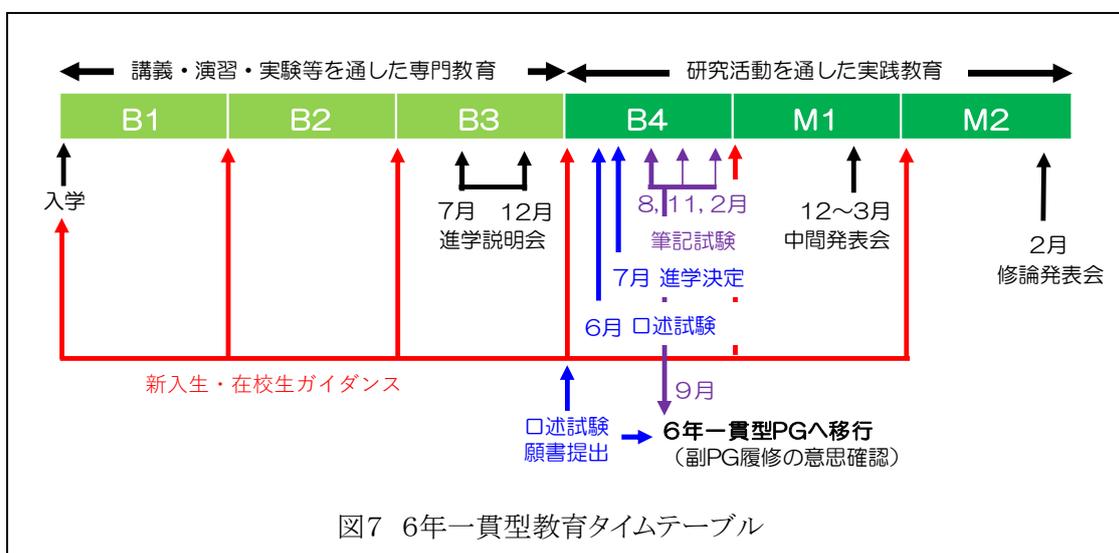
#### 4-5 研究倫理審査体制

本学では、研究活動上の不正行為の防止に努めるとともに、不正行為が生じた場合に厳正・適切に対応するために、「国立大学法人埼玉大学における研究者等の行動規範」及び「国立大学法人埼玉大学における研究活動上の不正行為の防止等に関する規則」を定め、公正な研究活動を推進している。埼玉大学では、学長を「最高責任者」、研究担当理事をもって最高責任者を補佐する「統括責任者」とし、全学の研究倫理を統括する。また、具体的な不正防止の取組に関して実質的な責任と権限を有する者として、部局長を「研究倫理教育等責任者」としている。これらの規則に基づいて、理工学研究科では、卒業研究着手あるいは大学院入学時に倫理教育の受講を義務づけている。

この他、「埼玉大学における研究費の不正使用の防止等に関する規則」、「埼玉大学利益相反マネジメント規則」等、関連する規則を整備し、研究活動における不正行為を防止するための施策を講じている。教員が行うヒトを対象とした研究の倫理審査は、「埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理規則」の規定により行っている。【資料1】

#### 4-6 6年一貫型教育のタイムテーブル

本学では、理学部、工学部の学生のうちおよそ 2/3 (65%) が進学する。したがって6年一貫型の教育プログラムへの移行、特に特別教育プログラム(副プログラム)履修の意思確認は、進学の意味が固まってくると思われる、4年次進級の際が理想的と考える。まず、大学院へ進学する学生の主要なスケジュールを以下に示す。



理学部、工学部に入学した学生は、1-3年次の間、講義、演習、実験棟を通じた専門教育を受ける。両学部では、毎年4月にガイダンスを実施しており、1-3年次のガイダンス時に大学院進学を含む6年一貫型教育に関して説明と指導を行う。3年次に進級後は、7月及び12月に大学院進学説明会を開催し、6年一貫型教育に進む学生の意思確認と進学に向けた準備を促す。

4年進級時、一定の成績基準を満たした学生は口述試験に願書を提出、その時点から6年一貫型教育のプログラムに移行する。口述試験(面接試験含む)を6月に実施し、7月には進学が内定。内定後は指導教員の元で短・長期的な観点から本格的な研究計画を作成する。

なお、筆記試験は、8月に1次募集(秋入学の学生向け入試を兼ねる)を実施。9月に合格発表し、合格後は速やかに6年一貫型教育に移行する。なお、必要に応じて11月及び2月に2次及び3次募集を行う。

口述試験に出願した学生は4年次第1ターム、筆記試験を受験した学生は合格発表後、4年次第3タームより積極的に大学院の講義を履修する。このとき、副プログラムである特別教育プログラム(A)~(C)の講義を積極的に履修することで、副プログラムの学修内容を大学院進学後の研究活動において活かせるようにする。

なお、博士前期課程においては、秋入学も実施しており、主として海外からの留学生を受け入れている。秋入学の学生についても全ての特別プログラム及び融合教育プログラムの履修可能な設計になっている。

#### 4-7 履修モデル

##### 生命科学専攻

表4 分子生物学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目			
専攻共通科目	分子生物学特論 1 (1) 分子生物学特論 2 (1)	分子生物学特論 3 (1) 分子生物学特論 4 (1)	
PG 専門科目		生命科学特別講義 (2) 分子細胞学特論 5 (2) 細胞情報学特論 7 (2) 遺伝子発現学輪講 1A (2) 遺伝子発現学輪講 1B (2) 遺伝子発現学輪講 2A (2) 遺伝子発現学輪講 2B (2) * 分子生物学特別研究 1(6) * 分子生物学特別研究 2(6)	
<p>修了要件: 次に掲げる修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(理学)を授与する。分子生物学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。</p> <p>1) 分子生物学特別研究 1(6 単位)及び分子生物学特別研究 2(6 単位)の 2 科目 12 単位を修得すること。 2) 分子生物学プログラムの専門科目から、輪講 8 単位以上を含む 14 単位以上を修得すること。 3) 2)には、生体制御学プログラムの専門科目における特論を 4 単位まで含めることができる。 4) 1)、2)及び 3)で修得すべき 26 単位以外の 4 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。</p> <p>・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p>			

表5 生体制御学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目			
専攻共通科目	生体制御学特論 1 (2) 生体制御学特論 2 (2)		
PG 専門科目		基礎生体制御学1 (2) 調節生理学特論 1 (2) 調節生理学特論 2 (2) 調節生理学輪講 1A (2) 調節生理学輪講 1B (2) 調節生理学輪講 2A (2) 調節生理学輪講 2B (2) * 生体制御学特別研究 1 (6) * 生体制御学特別研究 2 (6)	
<p>修了要件: 次に掲げる修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(理学)を授与する。生体制御学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。</p> <p>1) 生体制御学特別研究 1(6 単位)及び生体制御学特別研究 2(6 単位)の 2 科目 12 単位を修得すること。 2) 生体制御学プログラムの専門科目から、輪講 4 単位以上を含む 12 単位以上を修得すること。ただし、輪講は 8 単位まで修了要件に含めることができる。 3) 1)及び 2)で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。</p> <p>・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p>			

## 物質科学専攻

表6 物理学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目			
専攻共通科目			
PG 専門科目		素粒子論 I (2) 有機導体特論 II (2) 希土類化合物特論 I (2) * 物理学特別研究 1(6) 物性物理学特論 I (2) 量子物性学特論 I (2) 磁性物理学特論 II (2) * 物理学輪講 I (3)	物理学特別研究 2(6) * 物理学輪講 II (3)
<p>修了要件: 次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(理学)を授与する。 物理学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。 1) 物理学特別研究 1(6 単位)、物理学輪講 I (3 単位)及び物理学輪講 II (3 単位)の 3 科目 12 単位を修得すること。 2) 物理学プログラムの専門科目から 12 単位以上を修得すること。 3) 1)及び2)で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。 ・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p>			

表7 基礎化学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目			
専攻共通科目		有機金属錯体化学特論(2)	
PG 専門科目		基礎化学特論 I a (1) 有機典型元素化学特論(2) 基礎化学特論 I b (1) 反応解析特論 (2) 量子化学特論 (2) 有機立体化学特論 (2) 天然物化学特論 (2) * 基礎化学輪講 I a,b (2) * 基礎化学輪講 II a,b (2) * 基礎化学特別研究 (12)	
<p>修了要件: 次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(理学)を授与する。 基礎化学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。 1) 基礎化学特別研究(12 単位)、基礎化学輪講 I a(1 単位)、基礎化学輪講 I b(1 単位)、基礎化学輪講 II a(1 単位)及び基礎化学輪講 II b(1 単位)の 5 科目 16 単位を修得すること。 2) 基礎化学プログラムの専門科目から 4 単位以上を修得すること。 3) 専攻共通科目及び専門科目から 4 単位以上を修得すること。 4) 1)、2)及び 3)で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。 ・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p>			

表8 応用化学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目		課題解決型特別演習 C (1)	
専攻共通科目			

PG 専門科目	応用化学特論Ⅰ (1) 応用化学特論Ⅲ (1) 応用化学特論Ⅱ (1) 有機合成化学特論Ⅰ (2) 有機合成化学特論Ⅱ (2) 有機合成反応特論 (2) 機能分子合成特論 (2) 超分子化学特論 (2) * 応用化学輪講Ⅰ (2) * 応用化学輪講Ⅱ (2) * 応用化学特別研究 (12)
修了要件: 次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(工学)を授与する。 応用化学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。 1) 応用化学特別研究(12 単位)、応用化学輪講Ⅰ (2 単位)及び応用化学輪講Ⅱ (2 単位)の 3 科目 16 単位を修得すること。 2) 応用化学プログラムの専門科目から 4 単位以上を修得すること。 3) 専攻共通科目及び専門科目から 4 単位以上を修得すること。 4) 1)、2)及び 3)で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。 ・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。	

## 数理電子情報専攻

表9 数学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目			
専攻共通科目	数理電子情報特論Ⅰ (2)		
PG 専門科目		代数学特論Ⅰ (2) 代数学特論Ⅱ (2) 代数学特論Ⅲ (2) 代数学特論Ⅳ (2) 数学特論Ⅰ (2) 数学輪講Ⅶ (3) 数学輪講Ⅸ (3)	
		* 数学特別研究Ⅰ (6)	* 数学特別研究Ⅱ (6)
修了要件: 次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(理学)を授与する。 数学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。 1) 数学特別研究Ⅰ (6 単位)及び数学特別研究Ⅱ (6 単位)の 2 科目 12 単位を修得すること。 2) 数学プログラムの専門科目から 12 単位以上を修得すること。 3) 1)及び 2)で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。 ・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。 ・多くの科目が B4 から履修可能であるが、表中にはプログラムとして推奨する科目を記載している。			

表 10 電気電子物理工学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目		課題解決型特別演習 B (2)	
専攻共通科目	数理電子情報特論Ⅰ (2)		
PG 専門科目		電力工学特論 (2) 電機制御特論 (2) マイクロ波回路特論 (2) 電磁波工学特論 (2) 半導体工学特論 (2) 電子応用計測特論 (2)	
		電気電子物理工学輪講Ⅰ (1) 電気電子物理工学輪講Ⅱ (1) * 電気電子物理工学特別研究Ⅰ (6)	電気電子物理工学特別研究Ⅱ (6)

<p>修了要件: 次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(工学)を授与する。 電気電子物理学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。</p> <p>1) 電気電子物理学特別研究 I (6 単位) の 1 科目 6 単位を修得すること。</p> <p>2) 電気電子物理学プログラムの専門科目から 18 単位以上を修得すること。なお、電気電子物理学特別研究 II を履修するには、電気電子物理学特別研究 I の単位を修得していなければならない。</p> <p>3) 1) 及び 2) で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。</p> <p>・表中、( ) は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p> <p>・多くの科目が B4 から履修可能であるが、表中にはプログラムとして推奨する科目を記載している。</p>
--

表 11 情報工学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目		課題解決型特別演習 B (2)	
専攻共通科目	数理電子情報特論 I (2)		
PG 専門科目		センシングシステム特論 (2) 画像応用システム特論 (2) 確率的情報処理特論 (2) サイバーセキュリティ特論 (2) プログラミング特別演習 I (2) *プレゼンテーション特別演習 (2) 情報工学輪講 I (1) 情報工学輪講 II (1) * 情報工学特別研究 I (6)	情報工学特別研究 II (6)
修了要件:	次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(工学)を授与する。 情報工学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。 <p>1) 情報工学特別研究 I (6 単位) 及びプレゼンテーション特別演習 (2 単位) の 2 科目 8 単位を修得すること。</p> <p>2) 情報工学プログラムの専門科目から 14 単位以上を修得すること。</p> <p>3) 1) 及び 2) で修得すべき 22 単位以外の 8 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。</p> <p>・表中、( ) は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p> <p>・多くの科目が B4 から履修可能であるが、表中にはプログラムとして推奨する科目を記載している。</p>		

## 機械科学専攻

表 12 機械科学プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目		課題解決型特別演習 A (2)	
PG 専門科目	熱エネルギー特論 (2) 流体力学特論 (2) 加工学特論 (2) 機械運動学特論 (2)	ロボティクス特論 (2) メカトロニクスシステム特論 (2) マンマシンインターフェース特論 (2) ユーザビリティ工学特論 (2) * 機械科学特別研究 I (3)	* 機械科学特別研究 II (3) * 機械科学輪講 II (3)
		* 機械科学輪講 I (3)	
修了要件:	次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(工		

<p>学)を授与する。</p> <p>機械科学プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。</p> <p>1) 機械科学特別研究 I (3 単位)、機械科学特別研究 II (3 単位)、機械科学輪講 I (3 単位)及び機械科学輪講 II (3 単位)の 4 科目 12 単位を修得すること。</p> <p>2) 機械科学プログラムの専門科目から 12 単位以上を修得すること。</p> <p>3) 1)及び 2)で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は、4 単位までとする。</p> <p>・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p> <p>・多くの科目が B4 から履修可能であるが、表中にはプログラムとして推奨する科目を記載している。</p>
--

## 環境社会基盤専攻

表 13 環境社会基盤国際プログラム履修モデル

	B4	M1	M2
課程共通科目			
PG 専門科目	<p>地盤環境工学特論(E) (2)</p> <p>構造設計と解析 (JE) (2)</p>	<p>地形プロセス学特論(E) (2)</p> <p>地圏デザイン序説(JE) (2)</p> <p>地盤構造学(E) (2)</p> <p>地盤材料学(E) (2)</p> <p>地盤地震工学特論(E) (2)</p> <p>インターナショナルコミュニケーション(2)</p> <p>* 環境社会基盤国際特別研究 I (6)</p> <p>* 環境社会基盤国際特別研究 II (6)</p> <p>環境社会基盤工学輪講 I (1)</p> <p>環境社会基盤工学輪講 II (1)</p>	
修了要件:	<p>次に掲げる各プログラムの修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(工学)を授与する。</p> <p>環境社会基盤国際プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。</p> <p>1) ベトナム国立建設大学とのジョイントマスタープログラムの履修者以外の学生は、環境社会基盤国際特別研究 I (6 単位)及び環境社会基盤国際特別研究 II (6 単位)の 2 科目 12 単位を修得すること。なお、環境社会基盤国際特別研究 II を履修するには、環境社会基盤国際特別研究 I の単位を修得していなければならない。</p> <p>2) ベトナム国立建設大学とのジョイントマスタープログラム履修者は、環境社会基盤国際特別研究 III (12 単位)を修得すること。</p> <p>3) 環境社会基盤国際プログラムの専門科目から、英語で開講される選択科目 6 単位以上を含めて 12 単位以上を修得すること。なお、次に掲げる授業科目の修了単位の認定については、それぞれ記載のとおりとする。</p> <p>・地盤環境工学特論(2 単位)及び地盤環境工学特論(E) (2 単位)の 2 科目を履修した場合は、いずれかの科目を修了単位として認める。</p> <p>・構造力学Ⅲ及び耐震・地震工学は、埼玉大学工学部で未履修の場合に限り、2単位まで修了単位として認める。</p> <p>・科学技術英語特論 I (1 単位)、科学技術英語特論 II(E)(1 単位)又は国際工学資格(FE 資格)(1 単位)のうち 2単位まで修了単位として認める。</p> <p>4) 1)及び 2)で修得すべき 24 単位以外の 6 単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。ただし、特別教育プログラム開講科目は4単位までとする。</p> <p>5) (E)印の付いている科目は英語で開講する科目である。</p> <p>6) (JE)印の付いている科目は日本語と英語を併用する科目である。ただし英語開講科目とはみなさない。</p> <p>・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p> <p>・多くの科目が B4 から履修可能であるが、表中にはプログラムとして推奨する科目を記載している。</p>		

### 融合教育プログラム(専攻共通プログラム)

融合教育プログラムは、学生は 10 の専門教育プログラムのいずれかに所属する。所属するプログラムにおいて履修する「特別研究」以外の単位は、本プログラム記載の科目から履修する。以下、代表的な履修モデルとして、分子生物学プログラム及び応用化学プログラムに所属する学生を例にした履修モデルを示す。

表 14 地球環境における科学技術の応用と融合プログラム 履修モデル  
(分子生物学プログラム所属学生の例)

	M1	M2
課程共通科目		
専門科目 (a)群	地球システム科学特論(2) 未来デザイン・バックキャスト論(2) Public Policies and SDGs(2)	
(b)群	植物分子育種学特論(2) 環境生物学特論(2) 水環境工学特論(2)	
(c)群	データ解析学演習(1) グローバルパートナーシップ(1) 科学技術応用学際特別輪講Ⅰ(1)	科学技術応用学際特別輪講Ⅱ(1)
専門教育 PG 開 講科目	* 分子生物学特別研究 1(6) 分子生物学特論 1(1) 分子生物学特論 2(1)	* 分子生物学特別研究 2(6)
<p>修了要件</p> <p>次に掲げる修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(理学)を授与する。本プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。</p> <p>1) 分子生物学プログラムに所属する学生は、分子生物学特別研究 1(6 単位)及び分子生物学特別研究 2(6 単位)の 2 科目 12 単位を修得すること。</p> <p>2) 地球環境における科学技術応用と融合プログラム専門科目から、次のとおり 16 単位以上を修得すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(a)群から、環境経済学(2 単位)又は Public Policies and SDGs(2 単位)の 2 単位以上を含めて 6 単位以上を修得すること。</li> <li>・(b)群から、環境地質学特論(2 単位)、環境生物学特論(2 単位)又は水環境工学特論(2 単位)の 2 単位以上を含めて 6 単位以上を修得すること。</li> <li>・(c)群から、グローバルパートナーシップ(1 単位)、農作物栽培技術演習(1 単位)又はデータ解析学演習(1 単位)の 2 単位以上を含めて 4 単位以上を修得すること。</li> </ul> <p>3) 1)及び 2)で修得すべき単位数以外の単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。</p> <p>・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p>		

表 15 地球環境における科学技術の応用と融合プログラム 履修モデル  
(応用化学プログラム所属学生の例)

	M1	M2
課程共通科目	課題解決型特別演習 C(1)	
専門科目 (a)群	地球システム科学特論(2) 未来デザイン・バックキャスト論(2) Public Policies and SDGs(2)	
(b)群	植物分子育種学特論(2) 環境生物学特論(2) 水環境工学特論(2)	
(c)群	データ解析学演習(1)	

	グローバルパートナーシップ(1) 科学技術応用学際特別輪講 I (1)	科学技術応用学際特別輪講 II(1)
専門教育 PG 開 講科目	* 応用化学特別研究 (12) 応用化学特論 I (1)	
<p>修了要件</p> <p>次に掲げる修了要件を満たし、かつ、修士論文の審査及び最終試験に合格した者に修士(工学)を授与する。本プログラムを履修する学生にあつては、下記の履修方法により、合わせて 30 単位以上を修得すること。</p> <p>1) 応用化学プログラムに所属する学生は、応用化学特別研究(12 単位)1 科目 12 単位を修得すること。</p> <p>2) 地球環境における科学技術応用と融合プログラム専門科目から、次のとおり 16 単位以上を修得すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(a)群から、環境経済学(2 単位)又は Public Policies and SDGs(2 単位)の 2 単位以上を含めて 6 単位以上を修得すること。</li> <li>・(b)群から、環境地質学特論(2 単位)、環境生物学特論(2 単位)又は水環境工学特論(2 単位)の 2 単位以上を含めて 6 単位以上を修得すること。</li> <li>・(c)群から、グローバルパートナーシップ(1 単位)、農作物栽培技術演習(1 単位)又はデータ解析学演習(1 単位)の 2 単位以上を含めて 4 単位以上を修得すること。</li> </ul> <p>3) 1)及び 2)で修得すべき単位数以外の単位については、理工学研究科博士前期課程開講科目から修得することができる。</p> <p>・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p>		

次に特別教育プログラムを履修する場合の履修モデルを説明する。なお、特別教育プログラム(A)及び(C)においては、出身学部によりプログラム修了に必要な単位数が異なるため、それぞれのケースについて履修モデルを作成した。

### 特別教育プログラム(副プログラム)履修モデル

#### 特別教育プログラム(A) 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム 履修モデル

表 16 工学部学生(電気電子物理工学プログラム進学学生)が履修する場合

	～B4	M1	M2
課程共通科目		課題解決型特別演習 A (2) 課題解決型特別演習 B (2) 技術者のための産業経営特論 (2)(自由科目)	
専攻共通科目	数理電子情報特論 I (2)		
PG 専門科目		電力工学特論 (2) マイクロ波回路特論 (2) 半導体工学特論 (2) 電気電子物理工学輪講 I (1) * 電気電子物理工学特別研究 I (6)	電機制御特論 (2) 電磁波工学特論 (2) 電気電子物理工学輪講 II (1) 電気電子物理工学特別研究 II (6)
工学部開講科目(イノベーション科目)	イノベーションとマーケティング(2) 産業創成論(2) 電気電子と職業(2)		
<p>特別教育プログラム(A)修了要件</p> <p>(A)6年一貫型イノベーション人材育成プログラムを履修する学生にあつては、電気電子物理工学プログラムの修了要件を満たし、かつ、下記の履修方法により、合わせて 12 単位以上を修得すること。</p> <p>1) 特別教育プログラム(A)の学部開講科目(a)より 6 単位以上を修得すること。(工学部卒業要件より履修済み)</p> <p>2) 大学院開講科目群(a)2 から、技術者のための産業経営特論(2 単位)、課題解決型特別演習 A(2 単位)又は課題解決型特別演習 B(2 単位)の 2 単位以上を含めて 4 単位以上を修得すること。</p> <p>3) 1)及び 2)で修得すべき 10 単位以外の 2 単位については、本プログラムから修得すること。</p> <p>・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。</p> <p>・多くの科目が B4 から履修可能であるが、表中にはプログラムとして推奨する科目を記載している。</p>			

課程共通科目のうち4単位は、電気電子物理工学プログラムの修了要件として認められる。課程共通科目の2単位は、電気電子物理工学プログラムの修了要件外の単位として修得しなければならない。従って、電気電子物理工学プログラム修了要件30単位に加えて、2単位を追加修得すれば、修士(工学)の学位と特別教育プログラム(A)の修了認定を受けることが可能。なお、工学部イノベーション科目6単位は工学部電気電子物理工学科の卒業要件であり、全学生が6単位以上修得済み。

### 特別教育プログラム(A) 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム 履修モデル

表 17 理学部学生(分子生物学プログラム進学学生)が履修する場合

	～B4	M1	M2
課程共通科目		課題解決型特別演習 A (2) 技術者のための産業経営特論 (2) 課題解決型特別演習 B (2) (自由科目)	
専攻共通科目	分子生物学特論 1 (1) 分子生物学特論 2 (1)		
PG 専門科目		生命科学特別講義 (2) 分子細胞学特論 5 (2) 遺伝子発現学輪講 1A (2) 遺伝子発現学輪講 1B (2) 遺伝子発現学輪講 2A (2) 遺伝子発現学輪講 2B (2) * 分子生物学特別研究 1(6) * 分子生物学特別研究 2(6)	
特別教育プログラム(A)開講科目 (自由科目)	イノベーションとマーケティング(2) 産業創成論(2) 社会的意思決定論(2) (これらはいずれも工学部イノベーション科目である)		
特別教育プログラム(A)修了要件 (A)6年一貫型イノベーション人材育成プログラムを履修する学生にあつては、分子生物学プログラムの修了要件を満たし、かつ、下記の履修方法により、合わせて12単位以上を修得すること。 1) 特別教育プログラム(A)の学部開講科目(a)より6単位以上を修得すること。 2) 大学院開講科目群(a)2 から、技術者のための産業経営特論(2単位)、課題解決型特別演習 A(2単位)又は課題解決型特別演習 B(2単位)の2単位以上を含めて4単位以上を修得すること。 3) 1)及び2)で修得すべき10単位以外の2単位については、本プログラムから修得すること。 ・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。 ・多くの科目が B4 から履修可能であるが、表中にはプログラムとして推奨する科目を記載している。			

特別教育プログラム(A)を修了するためには、分子生物学プログラム(専門教育プログラム)の修了要件に加えて、修了要件外の単位として、工学部イノベーション科目から6単位、大学院共通科目から2単位、計8単位を修得しなければならない。課程共通科目のうち4単位については、修了要件として認められる。

### 特別教育プログラム(B)データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム 履修モデル

理学部、工学部からの進学学生においては、確率・統計基礎を履修していれば、履修モデルに大きな違いはないので、基礎化学プログラム履修生をモデルとした。

表 18 理学部学生(基礎化学プログラム進学学生)が履修する場合

	～B4	M1	M2
専攻共通科目		有機金属錯体化学特論(2)	
PG 専門科目		基礎化学特論 I a(1)	有機典型元素化学特論(2)

		基礎化学特論Ⅱa(1) 反応解析特論(2) 量子化学特論(2) * 基礎化学輪講Ⅰa,b(2) * 基礎化学輪講Ⅱa,b(2) * 基礎化学特別研究Ⅰ(12)
理学部開講科目	* 確率・統計基礎(2)	
特別教育PG(B)開講科目	* データサイエンス基礎(2)	* 機械学習特論(2) * データマイニング特別演習(2)(自由科目)
特別教育プログラム(B)修了要件 本プログラムを履修する学生にあつては、基礎化学プログラムの修了要件を満たし、かつ、本プログラムの必修科目8単位を修得すること。 ・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。		

特別教育プログラム(B)を修了するためには、基礎化学プログラム(専門教育プログラム)の修了要件に加えて、修了要件外の単位として、課程共通科目から2単位を修得しなければならない。なお、特別教育PG(B)開講科目のうち4単位はプログラム修了要件として認められる科目である。

### (C) 6年一貫型ハイグレード理数教育プログラム(HiSEP-6) 履修モデル

理学部から進学した学生が修得する場合には、工学部から進学した学生よりも修得すべき単位が少ないので、負荷の大きい情報工学プログラム履修生をモデルとした。

表 19 工学部学生(情報工学プログラム進学学生)が履修する場合

	～B4	M1	M2
PG専門科目		センシングシステム特論(2) 画像応用システム特論(2) 確率的情報処理特論(2) サイバーセキュリティ特論(2) プログラミング特別演習Ⅰ(2) * プレゼンテーション特別演習(2) 情報工学輪講Ⅰ(1) 情報工学輪講Ⅱ(1) * 情報工学特別研究Ⅰ(6) 情報工学特別研究Ⅱ(6)	
特別教育プログラム(C)開講科目	* HiSEP 特別講義Ⅰ(2) * アウトリーチ活動Ⅰ(1) 特別研究Ⅰ(2) 科学プレゼンテーションⅠ(2)	* 科学プレゼンテーションⅡ(2) * 科学プレゼンテーションⅢ(2)(自由科目) * HiSEP 特別講義Ⅱ(2)	
修了要件 本プログラムを履修する学生にあつては、情報工学プログラムの修了要件を満たし、かつ、本プログラムの必修科目9単位及び選択科目4単位以上、計13単位以上を修得すること。 ・表中、( )は単位数であり、* を付した科目は必修科目である。			

特別教育プログラム(C)を修了するためには、情報工学プログラムの修了要件に加えて、特別教育プログラム(C)の学部開講科目群(a)から必修科目3単位を含む7単位、大学院開講科目群(b)から必修科目6単位を修得しなければならない。ただし、特別教育プログラム(C)開講科目群のうち大学院開講科目の4単位は情報工学プログラム修了要件の単位として認められる。

工学部から進学した学生が本プログラムを修了するためには、情報工学プログラム修了要件外の科目を9単位履修する必要がある。

#### 4-8 企業実習の具体的計画

学生の就業意識を高め、また職業のミスマッチを避けるために、本研究科ではインターンシップの受講を積極的に推進している。インターンシップにはインターンシップ I (1 単位) および II (2 単位) があり、専攻毎に単位認定を行っている。インターンシップの単位は、各専攻で設定した基準に基づいて単位認定されるが、大まかな単位認定の目安として、講義との関連から準備も含めて 24 時間相当の実習で 1 単位、40 時間相当の実習で 2 単位としている。単位認定は、受講した学生が提出するインターンシップ報告書を元に指導教員、副指導教員、インターンシップ担当教員及びカリキュラム委員による審査によって行う。

インターンシップ先としては特に特別な契約等はしていないが、指導教員及びインターンシップ担当教員が中心となって、各専攻あるいは教育プログラムの卒業生を多く受け入れている企業を中心に学生の指導をお願いしている。また、例年、埼玉県が実施している「埼玉県庁インターンシップ」(公募制)を活用したインターンシップ受講を奨励している。別添の資料2には、過去2年間のインターンシップ先実績を示す。なお、このリストに記載されている企業は、あくまでも学生が単位認定を希望したインターンシップの受講先である。【資料2】

最後に、最近急速に数が増えている One Day インターンシップは、実質的に企業の採用活動であり、インターンシップの本質からは離れるため、本研究科では単位認定しない。

#### 4-9 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

学生を社会的・職業的に自立させるためには、大学の研究室とは違う企業の研究開発の実体を理解することが第一歩と考える。そのために効果的な方法は、1週間以上のインターンシップの受講である。本研究科ではインターンシップの受講を積極的に推奨しており、学生の要望に合わせた柔軟な運営として、学生がインターンシップ先を見つけてから履修登録できる特例を設け、学期の途中におけるインターンシップ受講を容易にしている。

なお、本学では、教育機構(全学組織)が中心となり、全学部・研究科を対象として、就職・キャリアセミナーを実施している。例えば、先輩内定者との勉強会、OB・OG・社会人との座談会、マナー実践練習、自己理解ワーク、先輩との勉強会、業界研究グループワーク、模擬面接・グループディスカッションなどを行っている。これらのイベントに参加することにより、社会に出ることを学生に強く意識させ、社会的・職業的に自立させることを目指す取り組みである。

また、本研究科の取り組みとしては、理工系学部・研究科の特徴ではあるが、卒業生・修了生を中心にしたOB・OGとのディスカッションを行う業界説明会が中心となる。先輩達から具体的な日々の業務を聞くことで、就業意識が高まり、自立心も高まる。なお、博士前期課程においては専門性が高いために、本研究科で一括して実施してはならず、プログラム毎に選任されている就職担当教員が中心となり、関連する企業等と連絡をとりながら、業界説明会や就職説明会を実施している。

本研究科における学生の社会的・職業的自立を促す間接的な取り組みとして、クロスポイントにより民間企業の現役技術者・研究者2名を実務家教員として本研究科教授に雇用し、PBL 型授業を開講している。PBL 型授業科目である「課題解決型特別演習 A」及び「課題解決型特別演習

B)は、本研究科の博士前期・後期課程の共通科目であり、(株)マレリ及び(株)オリジンの現役技術者・研究者による種々の研究・技術開発の体験談や社会人、技術者、研究者としての心構えなどを聞くことにより、社会的・職業的自立心が育成される。また、この講義以外にも、長年、(株)埼玉りそな銀行で勤務経験がある専任教員が開講している「技術者のための産業経営特論」においては、企業の幹部クラスを講師として招聘し、学生に対して、「企業が求める人材」といった観点の話聞くことで、将来、社会人及び企業人としての身につけるべき能力を学修させている。

なお、これらの科目は、新設する特別教育プログラム、(A)6年一貫型イノベーション人材育成プログラム、の中核をなす科目となっている。

最後ではあるが、特定の分野の取り組みとして、工学系、特に機械科学プログラム、応用化学プログラムでは、「先端産業国際ラボラトリー」における、産学官連携のプロジェクト、民間企業との共同研究プロジェクトを通した、OJT方式の教育を取り入れている。これらの活動を通して、企業等における研究・技術開発の実戦の場において社会的・職業的自立に関する指導を行っている。

## 5 基礎となる学部との関係

基礎となる理学部、工学部の関係および博士後期課程との関係を図8に示す。本改組では、理学部および工学部からの6年一貫型教育を目指しており、理学部5学科および工学部5学科と10の専門教育プログラム(PG)が一対対応の関係にある。それぞれの教育プログラムは、その専門性に関連して5つの専攻(生命科学、物質科学、数理電子情報、機械科学および環境社会基盤)に分類され、専攻毎に専門教育のためのカリキュラムを組んでいる。これら5つの専攻は、1専攻で構成される博士後期課程の5コース(生命科学、物質科学、数理電子情報、機械科学、環境社会基盤)に対応している。

博士前期課程には、全ての専攻に共通な教育プログラムとして、融合教育プログラム(地球環境における科学技術の応用と融合プログラム)を導入し、文理融合教育によるSDGsに代表される持続可能な社会の構築に貢献できる人材の育成を目指している。このプログラムでは、独自のアドミッション・ポリシーに従って入試を実施し、合格後は各専門教育プログラムに所属して専門的知識を修得するための研究活動を行いながら、融合教育プログラムの独自カリキュラムに従って開講される専門科目による文理融合教育を受ける。

学部—博士前期—博士後期課程の関係



図8 基礎となる学部と博士前期および後期課程との関係

6 取得可能な資格

本研究科では、以下の表 20 のとおり、中学校及び高等学校の専修免許状が取得できる。

表 20 取得できる免許状

専攻名等		認定を受ける免許状の種類
生命科学専攻	分子生物学プログラム 生体制御学プログラム	中学校教諭専修免許状(理科) 高等学校教諭専修免許状(理科)
物質科学専攻	物理学プログラム 基礎化学プログラム 応用化学プログラム	中学校教諭専修免許状(理科) 高等学校教諭専修免許状(理科)
数理電子情報専攻	数学プログラム	中学校教諭専修免許状(数学) 高等学校教諭専修免許状(数学)

## 7 入学者選抜の概要

### 7-1 入学者選抜の基本方針

博士前期課程において、専門的な教育や研究指導により高度な実験・実習を進めるためには、自然科学や工学の各分野における基礎学力が必須である。入学者選抜は各教育プログラムが掲げる「養成する人材像」を達成するため、全てのプログラムに対して学部教育課程における成績優秀者を対象とする口述試験(筆記試験免除試験)、あるいは学部教育課程で身につけた基礎学力の判定を目的とした筆記試験を行う。さらに、知識の応用力や勉学に対する姿勢が十分であるかを確認するために個別面接試験を実施する。

選抜方法の概要を以下の表 21 にまとめる。

表 21 選抜方法

専攻名	プログラム名	選抜方法
生命科学専攻	分子生物学プログラム	口述試験
		筆記試験
	生体制御学プログラム	口述試験
		筆記試験
物質科学専攻	物理学プログラム	口述試験
		筆記試験
	基礎化学プログラム	口述試験
		筆記試験
	応用化学プログラム	口述試験
		筆記試験
数理電子情報専攻	数学プログラム	口述試験
		筆記試験
	電気電子物理工学プログラム	口述試験
		筆記試験
	情報工学プログラム	口述試験
		筆記試験
機械科学専攻	機械科学プログラム	口述試験
		筆記試験
環境社会基盤専攻	環境社会基盤国際プログラム	口述試験
		筆記試験
専攻共通	融合教育プログラム: 地球環境における科学技術の 応用と融合プログラム	口述試験
		筆記試験
備考 ・口述試験、筆記試験共に面接試験を併用する。 ・春入学に加えて秋入学についても同様に実施する。		

口述試験(筆記試験免除試験)では、学部教育課程の成績、口頭試問の結果、英語力、面接試験の成績等により総合的に判定する。筆記試験では、学部教育課程の成績、専門基礎および専門科目に関する筆答試験、英語力および面接試験の成績等により総合的に判定する。

なお、学部教育課程における成績優秀者の判定には、履修した講義毎に付与されるグレードポイント(理解度に応じて、0～4点が付与される)の平均値であるグレードポイントアベレージ(GPA=

GPの総和÷履修単位数の総和)等を用いる。また、研究活動に必須となる英語力の判定には、英語の筆記試験、英語による面接試験、TOEIC、TOEFL、IELTSなどの外部試験を単独あるいは併用して行う。

## 7-2 博士前期課程のアドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

理工学研究科博士前期課程では、学部における専門基礎教育をもとに、専門分野のみならず基礎から応用にわたる広い関連知識の習得を目指す高度専門教育を通して、独創性のある国際的なレベルの研究者へ成長するための基礎を備えた人材又は国際的な知識基盤社会において指導的役割を果たすことができる高度専門職業人の育成を目指す。

このような人材育成の目標を達成するために、本理工学研究科では、6年一貫型教育をめざしており、4年次3-4ターム(後期)から博士前期課程へと連続性を持った教育・研究活動を実施する。そのため成績優秀学生については4年生進級時に大学院進学に向けて口述試験の受験申請を行い、6月に口述試験、7月から6年一貫型教育を開始する。また、筆答試験受験者は6月に受験申請、8月に入試を行い、3・4タームから6年一貫型教育を受ける。

この他、秋期入学生(主に留学生)向けの試験も同時に8月に行う。また、学生定員が充足しなかったプログラムについては、2次募集、3次募集を実施する。

## 7-3 各専攻及び教育プログラムのアドミッション・ポリシー

本研究科博士前期課程の各プログラムでは、次のような学生を受け入れ、教育・研究指導を行う。博士前期課程教育を受ける適性のある人を積極的に受け入れるため、複数の入学試験を実施する。各教育プログラムのアドミッション・ポリシーは以下のとおりである。

### 生命科学専攻

#### ・分子生物学プログラム

1. 微生物及び植物などを研究材料に、生命の基本的なしくみと生理現象を遺伝子レベルで解明することに興味を持ち、将来、研究者や、生命・環境・生活などの分野で専門職業人を目指す人
2. 生命科学分野の専門知識を身につけ、社会における自らの役割を認識し、誠実、勤勉に自己研鑽することによって、より高度な人格形成を目指す人

#### ・生体制御学プログラム

1. 生物学及び関連した専門分野の基礎的な学力を有し、さらに多様な生命現象に対する幅広い専門知識と高い問題解決能力を身につけることを目指す人
2. 修得した生命科学に関する専門知識と思考力、創造力を生かし、生命科学が関わる多様な分野において、研究者あるいは技術者としての活躍を目指す人
3. 高い専門性と広い視野を身につけ、さらに語学力、コミュニケーション力を養い、国際的な活躍を目指す人

## 物質科学専攻

### ・物理学プログラム

1. 自然科学の基礎となる物理学の基本とその思考方法及びコミュニケーション能力を身につけている人
2. 自然の諸階層における物質構造や量子科学についての基本的理解と柔軟な思考力・能動的な学術的研究能力を持つ国際的にも通用する研究者となることを目指す人
3. 自然の体系的な理解に基づく研究開発能力を備えた高度な技術者となって実社会に貢献することに意欲を持つ人

### ・基礎化学プログラム

1. 創造性に富む優れた研究者、教育者あるいは専門技術者を目指すとともに、社会貢献に対して情熱と意欲を持つ人
2. 化学分野の基礎知識の他に、コミュニケーション能力及び基本的な語学力を有し、将来に対する明確な目標を持つ人
3. 化学における未踏の課題に対して興味を持ち、独創的かつ先端的研究を行うことに意欲を持つ人

### ・応用化学プログラム

1. 化学・物理など自然科学の基礎科目に関する十分な学力と応用化学の専門科目に関する基礎学力を有する人
2. 化学及び応用化学分野に関する、日本語及び英語による基礎的なコミュニケーション能力を有する人
3. 材料の合成・高機能化・分析及びそれらに必要な技術に関連する応用化学の専門分野に興味を有し、高度な専門知識と豊かな創造力を持つ技術者・研究者として社会に貢献すべく、勉学に励む意欲に溢れる人
4. 化学及び関連分野における製品開発など先端的研究に挑戦し、社会に貢献する意欲に溢れる人

## 数理電子情報専攻

### ・数学プログラム

1. 解析学・代数学・幾何学などに関する基礎学力を身につけており、それらの最先端の研究や自然・社会現象を理解するための数理に知的好奇心を持ち、論理的思考を重視し、学習、研究、研究発表などに積極的に取り組もうとする人
2. 数理的知識や論理的思考力を生かして教育界や情報関連分野をはじめとする社会の諸分野で活躍しようとする人
3. 最先端の研究に寄与して国際的なレベルでの活躍を目指す意欲的な人

### ・電気電子物理工学プログラム

1. 数学、物理、英語などの基礎学力及び電気電子工学に関する専門基礎知識を有する人
2. 電気・電子・情報通信分野に興味を持ち、専門知識と能力を向上させ、独創的かつ先端的な研究開発を積極的に行う意欲を持つ人
3. 優れた人間性を備え、国際的に活躍し、社会へ貢献する意欲のある人

#### ・情報工学プログラム

1. 数学、情報分野の基礎知識とコミュニケーション能力を有する人
2. 興味を持つテーマに関する専門的な知識を有する人
3. 技術者・研究者として社会に貢献することに意欲的な人
4. 最先端の知識を吸収し、また発信することに意欲的な人

### 機械科学専攻

#### ・機械科学プログラム

1. 数学、物理と機械工学分野の専門科目における十分な学力を有する人
2. 自然科学の諸問題に興味を持ち、先見性と洞察力を持って研究に取り組むことができる人
3. 豊かな創造力と熱意をもって新たな研究課題に挑戦しようとする意欲を有する人
4. 技術者・研究者として社会に貢献することを目指す人

### 環境社会基盤専攻

#### ・環境社会基盤国際プログラム

1. 環境・社会基盤工学に関する最新かつ高度な専門知識に興味を持つ人
2. 社会の要求する問題に対し、自ら課題を探求し解決することに強い意欲を有する人
3. データ収集・分析を行い事象の本質を探求する姿勢を持つ人
4. 論理的な思考能力とプレゼンテーション能力を身につけたい人
5. 多様な人や組織と連携を取りながら国際的に活躍という熱意のある人

### 融合教育プログラム

#### ・地球環境における科学技術の応用と融合プログラム

融合教育プログラムでは、SDGs に代表される持続可能な社会の構築に貢献できる人材として、高い専門性と人文・社会科学を含めた幅広い知識を有する人材を育成するため、以下の1～3に関して積極的に学ぶことを望む学生を受け入れる。

1. 持続可能な開発目標 (SDGs) の達成に強く興味を持つ人
2. SDGs の中でもエネルギー・資源・環境分野において目標達成に貢献することを目指す人
3. 海外諸国の自然・文化の特性を理解し、国際社会で活躍することを目指す人

## 8 教員組織の編制の考え方及び特色

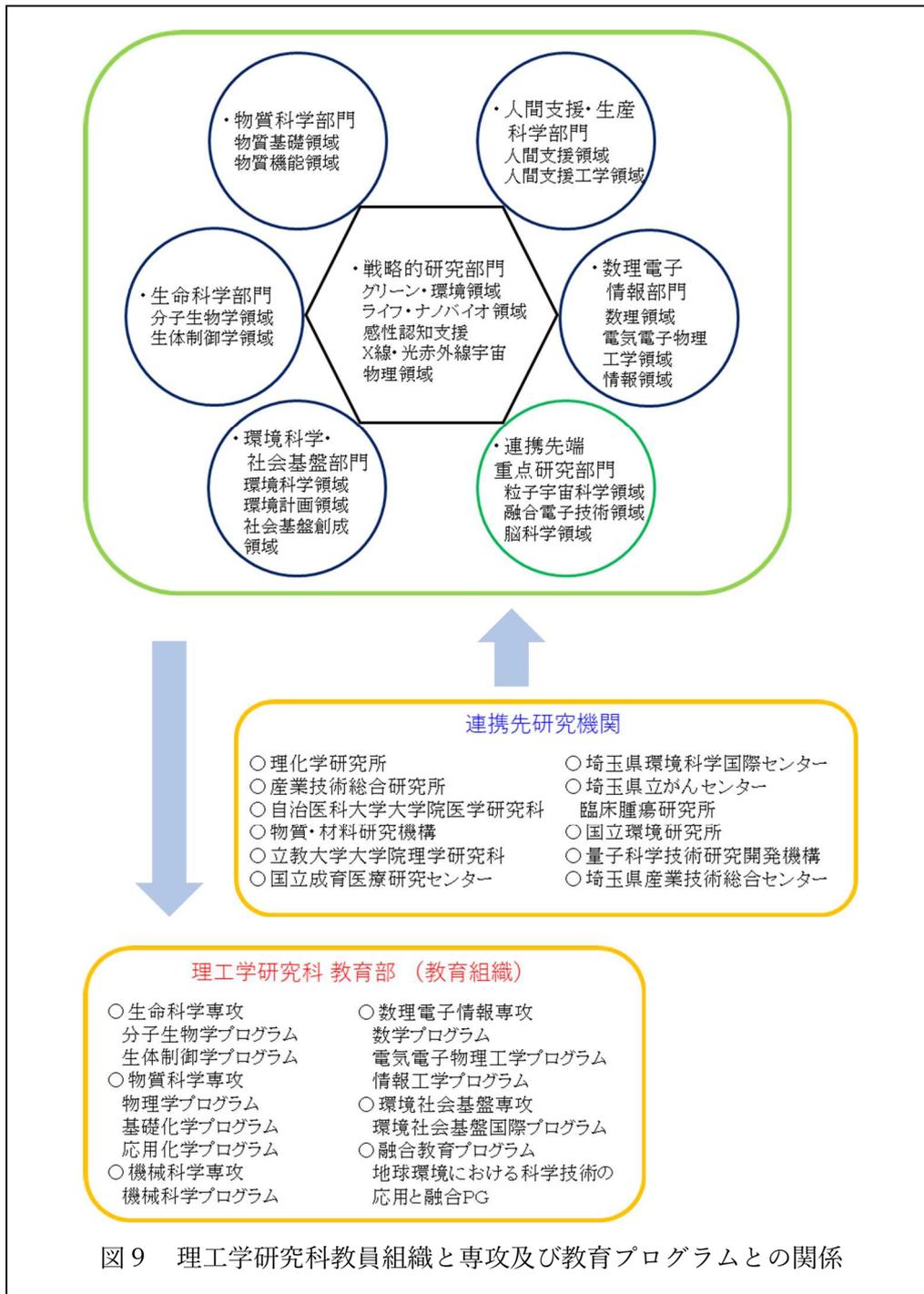
### 8-1 組織の概要

本研究科では教員組織(研究部)と教育組織(教育部)を分離しているため、まず教員組織について説明する。教員はその専門分野に応じて図9に示す7の部門、すなわち、生命科学部門、物質科学部門、数理電子情報部門、人間支援・生産科学部門、環境科学・社会基盤部門、連携先端重点研究部門、戦略的研究部門に所属している。このうち、博士前期課程教育の主体となっているのは生命科学部門、物質科学部門、数理電子情報部門、人間支援・生産科学部門、環境科学・社会基盤部門の5部門であり、これら5部門に内包される12の研究領域が、理学部、工学部の10学科及び博士前期課程の11教育プログラムの教育を担当している。

生命科学部門に所属する教員は、分子生物学及び生体制御学に基づいて生命の基本現象の理解、生物環境の維持や生物界を取り巻く諸問題に関連した研究を行う。物質科学部門に所属する教員は、物理学、基礎化学及び応用化学に基づいて自然界の多岐にわたる現象をその根源の解明、物質の合成・構造・反応・機能・分析に関する基礎的および応用的研究を行う。数理電子情報部門に所属する教員は、数学、電気電子物理工学及び情報工学に基づいて数理電子情報に関連した科学技術を発展させるための総合的・学際的な研究を行う。人間支援・生産科学部門に所属する教員は、機械科学に基づいて人間を支援するための科学技術に関する研究を行う。環境科学・社会基盤部門では、環境と調和した社会基盤の計画・設計・施工・維持・管理技術に関する研究を行う。

連携先端重点研究部門は本学教員(併任)と外部機関に所属する教員団による先端的研究や分野融合的研究をベースとして博士前期課程における高度教育を支援している。また、戦略的研究部門(令和4年度より、領域等の再構築を予定している)は、その名の通り、本学が戦略的研究領域として定めた4領域(グリーン・環境、ライフ・ナノバイオ、感性認知支援、X線・光赤外線宇宙物理領域)における最先端の研究活動を通して、博士前期課程教育を支援している。

本学の理工系教育は、学部－博士前期課程を連結した6年一貫型教育を柱としている。博士前期課程教育プログラムのコア部分は、理学部5学科及び工学部5学科に直結した10の教育プログラムで構成されている。各々の教育プログラムは、教育プログラムと密接に関連した専門分野により5つの専攻を構成している。加えて、本改組では、出身学部・学科にとらわれない専攻横断の融合教育プログラムを導入した。さらに、時代に即した教育を実施するために3つの特別教育プログラムを導入した。これらの関係を図10に示す。ここで、理学部における教育は主として研究部の理学系教員、工学部における教育は主として研究部の工学系教員が担当することとなっているが、理・工学部では平成28年度より理学部・工学部の学生に対して、数学、物理、化学、生物等の理工系基礎科目に関して協働で教育する体制をとっているため、理・工に関わらず協力して教育する体制が既に構築されており、博士前期課程においても同様の協働体制により教育を実施する。



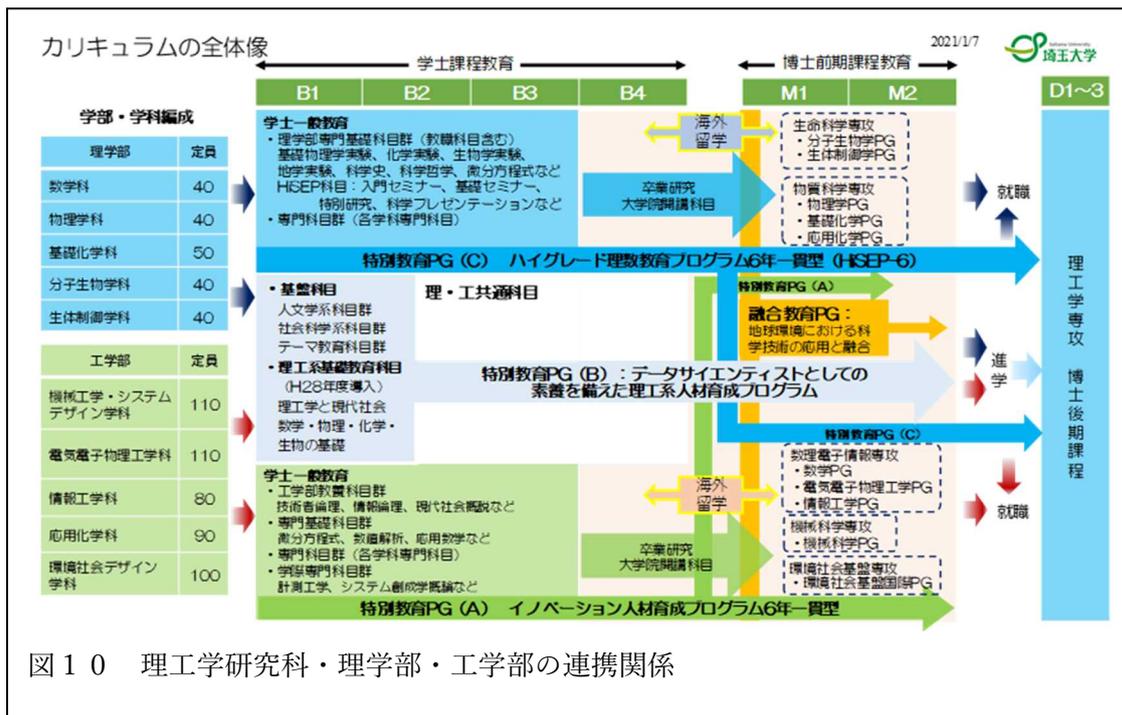


図 1 0 理工学研究科・理学部・工学部の連携関係

## 8-2 教員配置

本改組における教員配置は、原則として、現在の6専攻、13コースを担当していた教員をその専門分野に応じて一部再配置することで実現する。特に工学部改組に伴い統合された学科と連結した、博士前期課程のコースであった「機能材料工学コース」及び「環境制御システムコース」を担当していた教員については専門性に基づいて、機能材料工学コース担当教員は電気電子物理工学プログラム及び応用化学プログラム、「環境制御システムコース」を担当していた教員は、主として、電気電子物理工学プログラム、応用化学プログラム、環境社会基盤国際プログラムの教育・研究を担当することとなる。

各専攻及び教育プログラムを担当する教員数は、表 22-27 のとおりである。

本改組に伴い、情報工学プログラム及び機械科学プログラムでは実質的な学生定員増を実施することになるが、教育の質を低下させないために、学長のリーダーシップの下、学内の教員ポストを再配置する予定である。

表 22 生命科学専攻 教員配置

プログラム	教授	准教授	講師	助教	現員
分子生物学プログラム	指導教員 5名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 5名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 1名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 3名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	14
生体制御学プログラム	指導教員 6名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 3名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 3名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	12

表 23 物質科学専攻 教員配置

プログラム	教授	准教授	講師	助教	現員
物理学プログラム	指導教員 3名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 6名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 5名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	14
基礎化学プログラム	指導教員 5名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 3名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 2名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 4名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	14
応用化学プログラム	指導教員 8名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 11名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 1名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 6名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	26

表 24 数理電子情報専攻 教員配置

プログラム	教授	准教授	講師	助教	現員
数学プログラム	指導教員 6名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 3名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 4名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	13
電気電子物理工学プログラム	指導教員 11名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 12名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 8名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	31
情報工学プログラム	指導教員 6名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 7名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 5名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	18

表 25 機械科学専攻 教員配置

プログラム	教授	准教授	講師	助教	現員
機械科学プログラム	指導教員 11名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 10名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 4名 授業担当教員 1名 その他の教員 0名	26

表 26 環境社会基盤専攻 教員配置

プログラム	教授	准教授	講師	助教	現員
環境社会基盤国際プログラム	指導教員 11名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 8名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 6名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	25

なお、融合教育プログラムには、専任教員を配置していないが、環境社会基盤専攻担当の教授をプログラム責任者(併任)として配置する。この他、融合教育プログラムを運営するために、併任教員として、生命科学専攻より教授1名、物質科学専攻より教授2名、数理電子情報専攻より教授2名の6名(プログラム責任者含む)が参画し、運営に責任を持つ。この他、生命科学専攻より准教授1名、物質科学専攻より助教1名、環境社会基盤専攻より准教授2名及び助教1名が参画し、学生指導を含めたプログラム運営に協力する。この他、経済学部及び教育学部より、融合教育プロ

グラムでは、全ての専門教育プログラムから入学が可能であるため、当該プログラムに学生が進学した場合には、指導教員が本プログラムの教育教員となり、本プログラムのカリキュラムに沿って学生の指導を行う。

表 27 融合教育プログラム 教員配置

プログラム	教授	准教授	講師	助教	現員
地球環境における科学技術の応用と融合プログラム	指導教員 6名 授業担当教員 6名 その他の教員 0名	指導教員 3名 授業担当教員 3名 その他の教員 0名	指導教員 0名 授業担当教員 0名 その他の教員 0名	指導教員 2名 授業担当教員 2名 その他の教員 0名	11
本プログラムにおいては、指導教員はいずれかの専門教育プログラムを兼務する教員となる。					

## 9 施設・設備等の整備計画

### ・教室等の施設設備

理学部及び工学部を含む本理工学研究科の敷地面積は 60,261 m<sup>2</sup>、校舎床面積は 12,554 m<sup>2</sup> 超、校舎延べ床面積は 58,578 m<sup>2</sup> である。講義室は、計 22 室あり、学部教育を含め稼働率は高い。博士前期課程指導教員と授業担当教員 193 名には専任教員室が割り当てられ、教育・研究が進められている。実際の教育・研究のための活動場所となる実験室・実習室・演習室は別途用意されている。理学部、工学部を含む施設概要を表 28 にまとめる。

各建物にはフロアのロビー等にテーブルとイスを設置し、適宜、学生がくつろぐスペースを設けている。また、構内のオープンスペースにも適宜、イス等を配置して、研究活動等の合間にリラックスできる環境を整備している。

表 28 理工学研究科等の施設概要

区分	内 訳			
	理学系	工学系	その他	計
(1)敷地	16,571 m <sup>2</sup>	43,690 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	60,261 m <sup>2</sup>
(2)校舎	3,036 m <sup>2</sup> (16,426 m <sup>2</sup> )	9,518 m <sup>2</sup> (42,152 m <sup>2</sup> )	0 m <sup>2</sup> ( m <sup>2</sup> )	12,554 m <sup>2</sup> (58,578 m <sup>2</sup> )
(3)講義室	8 室	14 室	0 室	22 室
(4)専任教員研究室	67 室	126 室	0 室	193 室

理工学研究科の教育・研究活動を支援するための組織として、図書館、情報メディア基盤センター、科学分析支援センター、総合技術支援センターがある。

#### ・図書館

図書館は、教育に必要となる教科書、参考書等の和書・洋書の所蔵に加えて、大学院における教育・研究活動において極めて重要となる学術論文誌の所蔵・閲覧等を行っている。近年では学術論文誌の提供が冊子体から電子ジャーナルへ移行しており、その経費も年々高額となっているが、図書館では長期契約などの手法により経費を節約しつつ、閲覧可能な論文数を維持するなど、教育・研究活動をサポートしている。なお、購読している論文誌の継続・廃止、高額な図書資料の購入などについては、毎年、申請や利用実績調査に基づいて、図書館会議で審議の上、購読の可否を判断している。

ホームページ：<http://home.lib.saitama-u.ac.jp/>

#### ・情報メディア基盤センター

情報メディア基盤センターは、併任のセンター長のもと、1名の専任教員と2名の兼任教員、2名の専任職員により、全学的に不可欠な IT インフラを教育、研究、運営に供するための組織である。主な業務としては、学内基幹ネットワークの維持管理(光直収ネットワーク、無線 LAN システム、高速大容量(10Gbps)対外接続)、データセンターを活用した各種サービス(メールやウェブなど)と仮想化技術による学内クラウド、情報メディア教育用の PC 端末教室などの整備・運用を行い、また、東京大学のスーパーコンピューター共同利用の支援も行っている。加えて、さらに高度な IT インフラ及びサービスに向けて、高度情報基盤技術や応用技術の研究を行っている。

ホームページ：<https://www.itc.saitama-u.ac.jp/>

#### ・科学分析支援センター

本学では、大型分析機器の効率的な運用を実現するため、それらの機器を科学分析支援センターに集約して一元管理している。本センターは、自然科学系教員の教育と研究を、あらゆる分野において強かにサポートする組織であり、物質の構造や性質の解析に必要な様々な高性能分析機器を備え、併任のセンター長のもと、4名の専任教員と3名の技術職員(専任)が、機器の維持管理、利用ガイダンス、機器の講習、依頼分析などを担当している。併せて、放射性同位元素を用いた実験を行うアイソトープ実験施設、実験動物を飼養保管する飼育室の維持管理、液体窒素の供給と設備の維持管理、薬品管理システムの維持管理、実験廃液の回収、学内排水の監視業務など、多岐にわたる業務で理工学研究科の活動を支えている。

##### 【一元管理している主たる分析装置】

核磁気共鳴装置、常磁性共鳴吸収装置、質量分析装置、X線光電子分光分析装置、示差走査熱量分析装置、示差熱・熱重量分析装置、走査型プローブ顕微鏡、高分解能走査型電子顕微鏡、走査型分析電子顕微鏡、低真空走査型電子顕微鏡、透過型電子顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡、zeta 電位・粒子径・分子量測定装置、粉末 X 線回折装置、高輝度二次元 X 線回折装置、多機能粉末 X 線回折装置、蛍光 X 線分光分析装置、CCD 型単結晶 X 線回折装置、顕微レーザーラマン分光光度計、フーリエ変換赤外分光光度計、有機微量分析装置など

ホームページ: <http://www.mlsrc.saitama-u.ac.jp/>

・総合技術支援センター

技術職員を束ねる全学組織である。併任のセンター長のもと、総括技術長と3名の技術長により、本学のあらゆる技術的支援を行っている。具体的には、情報基盤整備、科学分析支援、機械工作支援、電子工作支援、ガラス器具・装置の工作支援、安全管理関連業務などにより、学生及び教員の教育・研究活動の協力・支援を行っている。

ホームページ: <http://www.tsd.saitama-u.ac.jp/>

・オープンイノベーションセンター

産学官連携におけるリエゾンオフィスとしての機能を持ち、産学官連携推進部門及び知的財産部門からなる。知的財産の活用、学外からの技術相談、技術移転、共同研究の実施支援、外部機関との連携によるプロジェクト推進など、理工学研究科の教育・研究をサポートしている。本センターでは研究活動面のサポートだけでなく、実務家としての経験を有する専任教員、弁理士・技術士などの国家資格を有する専門家及び産業界における豊富な経験を有するコーディネーターが、工学部及び本研究科において多数の講義を担当している。なお、特に本改組で導入する特別教育プログラム(A)「6年一貫型イノベーション人材育成プログラム」においては、知財関連の知識や経営マインドを持った技術者を育成するための重要な講義を担当することで、理工学研究科の人材育成にも大きく貢献している。

ホームページ: [http://www.saitama-u.ac.jp/coalition/coic/coic\\_about/](http://www.saitama-u.ac.jp/coalition/coic/coic_about/)

## 10 管理運営

本学では、大学・学部の計画及び運営に関する事項を協議するための機関である全学運営会議があり、理工学研究科に関連した教員代表として、理工学研究科長、理学部長、工学部長が出席して協議に参加している。また、大学の教育研究に関する重要事項を審議するための機関として教育研究評議会があり、理工学研究科に関連した教員代表として、理工学研究科長、理学部長、工学部長、教授1名(評議員)が出席して審議に参加している。なお、全学運営会議および教育研究協議会は少なくとも月1回開催されている。

本研究科には理工学研究科教授会が設置されており、研究科長、副研究科長、副研究部長、教育部長、副教育部長および研究科の専任の教授で構成されている。理工学研究科教授会では、学長が(1)大学院学生の入学及び課程の修了に関する事項、(2)学位の授与に関する事項、(3)その他教育研究に関する重要な事項等について決定を行うための意見を述べる。また、学長及び研究科長がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び学長等の求めに応じ、意見を述べる。

本研究科では、教授会と同等の機能を持つ代議員会を設置し、大学からの審議事項や教育・研究現場において発生する諸問題へ迅速に対応している。なお、現在はコース制で運営している

こともあり、研究科長、副研究科長、副研究部長、教育部長、副教育部長に各コース長を加えたメンバーで構成されている。改組後は、コース制からプログラム制に移行するが、各プログラムにプログラム長を置き、これまで同様に管理・運営に関する業務を行う。

この他、理工学研究科、理学部、工学部の管理・運営や教育・研究に関連した企画・立案を行う組織として、公式ではないが、研究科長、理学部長、工学部長、評議員、理学部副学部長、工学部副学部長及び事務組織である理工学研究科支援室事務長、事務長代理、理工研係、理学部係、工学部係の各係長からなる、理工学研究科科長室会議を組織し、教員と職員が情報共有・連携しながら、教育・研究活動における諸問題について、迅速かつ適切に対応している。

理工学研究科の管理運営体制を図11に示す。

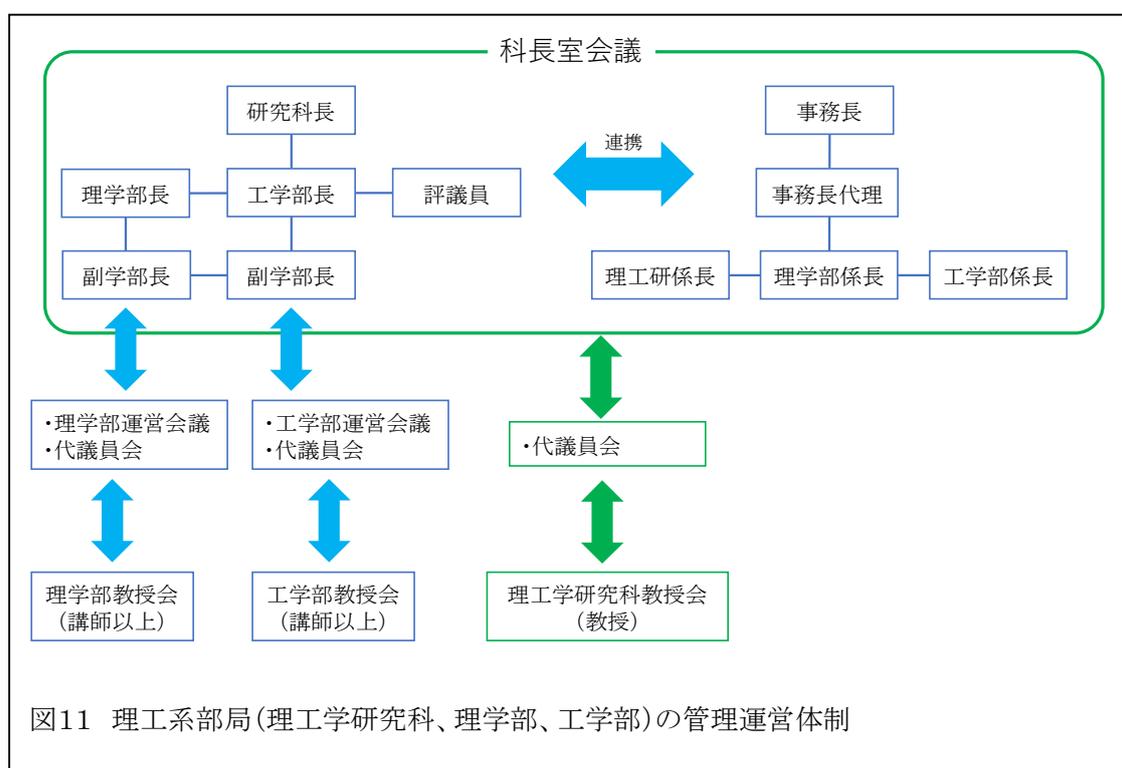


図11 理工系部局(理工学研究科、理学部、工学部)の管理運営体制

この他、本研究科では研究活動に関して安全管理を行う体制として、理工学研究科安全衛生委員会を設置し、月1回の会議を通して、教職員、学生の健康管理と安全管理を行っている。理工学研究科安全衛生委員会には、総合技術支援センターに所属する技術職員も参画し、安全管理の技術的側面、具体的には、法改正等に伴う安全ガイドラインの改訂、学生向け「安全の手引き」の改訂、リスクアセスメント等、自主管理のための規則等の策定をサポートしている。

### 1.1 自己点検・評価

本学では中期計画に沿った教育、研究、管理運営に関する取り組みを実施しており、本研究科でも中期目標・計画に沿った活動を行っている。本学では、活動状況の自己点検・評価として、年度中及び年度末にそれぞれ中間評価及び年度末評価を実施しており、本研究科においても、大学の方針に沿って自己点検・評価結果を実施して提出している。目標が未達成の場合には、その

理由と改善策の提出が求められる。全ての部局の自己点検・評価結果は、教育研究評議会で審議・承認の上、公表される。

## 1 2 情報の公表

本学では、ステークホルダーに対する教育・研究に関する活動状況を適切に公開している。例えば、教育情報として、卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育研究上の目的、入学者受け入れの方針、教育課程編成の方針(カリキュラム・ポリシー)、入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)等を大学ホームページで公開している。

<http://edu-info.saitama-u.ac.jp/>

また、電子シラバスについても、ホームページ上で公開している。

<http://syllabus.saitama-u.ac.jp/portal/public/syllabus/>

その他、教育、研究、運営に関する情報をホームページ上で公開している。

<http://www.saitama-u.ac.jp/guide/index.html>

本研究科の取り組みとしては、令和2年度に日本語及び英語版のホームページを整備し、情報発信に向けた整備を行った。

<http://www.saitama-u.ac.jp/rikogaku/>

特に本研究科では教育と研究のグローバル化を目指しており、英語版ホームページのリニューアルにより、海外からの学生確保にも繋がることを期待している。現実にホームページ開設以来、海外からの留学希望の問い合わせも増えており、研究成果等の情報公開も進める。

## 1 3 教育内容等の改善のための組織的な研修等

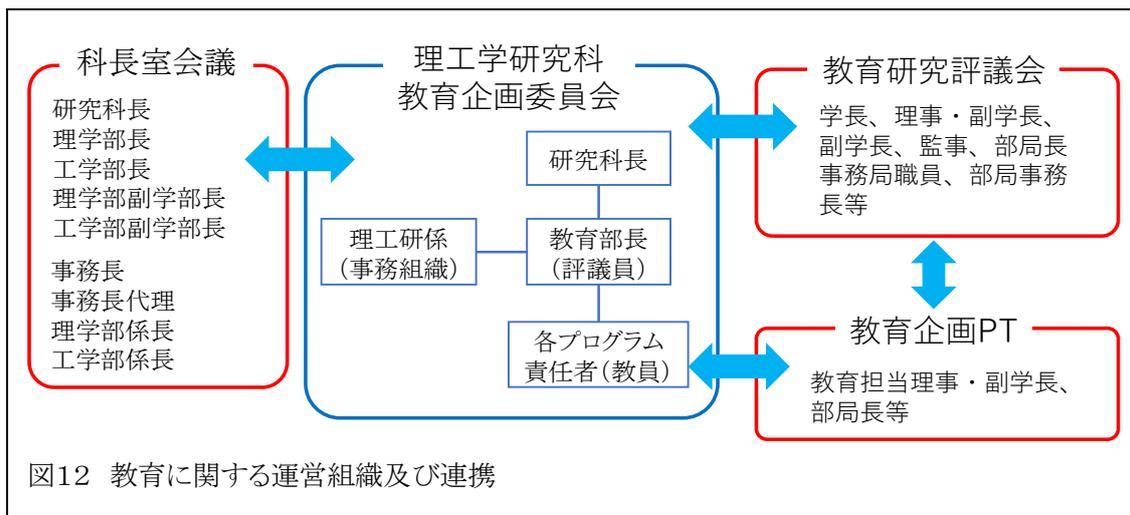
教育に関する大学の審議機関としては、教育研究評議会がある。委員は、学長、理事、副学長、部局長等であり、この組織では学年暦の決定、入試、カリキュラムなど、教育研究に関する重要事項について審議、決定する。

この他、特筆すべき点として、教育改革や教育に関する諸問題に対して迅速に対応を行うために、令和2年度より教育担当理事・副学長の元に教育企画プロジェクトチームを編成した。このチームには、教育担当理事と各部局等が参画し、教育に関する諸問題に対して迅速かつ適切に対応することが可能となった。特に令和2年度は COVID-19 の流行により、遠隔授業の実施とそれに伴う時間割の再編成、設備対応など、困難な問題が多数発生したが、本プロジェクトチームでの議論により、大きなトラブルなく教育活動を実行できた。

次に、理工学研究科の教育課程の管理・運営については、教育部長(評議員)が主宰する教育企画委員会で行う。教育企画委員会には、教育部長、副教育部長として理学部及び工学部の副学部長、各コースの教育担当委員(今後は各プログラムの教育担当委員)、理工研係職員が参画し、時間割作成、開講科目の見直し、単位認定に関する諸問題を審議、決定する。

組織的な研修としては、全学の取り組みとして、教育方法、ハラスメント、ダイバーシティ等の取り組みに精通した学内外の講師によるFD・SD研究会を毎年開催している。また、理・工系教員が参加可能なFD活動に関連したシンポジウムを毎年開催し、外部講師による講義や学生による授業評価において高い評価を受けた教員によるワンポイントアドバイスなど、教員のスキルアップに繋がる取り組みを行っている。

これら一連の管理運営体制を図12に示す。



また、教育部長は、大学院アドミッション委員会を組織し、各コース委員(各プログラム委員)、理工研係職員と協力して入試関連の諸問題を審議、決定する。

授業等の改善については、半期毎に受講学生による授業評価アンケートを実施しており、その結果を教員にフィードバックすることで授業の改善等に役立てている。また、修了時には学生に教育内容、設備等を含めた総合的なアンケートを実施し、研究科全般の活動に関して、学生目線に立った改善を行っている。

## ○国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする 研究に関する倫理規則

平成22年9月30日  
規則第48号

改正	平成24. 9. 25	24規則34	平成26. 9. 25	26規則8
	平成27. 2. 19	26規則46	平成27. 3. 20	26規則127
	平成28. 3. 25	27規則79	平成28. 9. 29	28規則9
	平成29. 3. 28	28規則37	平成29. 5. 24	29規則5

(趣旨)

**第1条** この規則は、ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針（平成16年文部科学省・厚生労働省・経済産業省告示第1号）及び人を対象とする医学系研究に関する倫理指針（平成26年文部科学省・厚生労働省告示第3号）（以下「各倫理指針」という。）に基づき、国立大学法人埼玉大学（以下「本学」という。）において実施するヒトを対象とする研究に関し必要な事項を定め、もって研究の適正な実施を図ることを目的とする。

2 研究の計画及び実施については、各倫理指針に定めるもののほか、この規則の定めるところによる。

(定義)

**第2条** この規則において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

- (1) 「研究責任者」とは、研究の有用性及び限界並びに生命倫理について十分な知識を有する者であって、研究を遂行するとともに、研究に係る業務を統括する者をいう。
- (2) 「研究担当者」とは、研究に係る業務の内容に応じて必要な知識と技能を持つ者であって、研究責任者の指示又は委託に従って、研究を実施する者をいう。
- (3) 「部局」とは、研究を計画し、実施しようとする教育学部、人文社会科学研究所、理工学研究科、教育機構、研究機構、情報メディア基盤センター及び国際本部をいう。
- (4) 「部局長」とは、前号に規定する部局の長をいう。

2 前項に定めるもののほか、用語の意義は、各倫理指針の定めるところによる。

(適用範囲)

**第3条** この規則は、本学において実施するヒトを対象とする研究に適用する。ただし、第14条の規定は、ヒトゲノム・遺伝子解析研究に限り適用する。

(学長の責務)

**第4条** 学長は、各倫理指針及びこの規則に定めるところにより、本学において行う研究の実施に関し統括するものとする。

(委員会の設置)

**第5条** 本学に、国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（委員会の任務）

**第6条** 委員会は、次に掲げる事項について審議又は調査し、学長に報告するとともに、必要に応じ、助言又は意見を具申する。

(1) 研究計画の実施の適否等について、科学的及び倫理的な観点から審査すること

(2) その他ヒトを対象とする研究に関する倫理等の適正な実施のために必要な事項に関すること

（委員会の構成）

**第7条** 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1) 保健センター長

(2) 人文・社会科学分野の教授又は准教授 1人

(3) 関連する分野を含む自然科学分野の教授又は准教授 3人

(4) 学外の学識経験者 1人

(5) 学外の倫理・法律を含む人文・社会科学分野の有識者 1人

(6) その他学長が必要と認める者

2 前項の委員は、学長が任命する。

3 第1項に掲げる委員は、男女両性により組織しなければならない。

4 第1項第1号から第5号までに掲げる委員が、審査対象となる研究の研究責任者及び研究担当者となった場合は、その審議、採決及び審査に加わることができない。

（任期）

**第8条** 前条第1項第2号から第5号までに掲げる委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員により補充された委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前条第1項第6号に掲げる委員の任期は、その都度定める。

（委員長及び副委員長）

**第9条** 委員会に委員長を置き、委員の互選によってこれを定める。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員会に副委員長を置き、委員長の指名する委員をもって充てる。

4 副委員長は、委員長を助け、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

（迅速審査手続）

**第10条** 委員長は、次の各号のいずれかに該当する審査については、委員長があらかじめ指名した委員に当該審査を委ねることができる。

- (1) 既に委員会において承認された研究計画の軽微な変更の審査
- (2) 既に委員会において承認されている研究計画に準じて類型化された研究計画の審査
- (3) 共同研究であって、既に主たる研究機関において委員会の承認を受けた研究計画を分担研究機関として実施しようとする場合の研究計画の審査

2 前項に規定する審査を行った委員は、審査結果を書面により委員長に報告する。報告を受けた委員長はすべての委員に報告内容を通知しなければならない。

3 前項に規定する報告に異議がある委員は、理由を付した書面により委員会における審査を委員長に申し出ることができる。

4 委員長は、前項に規定する申し出を受けたときは、速やかに委員会を招集し、当該事項の審査を行うものとする。

(意見の聴取等)

**第 1 1 条** 委員会が必要と認めたときは、研究責任者の出席を求めて研究計画の説明及び意見を聴くことができる。

(会議)

**第 1 2 条** 委員会は、男女両性で構成された 5 名以上の委員が出席し、かつ、第 7 条第 1 項第 4 号及び第 5 号に掲げる委員が出席しなければ会議を開くことができない。

2 委員会の議決は、出席委員全員の合意を原則とする。

(遵守事項)

**第 1 3 条** 委員会の委員及び研究に携わる者は、職務上知ることのできた個人情報を正当な理由なく漏らしてはならない。また、委員を辞した後又は研究終了後及び中止後においても、同様とする。

(個人情報の管理等)

**第 1 4 条** 学長は、研究において、個人情報を取り扱う場合は、個人情報の保護を図るため個人情報管理者を置くものとする。なお、必要に応じて、分担管理者を置くことができる。

2 個人情報管理者及び分担管理者は、学長が指名する。

(研究の申請及び可否の決定)

**第 1 5 条** 研究責任者は、研究計画書（別紙様式 1）により、研究責任者が所属する部局長の確認を受け、学長に申請する。

2 研究責任者は、承認を受けた研究計画を変更しようとするときは、研究計画変更承認申請書（別紙様式 2）により、研究責任者が所属する部局長の確認を受け、学長に申請する。

3 学長は、研究計画書又は研究計画変更承認申請書を受理したときは、速やかに

委員会にその審査を付議する。

- 4 学長は、申請のあった研究について、委員会の審議を経て、研究実施の可否を決定するものとする。

(審査結果通知)

- 第16条** 学長は、第15条第4項に規定する決定を行ったときは、審査結果通知書(別紙様式3)により、速やかに当該部局長を経由して研究責任者に通知するものとする。

(研究責任者の責務)

- 第17条** 研究責任者は、第15条第1項に規定する研究計画書の作成に当たっては、提供者等に予想される影響等を踏まえて、研究の必要性、提供者等の不利益を防止するための研究方法等を十分考慮しなければならない。また、同条第2項の規定により、承認を受けた研究計画を変更しようとする場合においても同様とする。

- 2 研究責任者は、許可された研究計画に基づき、研究担当者が適正に研究を実施するよう監督しなければならない。

- 3 研究責任者は、原則として、匿名化された試料等又は遺伝情報を用いて、研究を実施するものとする。また、研究の業務の一部を委託する場合においても同様とする。

- 4 研究責任者は、匿名化されていない試料等又は遺伝情報を原則として、外部の機関に提供することができない。

- 5 研究責任者は、提供者等の求めに応じて、研究の進捗状況及び研究結果を分かりやすく説明し、又は公表しなければならない。ただし、提供者等の人権の保障及び知的財産権の保護のため、必要と認められる場合には、この限りでない。

(インフォームド・コンセント)

- 第18条** 研究責任者は、研究を実施する場合は、提供者に事前に十分な説明を行い、提供者の自由意思に基づき、原則として文書による同意を得て、試料等の提供を受けなければならない。

- 2 研究責任者は、提供者から前項の同意を得ることが困難な場合であって、研究の重要性が高く、かつ、提供者からの試料等の提供を受けなければ研究が成り立たないと委員会が認め、学長が許可した場合に限り、提供者の代諾者等から同意を受けることができる。

- 3 研究責任者は、委員会の承認を受けて学長が許可した研究において、他の研究機関から試料等又は遺伝情報の提供を受ける場合は、当該試料又は遺伝情報に関するインフォームド・コンセントの内容を当該他の研究機関からの文書等によって確認のうえ、提供に係る記録を作成し、保管しなければならない。

(試料等の保存及び廃棄)

**第 19 条** 研究責任者は、試料等を保存する場合は、提供者又は代諾者等の同意事項を遵守し、研究計画書に記載された方法に従い実施しなければならない。

2 研究責任者は、試料等の保存期間が研究計画書に記載された期間を過ぎた場合は、提供者又は代諾者等の同意事項を遵守し、匿名化して廃棄しなければならない。

3 研究責任者は、提供者又は代諾者等からインフォームド・コンセントの撤回があった場合は、原則として提供者に係る試料等及び研究結果を匿名化して廃棄するものとする。

4 研究責任者は、保存期間が定められていない試料等を保存する場合には、研究計画の終了後遅滞なく、学長に対して、次に掲げる事項について報告しなければならない。また、これらの内容に変更が生じた場合も同様とする。

- (1) 試料等の名称
- (2) 試料等の保管場所
- (3) 試料等の管理責任者
- (4) 被験者等から得た同意の内容  
(研究の終了又は中止の報告)

**第 20 条** 研究責任者は、研究を終了し、又は中止したときは、研究（終了・中止）報告書（別紙様式 4）を作成し、速やかに所属部局長の確認を受け、学長に報告しなければならない。

2 研究責任者は、研究が終了したときは、研究計画書に記載された方法に従い研究結果を公表しなければならない。

(外部の研究機関等への試料等の提供)

**第 21 条** 研究責任者は、委員会の承認を受けて学長が許可した研究で得られた試料等を、外部の研究機関に提供する場合は、原則として試料等を匿名化しなければならない。ただし、提供者等が匿名化を行わずに当該研究機関に提供されることに同意しており、かつ、許可された研究計画においても、匿名化を行わずに当該研究機関に提供することが認められている場合は、この限りではない。

2 前項の場合において、研究責任者は、提供に関する記録を作成し、保管しなければならない。

(教育・研修)

**第 22 条** 学長、研究責任者、研究担当者、委員会委員及びその事務に従事する者は、ヒトを対象とする研究に関する倫理並びに当該研究の実施に必要な知識及び技術に関する教育・研修を受けなければならない。

(情報の公開)

**第 23 条** 本学におけるヒトを対象とする研究に関する規則等、委員会の開催状況

及び審査の概要等に関する情報については、毎年1回程度公表するものとする。

(事務)

**第24条** 委員会の事務は、研究協力部研究推進課において処理する。

(補則)

**第25条** この規則に定めるもののほか、ヒトを対象とする研究の実施に関し必要な事項は、学長が別に定める。

**附 則**

この規則は、平成22年10月1日から施行する。

**附 則** (平成24. 9. 25 24規則34)

この規則は、平成24年9月25日から施行し、平成24年4月1日から適用する。

**附 則** (平成26. 9. 25 26規則8)

1 この規則は、平成26年9月25日から施行する。

2 この規則施行の際、第7条第1項第2号から第5号の規定に基づき、現に任命されている委員の任期は、第8条第1項の規定にかかわらず、平成27年3月31日までとする。

**附 則** (平成27. 2. 19 26規則46)

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

**附 則** (平成27. 3. 20 26規則127)

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

**附 則** (平成28. 3. 25 27規則79)

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

**附 則** (平成28. 9. 29 28規則9)

この規則は、平成28年9月29日から施行する。

**附 則** (平成29. 3. 28 28規則37)

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

**附 則** (平成29. 5. 24 29規則5)

この規則は、平成29年5月30日から施行する。

(別紙様式1)

受付番号

年 月 日

研究計画書

埼玉大学長 殿

研究責任者

所 属

職 名

氏 名

下記の研究計画について、国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理規則第15条第1項の規定に基づき申請しますので、承認願います。

記

1 新規・変更の別	<input type="checkbox"/> 新規 ・ <input type="checkbox"/> 変更
2 課題名	
3 研究予定期間	審査結果通知書交付日 ～ 年 月 日
4 研究担当者 (他機関の共同研究者等がいる場合は記載)	・ 埼玉大学教職員・学生等 [所属・職名] [氏名]  ・ 共同研究者等 [所属・職名] [氏名]
5 研究実施場所 (他機関で研究が行われる場合は、他機関の倫理委員会の有無と審査結果等について記載)	・ 埼玉大学構内 [名称]  ・ 他機関の施設等 [名称] [所在地] [倫理委員会] <input type="checkbox"/> 有/ <input type="checkbox"/> 無 [審査結果等] <input type="checkbox"/> 承認済/ <input type="checkbox"/> 審査中/ <input type="checkbox"/> 申請予定/ <input type="checkbox"/> 申請不要 (備考欄に理由を記載)  (備考： )

6 研究の概要	[研究の目的、方法、期待される効果等] (簡潔に記載)			
	研究の分類	<input type="checkbox"/> ヒトゲノム・遺伝子解析研究 (注1)		
		<input type="checkbox"/> 人を対象とする医学系研究 (注2)		
		<input type="checkbox"/> 人を対象とするその他研究		
	個人情報の取扱い	<input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有 → 取扱う項目を下記に簡潔に記載 (要配慮個人情報(注3)には下線を引くこと)		
	人体から採取された試料等の使用	<input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有 → 内容を下記に簡潔に記載		
	既存試料・情報等の使用の有無	<input type="checkbox"/> 無		外部からの提供
<input type="checkbox"/> 有 → 内容を下記に簡潔に記載		<input type="checkbox"/> 有 / <input type="checkbox"/> 無		
(外部からの提供を受ける場合は、提供元、取得の経緯、同意の取得状況、匿名化の有無を記載すること)				
侵襲性(注4)	<input type="checkbox"/> 無	<input type="checkbox"/> 侵襲 →	負担の種類	
		<input type="checkbox"/> 軽微な侵襲 →	<input type="checkbox"/> 身体的負担 / <input type="checkbox"/> 精神的負担	
介入の有無(注5)	<input type="checkbox"/> 無	<input type="checkbox"/> 有		
7 研究対象者について	[年齢層、性別、想定人数等]			
	[募集方法] (研究対象者から除外する基準がある場合は明記すること)			
	[謝礼・交通費等の有無]			
	未成年者	<input type="checkbox"/> 無	<input type="checkbox"/> 有 →	代諾者 <input type="checkbox"/> 有 / <input type="checkbox"/> 無
	十分な判断力・意識	<input type="checkbox"/> 有	<input type="checkbox"/> 無 →	代諾者 <input type="checkbox"/> 有 / <input type="checkbox"/> 無
	[代諾者の設定基準] (代諾者が必要な場合は記載)			
	疾病・障害	<input type="checkbox"/> 無	<input type="checkbox"/> 有 →	下記に配慮方法等を記載
[疾病・障害を持つ研究対象者への配慮方法]				

<p>8 研究対象者への説明方法及び同意の取得方法 (研究参加の任意性等、説明・同意内容を具体的に記載)</p>		
<p>9 実験等の実施手順 (箇条書きで具体的に記載)</p>		
<p>10 成果の公表方法 (個人情報への配慮方法も記載)</p>		
<p>11 個人情報及び実験データ等の保護方法(他機関に試料・情報の提供を行う場合は、提供先、試料・情報の項目についても記載)</p>	<p>実験データ等の匿名化(注6)</p> <p><input type="checkbox"/>匿名化して保管 → 対応表の作成 <input type="checkbox"/>有/<input type="checkbox"/>無  <input type="checkbox"/>非識別加工情報(注7)を作成して保管  <input type="checkbox"/>その他( )</p>	
	<p>廃棄方法</p> <p><input type="checkbox"/>学内規則等に基づき、一定期間保管した後、匿名化して廃棄  <input type="checkbox"/>その他( )</p>	
	<p>他機関等への提供方法(該当する場合)</p> <p><input type="checkbox"/>対応表は提供せず、匿名化して提供  <input type="checkbox"/>非識別加工情報として提供  <input type="checkbox"/>その他( )</p>	
	<p>[具体的な匿名化の方法・実験データ等の保管・廃棄方法・提供内容や保存期間等]</p>	
	<p>12 研究等によって生じる不利益及び危険性、人権擁護の手法 (それぞれの事案への対策方法や、研究を中止する場合の基準等を具体的に記載)</p>	
<p>13 添付資料</p>	<p><input type="checkbox"/>研究対象者への説明文書 <input type="checkbox"/>同意書 <input type="checkbox"/>その他( )  [添付しない場合の理由等]</p>	



補足説明（提出時は以下を削除願います）

（注1）ヒトゲノム・遺伝子解析研究

提供者の個体を形成する細胞に共通して存在し、その子孫に受け継がれ得るヒトゲノム及び遺伝子の構造又は機能を、試料・情報を用いて明らかにしようとする研究をいう。本研究に用いる試料・情報の提供又は収集・分譲が行われる場合も含まれる。

詳細は『ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針』及び『同Q&A』を参照のこと。

参考URL：[http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/hito\\_genom.html](http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/hito_genom.html)

（注2）人を対象とする医学系研究

人（試料・情報を含む。）を対象として、傷病の成因（健康に関する様々な事象の頻度及び分布並びにそれらに影響を与える要因を含む。）及び病態の理解並びに傷病の予防方法並びに医療における診断方法及び治療方法の改善又は有効性の検証を通じて、国民の健康の保持増進又は患者の傷病からの回復若しくは生活の質の向上に資する知識を得ることを目的として実施される活動をいう。

詳細は『人を対象とする医学系研究に関する倫理指針』及び『同ガイダンス』を参照のこと。

参考URL：<http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/ekigaku.html>

（注3）要配慮個人情報

本人の人種、信条、社会的身分、病歴、犯罪の経歴、犯罪により害を被った事実その他本人に対する不当な差別、偏見その他不利益が生じないようにその取扱いに特に配慮を要する記述等が含まれる個人情報をいう。

詳細は『人を対象とする医学系研究に関する倫理指針』及び『同ガイダンス』を参照のこと。

参考URL：<http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/ekigaku.html>

（注4）侵襲性

侵襲とは、研究目的で行われる、穿刺、切開、薬物投与、放射線照射、心的外傷に触れる質問等によって、研究対象者の身体又は精神に傷害又は負担が生じることをいう。

侵襲のうち、研究対象者の身体及び精神に生じる傷害及び負担が小さいものを「軽微な侵襲」という。

判断例	侵襲性の有無
研究目的でない診療で採取された血液、体液、組織、細胞、分娩後の胎盤・臍帯等を既存試料・情報として用いる場合	侵襲ではない
研究目的でない診療において穿刺、切開、採血量等を研究目的で増やした際、追加的に生じる傷害や負担が相対的にわずかである場合	軽微な侵襲
一般健康診断で行われる採血や胸部単純X線撮影等と同程度の内容を、研究目的のみで実施する場合	軽微な侵襲
質問票による調査で、研究対象者に精神的苦痛等が生じる内容を含むことをあらかじめ明示して、研究対象者が匿名で回答又は回答を拒否することができる等、十分な配慮がなされている場合	軽微な侵襲
自然排泄される尿・便・喀痰、唾液・汗等の分泌物、抜け落ちた毛髪・体毛を研究目的で採取する場合や、表面筋電図や心電図の測定、超音波画像の撮像などを研究目的で行う場合（ただし、長時間に及ぶ行動の制約等によって過度な負担が生じるものを除く）	侵襲ではない
研究目的で研究対象者にある種の運動負荷を加える際に、生じる身体的な恒常性の変化（呼吸や心拍数の増加、発汗等）が適切な休息や補水等により短時間で緩解する場合や、文部科学省の実施する体力・運動能力調査（新体力テスト）と同程度（対象者の年齢・状態、行われる頻度等を含む。）の実施内容の場合	侵襲ではない

詳細は『人を対象とする医学系研究に関する倫理指針』及び『同ガイダンス』を参照のこと。

参考URL：<http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/ekigaku.html>

#### (注5) 介入

研究目的で、人の健康に関する様々な事象に影響を与える要因（健康の保持増進につながる行動及び医療における傷病の予防、診断又は治療のための投薬、検査等を含む。）の有無又は程度を制御する行為（通常の診療を超える医療行為であって、研究目的で実施するものを含む。）をいう。

判断例	介入の有無
健康に影響を与えると考えられる日常生活の行動（適度な運動や睡眠、バランスの取れた食事、禁煙等）について、群間比較を行うために研究計画書に基づいて作為又は無作為の割付けにより要因の有無又は程度を制御する場合	介入に該当する
研究目的でない診療で従前受けている治療方法を、研究目的で一定期間継続することとして、他の治療方法の選択を制約するような場合	介入に該当する
研究目的で、診断及び治療のための投薬、検査等の有無及び程度を制御することなく、その転帰や予後等の診療情報を収集する場合	介入に該当しない

詳細は『人を対象とする医学系研究に関する倫理指針』及び『同ガイダンス』を参照のこと。

参考URL：<http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/ekigaku.html>

#### (注6) 匿名化

特定の個人（死者を含む。以下同じ。）を識別することができることとなる記述等（個人識別符号を含む）の全部又は一部を削除すること（当該記述等の全部又は一部を当該個人との関わりのない記述等に置き換えることを含む。）をいう。

詳細は『人を対象とする医学系研究に関する倫理指針』及び『同ガイダンス』を参照のこと。

参考URL：<http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/ekigaku.html>

#### (注7) 非識別加工情報

個人情報（独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第59号）の規定により非識別加工情報に係る加工の対象とされている個人情報に限る）に含まれる記述等の一部を削除する等の措置を講じて特定の個人を識別することができないように個人情報を加工して得られる個人に関する情報であって、当該個人情報を復元することができないようにしたもの。

詳細は『人を対象とする医学系研究に関する倫理指針』及び『同ガイダンス』を参照のこと。

参考URL：<http://www.lifescience.mext.go.jp/bioethics/ekigaku.html>

(別紙様式2)

年 月 日

## 研究計画変更承認申請書

埼玉大学長 殿

研究責任者  
所属  
職名  
氏名

下記の研究計画について、国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理規則第15条第2項の規定に基づき変更申請しますので、承認願います。

記

1	課 題 名	承認番号 ( )
2	変更理由	
3	変更内容 (添付資料は、変更箇所が分かるように朱書きで加筆修正してください。) 以下、添付資料のとおり変更します。 <input type="checkbox"/> 研究計画書 (別紙様式1) <input type="checkbox"/> 研究対象者への説明文書 <input type="checkbox"/> 同意書 <input type="checkbox"/> その他 ( )	
4	現在までの研究の進捗状況	
5	その他参考となる事項	
	※部局長確認日	年 月 日

注1 所属する部局長の確認を受け、そのことが分かる資料を添付すること。

2 記入欄が不足する場合には、適宜ページを増やしてください。

(別紙様式3)

審 査 結 果 通 知 書

年 月 日

申請者 殿

埼玉大学長

印

承認番号 \_\_\_\_\_

課 題 名 \_\_\_\_\_

さきに申請のあった上記課題の審査結果を国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理規則第16条の規定に基づき下記のとおり通知します。

記

判定	非該当	承認	条件付承認	変更の勧告	不承認
理由 又は 勧告					

(別紙様式4)

年 月 日

### 研究（終了・中止）報告書

埼玉大学長 殿

研究責任者

所 属

職 名

氏 名

年 月 日付けで承認のあった下記研究課題について、年 月 日をもって終了・中止しましたので、国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理規則第20条の規定に基づき報告します。

#### 記

1 課 題 名	承認番号 ( )
2 中止の理由 (終了の場合は記入不要)	
3 提供された試料等の数	
4 外部の機関への試料等又は遺伝子情報の提供数及び提供理由	
5 研究が実施された試料等の数	
6 研究成果の概要 (発表の有無等を含む。)	
7 試料等の廃棄方法	
8 その他参考となる事項	
※部局長確認日	年 月 日

注1 所属する部局長の確認を受け、そのことが分かる資料を添付すること。

2 記入欄が不足する場合には、適宜ページを増やしてください。



	実施機関	所在地	受入人数
1	株式会社フコク	群馬県邑楽郡千代田町	5
2	キリンホールディングス株式会社	東京都中野区	1
3	東日本電信電話株式会社	東京都新宿区	1
4	NTTアドバンステクノロジー株式会社	神奈川県川崎市幸区	1
5	東芝三菱電機産業システム株式会社	東京都府中市	1
6	日本製鉄株式会社	東京都千代田区	1
7	日本工営株式会社	東京都千代田区	5
8	JR東日本東京支社	東京都北区	1
9	サンコーコンサルタント株式会社	東京都江東区	1
10	パシフィックコンサルタンツ株式会社	東京都千代田区	3
11	川田工業株式会社	東京都北区	1
12	八千代エンジニアリング株式会社	東京都台東区	1
13	戸田建設株式会社	埼玉県所沢市	2
14	ジェイアール東海コンサルタンツ株式会社	東京都港区	1
15	独立行政法人水資源機構	埼玉県さいたま市桜区	2
16	株式会社建設技術研究所	東京都中央区	2
17	中央コンサルタンツ株式会社	東京都新宿区	2
18	東日本高速道路株式会社	神奈川県横浜市神奈川区	1
19	アイオン株式会社	茨城県古河市	1
20	極東興和株式会社	東京都北区	1
21	セントラルコンサルタント株式会社	東京都中央区	2
22	中日本高速道路株式会社（東京支社）	東京都港区	5
23	川田工業株式会社	東京都北区	1
24	清水建設株式会社	東京都中央区	1
25	日東電工株式会社	東京都新宿区	1
26	株式会社クレハ	東京都中央区	1
27	DIC株式会社	東京都中央区	1
28	JXTGエネルギー株式会社	神奈川県横浜市中区	1
29	株式会社長大	東京都中央区	1
30	大成建設株式会社	東京都新宿区	1
31	株式会社ジェイアール総研エンジニアリング	東京都国立市	1
32	株式会社NJS	東京都港区	1
33	株式会社東京設計事務所	東京都千代田区	1
34	鉄建建設株式会社	千葉県千葉市中央区	1
35	東京ガス株式会社	東京都港区	1
36	東急建設株式会社	東京都渋谷区	1
37	JR東日本研究開発センター	埼玉県さいたま市北区	1
38	株式会社コモンウェルスエンジニアーズ	東京都新宿区	1
39	セイコーエプソン株式会社	長野県諏訪市	1
40	株式会社フジクラ佐倉事業所	千葉県佐倉市	1
41	コスモ石油株式会社中央研究所	埼玉県幸手市	1
42	株式会社リニカル	東京都港区	1
43	コニカミノルタ株式会社	東京都八王子市	1
44	花王株式会社	東京都墨田区	1
45	株式会社ニコン	東京都港区	1
46	レイズネクスト株式会社	神奈川県横浜市磯子区	1
47	大日本印刷株式会社	東京都新宿区	1
48	住友化学株式会社	愛媛県新居浜市	1
49	JNC石油化学株式会社	千葉県市原市	1
50	日立GEニュークリア・エナジー株式会社	茨城県日立市	1
51	信越化学工業株式会社直江津工場	新潟県上越市頸城区	1
52	TANAKAホールディングス株式会社	東京都千代田区	2
53	日清紡プレーキ株式会社館林事業所	群馬県邑楽郡邑楽町	1
54	新日本無線株式会社川越製作所	埼玉県ふじみ野市	1

## 学生の確保の見通し等を記載した書類

### 目 次

1.	学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況	
1-1	学生の確保の見通し	
1-1-1	定員充足の見込み	p. 1
1-1-2	定員充足の根拠となる客観的なデータの概要	p. 3
1-1-3	学生納付金の設定の考え方	p. 9
1-2	学生確保に向けた具体的な取組状況	p. 9
2.	人材需要の動向等社会の要請	
2-1	人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的	p. 11
2-2	上記2-1が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠	p. 11



## 1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

### 1-1 学生の確保の見通し

#### 1-1-1 定員充足の見込み

##### (1) 入学定員設定の考え方

改組後の本研究科博士前期課程は、5専攻とする。また、5専攻には10の専門教育プログラムと専攻共通となる1つの融合教育プログラムとする。【資料1】

まず、理工系人材としての企業ニーズと各専攻および教育プログラムとの関係を表1に示す。ここでいう企業ニーズとは、経済産業省が平成30年度に報告した企業アンケート\*1において、企業側担当者が5年後に技術者が不足すると予想した分野を指す。

表1で示すとおり、社会的ニーズの高い産業分野としては「①機械工学・ロボット・メカトロニクス・自動車工学」であり、これは本研究科「機械科学専攻」の教育・研究分野と一致する。

表1 社会的ニーズの高い産業分野と各専攻およびプログラムとの関係

専攻およびプログラム(PG)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①機械工学・ロボット・メカトロニクス・自動車工学、②電力・アナログ・デジタル回路・計測・制御・システム工学、③通信・ネットワーク・セキュリティ、④ハード・ソフト・プログラム系、⑤土木工学・都市計画系、⑥人工知能・機械学習・画像処理、⑦有機化学・無機化学・金属・セラミック・物性物理、⑧化学工学・プロセス工学、⑨分子生物学・細胞生物学・発生・生化学・植物科学									
企業ニーズ (%)	19.1	12.1	5.8	5.7	6.3	4.3	3.5	1.3	0.8
生命科学専攻 分子生物学 PG 生体制御学 PG									◎ ◎
物質科学専攻 物理学 PG 基礎化学 PG 応用化学 PG							○ ◎	◎	
数理電子情報専攻 数学 PG 電気電子物理工学 PG 情報工学 PG			○	○					
機械科学専攻 機械科学 PG	◎	○							
環境社会基盤専攻 環境社会基盤国際 PG					◎				

\*1「理工系人材需給状況に関する調査結果概要」、平成30年4月20日、経済産業省産業技術環境局、大学連携推進室

次に社会的ニーズの高い産業分野としては「②電力・アナログ・デジタル回路・計測・制御・システム工学」であり、この分野は本研究科の「数理電子情報専攻」の教育・研究分野である。本改組における学生定員の考え方の基本は、このような社会的ニーズ、すなわち日本の製造業を支える人材として、産業界から求められている分野の定員増強を柱に、母体となる理学部、工学部各学科の入学定員、進学希望学生数、過去の進学率を勘案し、以下の表2に示す入学定員とした。

表2には、各専攻の入学定員、プログラム毎の目安定員、担当教員数、教員あたりの学生数をまとめた。

表2 改組後の博士前期課程の入学定員・教員数・教員あたりの学生数

専攻およびプログラム	対応する学部・学科の入学定員	定員	目安定員	教員数	教員あたりの学生数
生命科学専攻		55			
分子生物学プログラム	理学部分子生物学科 40		27	14	1.9
生体制御学プログラム	理学部生体制御学科 40		28	12	2.3
物質科学専攻		114			
物理学プログラム	理学部物理学科 40		25	14	1.8
基礎化学プログラム	理学部基礎化学科 50		32	14	2.3
応用化学プログラム	工学部応用化学科 90		57	26	2.2
数理電子情報専攻		142			
数学プログラム	理学部数学科 40		20	13	1.5
電気電子物理工学プログラム	工学部電気電子物理工学科 110		70	31	2.3
情報工学プログラム	工学部情報工学科 80		52	18	2.9
機械科学専攻		70			
機械科学プログラム	工学部機械工学・システムデザイン学科 110		70	26	2.7
環境社会基盤専攻		55			
環境社会基盤国際プログラム	工学部環境社会デザイン学科 100		55	25	2.2
共通:融合教育プログラム		(10)			
「地球環境における科学技術の応用と融合」			(10)		
計		436	436	193	2.3

•これらのプログラムの中で、融合教育プログラムについては、専攻共通であり、理学部、工学部の全ての学科から受け入れ可能である。したがって、定員は内数である。

進学率という観点で見ると、学部一博士前期課程の一貫性を考えて、専門教育プログラムでは概ね学部入学定員の 55-69%となっている。例えば、生命科学専攻では、学部入学定員 80 名に対して 55 名の博士前期課程定員であり、学部入学定員に対して 69%となる。物質科学専攻では、学部入学定員 180 名に対して 114 名の博士前期課程入学定員であり、63%である。同様に、数理電子情報専攻では、学部入学定員 230 名に対して 142 名、62%、機械科学専攻では、学部入学定員 110 名に対して 70 名、64%、環境社会基盤専攻では、学部入学定員 100 名に対して 55 名、55%となる。なお、環境社会基盤専攻のみ博士前期課程の入学定員が学部入学定員の 60%を下回っているが、本専攻分野の学生は公務員希望者が多く、また旺盛な人材需要により学部卒就職者が多いためである。

## (2) 過去5年間のデータによる定員充足の見込み

まず過去5年間における、志願者数、合格者数、入学者数の推移を表3にまとめるとともに、その傾向から、定員確保の見通しについて述べる。

改組前の博士前期課程定員(408名)に対する充足率は、過去5年間 107-118%であった。年度毎の入学者数等を詳しく見ると、(2016年度)435名、充足率 107%、(2017年度)452名、充足率 111%、(2018年度)483名、充足率 118%、(2019年度)465名、充足率 114%、(2020年度)436名、充足率 107%、であった。これらの実績から、新定員 436名(現定員の 107%に相当)は、改組前入学者実績、すなわち学部入学定員が 50名少ないときの実績でも達成可能な数値である。

なお、直近3年間は入学者が微減する傾向にあるが、その期間においても 600名前後の受験者数は確保できている。一方で、合格者に占める辞退者の割合(辞退率)は、2019および2020年度に急増しており、これは大企業および首都圏の旺盛な求人により、大学院合格者が進学せずに就職したためである。このように、辞退率の増加により充足率が減少する傾向はあるものの、志願者数は十分多く、28名増の入学定員(436名)は十分確保できると考えている。

表3 過去5年間の志願者数、合格者数、入学者数の推移

年度	2016	2017	2018	2019	2020
志望者数	559	563	604	614	593
合格者数	469	496	523	517	495
入学者数	435	452	483	465	436
辞退率 /%	7.2	8.9	7.6	10.1	11.9
充足率 /%	107	111	118	114	107

### 1-1-2 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

在学生からの進学ニーズを把握するため、外部機関に委託し、本学理学部及び工学部の3年次生を対象に、令和3年1月20日～2月16日までの期間において、Web 回答によるアンケート形式で調査を実施した。【資料2】調査においては、改組後に対応した 10 の専門教育プログラムと 1

つの融合教育プログラムについて、進学希望の有無を調査した。対象学生数は約 730 人、有効回答数は 640 人、回答率はおよそ 88%であった。まず、回答した学生の所属を示す。

表4 アンケート回答学生の所属

<b>- 所属学科をお答え下さい(1つだけ)。</b>	<b>学生定員</b>	<b>回答数</b>
分子生物学科	40	39
生体制御学科	40	36
物理学科	40	35
基礎化学科	50	47
応用化学科	90	79
数学科	40	20
電気電子物理工学科、電気電子システム工学科	110	102
情報工学科、情報システム工学科	80	82
機械工学・システムデザイン学科、機械工学科	110	117
環境社会デザイン学科、建設工学科	100	83
総計	700	640

表5 大学卒業後の進路

<b>- Q1-1. あなたは、大学卒業後の進路について、現時点ではどのように考えていますか。以下の項目から、あてはまるもの1つをお選びください。</b>	<b>回答数</b>
大学院に進学	424
就職	205
その他	11
総計	640

アンケートの結果、進学希望者総数は、424 名であった。また、表5中、「その他」の 11 名のうち 10 名は、「進学と就職で迷っている」と回答しており、学外からの入学者を考慮しないところで、概ね定員(436 名)と同数の進学希望者である。

表6には、大学院の進学を考える上で、重要なことを学生に聞いた結果をまとめた。

表6 進学理由

<b>- Q1-2 大学院の進学を考える上で、重要なことは何ですか。一つをお選び下さい。</b>	
学部と同じ教育研究の分野をより深く学ぶこと	429
社会的ニーズの高い教育研究の分野を学ぶこと	154
学部とは異なる教育研究の分野を学び、広い知識を得ること	47
その他	10
総計	640

進学理由としては、当然の理由ではあるが「大学で学んだ専門分野をより深く学ぶこと」が最も多く、次いで「社会的ニーズの高い分野を学ぶ」が多い。これは目的意識を持って進学を考えている学生が多いことを示しており、望ましい傾向と言える。また、「学部とは異なる分野を学びたい」とい

う学生も一定数存在している。

表7は、表6にまとめた質問において、「その他」と回答した学生の具体的な理由をまとめた結果である。

- 前問の「その他」の内容をお書き下さい。	回答数
学部と同じ教育研究の分野の、より現実に即したものを学ぶこと	1
私立教職を取る際、専任教員になるうえで有利になる。	1
自分の興味のある分野の研究を行うこと	1
就活で使えるか	1
就職や生涯年収に良いか悪いか	1
就職先	1
上2項目いずれも	1
大学4年間学んだ上で考えた、本当に自分が勉強したい分野を選択すること。	1
大学院在籍中や卒業後の自身の経済状況	1
面白そうかどうか。そこにいる人達に魅力があるかどうか	1
総計	10

表8は、各専攻、融合教育および特別教育プログラムに魅力を感じる学生数を集計した結果である。いずれの専攻でも、「とても興味を感じる」と回答した学生の数は募集予定定員を上回っていた。特に融合教育プログラム「地球環境における科学技術の応用と融合」に興味を持つ学生が多く、今後一層魅力をアピールすることで、学生確保につなげたいと考えている。

副プログラムとして開設する特別教育プログラム(A)～(C)についても、多くの学生が「とても魅力を感じる」と回答している。

専攻、その他	定員	とても魅力を感じる	ある程度魅力を感じる	あまり魅力を感じない	まったく魅力を感じない
生命科学専攻	55	98	226	119	42
物質科学専攻	114	117	261	123	32
教理電子情報専攻	142	148	195	99	33
機械科学専攻	70	126	220	91	40
環境社会基盤専攻	55	89	220	119	36
専攻共通:融合教育PG 地球環境における科学技術の応用と融合	(10)	103	230	94	21
特別教育PG(A) 6年一貫型イノベーション育成PG	(80)	171	359	94	16
特別教育PG(B) データサイエンティストとしての素養を備えた 理工系人材育成PG	(40)	230	330	67	13
特別教育PG(C) 6年一貫型ハイグレード理教教育PG	(20)	138	372	111	19

表9は埼玉大学大学院への入学希望の有無を聞いた結果である。401名の学生が、埼玉大学大学院への進学を希望している。

なお、表9の設問において、「入学したいとは思わない」と回答した学生の理由であるが、最も多い理由は当然のことながら「就職希望だから」であった。また、「他大学の大学院を希望しているから」と回答した学生が25名おり、これらの学生の一部は卒業研究着手後に埼玉大学大学院への進学に変わる可能性がある。

表9 埼玉大学大学院への入学希望者数

－ Q3. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)に入学したいと思いますか。あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。	回答数
入学したいと思う	401
入学したいとは思わない	239
総計	640

表9における設問で「入学したい」と回答した学生が401名となっている一方で、表10に示すように、進学を考えている学生のうち、78名の学生が「奨学金制度や経済支援があれば入学を希望する」と回答しており、奨学金や授業料免除に関する情報を早い時期に学生に対して周知する必要があることが分かった。

表10 入学希望者の経済状況等に関する回答

－ Q3 で「入学したい」と答えた方は以下の中であなたの気持ちに近いものを一つお選び下さい。	回答数
学部卒業後、そのまま入学を希望する	309
奨学金制度や経済支援があれば入学を希望する	78
3～5年程度社会経験を積んでから入学を希望する可能性がある	14
総計	401

次に理工学研究科博士前期課程に合格した場合、「いずれのプログラムへの入学を希望するか」という問いに対する回答を表11にまとめた。

本アンケートは、令和2年度の理学部及び工学部の3年次生(日本人学生)を対象に実施したものであるが、理工学研究科博士前期課程では毎年度一定数の留学生を受け入れている。令和2年度においては、71名の留学生が入学しており、本アンケート結果には反映されていない。なお、留学生数の詳細については表12にまとめた。

まず、アンケートにより「入学したい」と回答し、かついずれかのプログラムに所属を希望した学生は397名であった。さらに71名の留学生を加えると468名となる。なお、このうち36名(R2実績)は環境社会基盤専攻および共通プログラムである「地球環境における科学技術の応用と融合プログラム」の所属を希望する学生である。

次に入学希望者数を専攻毎に見てみると、まず、生命科学専攻においては 55 名の定員に対して 51 名の希望者であり、表 12 に示すように毎年 2～3名の留学生が入学していることを考えると、現時点でも定員を概ね充足できる見込みである。

表 11 各プログラムへの入学希望者数

－ Q4.あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)を受験して合格したら、どの専攻・専攻共通のPGへの入学を希望しますか。あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。	定員	回答数	割合(%)
生命科学専攻、分子生物学PG(仮称)に入学したい	27	28	103.7
生命科学専攻、生体制御学PG(仮称)に入学したい	28	23	82.1
物質科学専攻、物理学PG(仮称)に入学したい	25	28	112.0
物質科学専攻、基礎化学PG(仮称)に入学したい	32	30	93.8
物質科学専攻、応用化学PG(仮称)に入学したい	57	48	84.2
数理電子情報専攻、数学PG(仮称)に入学したい	20	12	60.0
数理電子情報専攻、電気電子物理工学PG(仮称)に入学したい	70	57	81.4
数理電子情報専攻、情報工学PG(仮称)に入学したい	52	50	96.2
機械科学専攻、機械科学PG(仮称)に入学したい	70	77	110.0
環境社会基盤専攻、環境社会基盤国際PG(仮称)に入学したい	55	38	69.1
専攻共通、地球環境における科学技術の応用と融合PG(仮称)に入学したい	(10)	6	(60.0)
入学したい専攻・PGはこの中ではない		4	
総計	436	401	92.0

物質科学専攻では、専攻の定員 114 名に対して、106 名の学生が入学したいと回答しており、現時点では入学希望者が定員を下回っている。特に応用化学プログラムの入学希望者が 9 名少ない。しかし、応用化学科では 3 年次生等の3・4ターム開始時、卒業研究の履修希望学生を各研究室に仮配属し、2月末に成績が確定した時点で卒業研究履修に向けて正式な研究室配属を行っている。卒業研究履修生の研究室配属確定後、3月初旬に各研究室の定員管理のために大学院進学希望者を調査したところ、3年次生の卒業研究履修者 74名のうち、埼玉大学大学院への進学希望者は 63 名、他大学進学希望者は 3 名、就職希望者は 8 名であった。この他、工学部改組前の旧課程に所属する学生で令和3年度から卒業研究を履修する学生のうち7名が、理工学研究科改組後の博士前期課程への進学を希望しており、この人数を加えると令和4年度入学を志望する学生としては、総数 71 名となる。なお、卒業研究に配属された学生はアンケートに回答した学生と同じであるから、両者の違いから配属学生の進学希望の意思表示には多少のバイアスがかかっている可能性もあるが、最新の情報となる卒業研究履修確定時においては少なくとも十分に定員を充足できる見込みである。

数理電子情報専攻に関しては、「入学したい」と回答した学生は、専攻定員 142 名に対して 119 名であり、定員に対して 23 名少ない結果であった。まず表 12 に示す本専攻の留学生入学実績の過去5年(2016～2020 年)平均値は9～10 名であるため、実際の不足数は 10 数名である。

まず、数学プログラムでは当該プログラムに入学を希望する学生が 12 名、他プログラム希望者が 3 名であり入学定員に対して大幅に少ないが、回答した学生が理学部数学科入学定員の半分(20 名)であったことを考えると、同学科からの内部進学実績、回答者数から考えて実際には概ね定員を確保できるものと考えている。

電気電子物理工学プログラムに直結する電気電子物理工学科では、令和3年1月より複数回、進路に関するアンケートを実施している。その結果、令和3年1月22日の調査では88名の回答者に対して61名の進学希望者(進学率=69%、すべて本学大学院希望)、令和3年2月24日の調査では87名の回答者に対して63名の希望者(進学率=72%、すべて本学大学院希望)、卒業研究着手が決まる研究室配属後の3月1-11日に実施した調査では、110名の研究室配属学生が回答し、82名が本学大学院希望であった(進学率=75%)。この進学希望者のうち、調査時にプログラムの選択で迷っていた学生の半数となる8名が他の教育プログラム等を希望する場合を考慮しても、電気電子物理工学プログラムへの進学希望者はおよそ74名を見込むことができる。よって、卒業研究着手後の最新情報では、進学希望者が定員を上回ると見込まれ、このほか毎年留学生が10名程度入学することを考えれば十分に学生を確保できると考えられる。

機械科学専攻においては、企業において修士課程修了者の採用意欲が高いこともあり、多くの学生が博士前期課程修了を念頭に活動していることから進学への意欲が高く、アンケート結果から分かるとおり定員は容易に充足できる見込みである。

環境社会基盤専攻においては、55名の定員に対して38名の学生が入学を希望しており、現時点では定員に対して17名少ない。しかしながら、本専攻では英語のみで修了可能な留学生特別プログラムを長年実施しており、以下の表12に示すとおり、海外からの留学生を毎年30名以上受け入れている実績から、その数を考慮すれば入学定員の55名は十分充足できる見込みである。

次にアンケートにおける融合教育プログラムへの進学を希望する学生は、現時点では6名であった。募集定員(内数)に4名不足している状況ではあるが、アンケートにおいて、本融合教育プログラムに関して「とても興味を感じる」と回答した学生が103名、「ある程度魅力を感じる」と回答した学生が230名おり、今後、プログラムの魅力を伝えていけば、目標人数には到達できると考えている。なお、本プログラムでは留学生も積極的に受け入れる予定であり、その点からも定員を充足できる見込みである。

なお、専攻毎の留学生入学実績を以下の表12にまとめた。

表12 過去5年間の留学生等の入学者数の推移

年 度		2016	2017	2018	2019	2020
入学者数		57	57	58	69	71
改組後の専攻	現行の専攻					
生命科学	生命科学系	3	4	3	1	5
物質科学	物理機能系	3	6	2	3	4
	化学系					
数理電子情報	数理電子情報系	8	5	12	17	12
機械科学	機械科学系	10	9	3	8	14
環境社会基盤	環境システム工学系	33	33	38	40	36

前述のとおり、大学卒業後の進路の回答において、現時点で進学あるいは就職のいずれかに決めかねている学生も一定数いることから、研究活動を通して進学希望者が増えるように、今後、大学院進学の魅力を発信し続ける。

最後に副プログラムである特別教育プログラムの受講希望を聞いた設問の回答を表 13 にまとめる。

(A), (B), (C)いずれのプログラムにおいても、受講を希望する学生が多く、目標とする受講生は十分確保できると考えている。また、受講希望者が目安定員を大幅に超える場合には、いずれの定員も内数であることから、担当教員を増やせば目安定員枠を広げることも可能である。一方で、大学院進学後は研究活動との兼ね合いで、時間的余裕がなくなる可能性もあり、集中講義として実施するなど、研究活動に支障が出にくいシステムを考える必要もあると思われる。

表 13 特別教育プログラム受講者希望者

－ Q5.あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)で構想している特別教育プログラム(副PG)を受講してみたいと思いますか。あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。	定員 目安	回答数
6年一貫型イノベーション人材育成PG(仮称)を受講したい	80	123
データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG(仮称)を受講したい	40	169
6年一貫型ハイグレード理数教育PG(仮称)を受講したい	20	46
受講したい副PGはこの中にある		63
総計		401

### 1-1-3 学生納付金設定の考え方

学生納付金の額は、「国立大学等の授業料その他の費用に関する省令」に則り、本学が定める「国立大学法人埼玉大学授業料その他の費用に関する規則」に基づき設定する。

### 1-2 学生確保に向けた具体的な取組状況

理学部及び工学部では、入学後、毎年度4月のガイダンスで大学院進学の魅力積極的にアピールしており、その取り組みが一定の成果を上げている。今後はこれまでの取り組みを継続すると共に、新たに導入した特別教育プログラムの魅力などを積極的に伝えることで、大学院進学魅力を学生が理解できるようにする。加えて、教員個々の専門科目の講義の中でも6年一貫教育をベースとした専門教育、融合教育および特別教育プログラムの魅力を伝える。さらに、外部講師を活用した以下の取り組みにより、埼玉大学理工学研究科博士前期課程、ひいては大学院進学魅力を積極的にアピールしたい。

#### (1) 理工系学生向けキャリアガイダンス

理学部および工学部の新4年生を対象とした「理工系学生向けキャリアガイダンス」を実施した。講師には、工学部のイノベーション人材育成プログラムにおいて、全学科共通の講義「イノベーションとマーケティング」の設計・実行をお願いしている、(株)TECH OCEANの長井裕樹氏を招いた。

なお、本学においては学部卒で就職する学生も3割強いるので、大学院進学に偏重した取り組みにならぬように留意した。

このキャリアガイダンスの概要は以下の通りである。

実施日:令和3年5月14日

実施対象:理学部、工学部 3・4年次生の希望者

実施方法:zoomによるリアルタイム方式、60分程度

実施者:(株)TECH OCEAN 代表 長井裕樹氏、理工学研究科教職員

講演内容:

激動の社会を乗り越える！社会から求められる人材とは？

大学・大学院で身につけたい能力とは？

院進学？学部卒で就職？(それぞれのメリット、デメリット)

就職活動の基本

大学としての大学院進学サポートの紹介(奨学金、授業料免除、相談窓口など)

## (2)理工系学生向け進学説明会

大学院進学者増という観点では、3年次の3・4ターム開始時におけるガイダンスが効果的であることから、その時期に理工学研究科として、進学説明会を実施する予定である。

実施時期:令和3年度10月

実施対象:理学部、工学部 3年次生の希望者

実施方法:各学部のガイダンスに併せて、学科毎に対面あるいは zoom によるリアルタイム方式で実施。60分程度

講演内容:

大学院進学で何が身につくのか？

大学院進学の特長 (就職先情報から)

入試情報(入試時期、定員、入試方法、試験科目など)

学生支援(奨学金、授業料免除、相談窓口など)

## (3)ホームページ等による広報活動

ホームページ上で積極的に広報活動を行う。特に新たに開設する融合教育プログラム、「地球環境における科学技術の応用と融合プログラム」については、留学生のみならず、他大の学生にとっても魅力あるプログラムであると自負しており、SDGsに興味を持つ学生などを積極的に受け入れていく予定である。また留学生向けには、英語によるプログラム説明資料を作成すること、オンラインでの入試を実施する(来日しなくても受験できる仕組みが必要)などを通して、多彩な学生の受け入れを実現したい。

令和3年度は、これらの取り組みを実施しつつ、その結果をフィードバックし、翌年以降の改善に

つなげる。

## **2. 人材需要の動向等社会の要請**

### **2-1 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的**

博士前期課程の教育研究上の目的は以下の通りである。

理工学研究科博士前期課程においては、学部における専門基礎教育をもとに、専門分野のみならず基礎から応用にわたる広い関連知識の修得を目指す高度専門教育を通して、科学技術イノベーションを牽引することができる、独創性のある国際的なレベルの研究者へ成長するための基礎を備えた人材又は国際的な知識基盤社会において指導的役割を果たすことができる高度専門職業人の育成を教育研究上の目的とする。

また博士前期課程の人材像は以下の通りである。

理工学研究科博士前期課程の 10 の専門教育プログラムで育成する人材は、学部教育の母体となる理学部及び工学部の教育理念をベースとして、それぞれの専門分野を体系的に深く学ぶことができる学士-修士6年一貫型教育プログラムを通して、理学および工学の各専門分野に関する高い専門性を身につけた研究者あるいは高度技術者である。

融合教育プログラムとして導入する、「地球環境における科学技術の応用と融合プログラム」で育成する人材は、SDGs に代表される持続可能な社会を構築するための開発目標を実現しうる高い専門性と人文学・社会科学を含めた幅広い知識を備えた研究者、技術者である。

これらの専門教育プログラム等に加えて、副プログラムとなる3つの特別教育プログラムにより、異分野協働による課題解決と社会実装により科学技術イノベーションに貢献しうる高度技術者、膨大なデータから必要とするデータを抽出・解析して有用な情報を引き出すことで、新しい価値を生み出すことのできる、データサイエンティストとしての素養を備えた高度技術者、および自然科学に関わる広い見識を身につけ、研究面での企画・実施・解析能力を持ち、研究遂行及び公表に必要な国際性と社会性、および研究倫理を備えた研究者を育成する。

### **2-2 上記2-1が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠**

#### **(1) 過去5年間の就職状況に基づく分析結果**

まず、理工学研究科博士前期課程修了学生の過去3年分の就職状況を表 14 にまとめた。

建設業、製造業、社会インフラ系企業、情報通信業、教育関連業、公務員を合計すると、修了生の概ね 90 %となり、多くの学生は博士前期課程で学んだ専門性を活かした職に就いていると分析している。

表 14 理工学研究科博士前期課程、過去3年間の就職状況

産業分類	R1	H30	H29	
建設業	28	20	22	
製造業	食料品・飲料・たばこ・飼料製造業	13	5	14
	繊維工業	3	0	0
	印刷・同関連業	7	5	7
	化学工業・石油・石炭製品製造業	46	47	45
	鉄鋼業・非鉄金属・金属製品製造業	11	12	7
	汎用・生産用・業務用機械器具製造業	39	32	17
	電子部品・デバイス・電子回路製造業	32	23	24
	電気・情報通信機械器具製造業	49	49	46
	輸送用機械器具製造業	33	44	48
	その他製造業	5	8	5
製造業 計	238	225	213	
電気・ガス・熱供給・水道業	10	7	6	
情報通信業	65	56	50	
運輸業・郵便業	5	7	8	
卸売業・小売業	6	8	2	
金融業・保険業	1	2	0	
不動産取引・賃貸・管理業・物品賃借業	1	0	0	
学術・研究開発機関	0	2	3	
その他専門・技術サービス業	11	9	17	
宿泊業・生活関連サービス業等	2	0	4	
教育 関連業	学校教育	13	8	8
	その他の教育・学習支援業	2	0	2
医療業・保健衛生・社会保険等	3	0	0	
国家公務員・地方公務員	14	13	13	
その他	12	8	8	
合 計	411	365	356	
数値はいずれも翌年度4月1日時点での集計値(大学概要より転記)				

次に表 15 には、各専攻及びコース毎の過去2年間の就職状況をまとめた。

過去2年間、進路状況の傾向に大きな変化はない。特徴としては、理学系の専攻では、博士後期課程への進学者数が多く(青塗り)、研究者育成を掲げる理学部の教育理念と合致している。一方、環境社会基盤国際コースでは、土木・建設工学系のコースであることから公務員への就職が多いこと、またその他が多いが、これは留学生が母国で職に就いていることなどによる。なお、過去2年間の就職率(就職希望者に対する就職者の割合)は、令和元年度(R1)=98.3%、平成30年度(H30)=97.1%であった。

これら一連の実績から、理工学研究科博士前期課程学生の就職希望者のほぼ全てが就職できており、また90%以上が専門性を活かした職業に就いている。

表 15 過去2年間の各コースの就職状況

R1年度						
コース名	修了者	進学者	民間企業	公務員	教員	その他
分子生物学	24	5	19			
生体制御学	27	2	20	1	2	2
物理学	23	1	22			
機能材料工学	38	1	37			
基礎化学	39	4	33	2		
応用化学	33	0	32			1
数学	14	2	6		5	1
電気電子システム工学	61	0	60	1		
情報システム工学	43	1	37	1	3	1
機械工学	49	1	44	2		2
メカロボト工学	29	1	27			1
環境社会基盤国際	49	1	29	6	5	8
環境制御システム	29	2	20	1		6
合計	458	21	386	14	15	22
H30年度						
コース名	修了者	進学者	民間企業	公務員	教員	その他
分子生物学	16	4	12			
生体制御学	33	4	24		2	3
物理学	18	5	12			1
機能材料工学	44		44			
基礎化学	31		28	2		1
応用化学	31	1	29			1
数学	21	5	10		4	2
電気電子システム工学	59	1	57			1
情報システム工学	38	1	33	3		1
機械工学	42	1	38			3
メカロボト工学	24		24			
環境社会基盤国際	40	1	20	6		13
環境制御システム	17	2	13			2
合計	414	25	344	11	6	28

(2) アンケート調査に基づく分析結果

理工系人材における社会的ニーズについては、令和3年2月8日より3月15日までの期間を対象に700社強にアンケートを実施した【資料3】。アンケート回答企業数は249社、本研究科修了生の採用を希望している企業は、延べ1045社、希望採用人数は延べ人数で1335名であった。また、今後、毎年度定期的に採用を予定している人数を聞いたところ、重複を除いた採用希望学生数は

487名(112%)となり、改組後の入学定員を十分超えていた。

それぞれの専攻毎に採用希望者の人数を見ると、表1の社会的ニーズにおいて、最もニーズの高かった①機械工学・ロボット・メカトロニクス・自動車工学に対応した「機械科学専攻」においては、本学修了生を「採用したい」と回答した企業数が募集定員を大幅に上回っており、この分野の人材需要と社会的ニーズが良く一致していた。また、社会ニーズの順位で見ると第5位であり、それほど高くないが、⑤土木工学・都市計画系である「環境社会基盤専攻」についても「採用したい」と回答した企業数および採用予定人数が、入学定員を大幅に上回っていた。その他、生命科学専攻、物質科学専攻および数理電子情報専攻のいずれにおいても、「採用したい」と回答した企業数は募集定員よりも多かった。なお、この採用予定人数は延べ人数であり、生命科学専攻と物質科学専攻の採用予定人数は重複している可能性があるが、いずれも2倍程度の採用予定人数となっており、これらの専攻においても十分進路は確保できていると考えられる。

表 16 企業アンケート実施結果

専攻	入学定員	「採用したい」回答社数	採用予定人数合計	採用予定人数/入学定員
生命科学専攻	55	117	142	2.58
物質科学専攻	114	158	210	1.84
数理電子情報専攻	142	170	257	1.81
機械科学専攻	70	191	287	4.10
環境社会基盤専攻	55	190	263	4.78
融合教育プログラム 地球環境における科学技術 の応用と融合PG	(10)	160	176	(17.60)
計	436	986	1,335	3.06

更に詳細に見ると、数理電子情報専攻に合致する社会的ニーズは、先の表1の②電力・アナログ・デジタル回路・計測・制御・システム工学、③通信・ネットワーク・セキュリティ、④ハード・ソフト・プログラム系、⑥人工知能・機械学習・画像処理等が該当する専門分野であり、これらは最も人材需要が旺盛な分野であることから、中長期的な展望からも就職先を確保できる。

また、物質科学専攻に合致する社会的ニーズは、⑦有機化学・無機化学・金属・セラミック・物性物理、⑧化学工学・プロセス工学等であるが、材料化学分野、ケミカルエンジニアリング関連は素材産業の基幹をなす分野であるから、派手ではないが堅調な人材需要がある。したがって、改組後の入学定員においても十分就職先を確保できる。

最後に、内数10名でスタートする融合教育プログラム「地球環境における科学技術の応用と融合PG」については、アンケートの結果より、予想以上に期待が高く、今後、この分野の人材を積極的に育成することが重要と思われる。なお、この専攻共通の新しい融合教育プログラムにおいては、生命科学、物質科学、電気電子物理工学、および環境社会基盤の各専攻の定員に組み入れられ

るため、指導教員の受け入れキャパシティを超えない限り、定員は臨機応変に変更可能である。

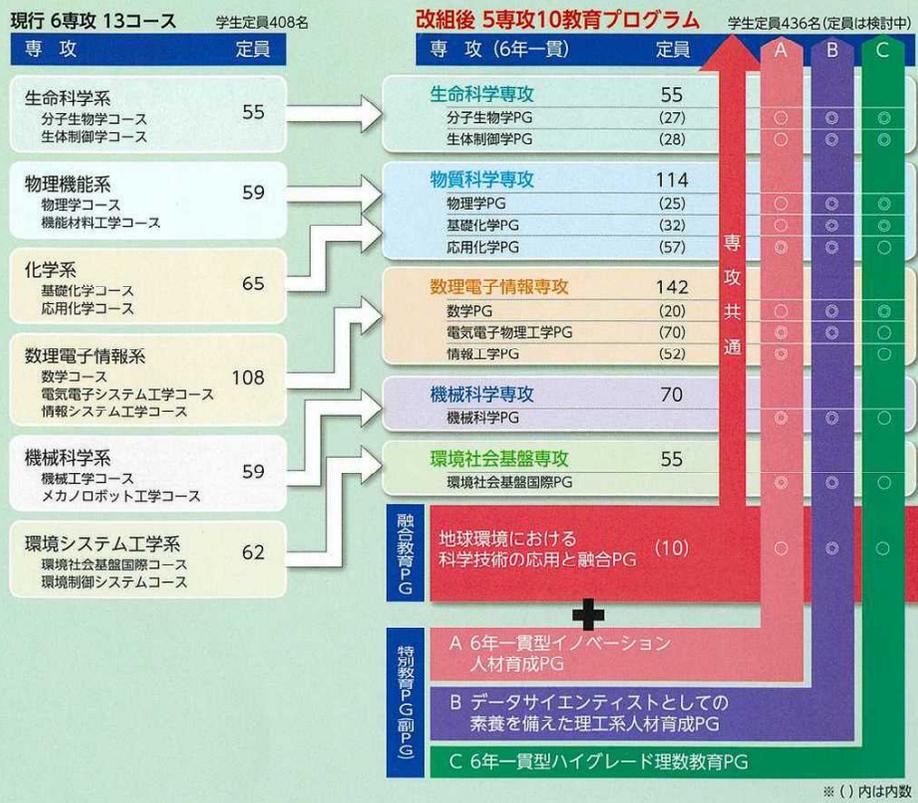
以上のとおり、アンケートから読み取れる人材需要の動向は、先にまとめた社会的ニーズから予想される傾向と一致しており、概ね全ての専攻で就職先は確保できる。

#### 資料目次

- 資料 1 調査に際して回答者に示した設置構想等資料
- 資料 2 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」改組に関するニーズ調査結果報告書【在学生対象】
- 資料 3 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」改組に関するニーズ調査結果報告書【企業対象調査】



# 理工学研究科 改組について



— 学生の確保の見通し等 — 19 —



交通機関  
 東京東北線……北浦和駅(西口)……[埼玉大学]行/バス(徒歩下車)約15分  
 埼京線……南与野駅……[埼玉大学]行/バス(徒歩下車)約10分  
 東武東上線……志木駅(東口)……[南与野駅]行/バス(徒歩下車)約20分

## 理工学研究科博士前期課程 (修士課程) が変わります!

(2022年4月開設に向けて設置構想中)

- Point 1** 博士前期課程を5専攻、10教育プログラムに再編成すると共に、入学定員が408名から436名に増えます!
- Point 2** SDGs達成に貢献しうる人材の育成をめざした専攻共通の融合教育プログラムを導入します!
- Point 3** 時代の要請に応える3つの特別教育プログラム(副プログラム)を導入します!

本プログラムの概要等は予定であり、今後変更になる場合があります。



# 産学連携を活用した教育研究を行いながら、 産業界や地域社会で活躍できる人材を育成します。

【2022年4月開設に向けて設置構想中】

※定員数の内訳は予定であり、今後変更になる場合があります。

理工学研究科長挨拶

埼玉大学大学院理工学研究科では、博士前期課程(修士課程)を従来の6専攻13コース(定員408名)から5専攻10教育プログラム(定員436名)に再編成します。理学部・工学部の10学科と連結した6年一貫型の教育をより充実させると共に、3つの副プログラムを導入することで時代の要求に応える質の高い教育を実施します。また、21世紀の持続可能な開発目標であるSDGsの達成に貢献しうる人材の育成をめざした、新しい教育プログラムも導入します。充実した教育プログラムを用意した埼玉大学大学院で学びましょう!

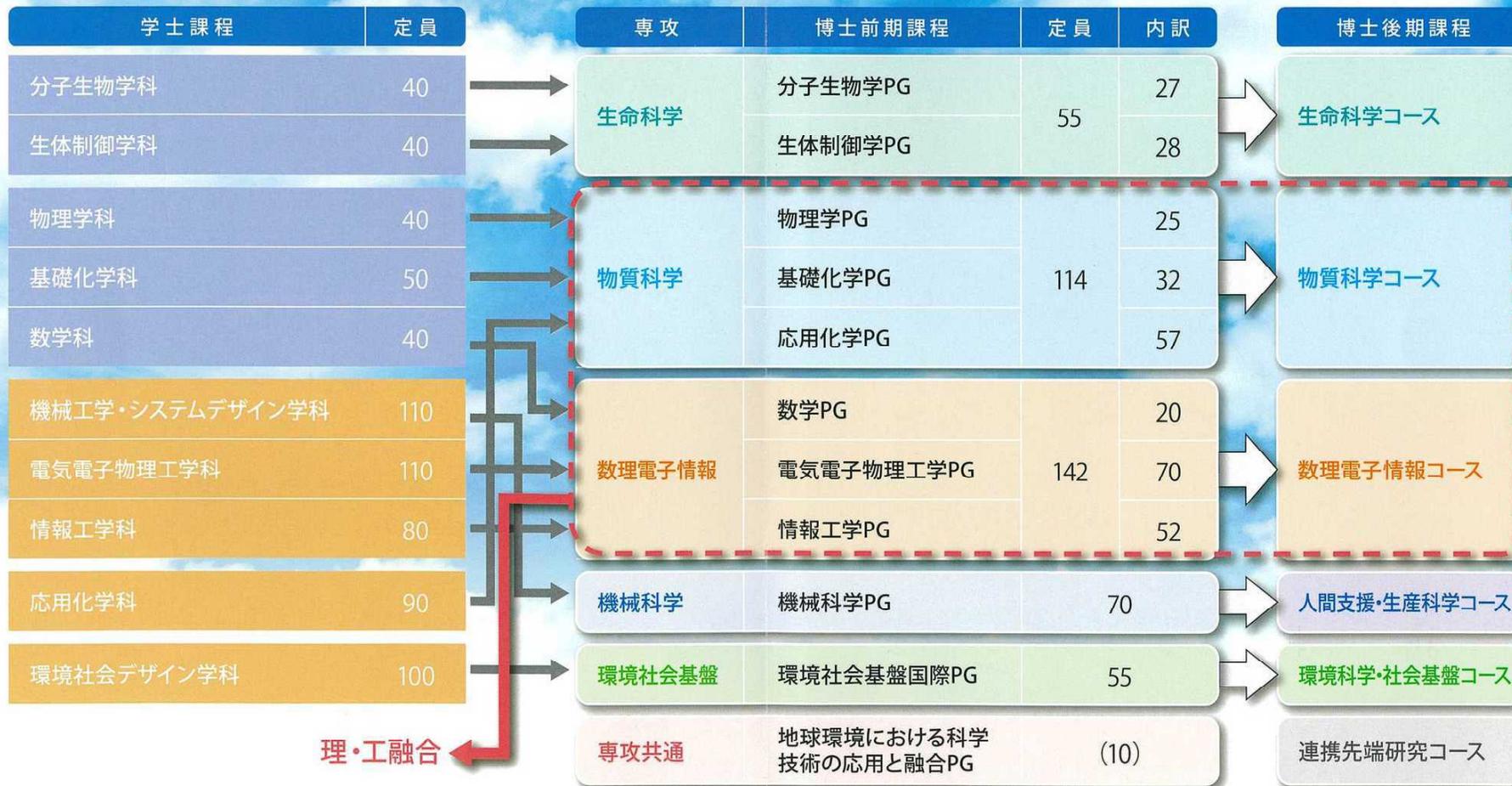


理工学研究科長  
黒川 秀樹

## 理学部・工学部

博士前期課程(436名)  
学位:理学、工学

博士後期課程(56名)  
学位:理学、工学、学術



※学生定員、定員検討中

## 高い実践力を持つ研究者・技術者を目指しましょう

---

---

埼玉大学大学院  
「理工学研究科 博士前期課程」  
改組に関するニーズ調査  
結果報告書  
【在学生対象】

---

---

令和3年4月  
株式会社 進研アド

# 在学生対象 調査概要

## 1. 調査目的

2022年4月改組予定の埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」改組構想に関して、在学生からの進学ニーズを把握する。

## 2. 調査概要

		在学生対象調査
調査対象		学部3年生
調査方法		Web調査
調査対象数	依頼数	730人
	有効回収数	640人 有効回収率:87.7%
調査時期		2021年1月20日(水)～2021年2月16日(火)
調査実施機関		株式会社 進研アド

## 3. 調査項目

在学生対象調査
<ul style="list-style-type: none"><li>・所属学科</li><li>・大学卒業後の進路</li><li>・大学院進学重視ポイント</li><li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度</li><li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度</li><li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への入学意向</li><li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への入学意識</li><li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の入学希望専攻・専攻共通PG</li><li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の受講希望副PG</li><li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への非入学意向理由</li></ul>

## 在学生対象 調査結果まとめ



# 在学生対象 調査結果まとめ

## 回答者の所属学科

※本調査は、埼玉大学大学院の「理工学研究科 博士前期課程」に対する需要を確認するための調査として設計。埼玉大学に在学する3年生に調査を実施し、640人から回答を得た。

- 回答者の所属学科は「機械工学・システムデザイン学科、機械工学科」が18.3%で最も多い。次に「電気電子物理工学科、電気電子システム工学科」が15.9%、「環境社会デザイン学科、建設工学科」が13.0%と続く。

## 大学卒業後の進路/大学院進学重視ポイント

- 回答者の大学卒業後の希望進路を聴取したところ、「大学院に進学」が66.3%で最も多い。次いで、「就職」が32.0%である。回答者の半数以上が大学院への進学を希望しており、進学意向率が非常に高いことがうかがえる。
- 回答者の大学院進学の際に重視するポイントは、「学部と同じ教育研究の分野をより深く学ぶこと」が67.0%で最も多い。次いで、「社会的ニーズの高い教育研究の分野を学ぶこと」が24.1%、「学部とは異なる教育研究の分野を学び、広い知識を得ること」が7.3%と続く。

# 在学生対象 調査結果まとめ

## 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度(※)は、以下の通り。

「A. 《生命科学専攻》生命現象に関わる物質と制御機構の解明、理解を通して、独創的な研究者となるために必要な生物学の幅広い知識・学力・見識を備えた人材を育成する」は66.8%である。(回答者:485人)

「B. 《物質科学専攻》物理学や化学の基礎、化学の応用に関する教育研究環境を構築し、学問の素養と幅広い視野を持ち国際社会で活躍できる研究者・技術者・教育者などを育成する」は70.9%である。(回答者:533人)

「C. 《数理電子情報専攻》数理電子情報に関する総合的・学際的な教育研究環境を構築し、国際的な情報化社会の進展に指導的役割を果たすことのできる技術者、ならびに独創性を備えた国際的レベルの研究者を育成する」は72.2%である。(回答者:475人)

「D. 《機械科学専攻》生産性の高度化および高効率化の実現を図るとともに、人間を支援するための科学技術の研究・開発を進展させる上で中核となる優れた人材を育成する」は72.5%である。(回答者:477人)

「E. 《環境社会基盤専攻》多様化していく社会ニーズに応えるために、自然環境と調和した社会基盤の計画・設計・施工・維持・管理技術を創造的かつ国際的に担うことができる人材を育成する」は66.6%である。(回答者:464人)

「F. 《専攻共通》【地球環境における科学技術の応用と融合PG】出身学部・学科に捉われず、エネルギー・資源・環境を主分野とし、持続可能な開発目標(SDGs)の達成や諸問題の課題解決に貢献しうる、国際性豊かでリーダーシップを備えた人材を育成する」は74.3%である。(回答者:448人)

※魅力度＝「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

※各魅力度は各特色について回答した人がベース

# 在学生対象 調査結果まとめ

## 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度(※)は、すべての項目において8割前後である。
- 最も魅力度が高いのは、「H. 【データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG】深い専門的知識に加えて、膨大なデータから有用な情報を抽出し、解析したデータを正しく判断し、それぞれの分野の専門知識と融合させることで新たな価値を創造できる技術者・研究者を育成する」(87.5%)である。

次に魅力度が高いのは、「G. 【6年一貫型イノベーション人材育成PG】深い専門知識に加えて、課題を分析し、技術と統合して、システム化した解決方法を構築でき、異分野共同による社会実装を実現しうるリーダーシップを備えた研究者・技術者を育成する」(82.8%)、さらに「I. 【6年一貫型ハイグレード理数教育PG】研究者育成を目的とし、研究面での企画・実施・解析能力や、研究遂行及び公表に必要な国際性と社会性、研究倫理を遵守する姿勢を育成し、特殊性と独創性がある研究が行える人材を育成する」(79.7%)と続く。

※魅力度＝「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

# 在学生対象 調査結果まとめ

## 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への 入学意向／入学意識／非入学意向理由

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」に「入学したいと思う」と答えた人は、62.7% (401人)である。「入学したいとは思わない」と答えた人は、37.3% (239人)である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」に「入学したいと思う」と答えた401人に対して、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への入学意識を聴取したところ、「学部卒業後、そのまま入学を希望する」と回答した人は、77.1% (309人)である。また、「奨学金制度や経済支援があれば入学を希望する」人は19.5% (78人)、「3～5年程度社会経験を積んでから入学を希望する可能性がある」人は3.5% (14人)である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」に「入学したいとは思わない」と答えた239人に対して、その理由を聴取したところ、「就職希望だから」と回答した人が82.8% (198人)と最も多い。次いで「他大学の大学院を希望しているから」と回答した人は10.5% (25人)、「改組後の理工学研究科博士前期課程に魅力を感じないから」が3.3% (8人)と続く。

# 在学生対象 調査結果まとめ

## 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の 入学希望専攻・専攻共通PG

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」に「入学したいと思う」と答えた401人のうち、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」を受験して合格したら入学したい専攻・専攻共通PGの結果は、以下の通り。
  - 生命科学専攻：12.7% (51人) ※入学定員数55人
    - 生命科学専攻、分子生物学PG (仮称)：7.0% (28人)
    - 生命科学専攻、生体制御学PG (仮称)：5.7% (23人)
  - 物質科学専攻：26.4% (106人) ※入学定員数114人
    - 物質科学専攻、物理学PG (仮称)：7.0% (28人)
    - 物質科学専攻、基礎化学PG (仮称)：7.5% (30人)
    - 物質科学専攻、応用化学PG (仮称)：12.0% (48人)
  - 数理電子情報専攻：29.7% (119人) ※入学定員数142人
    - 数理電子情報専攻、数学PG (仮称)：3.0% (12人)
    - 数理電子情報専攻、電気電子物理工学PG (仮称)：14.2% (57人)
    - 数理電子情報専攻、情報工学PG (仮称)：12.5% (50人)
  - 機械科学専攻、機械科学PG (仮称)：19.2% (77人) ※入学定員数70人
  - 環境社会基盤専攻、環境社会基盤国際PG (仮称)：9.5% (38人)
    - ※入学定員数45人
  - 専攻共通、地球環境における科学技術の応用と融合PG (仮称)：1.5% (6人)

# 在学生対象 調査結果まとめ

---

## 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の 受講希望副PG

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」に「入学したいと思う」と答えた401人のうち、受講してみたい副PGを聴取したところ、「データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG(仮称)を受講したい」人が42.1%(169人)と最も多く、予定している受講定員数40人を4倍以上上回っている。「6年一貫型イノベーション人材育成PG(仮称)を受講したい」人は30.7%(123人)で、予定している受講定員数80人を上回っている。「6年一貫型ハイグレード理数教育PG(仮称)を受講したい」人は11.5%(46人)で、予定している受講定員数20人を2倍以上上回っている。

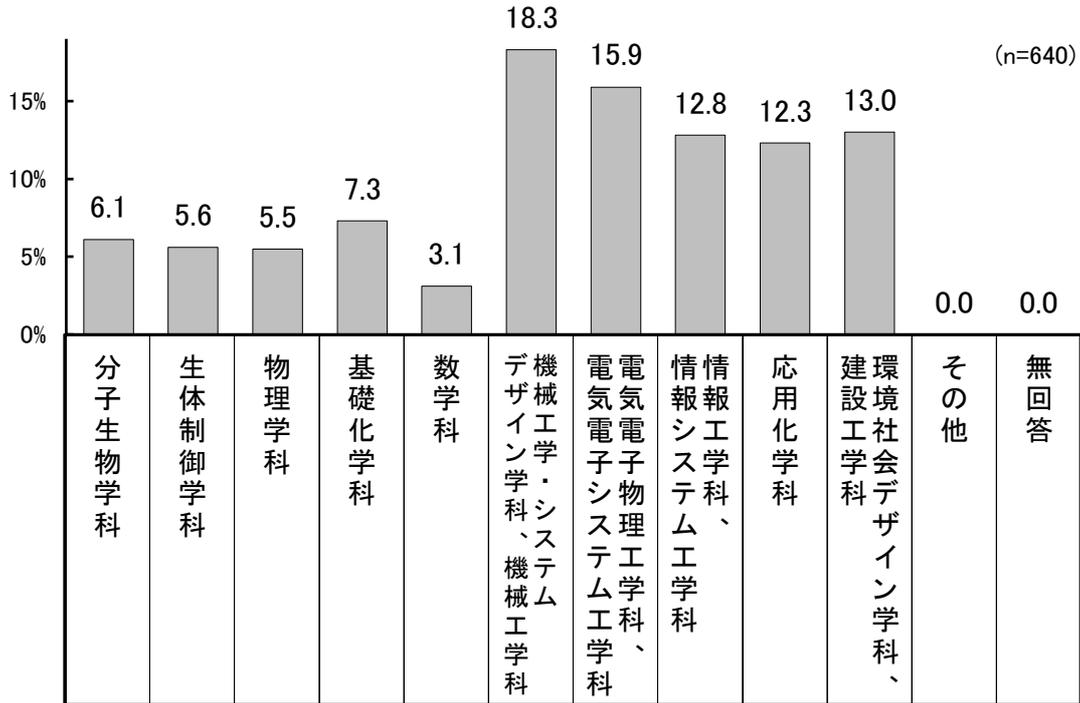
## 在学生対象 調査結果



# 所属学科/卒業後の進路/大学院進学重視ポイント

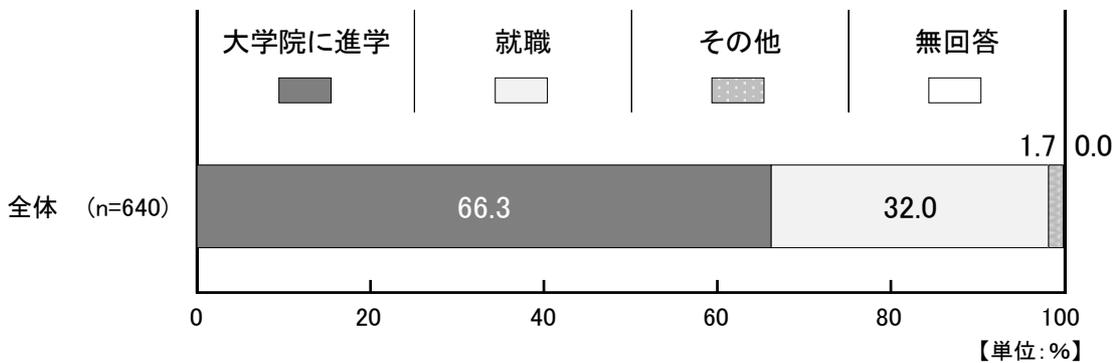
## ■所属学科

所属学科をお答え下さい(1つだけ)。



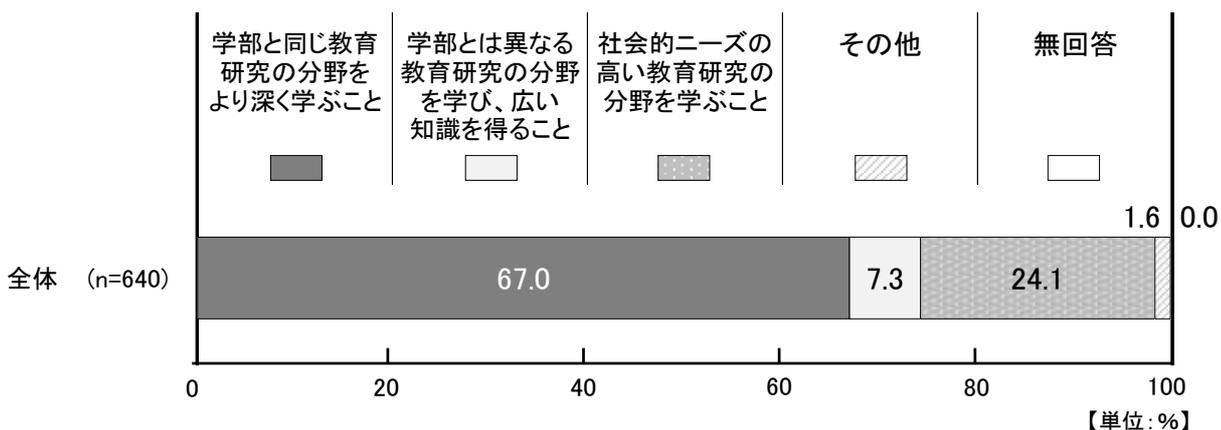
## ■大学卒業後の進路

Q1-1. あなたは、大学卒業後の進路について、現時点ではどのように考えていますか。以下の項目から、あてはまるもの1つをお選びください。



## ■大学院進学重視ポイント

Q1-2. 大学院の進学を考える上で、重要なことは何ですか。一つをお選び下さい。

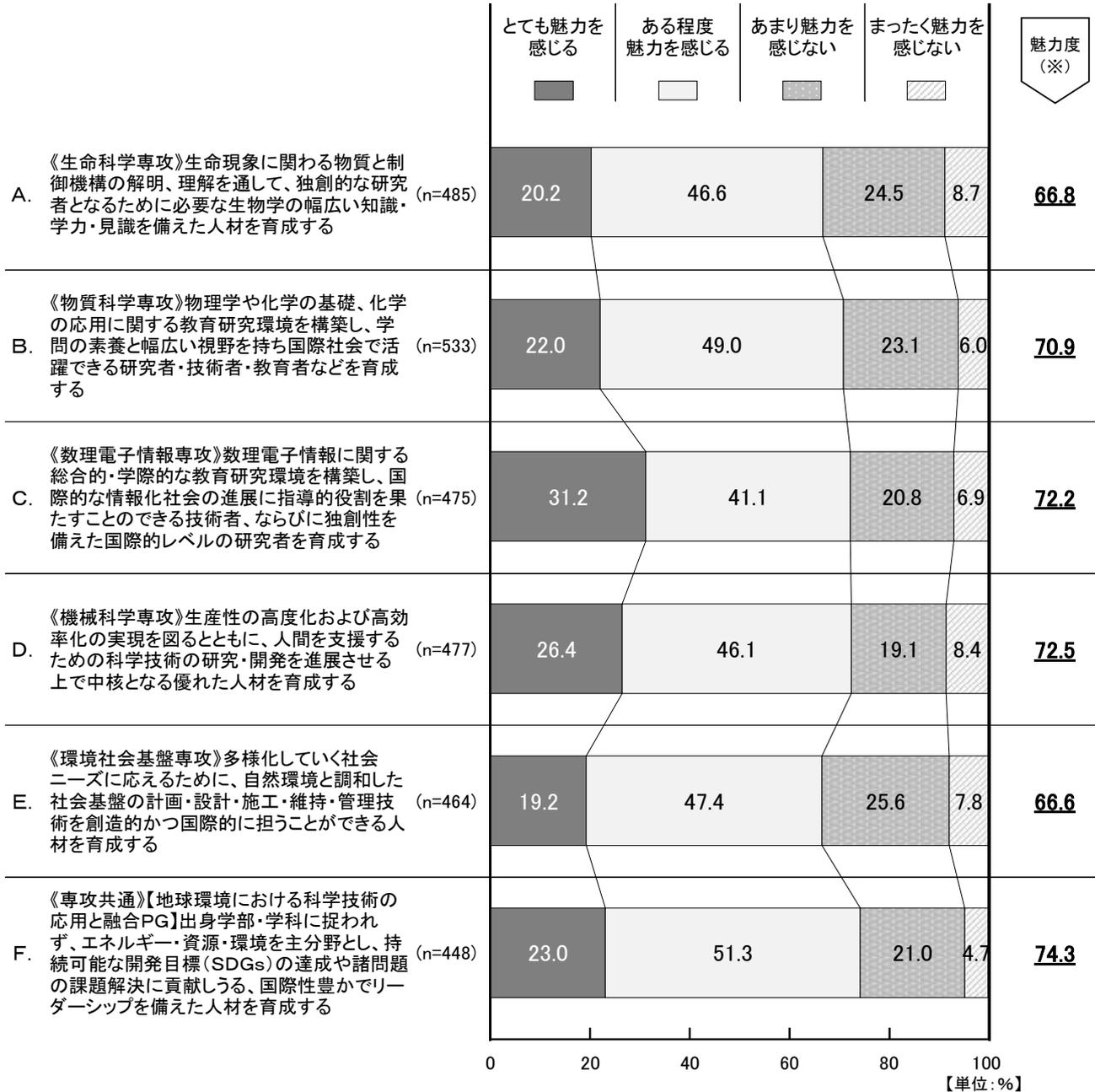


# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度

Q2-1. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・専攻共通のPG(いずれも仮称)には、以下のような特色があります。あなたはどの程度魅力を感じますか。

(A-Fの中で興味のある専攻について、1つだけ)



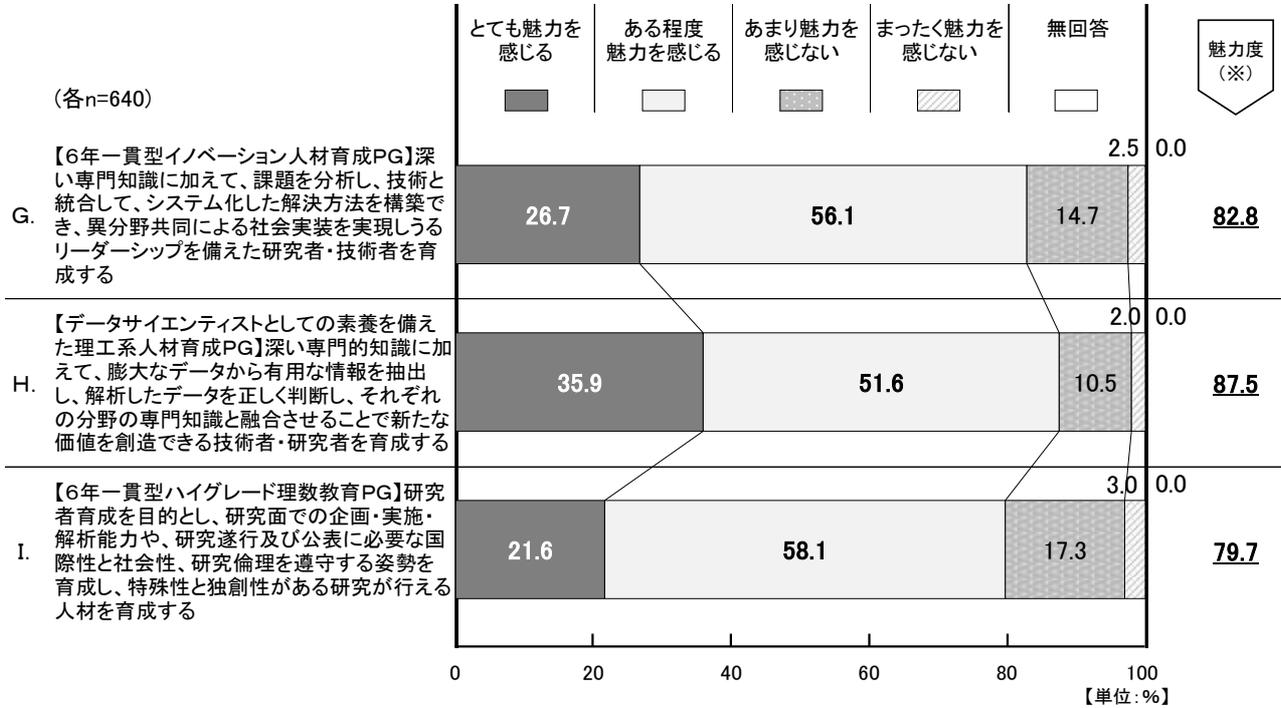
※魅力度=「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

※魅力度は、人数をもとに%を算出し、小数点第二位を四捨五入しているため、「とても魅力を感じる」と「ある程度魅力を感じる」の合計値と必ずしも一致しない

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度

Q2-2. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)では、副PGとして、自分の専攻以外の分野や最新の情報化技術を学べる3つの特別教育プログラム(いずれも仮称)の導入を構想しています。  
プログラムそれぞれの特色について、あなたはどの程度魅力を感じますか。(それぞれ、あてはまるものを1つだけ)



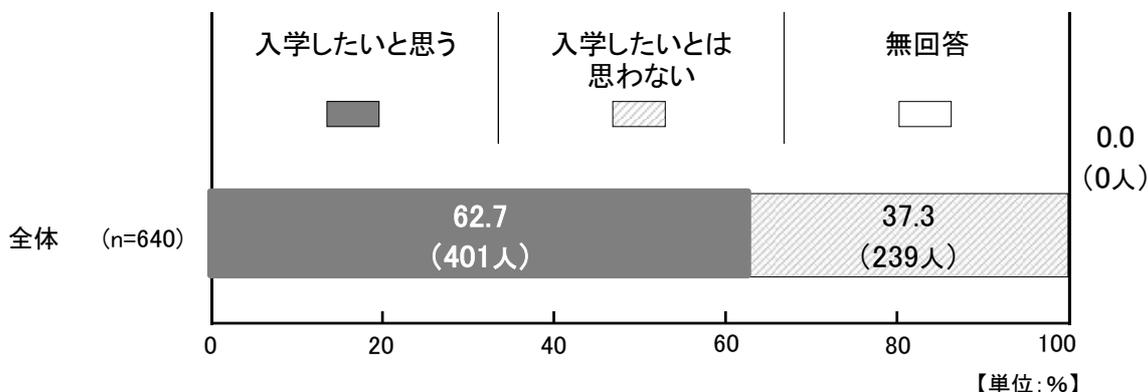
※魅力度＝「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

※魅力度は、人数をもとに％を算出し、小数点第二位を四捨五入しているため、「とても魅力を感じる」と「ある程度魅力を感じる」の合計値と必ずしも一致しない

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への 入学意向／入学意識／非入学意向理由

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への入学意向

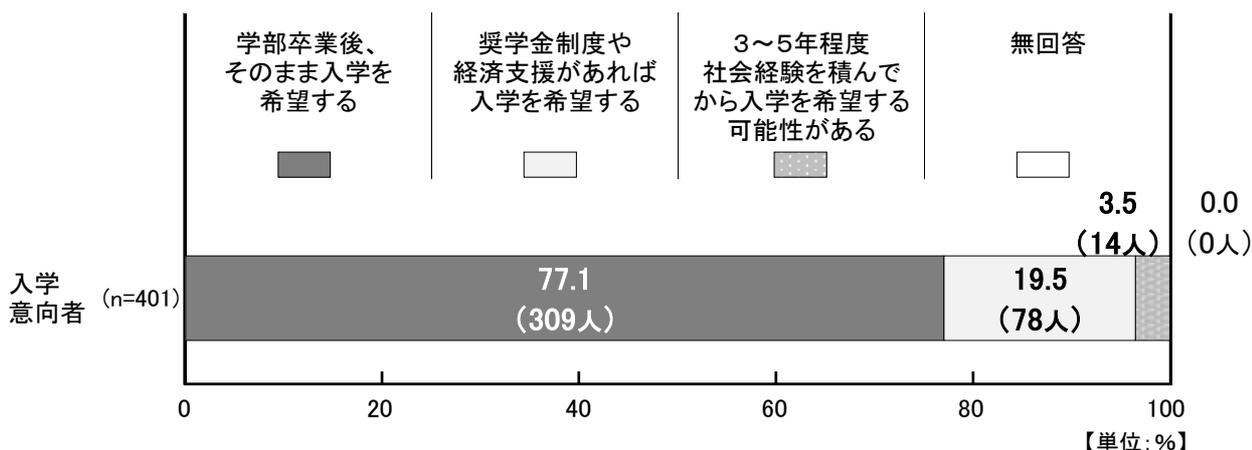
Q3. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)に入学したいと思いますか。  
あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。



※「入学したいと思う」と答えた401人のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への入学意識

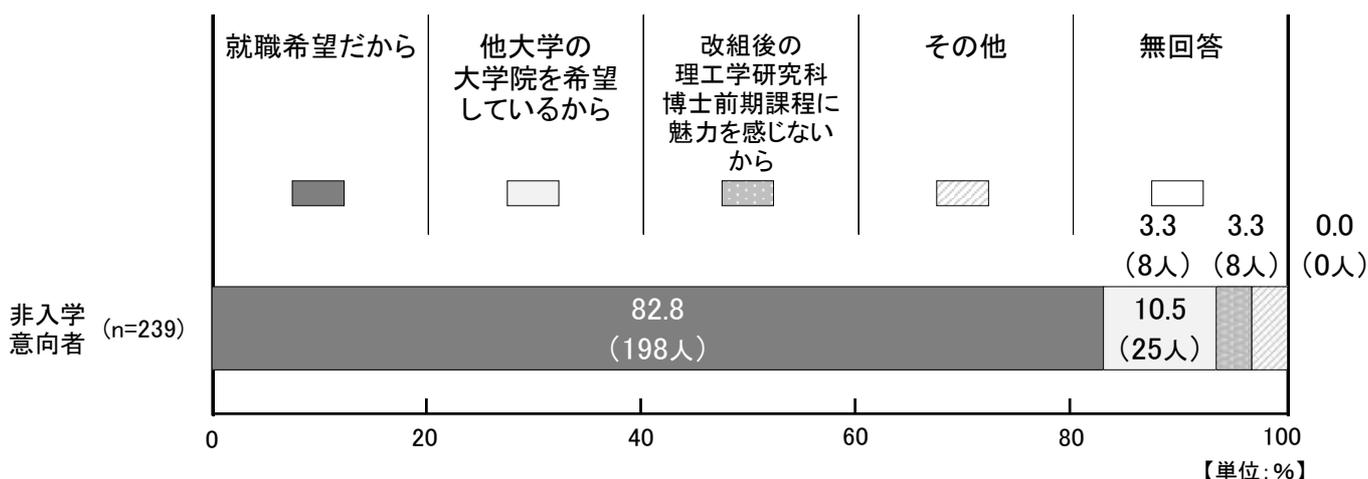
Q4. Q3で「入学したい」と答えた方は以下の中であなたの気持ちに近いもの一つをお選び下さい。



※「入学したいとは思わない」と答えた239人のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への非入学意向理由

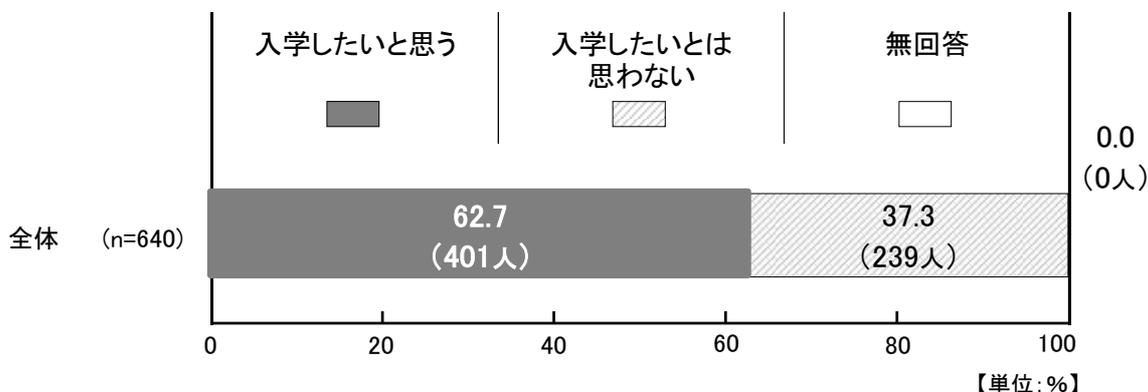
Q7. Q3で「入学したいとは思わない」理由を一つお選び下さい。



# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への 入学意向／入学希望専攻・専攻共通PG

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への入学意向

Q3. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)に入学したいと思いますか。  
あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。

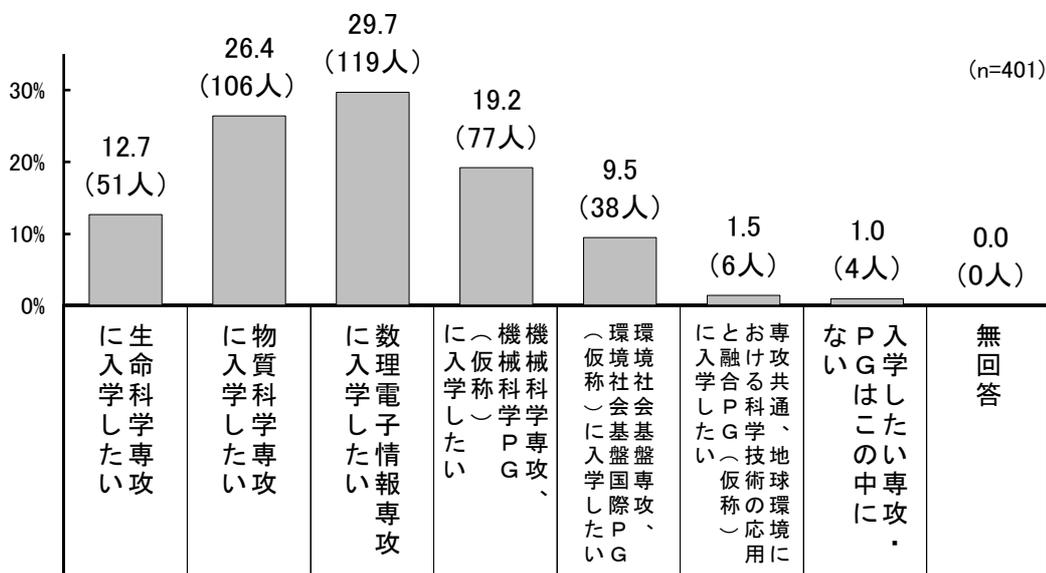


「入学したいと思う」と答えた401人のみ抽出

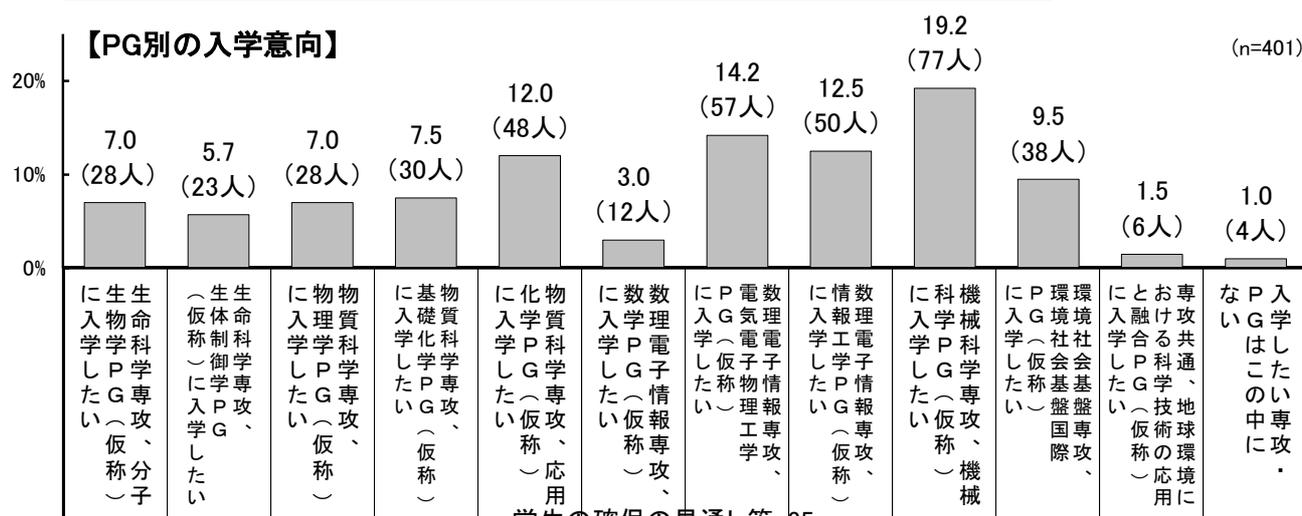
## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の入学希望専攻・専攻共通PG

Q5. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)を受験して合格したら、どの専攻・専攻共通のPGへの入学を希望しますか。あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。

### 【専攻・共通PG別の入学意向】



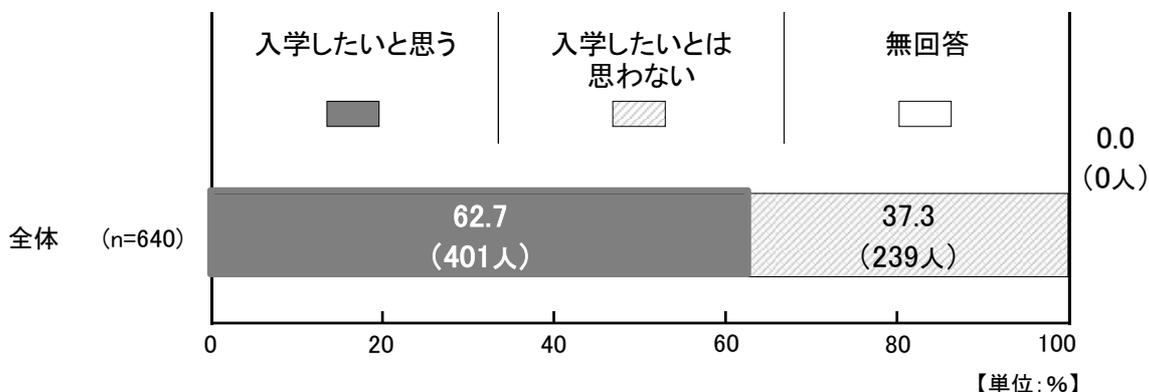
### 【PG別の入学意向】



# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への 入学意向／受講希望副PG

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」への入学意向

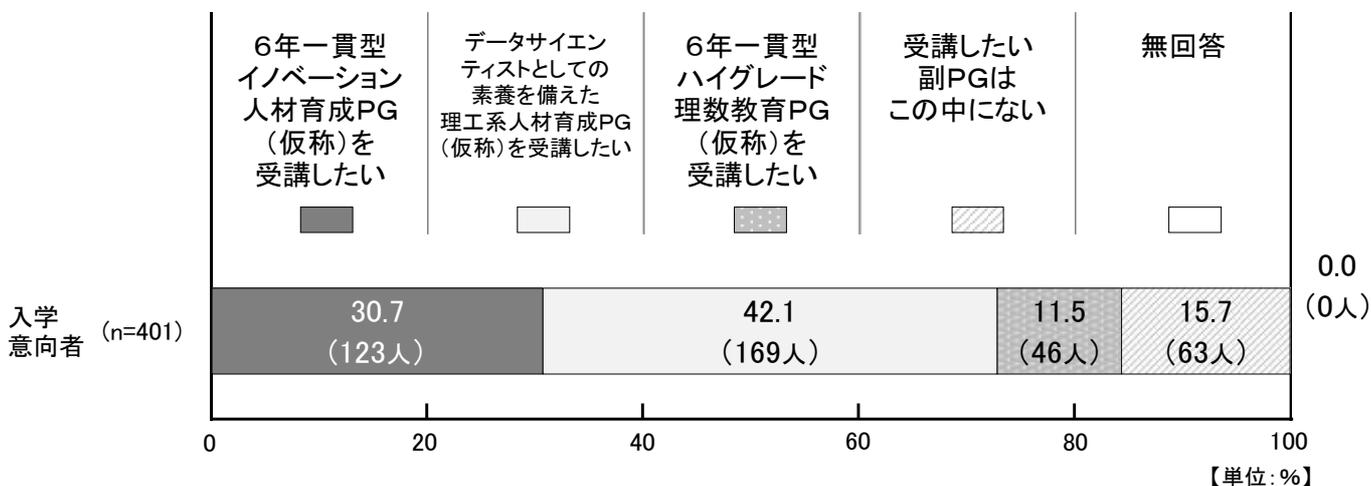
Q3. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)に入学したいと思いますか。  
あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。



「入学したいと思う」と答えた401人のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の受講希望副PG

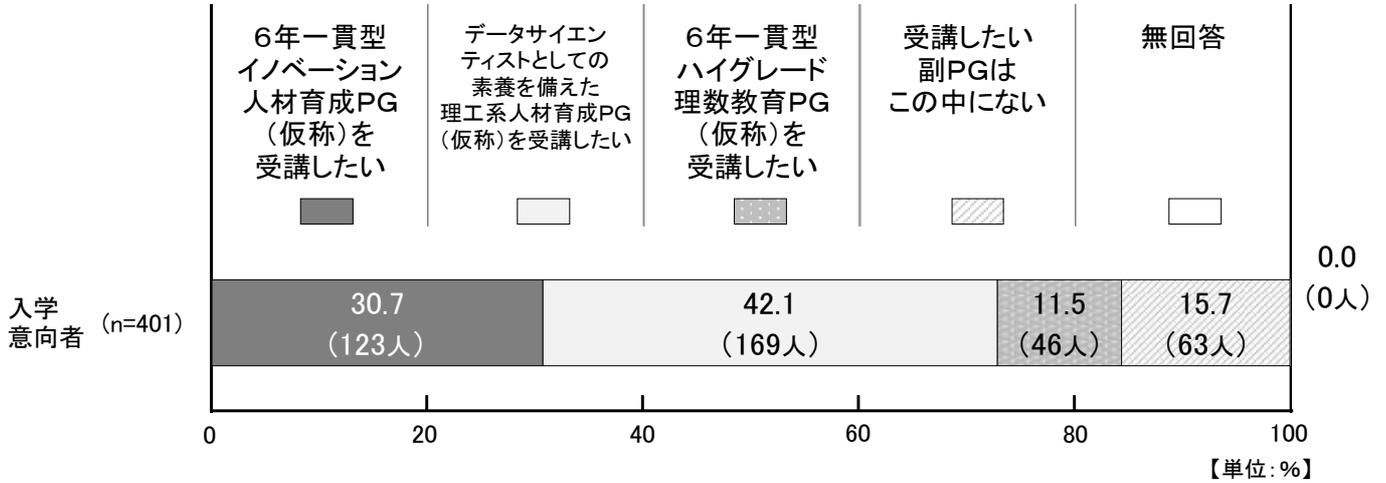
Q6. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)で構想している特別教育プログラム(副PG)を受講してみたいと思いますか。あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。



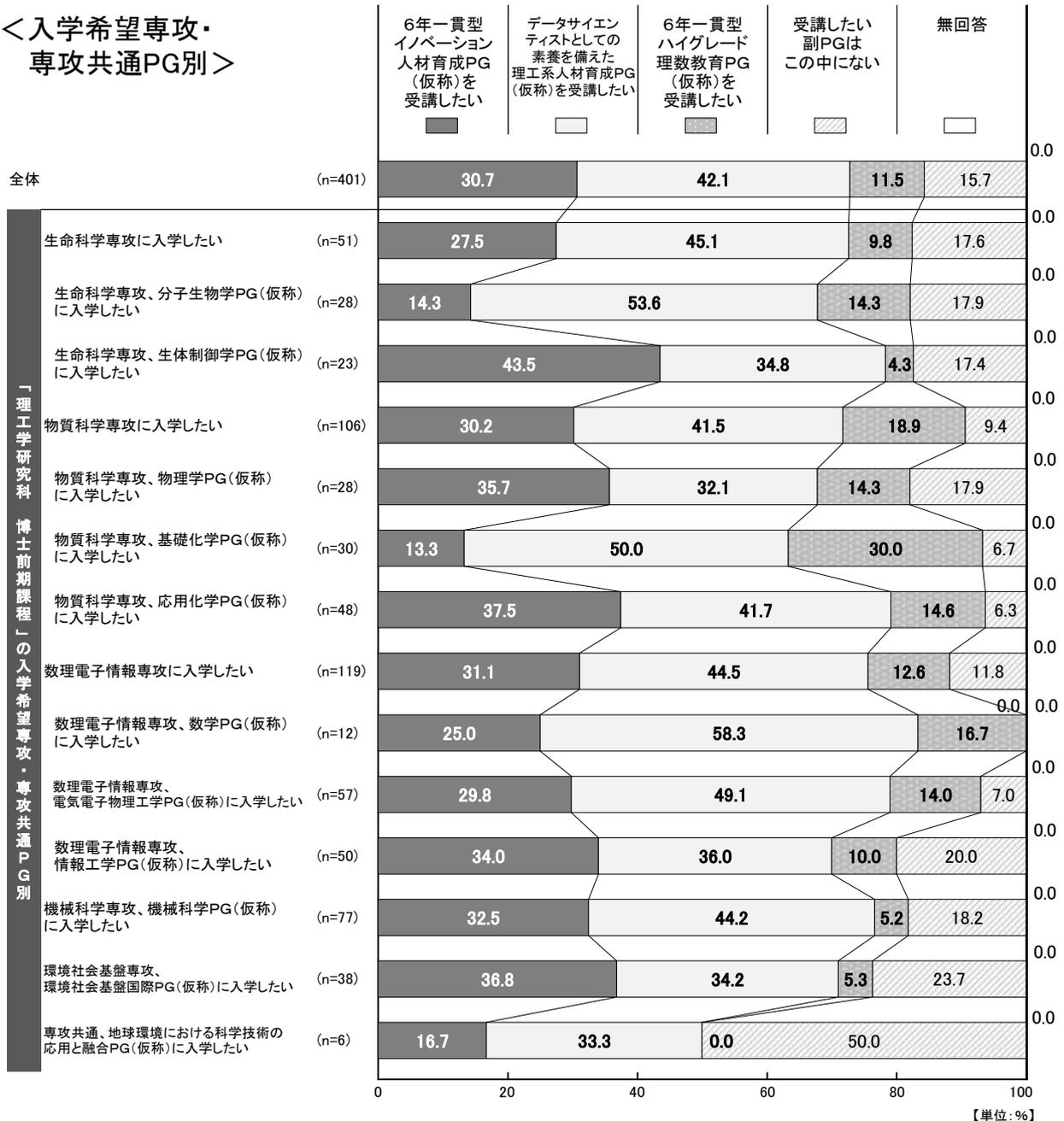
# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の 受講希望副PG<入学希望専攻・専攻共通PG別>

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の受講希望副PG

Q6. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)で構想している特別教育プログラム(副PG)を受講してみたいと思いますか。あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。



### <入学希望専攻・専攻共通PG別>



## 卷末資料 調査票



※報告書内の設問番号は下記赤字で記載している通りです。

## 埼玉大学大学院 理工学研究科 博士前期課程 (設置構想中)に関するアンケート

埼玉大学大学院では2022年(令和4年)4月に「理工学研究科 博士前期課程」を6専攻13コースから5専攻10教育プログラム(以後PGと略します)に再編し、さらに3つの副プログラムを導入することを構想しています。つきましては、現在、理学部もしくは工学部に所属している学生の皆様に調査させていただき、構想中の「理工学研究科 博士前期課程」の内容をより充実したものにするための参考とさせていただきたいと考えております。

このアンケートを通じて、皆様の忌憚のないご意見をお聞かせくださいますよう、よろしくお願いいたします。このアンケートで得られた情報や回答内容は、上記の目的のための統計資料としてのみ活用します。本アンケートの回答を送信すると「あなたの名前」として、氏名ではなくメールアドレスが記録、表示されます。このアドレスの情報はアンケート未回答者の確認にだけ用い、それ以外には一切利用しません。

ぜひアンケートへのご協力をお願いいたします。

※ このアンケートや別紙に記載されている内容は予定であり、変更になる可能性があります。

maeyama@mail.saitama-u.ac.jp さん、このフォームを送信すると、所有者にあなたの名前とメール アドレスが表示されます。

\* 必須

1. 所属学科をお答え下さい(1つだけ)。\*

- 分子生物学
- 生体制御学科
- 物理学
- 基礎化学科
- 数学科
- 機械工学・システムデザイン学科、機械工学科
- 電気電子物理工学科、電気電子システム工学科
- 情報工学科、情報システム工学科
- 応用化学科
- 環境社会デザイン学科、建設工学科
- その他

Q1-1

2. Q1-1. あなたは、大学卒業後の進路について、現時点ではどのように考えていますか。  
以下の項目から、あてはまるもの1つをお選びください。\*

- 大学院に進学
- 就職
- その他

# 調査票

3. Q1-1 の「その他」の内容をお書き下さい。\*

回答を入力してください

Q1-2 4. Q1-2 大学院の進学を考える上で、重要なことは何ですか。一つをお選び下さい。\*

- 学部と同じ教育研究の分野をより深く学ぶこと
- 学部とは異なる教育研究の分野を学び、広い知識を得ること
- 社会的ニーズの高い教育研究の分野を学ぶこと
- その他

5. 前問の「その他」の内容をお書き下さい。\*

回答を入力してください

6. ◆埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)についてお聞きます。  
埼玉大学大学院では、2022年(令和4年)4月に、「理工学研究科 博士前期課程」を5専攻10教育プログラムに再編し、さらに3つの副プログラムを導入することを構想しています。

※ ここからは、別紙「理工学研究科改組について」のパンフレットをご覧ください  
※

Q2-1 Q2-1. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・専攻共通のPG(いずれも仮称)には、以下のような特色があります。

あなたはどの程度魅力を感じますか。(A-Fの中で興味のある専攻について、1つだけ)

A. 生命科学専攻: 生命現象に関わる物質と制御機構の解明、理解を通して、独創的な研究者となるために必要な生物学の幅広い知識・学力・見識を備えた人材を育成する

B. 物質科学専攻: 物理学や化学の基礎、化学の応用に関する教育研究環境を構築し、学問の素養と幅広い視野を持ち国際社会で活躍できる研究者・技術者・教育者などを育成する

C. 数理電子情報専攻: 数理電子情報に関する総合的・学際的な教育研究環境を構築し、国際的な情報化社会の進展に指導的役割を果たすことのできる技術者、ならびに独創性を備えた国際的レベルの研究者を育成する

D. 機械科学専攻: 生産性の高度化および高効率化の実現を図るとともに、人間を支援するための科学技術の研究・開発を進展させる上で中核となる優れた人材を育成する

E. 環境社会基盤専攻: 多様化していく社会ニーズに応えるために、自然環境と調和した社会基盤の計画・設計・施工・維持・管理技術を創造的かつ国際的に担うことができる人材を育成する

F. 専攻共通: 【地球環境における科学技術の応用と融合PG】出身学部・学科に捉われず、エネルギー・資源・環境を主分野とし、持続可能な開発目標(SDGs)の達成や諸問題の課題解決に貢献しう、国際性豊かでリーダーシップを備えた人材を育成する

まったく魅力を感じない  
とても魅力を感じる ある程度魅力を感じる あまり魅力を感じない

- A. 生命科学専攻
- B. 物質科学専攻

# 調査票

C.数理電子情報専攻	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
D.機械科学専攻	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
E.環境社会基盤専攻	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
F.専攻共通	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

## Q2-2

7. Q2-2 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)では、副PGとして、自分の専攻以外の分野や最新の情報化技術を学べる3つの特別教育プログラム(いずれも仮称)の導入を構想しています。

プログラムそれぞれの特色について、あなたはどの程度魅力を感じますか。(それぞれ、あてはまるものを1つだけ)\*

G.【6年一貫型イノベーション人材育成PG】:深い専門知識に加えて、課題を分析し、技術と統合して、システム化した解決方法を構築でき、異分野共同による社会実装を実現しうるリーダーシップを備えた研究者・技術者を育成する

H.【データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG】:深い専門的知識に加えて、膨大なデータから有用な情報を抽出し、解析したデータを正しく判断し、それぞれの分野の専門知識と融合させることで新たな価値を創造できる技術者・研究者を育成する

I.【6年一貫型ハイグレード理数教育PG】:研究者育成を目的とし、研究面での企画・実施・解析能力や、研究遂行及び公表に必要な国際性と社会性、研究倫理を遵守する姿勢を育成し、特殊性と独創性がある研究が行える人材を育成する

※別紙パンフレットの改組後5専攻10教育プログラムの表に各特別教育プログラムが受講可能な専攻を○と◎で示しています。※

	とても魅力を感じる	ある程度魅力を感じる	あまり魅力を感じない	まったく魅力を感じない
G.【6年一貫型イノベーション育成PG】	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
H.【データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG】	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
I.【6年一貫型ハイグレード理数教育PG】	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

## Q3

8. Q3. あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)に入学したいと思いませんか。

あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。\*

- 入学したいと思う
- 入学したいとは思わない

## Q4

9. Q3 で「入学したい」と答えた方は以下の中であなたの気持ちに近いもの一つをお選び下さい。\*

- 学部卒業後、そのまま入学を希望する
- 奨学金制度や経済支援があれば入学を希望する
- 3~5年程度社会経験を積んでから入学を希望する可能性がある

# 調査票(入学意向者:Q4以降)

Q5

10. Q4.あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)を受験して合格したら、どの専攻・専攻共通のPGへの入学を希望しますか。  
あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。\*

- 生命科学専攻、分子生物学PG(仮称)に入学したい
- 生命科学専攻、生体制御学PG(仮称)に入学したい
- 物質科学専攻、物理学PG(仮称)に入学したい
- 物質科学専攻、基礎化学PG(仮称)に入学したい
- 物質科学専攻、応用化学PG(仮称)に入学したい
- 数理電子情報専攻、数学PG(仮称)に入学したい
- 数理電子情報専攻、電気電子物理工学PG(仮称)に入学したい
- 数理電子情報専攻、情報工学PG(仮称)に入学したい
- 機械科学専攻、機械科学PG(仮称)に入学したい
- 環境社会基盤専攻、環境社会基盤国際PG(仮称)に入学したい
- 専攻共通、地球環境における科学技術の応用と融合PG(仮称)に入学したい
- 入学したい専攻・PGはこの中不在

Q6

11. Q5.あなたは、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)で構想している特別教育プログラム(副PG)を受講してみたいと思いますか。  
あなたの気持ちに近いもの一つをお選びください。\*

- 6年一貫型イノベーション人材育成PG(仮称)を受講したい
- データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG(仮称)を受講したい
- 6年一貫型ハイグレード理数教育PG(仮称)を受講したい
- 受講したい副PGはこの中不在

12. 最後に、改編計画を含め 本学理工学研究科 博士前期課程に対してご意見、ご要望があればお聞かせ下さい。

回答を入力してください

送信

このコンテンツはフォームの所有者が作成したものです。送信したデータはフォームの所有者に送信されます。Microsoft は、このフォームの所有者を含むお客様のプライバシーやセキュリティの取り扱いに関して一切の責任を負いません。パスワードを記載しないでください。

# 調査票(非入学意向者:Q4以降)

---

**Q7** 9. Q3 で「入学したいとは思わない」理由を一つお選び下さい。\*

- 就職希望だから
- 他大学の大学院を希望しているから
- 改組後の理工学研究科博士前期課程に魅力を感じないから
- その他

10. 前問の「その他」の内容をお書き下さい。\*

回答を入力してください

11. 最後に、改編計画を含め 本学理工学研究科 博士前期課程に対してご意見、ご要望があればお聞かせ下さい。

回答を入力してください



---

---

埼玉大学大学院  
「理工学研究科 博士前期課程」  
改組に関するニーズ調査  
結果報告書  
【企業対象調査】

---

---

令和3年4月  
株式会社 進研アド

# 企業対象 調査概要

## 1. 調査目的

2022年4月改組予定の埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」改組構想に関して、企業のニーズを把握する。

## 2. 調査概要

		企業対象調査
調査対象		企業の採用担当者
調査エリア		北海道、宮城県、茨城県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、山梨県、岐阜県、静岡県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、広島県、福岡県、佐賀県
調査方法		郵送、Web調査
調査対象数	依頼数	郵送調査:757企業 Web調査:企業説明会にご参加頂いた企業に依頼
	回収数	郵送調査:123企業(回収率:16.2%) Web調査:126企業 計:249企業
調査時期		2021年2月8日(月)～2021年3月15日(月)
調査実施機関		株式会社 進研アド

## 3. 調査項目

企業対象調査
<ul style="list-style-type: none"> <li>・人事採用への関与度</li> <li>・本社所在地</li> <li>・業種</li> <li>・従業員数</li> <li>・正規社員の平均採用人数</li> <li>・本年度の採用予定数</li> <li>・採用したい学問分野</li> <li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度</li> <li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度</li> <li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの社会的必要性</li> <li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」各専攻修了生および副PG受講生に対する採用意向</li> <li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」各専攻修了生および副PG受講生の毎年の採用想定人数</li> <li>・埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」全体に対する毎年の採用想定人数</li> </ul>

## 企業対象 調査結果まとめ



## 回答企業(回答者)の属性

※本調査は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」に対する人材需要を確認するための調査として設計。埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の修了生就職先として想定される企業の人事関連業務に携わっている人を対象に調査を実施し、249企業から回答を得た。

- 回答者の人事採用への関与度を聞いたところ、「採用の決裁権があり、選考にかかわっている」人は14.5%、「採用の決裁権はないが、選考にかかわっている」人が72.7%と、採用や選考にかかわる人事担当者からの意見を聴取できていると考えられる。
- 回答企業の本社所在地は、「東京都」が61.0%を占め、最も多い。次いで埼玉大学大学院の所在地である「埼玉県」が9.6%、「神奈川県」が7.2%である。
- 回答企業の業種としては「製造業」が39.4%で最も多い。次いで「建設業」が21.3%、「情報通信業」が14.1%である。
- 回答企業の従業員数(正規社員)は、「1,000名～5,000名未満」が30.1%で最も多い。次いで「100名～500名未満」が25.3%、「500名～1,000名未満」が18.9%である。

## 回答企業の採用状況(過去3か年)／本年度の採用予定数／採用したい学問分野

- 回答企業の平均的な正規社員の採用人数は、「100名以上」が26.9%で最も多い。次いで「30名～50名未満」が17.7%、「10名～20名未満」が14.5%である。毎年、正規社員を採用している企業がほとんどである。
- 回答企業の本年度の採用予定数は、「昨年度並み」が67.5%で最も多い。次いで「増やす」が16.5%である。回答企業の多くで昨年と同等かそれ以上の採用が予定されている様子である。
- 回答企業の採用したい学問分野を複数回答で聴取したところ、「理工学研究科 博士前期課程」の学びに関連のある「工学」の割合が83.5%で最も高い。次いで「理学」が59.0%、「経済・経営・商学」が28.1%である。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度(※)は、6項目中4項目で8割を超える。
- 最も魅力度が高いのは、「D.《機械科学専攻》生産性の高度化および高効率化の実現を図るとともに、人間を支援するための科学技術の研究・開発を進展させる上で中核となる優れた人材を育成する」(91.2%)であり、「とても魅力を感じる」と回答した人の割合も59.0%で最も高い。

次に魅力度が高いのは、「E.《環境社会基盤専攻》多様化していく社会ニーズに応えるために、自然環境と調和した社会基盤の計画・設計・施工・維持・管理技術を創造的かつ国際的に担うことができる人材を育成する」(87.1%)、さらに「B.《物質科学専攻》物理学や化学の基礎、化学の応用に関する教育研究環境を構築し、学問の素養と幅広い視野を持ち国際社会で活躍できる研究者・技術者・教育者などを育成する」(84.3%)と続く。

※魅力度＝「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した企業の合計値

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度(※)は、すべての項目で8割を超える。
- 最も魅力度が高いのは、「G. 【6年一貫型イノベーション人材育成PG】深い専門知識に加えて、課題を分析し、技術と統合して、システム化した解決方法を構築でき、異分野共同による社会実装を実現しうるリーダーシップを備えた研究者・技術者を育成する」(95.2%)であり、「とても魅力を感じる」と回答した人の割合も59.0%で最も高い。

次に魅力度が高いのは、「H. 【データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG】深い専門的知識に加えて、膨大なデータから有用な情報を抽出し、解析したデータを正しく判断し、それぞれの分野の専門知識と融合させることで新たな価値を創造できる技術者・研究者を育成する」(94.8%)、さらに「I. 【6年一貫型ハイグレード理数教育PG】研究者育成を目的とし、研究面での企画・実施・解析能力や、研究遂行及び公表に必要な国際性と社会性、研究倫理を遵守する姿勢を育成し、特殊性と独創性がある研究が行える人材を育成する」(89.2%)と続く。

※魅力度＝「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した企業の合計値

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」 の社会的必要性

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」の社会的必要性については、94.4% (235企業) が「必要だと思う」と回答しており、多くの企業からこれからの社会にとって必要な研究科・専攻であると評価されていることがうかがえる。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」 修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」修了生を「採用したいと思う」と答えた企業は、47.0% (117企業) である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」の修了生を「採用したいと思う」と答えた117企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」修了生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は142名で、予定している入学定員数55名を2倍以上上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、55.1% (98企業中、54企業)。採用想定人数の合計は59名で、予定している入学定員数を上回っている。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」 の社会的必要性

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」の社会的必要性については、96.0% (239企業) が「必要だと思う」と回答しており、多くの企業からこれからの社会にとって必要な研究科・専攻であると評価されていることがうかがえる。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」 修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」修了生を「採用したいと思う」と答えた企業は、63.5% (158企業) である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」の修了生を「採用したいと思う」と答えた158企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」修了生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は210名で、予定している入学定員数114名を上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、81.6% (98企業中、80企業)。採用想定人数の合計は104名であり、予定している入学定員数に迫っている。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」の社会的必要性

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」の社会的必要性については、98.0% (244企業) が「必要だと思う」と回答しており、多くの企業からこれからの社会にとって必要な研究科・専攻であると評価されていることがうかがえる。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」修了生を「採用したいと思う」と答えた企業は、68.3% (170企業) である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」の修了生を「採用したいと思う」と答えた170企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」修了生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は257名で、予定している入学定員数142名を上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、81.6% (98企業中、80企業)。採用想定人数の合計は123名で、一定の採用意向がみられる。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」 の社会的必要性

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」の社会的必要性については、97.2% (242企業) が「必要だと思う」と回答しており、多くの企業からこれからの社会にとって必要な研究科・専攻であると評価されていることがうかがえる。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」 修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」修了生を「採用したいと思う」と答えた企業は、76.7% (191企業) である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」の修了生を「採用したいと思う」と答えた191企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」修了生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は287名で、予定している入学定員数70名を4倍以上上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、92.9% (98企業中、91企業)。採用想定人数の合計は148名で、予定している入学定員数を2倍以上上回っている。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」の社会的必要性

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」の社会的必要性については、97.6% (243企業) が「必要だと思う」と回答しており、多くの企業からこれからの社会にとって必要な研究科・専攻であると評価されていることがうかがえる。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」修了生を「採用したいと思う」と答えた企業は、76.3% (190企業) である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」の修了生を「採用したいと思う」と答えた190企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」修了生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は263名で、予定している入学定員数45名を大きく上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、62.2% (98企業中、61企業)。採用想定人数の合計は63名で、予定している入学定員数を上回っている。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」の社会的必要性

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」の社会的必要性については、94.8% (236企業) が「必要だと思う」と回答しており、多くの企業からこれからの社会にとって必要な研究科・専攻であると評価されていることがうかがえる。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」修了生を「採用したいと思う」と答えた企業は、64.3% (160企業) である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」の修了生を「採用したいと思う」と答えた160企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」修了生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は176名である。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、60.2% (98企業中、59企業)。採用想定人数の合計は62名である。「建設業」の企業からの採用意向は、71.7% (53企業中、38企業) で、採用想定人数の合計は40名である。「情報通信業」の企業からの採用意向は、74.3% (35企業中、26企業) で、採用想定人数の合計は32名である。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型イノベーション人材育成PG」 受講生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型イノベーション人材育成PG」受講生を「採用したいと思う」と答えた企業は、80.7% (201企業)である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型イノベーション人材育成PG」の受講生を「採用したいと思う」と答えた201企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型イノベーション人材育成PG」受講生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は**234名**で、予定している受講定員数80名を2倍以上上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

< 属性別 >

◇ 業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、84.7% (98企業中、**83企業**)。採用想定人数の合計は**88名**で、予定している受講定員数を上回っている。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」受講生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」受講生を「採用したいと思う」と答えた企業は、79.1% (197企業)である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」の受講生を「採用したいと思う」と答えた197企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」受講生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は235名で、予定している受講定員数40名を大きく上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、83.7% (98企業中、82企業)。採用想定人数の合計は87名で、予定している受講定員数を2倍以上上回っている。

### 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型ハイグレード理数教育PG」 受講生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型ハイグレード理数教育PG」受講生を「採用したいと思う」と答えた企業は、67.5% (168企業)である。
- 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型ハイグレード理数教育PG」の受講生を「採用したいと思う」と答えた168企業へ埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)6年一貫型ハイグレード理数教育PG」受講生の採用を毎年何名程度想定しているか聞いたところ、採用想定人数の合計は**194名**で、予定している受講定員数20名を大きく上回っている。このことから、安定した人材需要があることがうかがえる。

<属性別>

◇業種別

- 「製造業」の企業からの採用意向は、76.5% (98企業中、**75企業**)。採用想定人数の合計は**79名**で、予定している受講定員数を3倍以上上回っている。「建設業」の企業からの採用意向は、56.6% (53企業中、**30企業**)。採用想定人数の合計は**30名**で、予定している受講定員数を上回っている。「情報通信業」の企業からの採用意向は、77.1% (35企業中、**27企業**)。採用想定人数の合計は**37名**で、予定している受講定員数を上回っている。

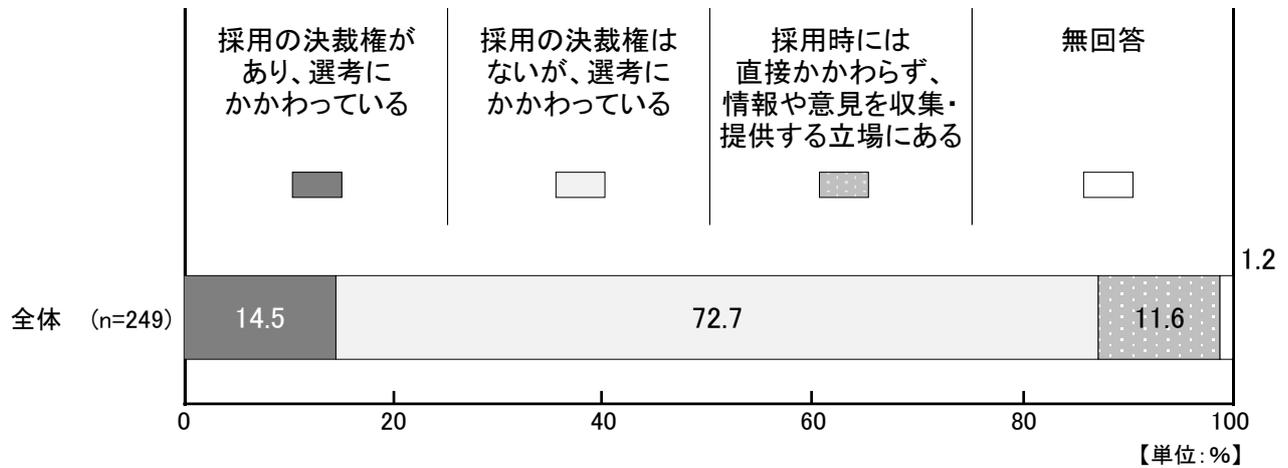
## 企業対象 調査結果



# 回答企業(回答者)の属性(人事採用への関与度/本社所在地)

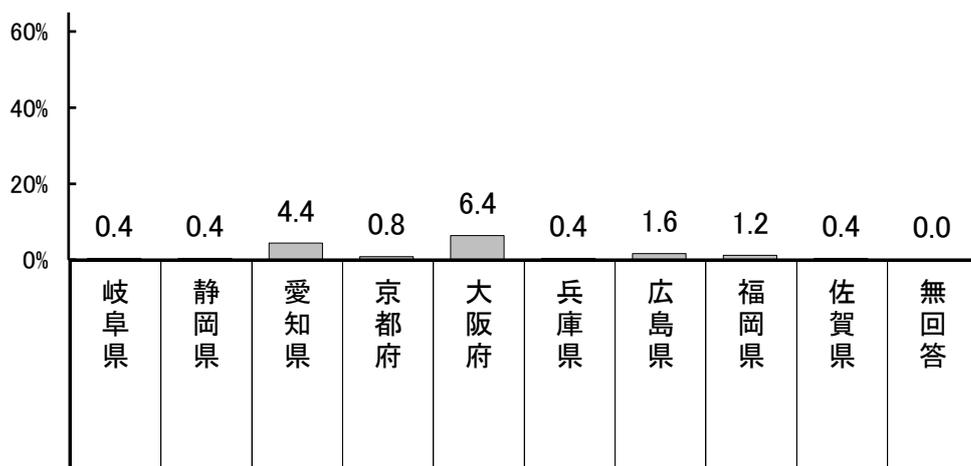
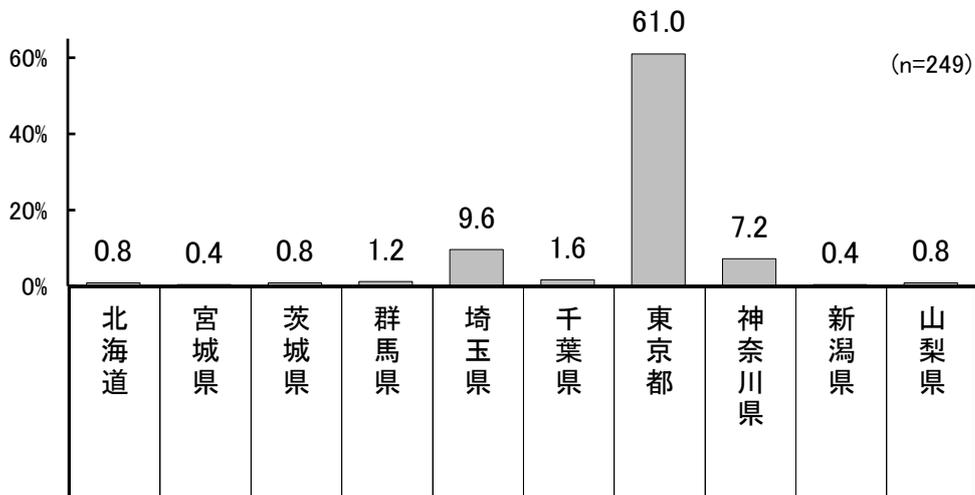
## ■人事採用への関与度

Q1. アンケートにお答えいただいている方の、人事採用への関与度をお教えてください。(あてはまる番号1つに○)



## ■本社所在地

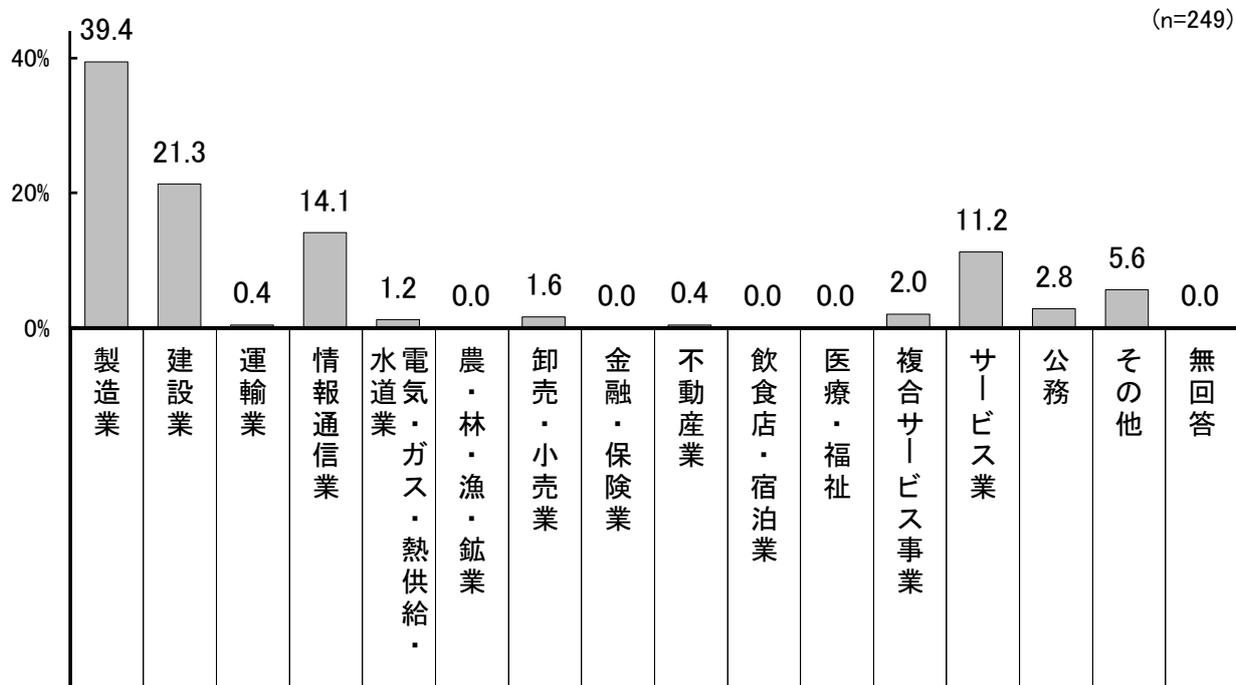
Q2. 貴社・貴団体の本社(本部)所在地について、都道府県名をお教えてください。



# 回答企業(回答者)の属性(業種/従業員数)

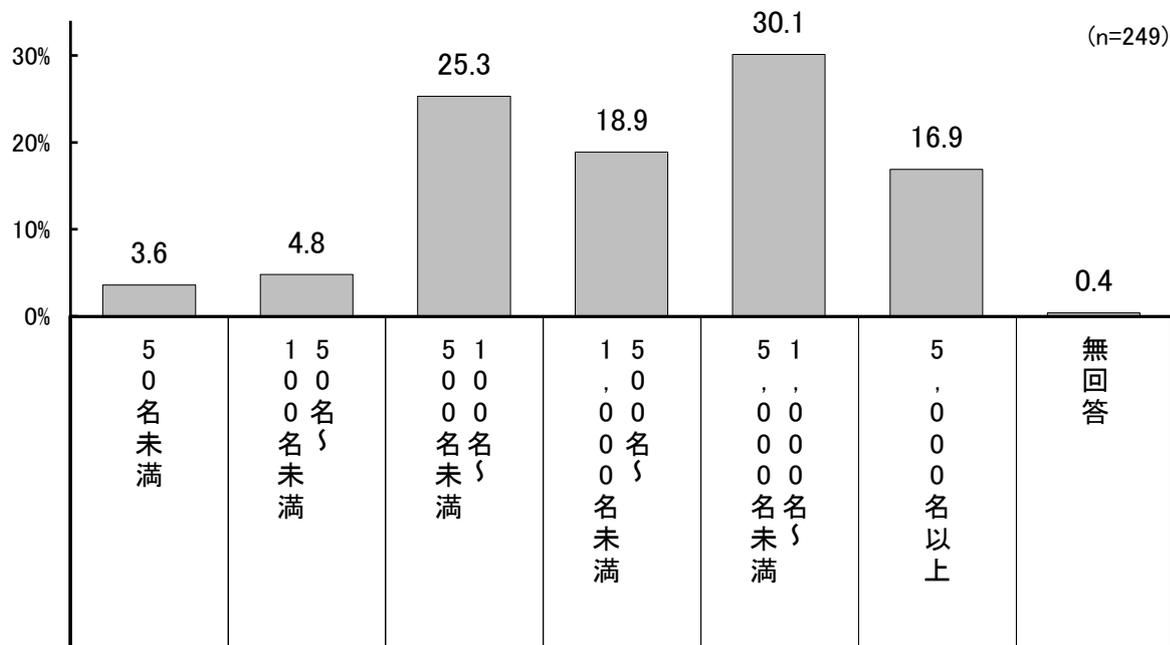
## ■業種

Q3. 貴社・貴団体の業種について、ご回答ください。(あてはまる番号1つに○)



## ■従業員数

Q4. 貴社・貴団体の従業員数(正規社員)について、ご回答ください。(あてはまる番号1つに○)

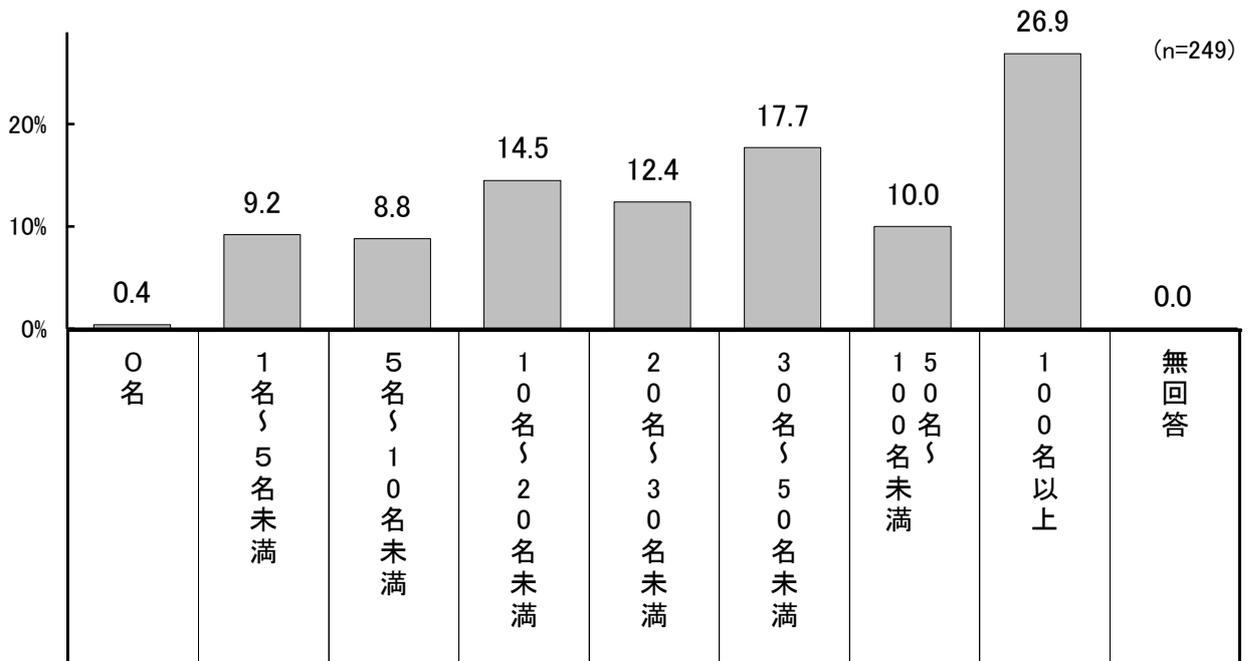


# 正規社員の平均採用人数／本年度の採用予定数

## ■正規社員の平均採用人数

Q5. 貴社・貴団体の過去3か年の平均的な正規社員の採用数について、お教えてください。

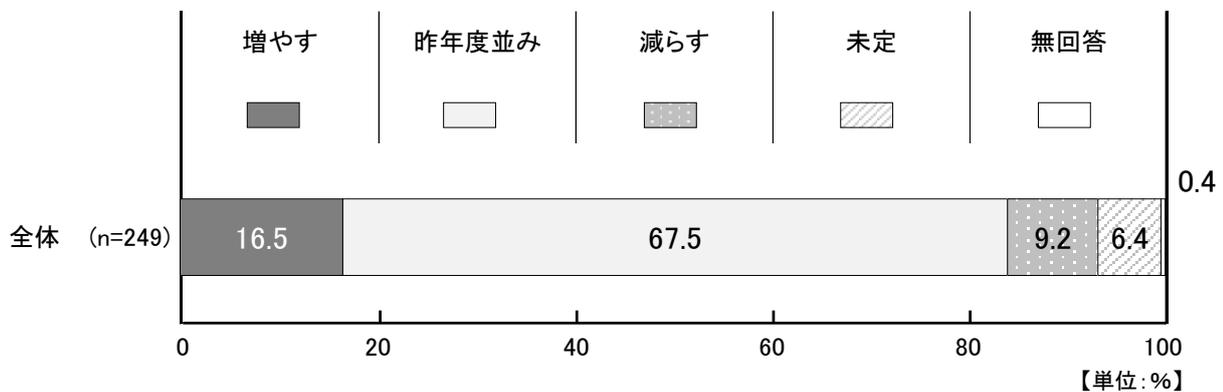
総数	25,456名
平均	102.2名



※総数は、平均的な正規社員採用人数の合計値

## ■本年度の採用予定数

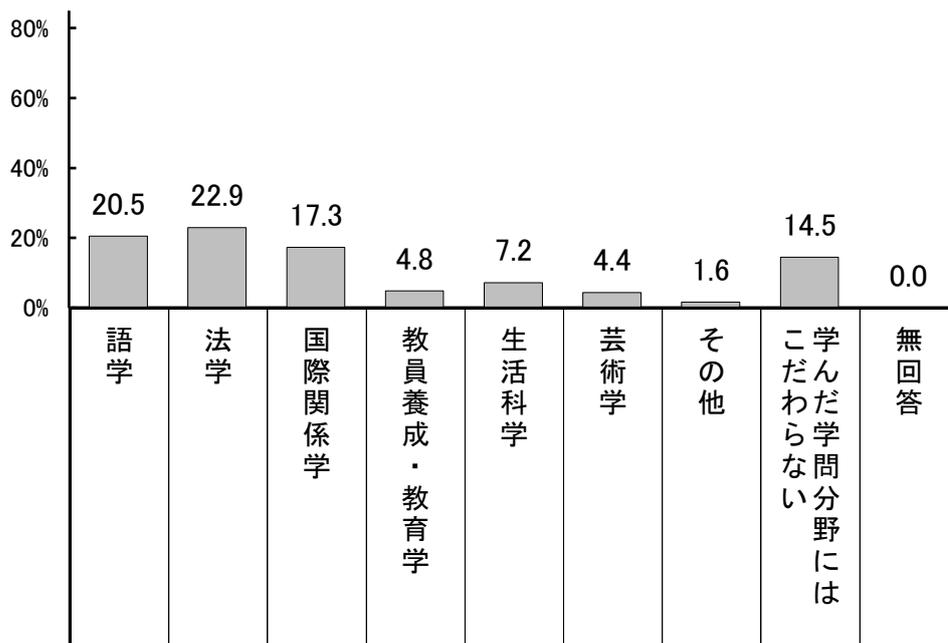
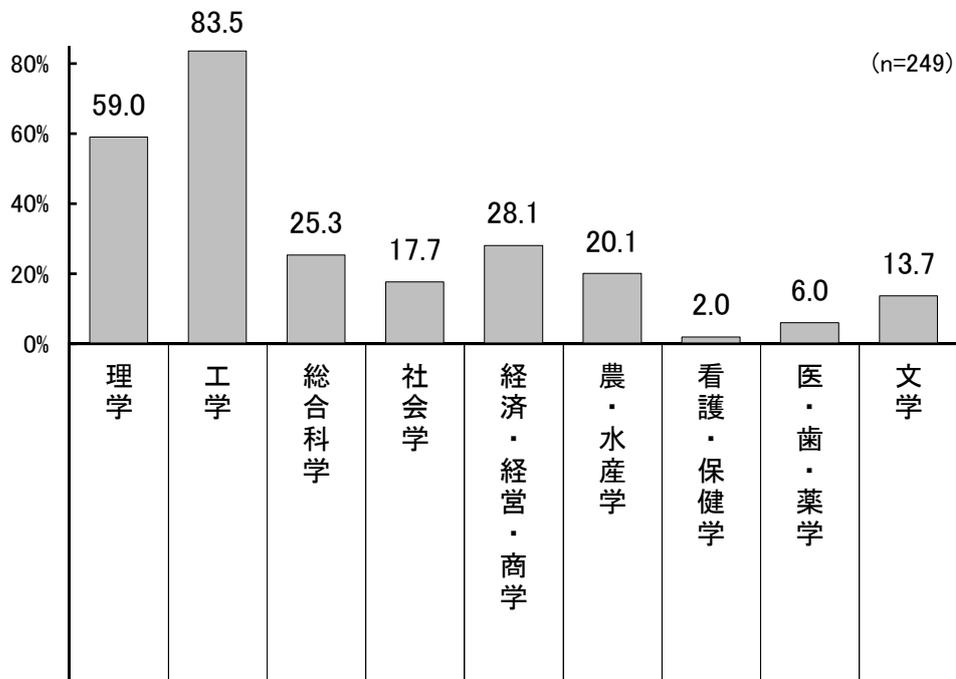
Q6. 貴社・貴団体の本年度の採用予定数は、昨年度と比較していかがですか。(あてはまる番号1つに○)



# 採用したい学問分野

## ■採用したい学問分野

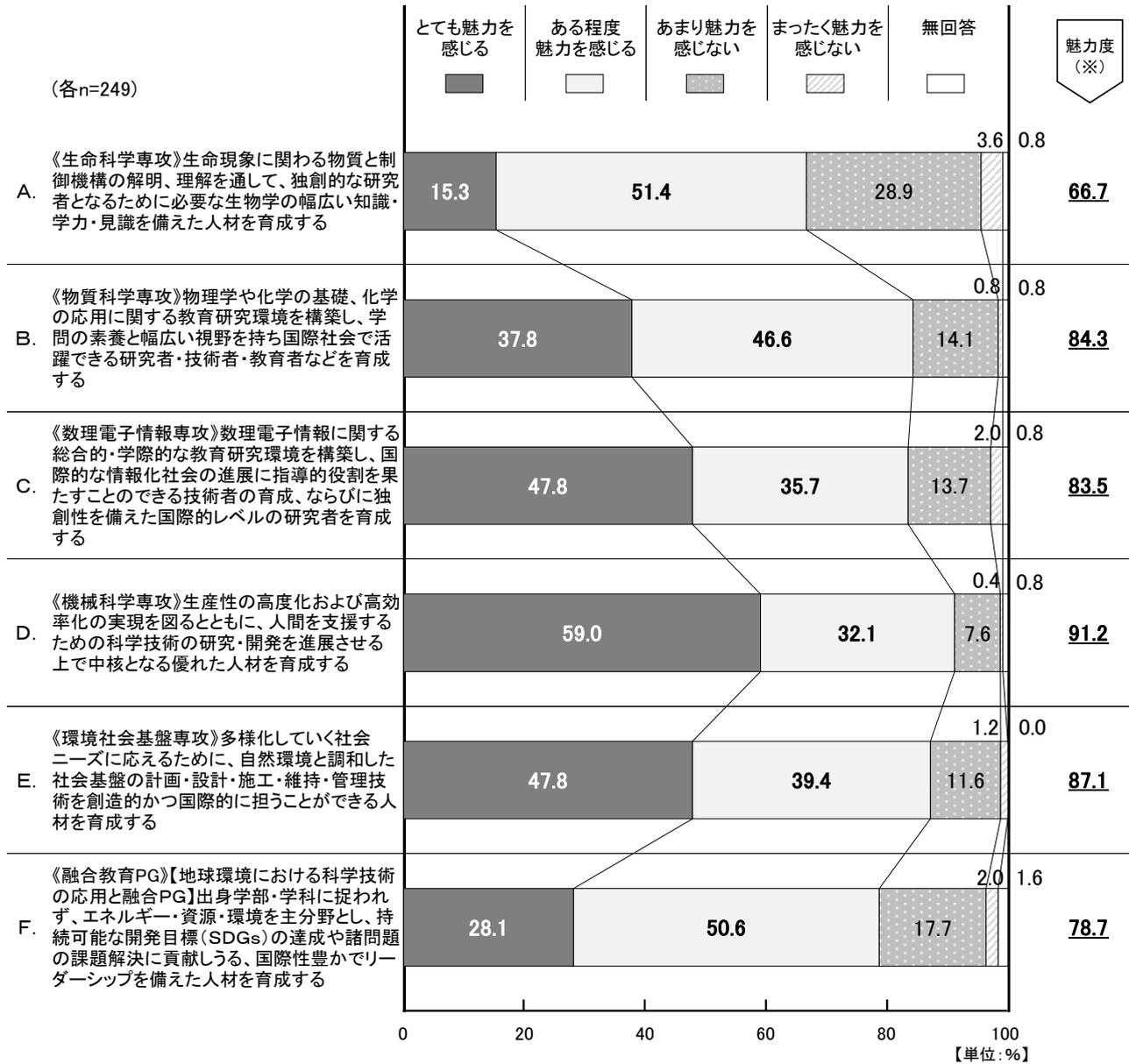
Q7. 貴社・貴団体では、今後、大学でどのような学問分野を学んだ人物を採用したいとお考えですか。  
(あてはまる番号すべてに○)



# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の各専攻・専攻共通PGの特色に対する魅力度

Q8-1. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)には、以下のような特色があります。貴社・貴団体(ご回答者)にとって、これらの特色はそれぞれの程度魅力に感じますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



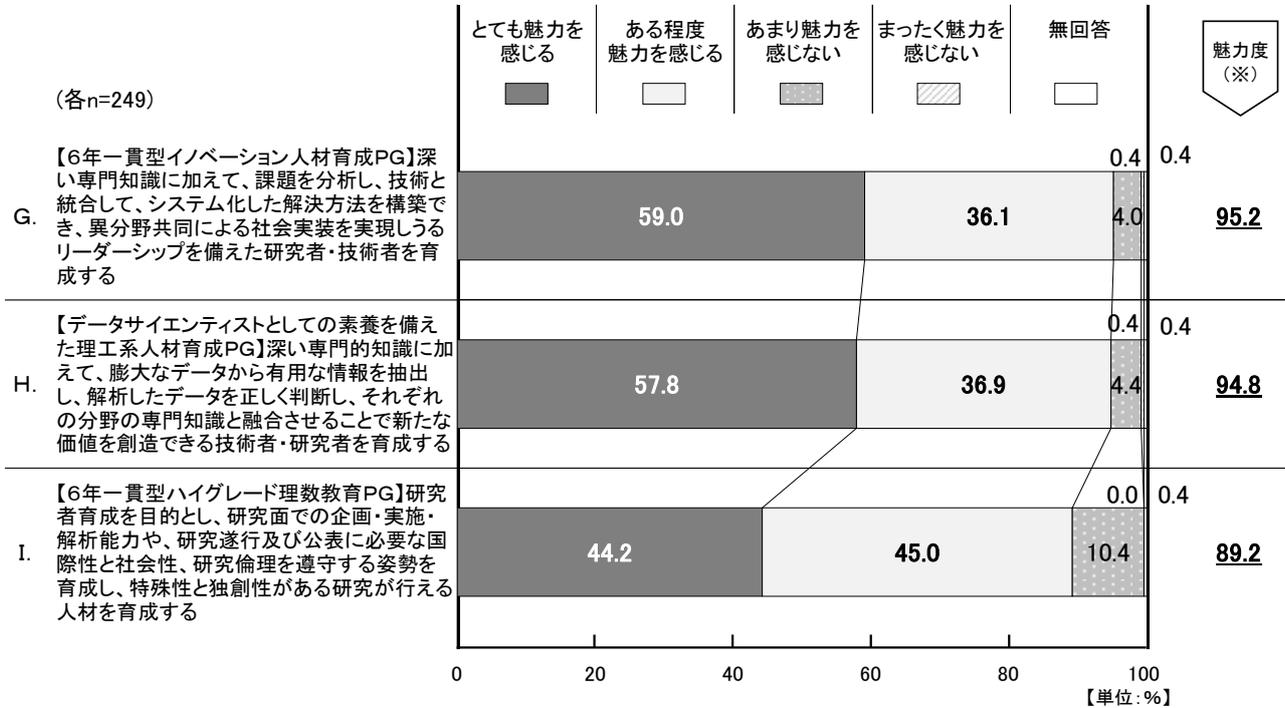
※魅力度=「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

※魅力度は、人数をもとに%を算出し、小数点第二位を四捨五入しているため、「とても魅力を感じる」と「ある程度魅力を感じる」の合計値と必ずしも一致しない

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」の副PGの特色に対する魅力度

Q8-2. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)では、副PGとして、自分の専攻以外の分野や最新の情報化技術を学べる3つの特別教育プログラム(いずれも仮称)の導入を構想しています。貴社・貴団体(ご回答者)にとって、これらの特色はそれぞれの程度魅力に感じますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



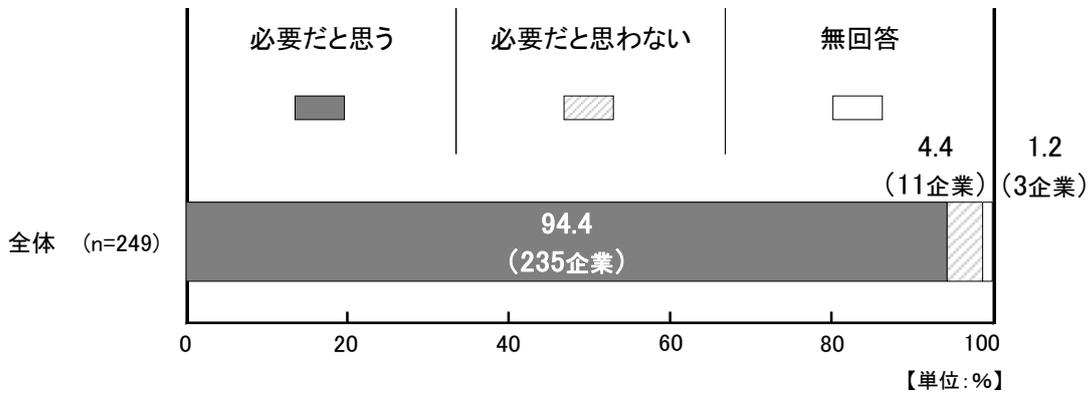
※魅力度 = 「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

※魅力度は、人数をもとに%を算出し、小数点第二位を四捨五入しているため、「とても魅力を感じる」と「ある程度魅力を感じる」の合計値と必ずしも一致しない

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」の社会的必要性／修了生に対する採用意向／修了生の毎年の採用想定人数

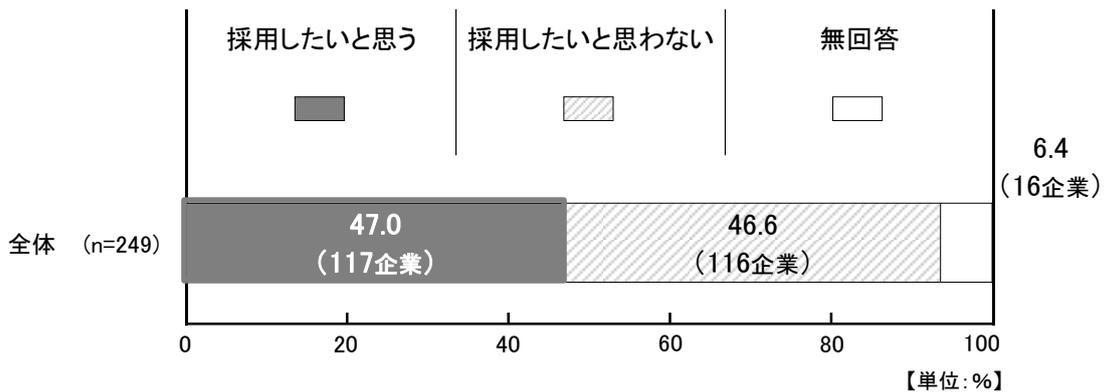
## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」の社会的必要性

Q9. 貴社・貴団体(ご回答者)は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)は、これからの社会にとって必要だと思われますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」修了生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG(いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた117企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」修了生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

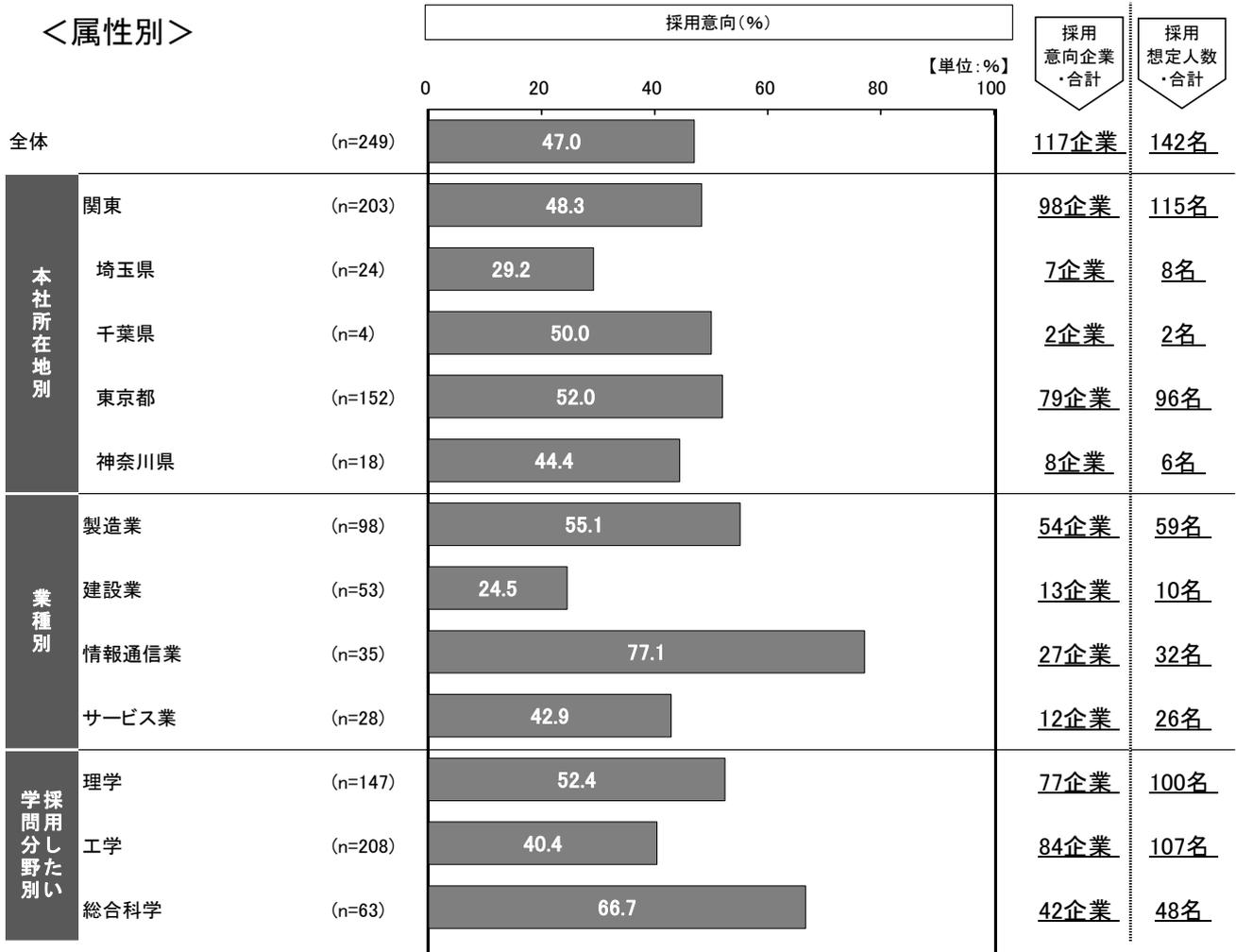
標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上	計
		%	%	%	%	%	
全体	117	68.4%	7.7%	4.3%	0.9%	4.3%	⇒ 100 142
	企業数	80	9	5	1	5	
	名	80	18	15	4	25	

※毎年の採用想定人数・計「5名以上」=5名を代入し合計値を算出  
— 学生の確保の見通し等-67—

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 生命科学専攻」に対して、Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計を【採用想定人数】と定義する。

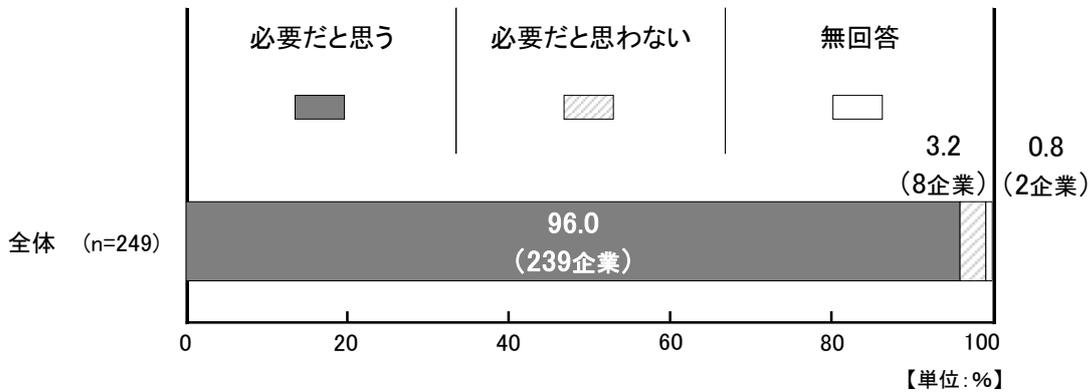


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」の社会的必要性／修了生に対する採用意向／修了生の毎年の採用想定人数

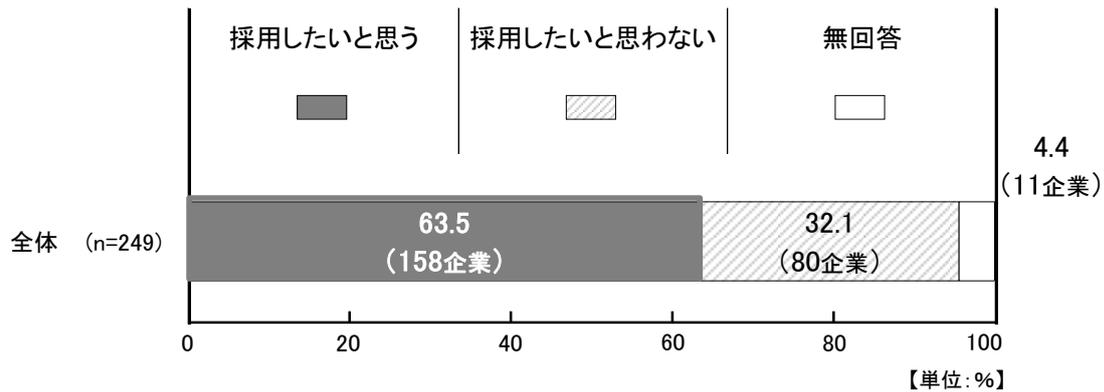
## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」の社会的必要性

Q9. 貴社・貴団体(ご回答者)は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)は、これからの社会にとって必要だと思われますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」修了生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG(いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた158企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」修了生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

全体	標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上	
			%	61.4%	13.3%	5.7%	0.6%	5.1%
			企業数	97	21	9	1	8
			名	97	42	27	4	40

計お示毎  
(※よし年  
)びたの  
( )採用企  
用業  
想数  
定・計  
人定  
数人  
・数  
をを

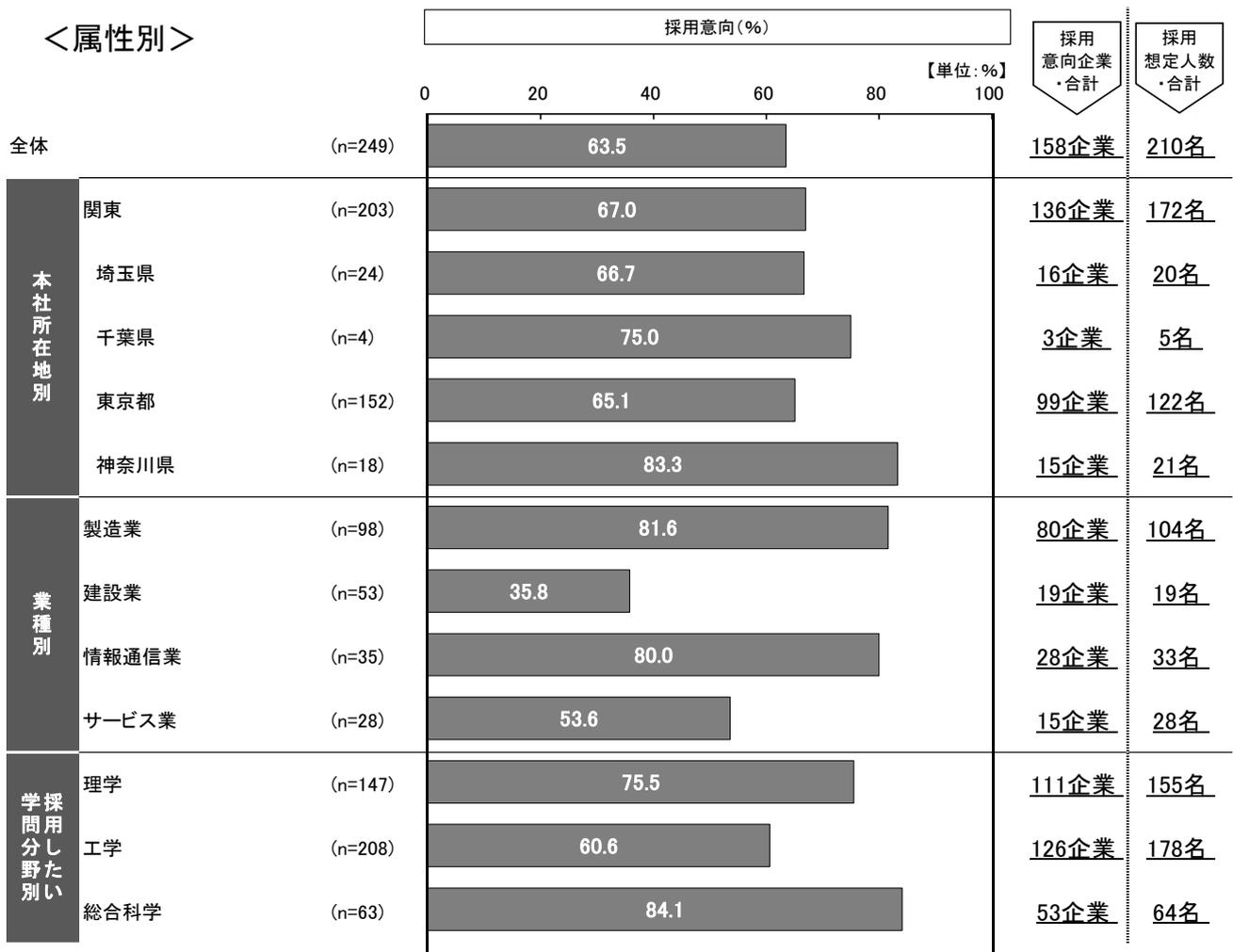
⇒

136
210

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 物質科学専攻」に対して、Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計を【採用想定人数】と定義する。

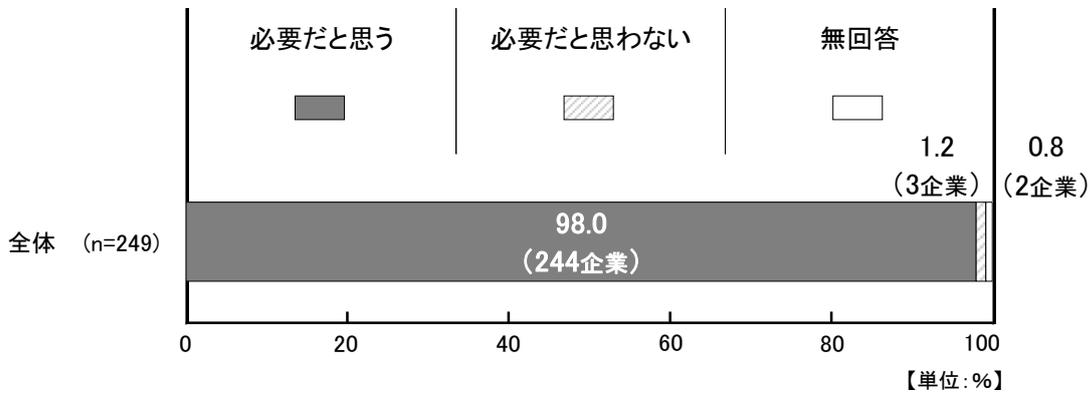


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」の社会的必要性／修了生に対する採用意向／修了生の毎年の採用想定人数

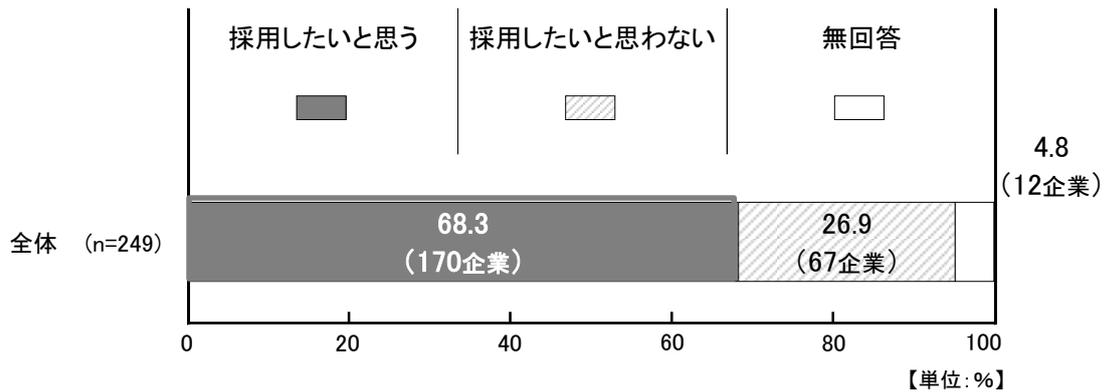
## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」の社会的必要性

Q9. 貴社・貴団体(ご回答者)は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)は、これからの社会にとって必要だと思われますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」修了生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG(いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた170企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」修了生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

全体	標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上
			%	54.7%	15.3%	8.8%	1.8%
	170	企業数	93	26	15	3	11
		名	93	52	45	12	55

計お示毎  
(※よ年の  
)びたの  
採用採用  
業業  
想数  
定・定  
人数計  
・人数  
を

⇒

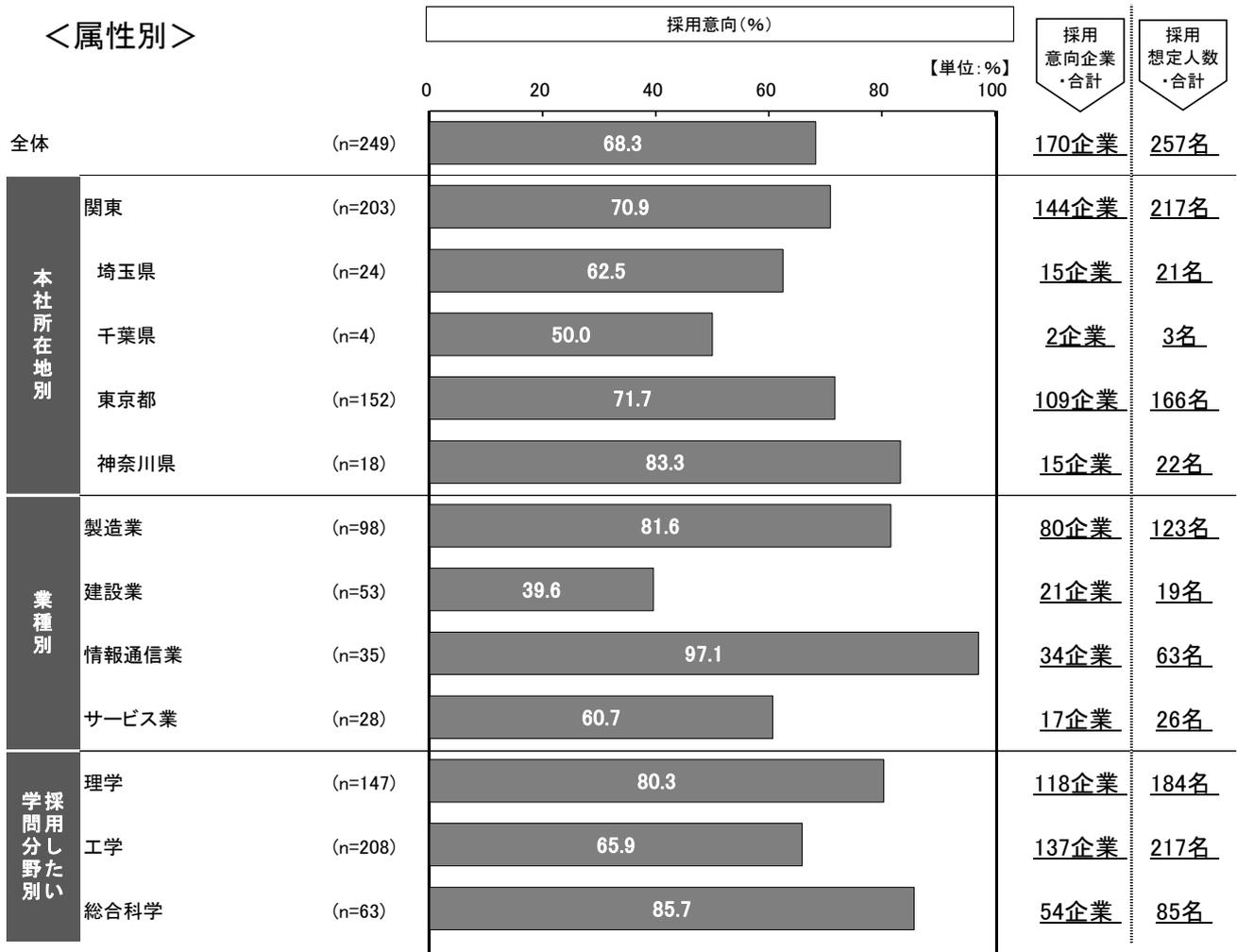
148
257

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 数理電子情報専攻」に対して、Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計を【採用想定人数】と定義する。

### <属性別>

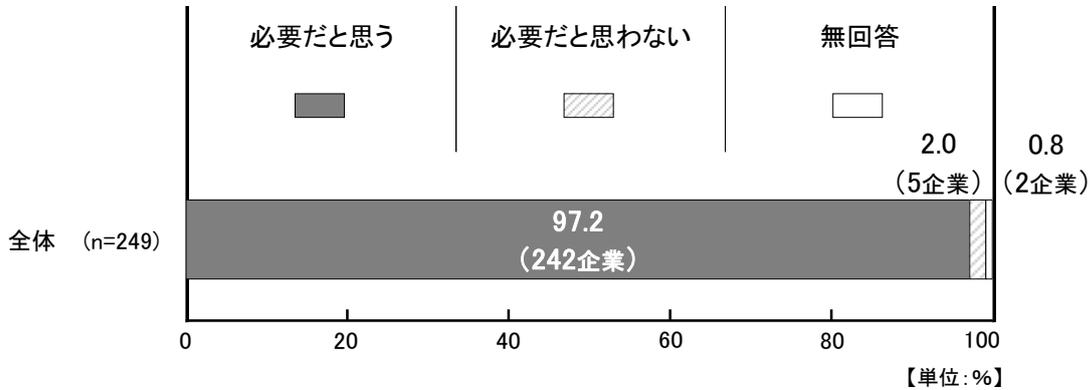


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」の社会的必要性／修了生に対する採用意向／修了生の毎年の採用想定人数

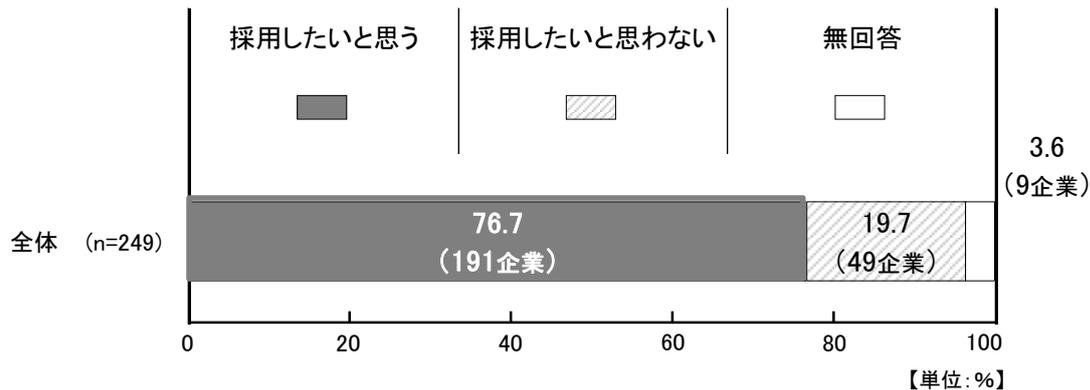
## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」の社会的必要性

Q9. 貴社・貴団体(ご回答者)は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)は、これからの社会にとって必要だと思われますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」修了生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG(いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた191企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」修了生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

全体	標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上
			%	企業数	名	%	企業数
	191	%	55.0%	17.3%	8.9%	0.0%	6.8%
		企業数	105	33	17	0	13
		名	105	66	51	0	65

計お示毎  
(※よ年の  
)びたの  
採用企採  
業業  
想数  
定・定  
人数・人  
計数  
・を

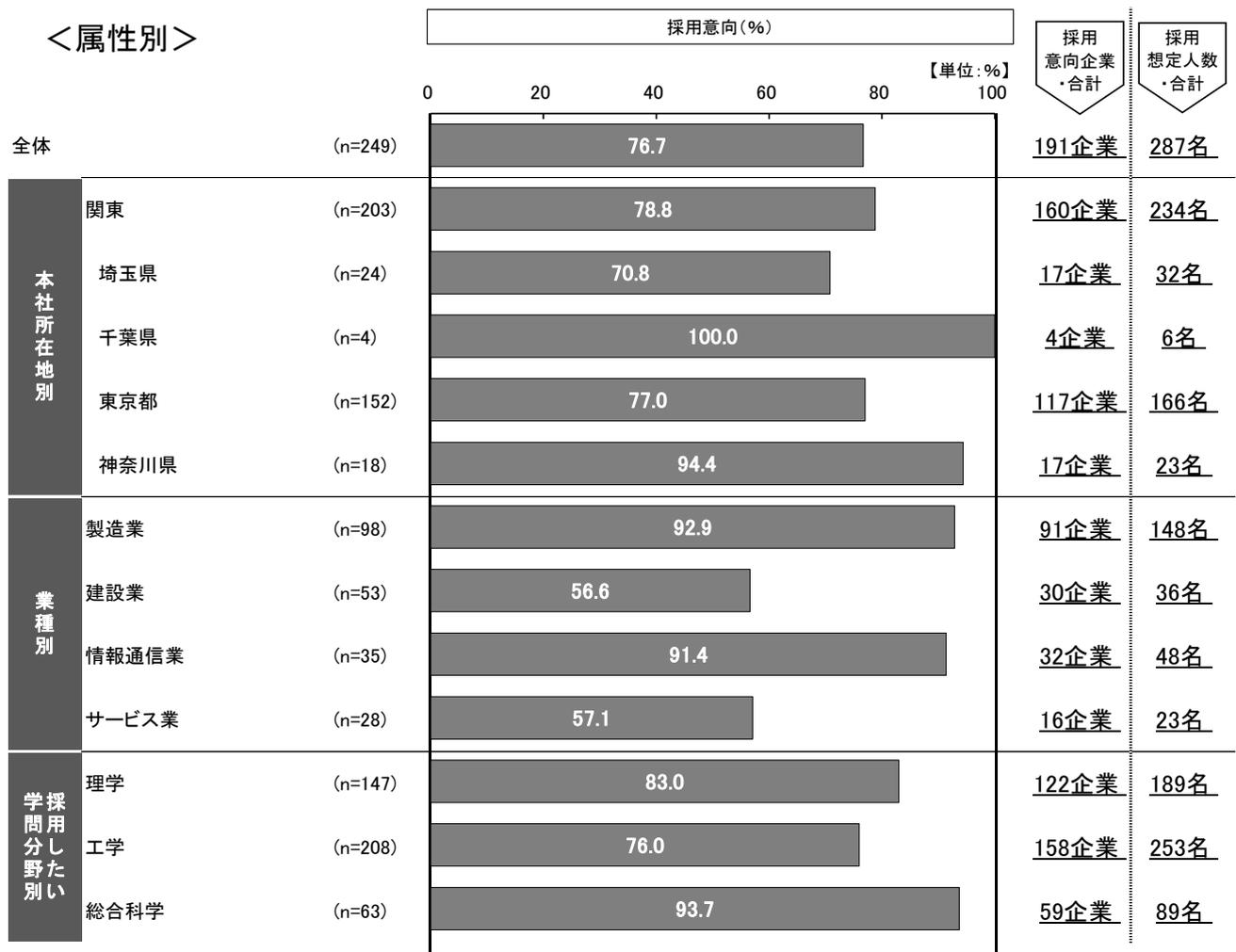
⇒

168
287

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 機械科学専攻」に対して、Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計を【採用想定人数】と定義する。

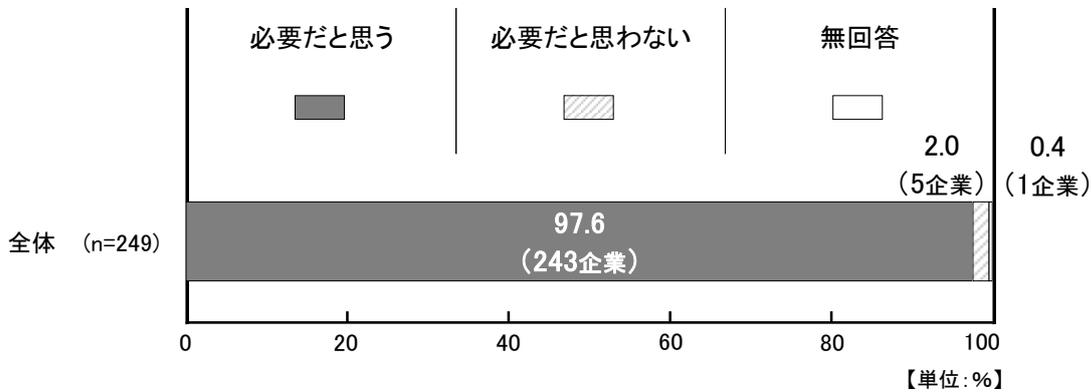


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」の社会的必要性／修了生に対する採用意向／修了生の毎年の採用想定人数

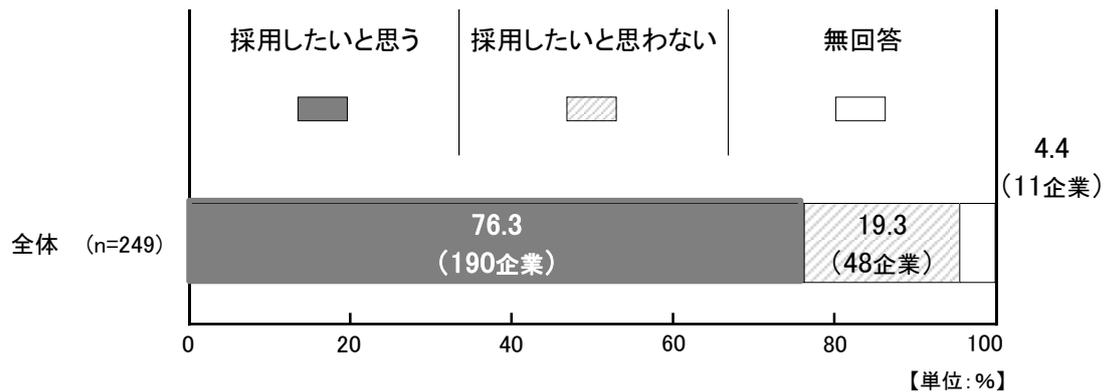
## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」の社会的必要性

Q9. 貴社・貴団体(ご回答者)は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)は、これからの社会にとって必要だと思われますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」修了生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG(いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた190企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」修了生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

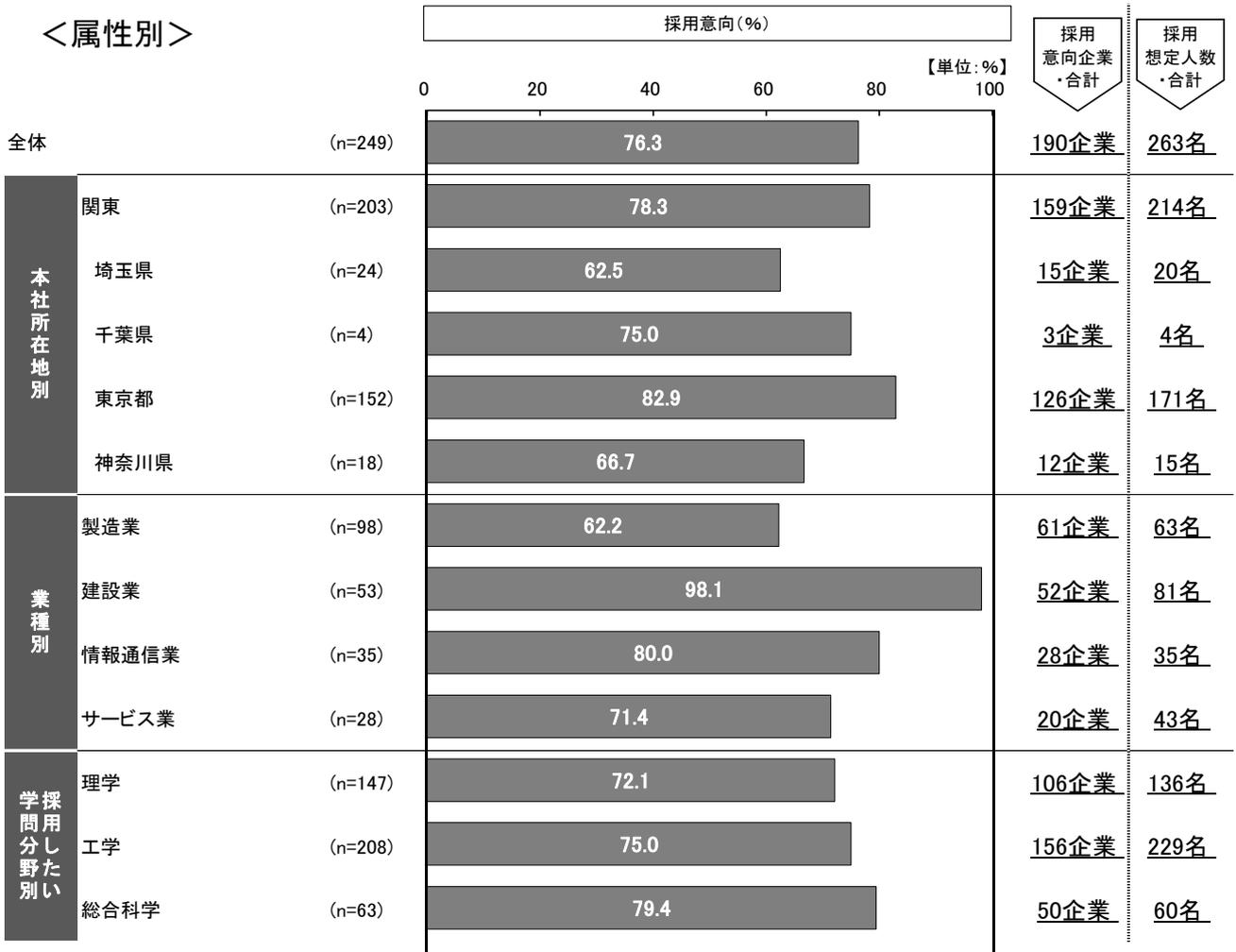
標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上	計	
		%	企業数	名	%	企業数		名
全体		61.1%	14.7%	4.7%	0.5%	6.3%	⇒ 166 263	
	190		116	28	9	1		12
			116	56	27	4		60

※毎年の採用想定人数・計「5名以上」=5名を代入し合計値を算出  
— 学生の確保の見通し等-75-

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 環境社会基盤専攻」に対して、Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計を【採用想定人数】と定義する。

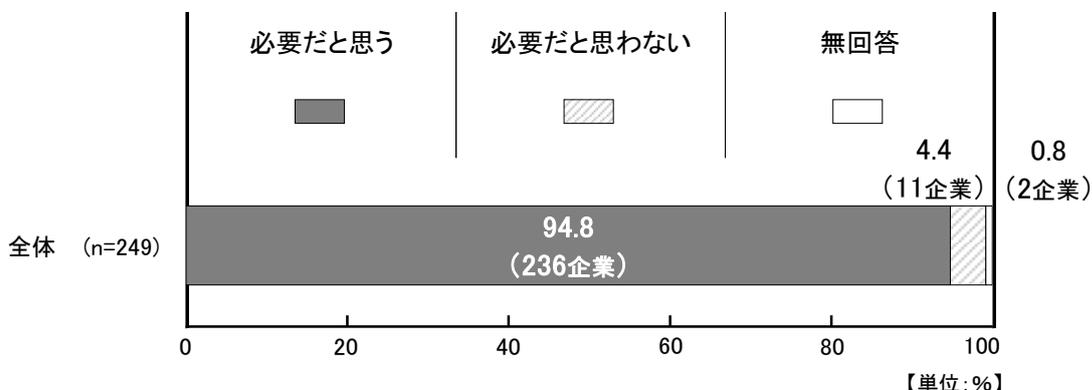


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」の社会的必要性／修了生に対する採用意向／修了生の毎年の採用想定人数

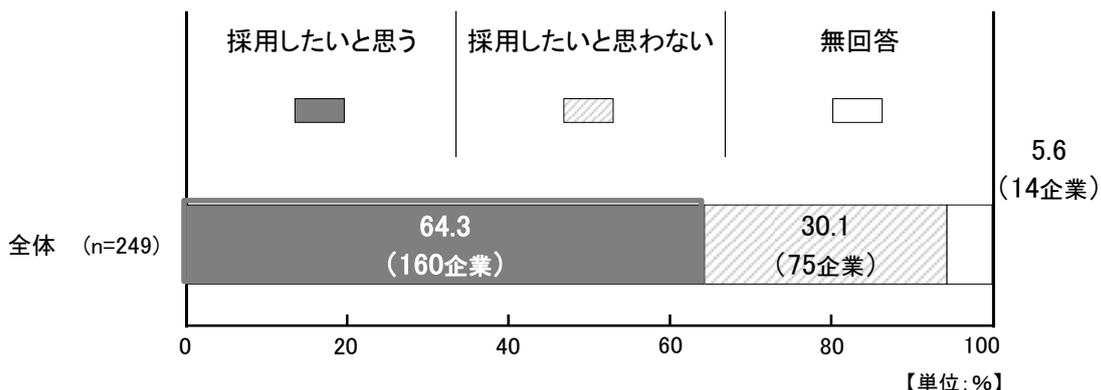
## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」の社会的必要性

Q9. 貴社・貴団体(ご回答者)は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)は、これからの社会にとって必要だと思われますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」修了生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG(いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた160企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」修了生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上	
		%	70.0%	10.6%	2.5%	1.3%	1.3%
全体	160	企業数	112	17	4	2	2
		名	112	34	12	8	10

計お示毎  
(よしの年  
※びたの  
)採用企採  
用業用  
想定数  
・定  
人数計  
・定  
人数  
・人数  
を

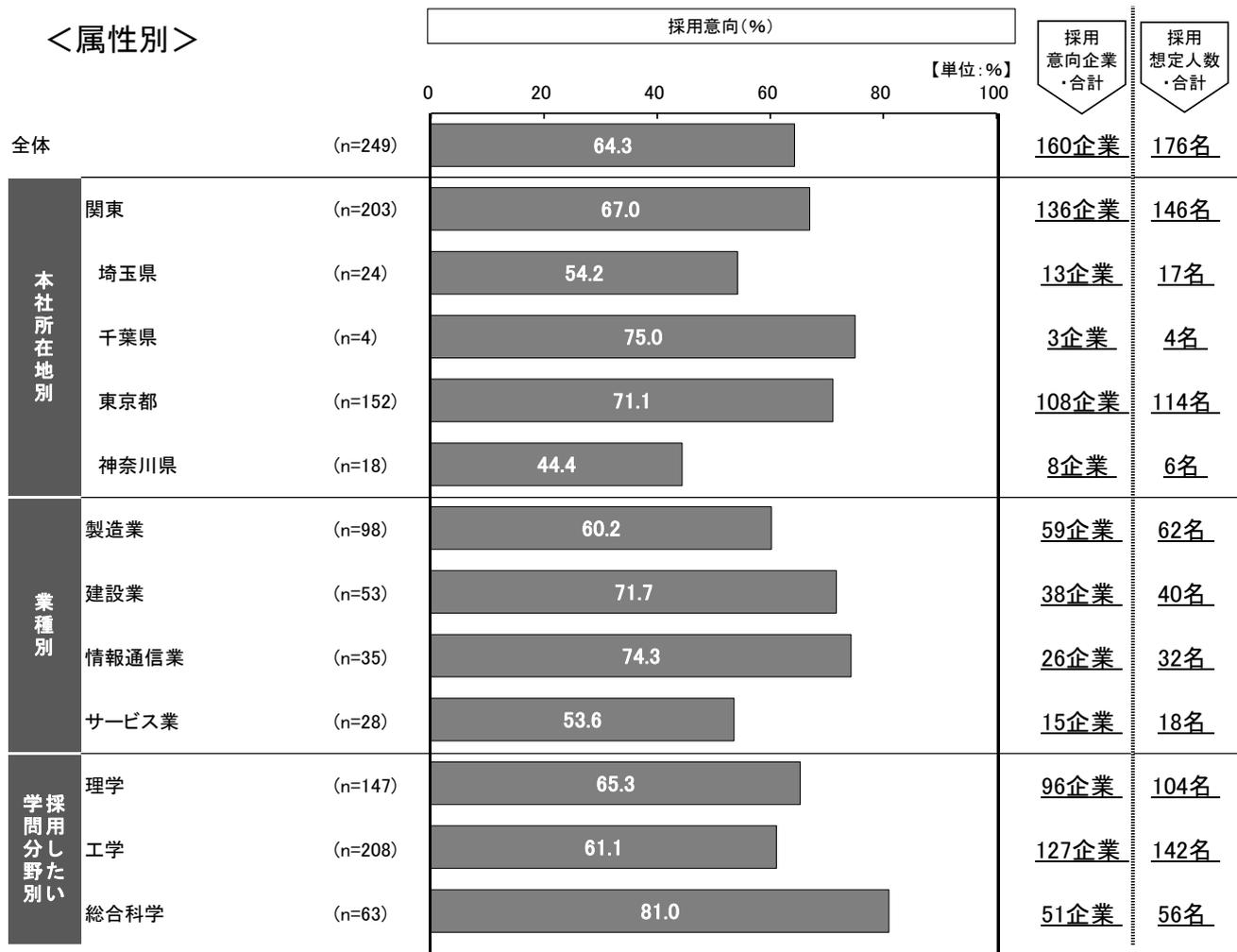
⇒

137
176

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」修了生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 地球環境における科学技術の応用と融合PG」に対して、  
 Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計を【採用想定人数】と定義する。

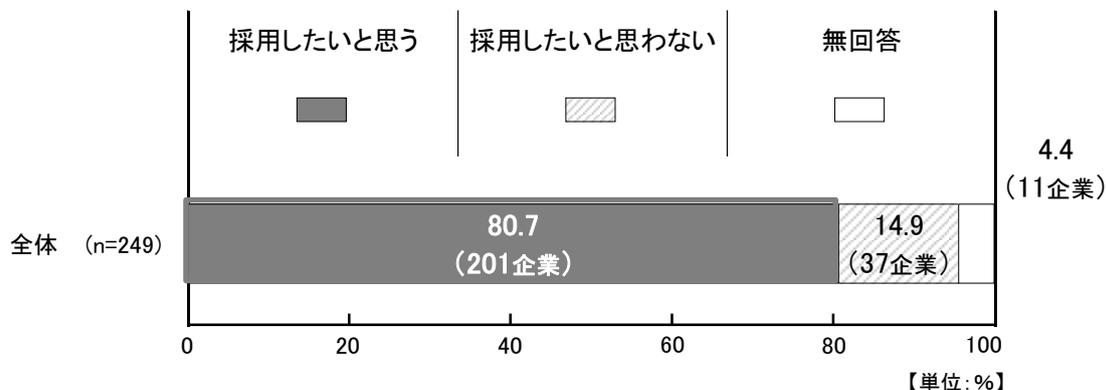


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム (副PG)6年一貫型イノベーション人材育成PG」受講生に対する採用意向 / 受講生の毎年の採用想定人数

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) 6年一貫型イノベーション人材育成PG」受講生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG (いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた201企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) 6年一貫型イノベーション人材育成PG」受講生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上	
		全体	201	% 66.2%	11.4%	3.5%	0.5%
		企業数	133	23	7	1	6
		名	133	46	21	4	30

計お示毎  
(※よしたの  
)びたの採  
用企採  
想業用  
定数想  
・定  
人計人  
数数  
・を

⇒

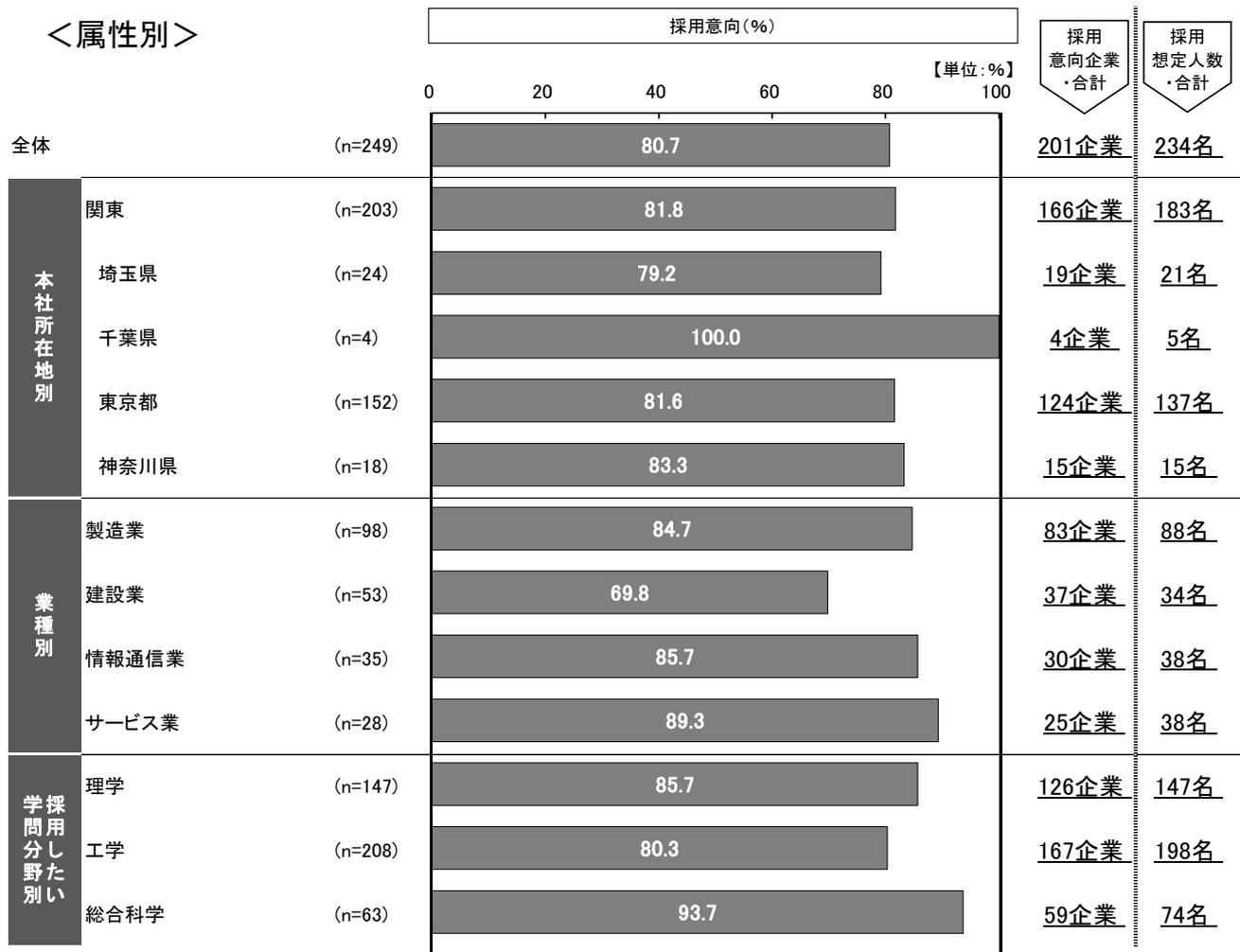
170
234

※ 毎年の採用想定人数・計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム  
(副PG)6年一貫型イノベーション人材育成PG」受講生に対する採用意向/  
採用想定人数<属性別>

■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)  
6年一貫型イノベーション人材育成PG」受講生に対する採用意向/採用想定人数  
<属性別>

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)  
6年一貫型イノベーション人材育成PG」に対して、  
Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに  
【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計  
を【採用想定人数】と定義する。

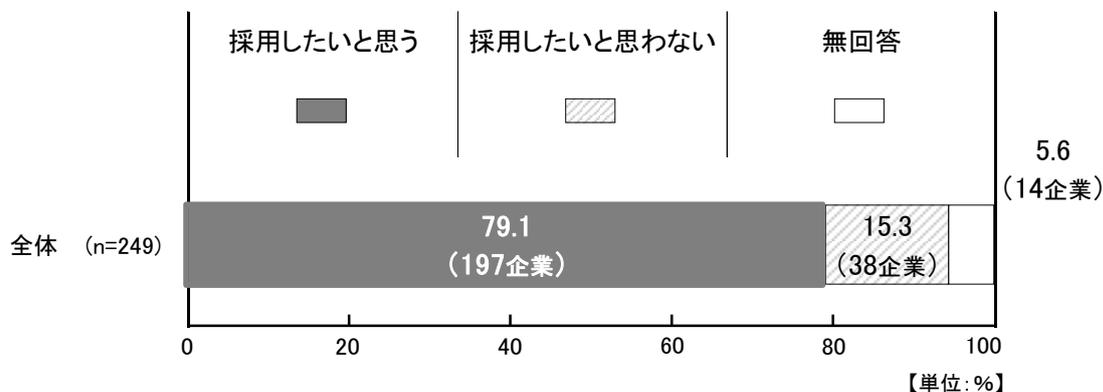


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム (副PG)データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」受講生に対する採用意向／受講生の毎年の採用想定人数

■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」受講生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG (いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた197企業のみ抽出

■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」受講生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上
		197	%	65.5%	11.7%	4.6%
全体	企業数	129	23	9	2	5
	名	129	46	27	8	25

計お示毎 (※よしたのび) 採採用企採 用業用 想定数・計 人数・ 人数を

⇒ 168

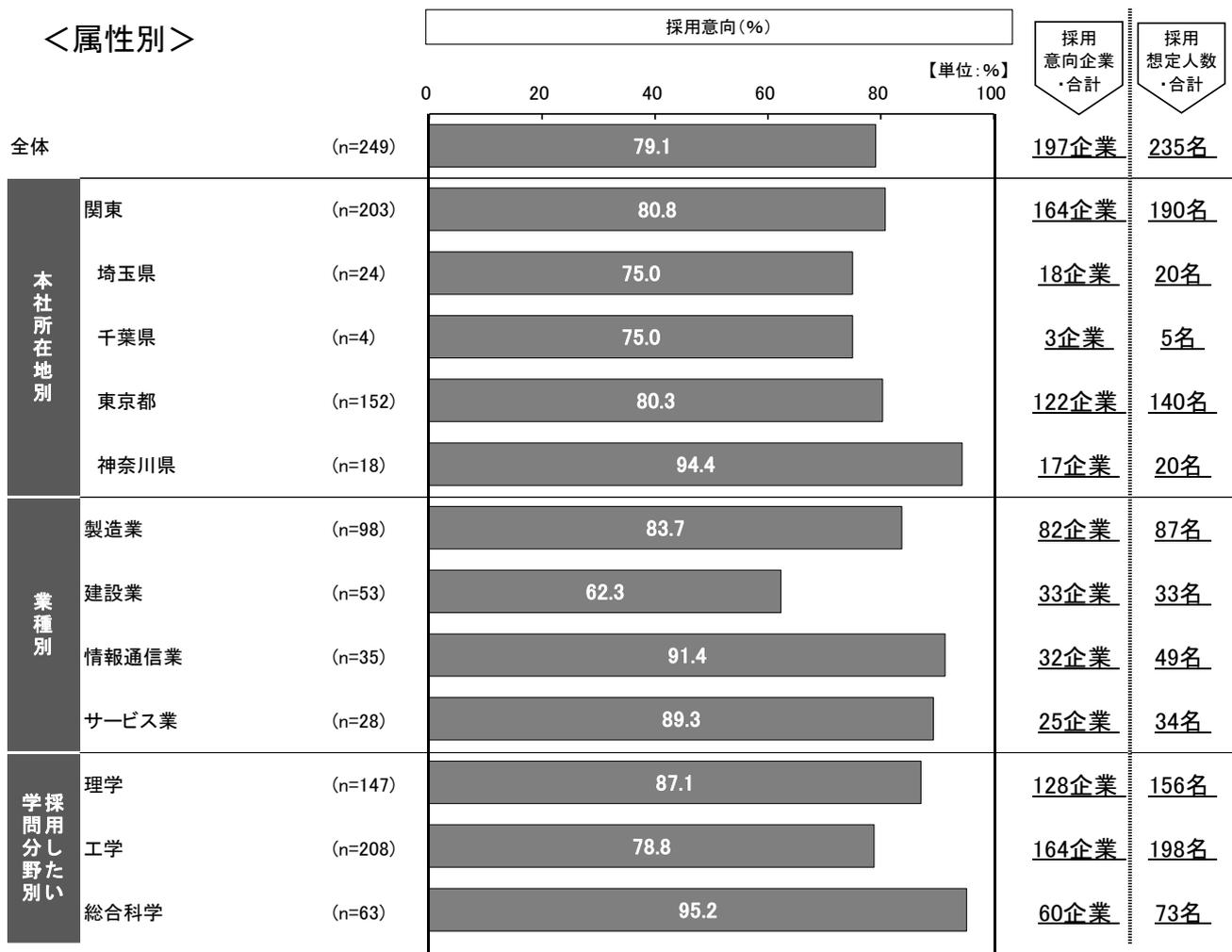
235

※ 毎年の採用想定人数・計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム  
(副PG)データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」  
受講生に対する採用意向／採用想定人数＜属性別＞

■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)  
データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」受講生に対する  
採用意向／採用想定人数  
＜属性別＞

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG)  
データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG」に対して、  
Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに  
【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計  
を【採用想定人数】と定義する。

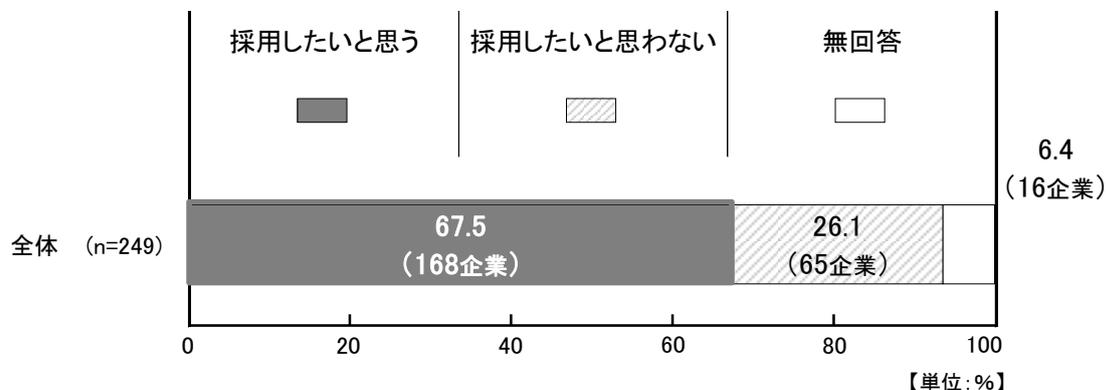


※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム (副PG)6年一貫型ハイグレード理数教育PG」受講生に対する採用意向／受講生の毎年の採用想定人数

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) 6年一貫型ハイグレード理数教育PG」受講生に対する採用意向

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG (いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)



「採用したいと思う」と答えた168企業のみ抽出

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) 6年一貫型ハイグレード理数教育PG」受講生の毎年の採用想定人数

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

	標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上
			%	67.9%	8.9%	4.2%	0.6%
全体	168	企業数	114	15	7	1	5
名		114	30	21	4	25	

計お示毎  
(※よしたの  
)びたの採  
採用用企  
想定業  
人数・定  
・計人  
・数数  
を

⇒

142
194

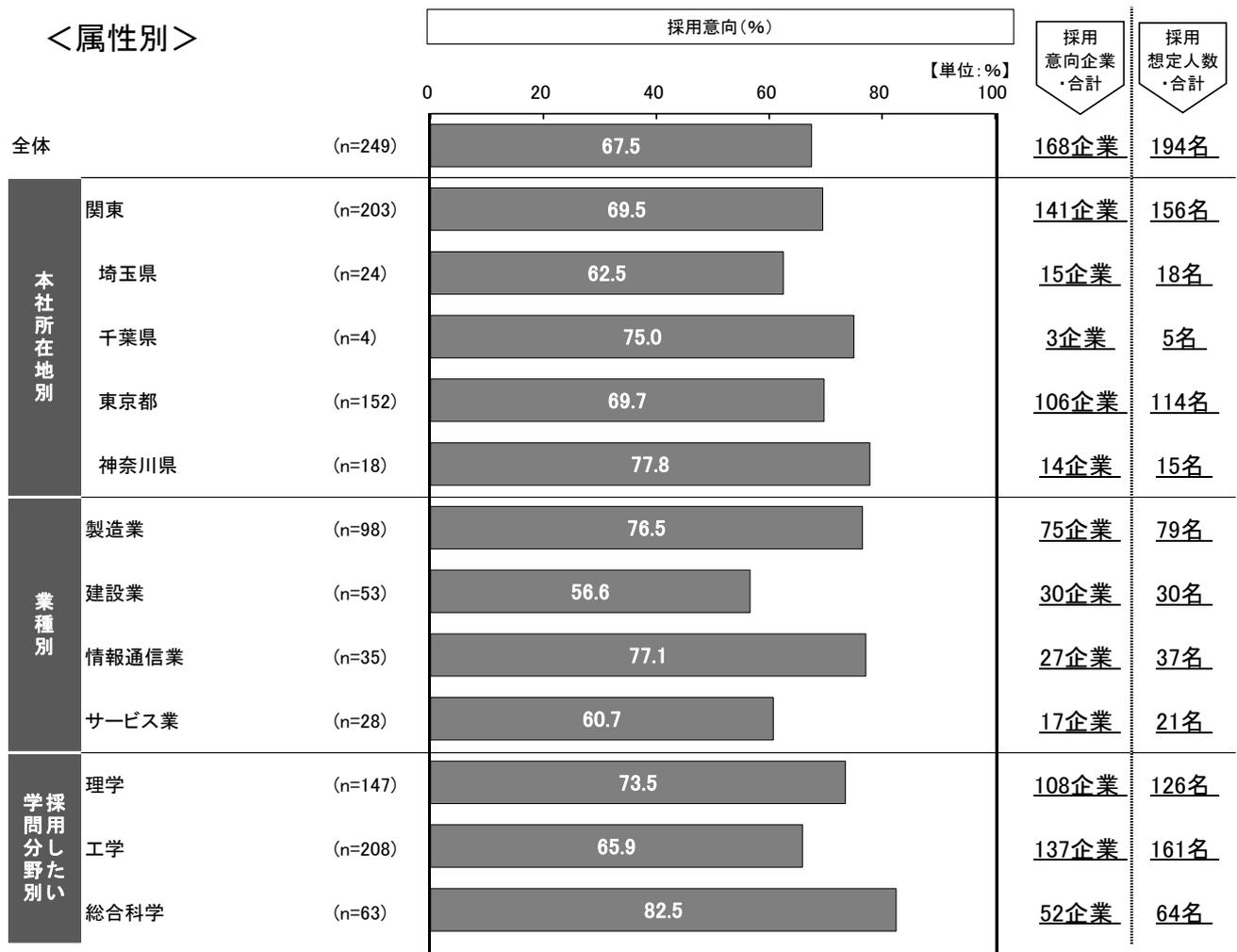
※ 毎年の採用想定人数・計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム (副PG)6年一貫型ハイグレード理数教育PG」受講生に対する採用意向／採用想定人数<属性別>

■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) 6年一貫型ハイグレード理数教育PG」受講生に対する採用意向／採用想定人数 <属性別>

※埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程 特別教育プログラム(副PG) 6年一貫型ハイグレード理数教育PG」に対して、 Q10-1で「採用したいと思う」と回答した企業を【採用意向企業】と定義し、さらに 【採用意向企業】のうち、Q10-2で具体的な人数を回答した企業の採用想定人数の合計を【採用想定人数】と定義する。

<属性別>



※採用想定人数・合計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

# 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」全体に対する毎年の採用想定人数

## ■埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」全体に対する毎年の採用想定人数

Q10-3. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)全体として毎年何名程度の採用を想定されますか。  
(あてはまる番号1つに○)

	標本数	単位	1名	2名	3名	4名	5名以上
			全体	249	%	32.9%	30.9%
		企業数	82	77	34	6	25
		名	82	154	102	24	125

計  
(※)  
お  
よ  
び  
採  
用  
想  
定  
人  
数  
・  
計  
人  
数  
・  
毎  
年  
の  
採  
用  
想  
定  
人  
数  
を  
示  
し  
た  
企  
業  
数  
・  
計  
人  
数  
を

⇒

	224
	487

※ 毎年の採用想定人数・計 「5名以上」=5名 を代入し合計値を算出

## 卷末資料 調査票

## 埼玉大学大学院理工学研究科 博士前期課程 (設置構想中)に関するアンケート

埼玉大学大学院では2022年(令和4年)4月に「理工学研究科 博士前期課程」を6専攻13コースから5専攻10教育プログラムに再編し、さらに3つの副プログラムを導入することを構想しています。このアンケートは採用ご担当者の皆様からご意見をお伺いし、より充実した研究科にするための参考資料とさせていただきます。このアンケートで得られた情報や回答内容は、上記の目的のための統計資料としてのみ活用し、個人を特定することは一切ありません。つきましては、ぜひアンケートへのご協力をお願いいたします。

※このアンケートや別紙に記載されている内容は予定であり、変更になる可能性があります。

### はじめに、貴社・貴団体についてお伺いいたします。

Q1. アンケートにお答えいただいている方の、人事採用への関与度をお教えてください。

(あてはまる番号1つに○)

1. 採用の決裁権があり、選考にかかわっている
2. 採用の決裁権はないが、選考にかかわっている
3. 採用時には直接かかわらず、情報や意見を収集・提供する立場にある

Q2. 貴社・貴団体の本社(本部)所在地について、都道府県名をお教えてください。

本社(本部)所在地

都・道・府・県 ←1つに○

Q3. 貴社・貴団体の業種について、ご回答ください。(あてはまる番号1つに○)

- |                  |             |              |
|------------------|-------------|--------------|
| 1. 製造業           | 6. 農・林・漁・鉱業 | 11. 医療・福祉    |
| 2. 建設業           | 7. 卸売・小売業   | 12. 複合サービス事業 |
| 3. 運輸業           | 8. 金融・保険業   | 13. サービス業    |
| 4. 情報通信業         | 9. 不動産業     | 14. 公務       |
| 5. 電気・ガス・熱供給・水道業 | 10. 飲食店・宿泊業 | 15. その他      |

Q4. 貴社・貴団体の従業員数(正規社員)について、ご回答ください。(あてはまる番号1つに○)

- |               |                  |                    |
|---------------|------------------|--------------------|
| 1. 50名未満      | 3. 100名～500名未満   | 5. 1,000名～5,000名未満 |
| 2. 50名～100名未満 | 4. 500名～1,000名未満 | 6. 5,000名以上        |

Q5. 貴社・貴団体の過去3か年の平均的な正規社員の採用数について、お教えてください。

過去3か年 平均

名程度

※アラビア数字(1,2,3...)でご記入ください。

Q6. 貴社・貴団体の本年度の採用予定数は、昨年度と比較していかがですか。(あてはまる番号1つに○)

1. 増やす
2. 昨年度並み
3. 減らす
4. 未定

Q7. 貴社・貴団体では、今後、大学でどのような学問分野を学んだ人物を採用したいとお考えですか。

(あてはまる番号すべてに○)

- |             |           |                     |
|-------------|-----------|---------------------|
| 1. 理学       | 7. 看護・保健学 | 13. 教員養成・教育学        |
| 2. 工学       | 8. 医・歯・薬学 | 14. 生活科学            |
| 3. 総合科学     | 9. 文学     | 15. 芸術学             |
| 4. 社会学      | 10. 語学    | 16. その他             |
| 5. 経済・経営・商学 | 11. 法学    | 17. 学んだ学問分野にはこだわらない |
| 6. 農・水産学    | 12. 国際関係学 |                     |

→次ページに続く

埼玉大学大学院では、2022年(令和4年)4月に、「理工学研究科 博士前期課程」を5専攻10教育プログラムに再編し、さらに3つの副プログラムを導入することを構想しています。

※ ここからは、別紙「埼玉大学大学院 理工学研究科 博士前期課程の設置計画の概要」をご覧くださいの上でお答えください ※

Q8-1. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の

各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)には、以下のような特色があります。

貴社・貴団体(ご回答者)にとって、これらの特色はそれぞれ

どの程度魅力に感じますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

			とても魅力を感じる	ある程度魅力を感じる	あまり魅力を感じない	まったく魅力を感じない
理工学研究科 博士前期課程	生命 攻科学専	A. 生命現象に関わる物質と制御機構の解明、理解を通して、独創的な研究者となるために必要な生物学の幅広い知識・学力・見識を備えた人材を育成する	→ 1	2	3	4
	物質 攻科学専	B. 物理学や化学の基礎、化学の応用に関する教育研究環境を構築し、学問の素養と幅広い視野を持ち国際社会で活躍できる研究者・技術者・教育者などを育成する	→ 1	2	3	4
	数理電 報専攻子情	C. 数理電子情報に関する総合的・学際的な教育研究環境を構築し、国際的な情報化社会の進展に指導的役割を果たすことのできる技術者の育成、ならびに独創性を備えた国際的レベルの研究者を育成する	→ 1	2	3	4
	機械 攻科学専	D. 生産性の高度化および高効率化の実現を図るとともに、人間を支援するための科学技術の研究・開発を進展させる上で中核となる優れた人材を育成する	→ 1	2	3	4
	環境 専攻社会基	E. 多様化していく社会ニーズに応えるために、自然環境と調和した社会基盤の計画・設計・施工・維持・管理技術を創造的かつ国際的に担うことができる人材を育成する	→ 1	2	3	4
	融 P G 合 教 育	F. 【地球環境における科学技術の応用と融合PG】 出身学部・学科に捉われず、エネルギー・資源・環境を主分野とし、持続可能な開発目標(SDGs)の達成や諸問題の課題解決に貢献しうる、国際性豊かでリーダーシップを備えた人材を育成する	→ 1	2	3	4

Q8-2. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)では、

副PGとして、自分の専攻以外の分野や最新の情報化技術を学べる

3つの特別教育プログラム(いずれも仮称)の導入を構想しています。

貴社・貴団体(ご回答者)にとって、これらの特色はそれぞれ

どの程度魅力に感じますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

			とても魅力を感じる	ある程度魅力を感じる	あまり魅力を感じない	まったく魅力を感じない
特別教育 プログラム (副PG)	G.	【6年一貫型イノベーション人材育成PG】 深い専門知識に加えて、課題を分析し、技術と統合して、システム化した解決方法を構築でき、異分野共同による社会実装を実現しうるリーダーシップを備えた研究者・技術者を育成する	→ 1	2	3	4
	H.	【データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成PG】 深い専門的知識に加えて、膨大なデータから有用な情報を抽出し、解析したデータを正しく判断し、それぞれの分野の専門知識と融合させることで新たな価値を創造できる技術者・研究者を育成する	→ 1	2	3	4
	I.	【6年一貫型ハイグレード理数教育PG】 研究者育成を目的とし、研究面での企画・実施・解析能力や、研究遂行及び公表に必要な国際性と社会性、研究倫理を遵守する姿勢を育成し、特殊性と独創性がある研究が行える人材を育成する	→ 1	2	3	4

→次ページに続く

# 調査票

Q9. 貴社・貴団体(ご回答者)は、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻・融合教育PG(いずれも仮称)は、これからの社会にとって必要だと思われませんか。  
(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

			1.必要だと思う	2.必要だと思わない
博士 工 前 学 期 研 究 課 程 科	A.	生命科学専攻	→ 1	2
	B.	物質科学専攻	→ 1	2
	C.	数理電子情報専攻	→ 1	2
	D.	機械科学専攻	→ 1	2
	E.	環境社会基盤専攻	→ 1	2
	F.	地球環境における 科学技術の応用と融合PG	→ 1	2

Q10-1. 貴社・貴団体(ご回答者)では、埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)の各専攻、副PG(いずれも仮称)を修了、受講した学生について、採用したいと思われませんか。  
(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

Q10-2. Q10-1で「採用したいと思う」と回答した専攻、副PGについて、それぞれ毎年何名程度の採用を想定されますか。(それぞれ、あてはまる番号1つに○)

			Q10-1		Q10-2		
			1.採用したい と思う	2.採用したい と思わない	採用予定人数		
博士 工 前 学 期 研 究 課 程 科	A.	生命科学専攻	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
	B.	物質科学専攻	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
	C.	数理電子情報専攻	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
	D.	機械科学専攻	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
	E.	環境社会基盤専攻	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
	F.	地球環境における科学技術の応用と 融合PG	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
特別 教育 P G の プ ロ グ ラ ム	G.	6年一貫型イノベーション人材育成PG	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
	H.	データサイエンティストとしての素養を 備えた理工系人材育成PG	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		
	I.	6年一貫型ハイグレード理数教育PG	→ 1	2	→ 1. 1名 2. 2名 3. 3名 4. 4名 5. 5名以上		

Q10-3. 埼玉大学大学院「理工学研究科 博士前期課程」(設置構想中)全体として毎年何名程度の採用を想定されますか。  
(あてはまる番号1つに○)

1. 1名      2. 2名      3. 3名      4. 4名      5. 5名以上      6. 0名

～質問は以上です。ご協力ありがとうございました。～

## 教 員 名 簿

学 長 の 氏 名 等						
調書 番号	役職名	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額基本給 (千円)	現 職 (就任年月)
一	学長	サカイ タカフミ 坂井 貴文 <令和2年4月>		博士 (医学)		埼玉大学 学長 (令和2年4月～令和8年3月)

(注) 高等専門学校にあっては校長について記入すること。

教 員 の 氏 名 等												
(理工学研究科 生命科学専攻)												
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	担 当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
1	専	教授	カワイ マキ 川合 真紀 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子細胞学特論1【隔年】 基礎分子生物学5※ 植物環境科学輪講1A 植物環境科学輪講1B 植物環境科学輪講2A 植物環境科学輪講2B	1通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1.1 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	5日
2	専	教授	コカトシサ 小竹 敬久 <令和4年4月>		博士 (学術)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子細胞学特論6 生体物質生化学輪講1A 生体物質生化学輪講1B 生体物質生化学輪講2A 生体物質生化学輪講2B	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平13.7)	5日
3	専	教授	トザリ ユズル 戸澤 譲 <令和4年4月>		博士 (農学)		分子生物学特論1 分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子細胞学特論3 基礎分子生物学1※ タンパク質科学輪講1A タンパク質科学輪講1B タンパク質科学輪講2A タンパク質科学輪講2B	1・2①～② 1通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	1 6 6 2 1 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平26.9)	5日
4	専	教授	ニヤマ ヨシカ 西山 佳孝 <令和4年4月>		博士 (工学)		分子生物学特論3 分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 細胞情報学特論2 生命科学特別講義 基礎分子生物学4※ 環境生物学輪講1A 環境生物学輪講1B 環境生物学輪講2A 環境生物学輪講2B	1・2①～② 1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	1 6 6 2 2 0.4 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	5日
5	専	教授	ヒハラ ユカ 日原 由香子 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特論2 分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子細胞学特論5【隔年】 生命科学特別講義 基礎分子生物学1※ 遺伝子発現学輪講1A 遺伝子発現学輪講1B 遺伝子発現学輪講2A 遺伝子発現学輪講2B	1・2①～② 1通 2通 1・2①～② 1・2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	1 6 6 2 2 1 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.4)	5日
6	専	教授	コバヤシ テツヤ 小林 哲也 <令和4年4月>		理学 博士		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 基礎生体制御学4【隔年】 調節生理学特論2【隔年】 調節生理学輪講2A【隔年】 調節生理学輪講2B【隔年】	1通 2通 1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通	6 6 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.4)	5日
7	専	教授	サカ イロウ 坂田 一郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 基礎生体制御学5 細胞制御学特論1【隔年】 細胞制御学輪講1A【隔年】 細胞制御学輪講1B【隔年】	1通 2通 1・2③～④ 1・2①～② 1通 2通	6 6 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平23.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 生命科学専攻)

調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
8	専	教授	フナヅリ ダイスケ 竹澤 大輔 <令和4年4月>		Ph.D (アメリ カ合衆 国)		生体制御学特論1 生体制御学特論2 生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 基礎生体制御学2 適応生理学特論【隔年】 適応生理学輪講A【隔年】 適応生理学輪講B【隔年】	1・2①～② 1・2①～② 1通 2通 1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通	2 2 6 6 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.10)	5日	
9	専	教授	タカ シユウイ 田中 秀逸 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 基礎生体制御学1【隔年】 遺伝学特論【隔年】 遺伝学輪講A【隔年】 遺伝学輪講B【隔年】	1通 2通 1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通	6 6 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.2)	5日	
10	専	教授	ツカハラ シンジ 塚原 伸治 <令和4年4月>		博士 (農学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 調節生理学特論1【隔年】 調節生理学輪講1A【隔年】 調節生理学輪講1B【隔年】	1通 2通 1・2③～④ 1通 2通	6 6 2 2 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平21.4)	5日	
11	専	教授	ヤマシキヨウ 弥益 恭 <令和4年4月>		理学 博士		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 発生物学特論2【隔年】 発生物学輪講2A【隔年】 発生物学輪講2B【隔年】	1通 2通 1・2①～② 1通 2通	6 6 2 2 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.4)	5日	
12	専	准教授	イシカワ トシキ 石川 寿樹 <令和4年4月>		博士 (農学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子遺伝学特論3【隔年】 植物環境科学輪講1A 植物環境科学輪講1B 植物環境科学輪講2A 植物環境科学輪講2B	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	5日	
13	専	准教授	オオカ ムイチ 大塚 裕一 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 細胞情報学特論3【隔年】 基礎分子生物学6 分子微生物学輪講1A 分子微生物学輪講1B 分子微生物学輪講2A 分子微生物学輪講2B	1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平30.4)	5日	
14	専	准教授	トヨタ マサツグ 豊田 正嗣 <令和4年4月>		博士 (医学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 細胞情報学特論7【隔年】 基礎分子生物学4※ 細胞情報学輪講1A 細胞情報学輪講1B 細胞情報学輪講2A 細胞情報学輪講2B	1通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 0.7 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平28.10)	5日	
15	専	准教授	フジシロ タカシ 藤城 貴史 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特論4 分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子遺伝学特論7【隔年】 生合成輪講1A 生合成輪講1B 生合成輪講2A 生合成輪講2B	1・2①～② 1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	1 6 6 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平27.4)	5日	
16	専	准教授	ヤマグチ マサトシ 山口 雅利 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子遺伝学特論2【隔年】 基礎分子生物学5※ 植物環境科学輪講1A 植物環境科学輪講1B 植物環境科学輪講2A 植物環境科学輪講2B	1通 2通 1・2③～④ 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 0.9 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平23.8)	5日	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 生命科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
17	専	准教授	カミラ アキラ 川村 哲規 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 発生生物学特論1【隔年】 発生生物学特論1A【隔年】 発生生物学特論1B【隔年】	1通 2通 1・2①～② 1通 2通		6 6 2 2 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平19.10)	5日
18	専	准教授	ツダ サチコ 津田 佐知子 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 基礎生体制御学3【隔年】 発生生物学特論3【隔年】 発生生物学特論3A【隔年】 発生生物学特論3B【隔年】	1通 2通 1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通		6 6 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	5日
19	専	准教授	ハヤマ シン 畠山 晋 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2 微生物学特論【隔年】 微生物学特論A【隔年】 微生物学特論B【隔年】	1通 2通 1・2①～② 1通 2通		6 6 2 2 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.10)	5日
20	専	講師	コレガ シ 是枝 晋 <令和4年4月>		理学 博士		インターンシップ 分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子遺伝学特論4 生命科学特別講義 基礎分子生物学4※ 細胞生化学特論1A 細胞生化学特論1B 細胞生化学特論2A 細胞生化学特論2B	1・2通 1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 6 6 2 2 0.9 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平3.4)	5日	
21	専	助教	タカハシ ダイスケ 高橋 大輔 <令和4年4月>		博士 (農学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 生体物質生化学特論1A 生体物質生化学特論1B 生体物質生化学特論2A 生体物質生化学特論2B	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	5日	
22	専	助教	タカハシ トモコ 高橋 朋子 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 遺伝子発現学特論1A 遺伝子発現学特論1B 遺伝子発現学特論2A 遺伝子発現学特論2B	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	5日	
23	専	助教	タカハシ ヒロコ 高橋 拓子 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.3)	5日	
24	専	助教	イノウエ ユウコ 井上 悠子 <令和4年4月>		博士 (食品栄 養科学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平24.4)	5日	
25	専	助教	タケミ ショウタ 竹見 祥大 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.1)	5日	
26	専	助教	ヨシハラ リョウヘイ 吉原 亮平 <令和4年4月>		博士 (農学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平26.4)	5日	
27	兼担	教授	コバヤシ ユウイチ 小林 裕一 <令和4年4月>		経済 学士		技術者のための産業経営特論	1・2①～②・ ③～④		4	2	埼玉大学研究機構 オープンイノベーションセンター 教授 (平27.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 生命科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
28	兼任	教授	カガチ タケキ 長澤 壯之 <令和4年4月>		理学 博士		特別研修A1 特別研修A2 特別研修A3 特別研修A4 特別研修B1 特別研修B2 特別研修B3 特別研修B4	1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通	1 2 3 4 1 2 3 4	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.10)	
29	兼任	教授	アライ マサト 新井 正敏 <令和4年4月>		修士 (工学)		課題解決型特別演習A	1・2①～②・ ③～④	8	4	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平27.12)	
30	兼任	教授	テモト スム 寺本 進 <令和4年4月>		工学士		課題解決型特別演習B	1・2①～②	2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.12)	
31	兼任	教授 (研究 科長)	カホリ ヒラキ 黒川 秀樹 <令和4年4月>		工学 博士		課題解決型特別演習C	1・2③	1	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.9)	
32	兼任	准教授	カガチ マコト 長沢 誠 <令和4年4月>		修士 (教育学)		国際教育特別演習	1・2①～②	2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学部 准教授 (平25.4)	
33	兼任	講師	マツカ ナツ 松岡 聡 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子遺伝学特論6【隔年】 タンパク質科学輪講1A タンパク質科学輪講1B タンパク質科学輪講2A タンパク質科学輪講2B	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 講師 (平20.1)	
34	兼任	助教	フルガテ ヒロキ 古舘 宏之 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 助教 (平7.10)	
35	兼任	連携 教授	イマト ナホ 今本 尚子 <令和4年4月>		医学 博士		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 細胞情報学特論5	1通 2通 1・2①～②	6 6 2	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平10.5)	
36	兼任	連携 教授	スズキ タツシ 鈴木 匡 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 分子細胞学特論7	1通 2通 1・2①～②	6 6 2	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平19.10)	
37	兼任	連携 教授	カハシ シュン 高橋 俊二 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 細胞情報学特論4【隔年】	1通 2通 1・2①～②	6 6 2	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 ユニットリーダー (平17.6)	
38	兼任	連携 教授	ドウマ ナツ 堂前 直 <令和4年4月>		博士 (学術)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 細胞情報学特論6【隔年】	1通 2通 1・2①～②	6 6 2	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 ユニットリーダー (平5.4)	
39	兼任	連携 教授	シカイ マチ 眞貝 洋一 <令和4年4月>		医学 博士		生体制御学特論3 細胞記憶学輪講A【隔年】 細胞記憶学輪講B【隔年】	1・2①～② 1通 2通	2 2 2	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平23.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 生命科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年 次	担 単 位 数	年 間 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
40	兼任	連携 教授	ホリガタ 堀口 敏宏 <令和4年4月>		博士 (農学)		生体制御学特論4※	1・2①～②	0.8	1	国立研究開発法人 国立環境研究所 研究室長 (平5.4)	
41	兼任	連携 教授	マエカミ 前川 文彦 <令和4年4月>		博士 (人間科 学)		生体制御学特論4※	1・2①～②	0.6	1	国立研究開発法人 国立環境研究所 主任研究員 (平23.4)	
42	兼任	連携 教授	カシヨウ 上條 岳彦 <令和4年4月>		博士 (医学)		生体制御学特論5 腫瘍分子生物学輪講A【隔年】 腫瘍分子生物学輪講B【隔年】	1・2①～② 1通 2通	2 2 2	1 1 1	埼玉県立がんセンター 臨床腫瘍研究所 所長 (平26.4)	
43	兼任	連携 教授	ナカムラ 中村 和昭 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体応答制御学特論【隔年】 生体応答制御学輪講A【隔年】 生体応答制御学輪講B【隔年】	1・2①～② 1通 2通	2 2 2	1 1 1	国立研究開発法人 国立成育医療研究センター 研究室長 (平20.4)	
44	兼任	連携 准教授	ミヤタ 宮武 秀行 <令和4年4月>		博士 (理学)		計算機構造創薬特論【隔年】 計算機構造創薬輪講A【隔年】 計算機構造創薬輪講B【隔年】	1・2①～② 1通 2通	2 2 2	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 専任研究員 (平8.4)	
45	兼任	連携 准教授	ミヤコ 宮戸 健二 <令和4年4月>		博士 (理学)		生殖医療学特論【隔年】 生殖医療学輪講A【隔年】 生殖医療学輪講B【隔年】	1・2①～② 1通 2通	2 2 2	1 1 1	国立研究開発法人 国立成育医療研究センター 研究室長 (平15.4)	
46	兼任	講師	アノマ 有馬 百子 <令和4年4月>		博士 (工学)		知的財産権の概要とその活用	1・2①～②	2	1	栈橋国際特許事務所 代表 (平27.1)	
47	兼任	講師	コバヤシ 小林 寛典 <令和4年4月>		修士 (文化情 報)		科学技術日本語Ⅰ 科学技術日本語Ⅱ	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
48	兼任	講師	ヨシタ 吉田 美幸 <令和4年4月>		学士 (外国文 化)		科学技術日本語Ⅰ 科学技術日本語Ⅱ	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
49	兼任	講師	カシヤマ 梶山 いづみ <令和4年4月>		文学士		科学技術日本語Ⅲ	1・2①～②・ ③～④	2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平27.7)	
50	兼任	講師	カワシマ 川嶋 貴治 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特論4※	1・2①～②	0.6	1	国立研究開発法人 国立環境研究所 主任研究員 (平23.4)	

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行う場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。



教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 物質科学専攻)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
1	専	教授	スズキ タツ 鈴木 健 <令和4年4月>		理学 博士		核物理学特論Ⅲ【隔年】 核物理学特論Ⅳ【隔年】 物理学特論CⅠ【隔年】 物理学特論CⅡ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2①～② 1・2①～② 1・2①～② 1・2①～② 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 1 1 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.4)	5日	
2	専	教授	タノ マコト 田代 信 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特論BⅠ【隔年】 物理学特論BⅡ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2①～② 1・2①～② 1通 2通 1・2通 1・2通	1 1 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.9)	1日	
							国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 特任教授 (平29.4)	4日					
3	専	教授	タニ ヨシアキ 谷井 義彰 <令和4年4月>		理学 博士		場の理論Ⅰ【隔年】 場の理論Ⅱ【隔年】 物理学特論AⅠ【隔年】 物理学特論AⅡ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2①～② 1・2①～② 1・2①～② 1・2①～② 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 1 1 1 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭63.5)	5日	
4	専	教授	イシ アキヒコ 石井 昭彦 <令和4年4月>		理学 博士		有機反応化学特論【隔年】 基礎化学特論Ⅲa【隔年】 基礎化学特別研究 基礎化学輪講Ⅰa【隔年】 基礎化学輪講Ⅰb【隔年】 基礎化学輪講Ⅱa【隔年】 基礎化学輪講Ⅱb【隔年】	1・2①～② 1・2①～② 1～2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 1 12 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭62.4)	5日	
5	専	教授	ウエノ ケイジ 上野 啓司 <令和4年4月>		博士 (理学)		無機化学特論【隔年】 基礎化学特論Ⅱa【隔年】 基礎化学特別研究 基礎化学輪講Ⅰa【隔年】 基礎化学輪講Ⅰb【隔年】 基礎化学輪講Ⅱa【隔年】 基礎化学輪講Ⅱb【隔年】	1・2①～② 1・2①～② 1～2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 1 12 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.10)	5日	
6	専	教授	サイト マサ子 斎藤 雅一 <令和4年4月>		博士 (理学)		有機典型元素化学特論【隔年】 基礎化学特論Ⅲb【隔年】 基礎化学特別研究 基礎化学輪講Ⅰa【隔年】 基礎化学輪講Ⅰb【隔年】 基礎化学輪講Ⅱa【隔年】 基礎化学輪講Ⅱb【隔年】	1・2①～② 1・2③～④ 1～2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 1 12 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平8.10)	5日	
7	専	教授	タカハシ トシユキ 高柳 敏幸 <令和4年4月>		理学 博士		量子化学特論【隔年】 基礎化学特論Ⅰa【隔年】 基礎化学特別研究 基礎化学輪講Ⅰa【隔年】 基礎化学輪講Ⅰb【隔年】 基礎化学輪講Ⅱa【隔年】 基礎化学輪講Ⅱb【隔年】	1・2①～② 1・2①～② 1～2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 1 12 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.4)	5日	
8	専	教授	カサ マサノブ 若狭 雅信 <令和4年4月>		理学 博士		反応解析特論【隔年】 基礎化学特別研究 基礎化学輪講Ⅰa【隔年】 基礎化学輪講Ⅰb【隔年】 基礎化学輪講Ⅱa【隔年】 基礎化学輪講Ⅱb【隔年】	1・2③～④ 1～2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 12 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.10)	5日	
9	専	教授	オウ セイロウ 王 青躍 <令和4年4月>		博士 (工学)		資源循環制御科学【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.3)	5日	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 物質科学専攻)

調査番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配年	当次単位数	年間開講数	現職(就任年月)	申請に係る大学等の職務に 従事する週当たり平均日数
10	専	教授 (研究科長)	クロカ ヒデアキ 黒川 秀樹 <令和4年4月>		工学博士		課題解決型特別演習C インターンシップⅠ インターンシップⅡ 触媒工業化学特論Ⅰ【隔年】 高分子工業化学特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③ 1・2通 1・2通 1・2①～② 1・2①～② 1～2通 1通 2通	1 1 2 2 2 12 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.9)	5日
11	専	教授	サイトウ ショウ 齋藤 伸吾 <令和4年4月>		博士 (工学)		分析化学特論Ⅰ【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2①～② 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平19.4)	5日
12	専	教授	タケガ ヒデアキ 武田 博明 <令和4年4月>		博士 (理学)		無機固体化学特論【隔年】 応用化学特論Ⅲ※ 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2①～② 1③～④ 1～2通 1通 2通	2 0.1 12 2 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.4)	5日
13	専	教授	ネト ナト 根本 直人 <令和4年4月>		博士 (学術)		生物物理化学特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2①～② 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	5日
14	専	教授	マツカ コウジ 松岡 浩司 <令和4年4月>		博士 (理学)		機能分子合成特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2①～② 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.9)	5日
15	専	教授	ミウ カキヨ 三浦 勝清 <令和4年4月>		博士 (工学)		有機合成化学特論Ⅰ【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2①～② 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.10)	5日
16	専	教授	ヤマギチ ショウイチ 山口 祥一 <令和4年4月>		博士 (理学)		線形レーザー分光光学特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平26.4)	5日
17	専	准教授	コカ マチ 小坂 昌史 <令和4年4月>		博士 (理学)		希土類化合物特論Ⅰ【隔年】 希土類化合物特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2③ 1・2③ 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平10.3)	5日
18	専	准教授	サトウ コウジ 佐藤 浩介 <令和4年4月>		博士 (理学)		宇宙物理学特論Ⅰ【隔年】 宇宙物理学特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平29.10)	5日
19	専	准教授	サトウ ジョウ 佐藤 丈 <令和4年4月>		博士 (理学)		素粒子論Ⅰ【隔年】 素粒子論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平14.9)	5日
20	専	准教授	タニグチ ヒロミ 谷口 弘三 <令和4年4月>		博士 (理学)		有機導体特論Ⅰ【隔年】 有機導体特論Ⅱ【隔年】 物理学特論DⅠ【隔年】 物理学特論DⅡ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1・2③～④ 1・2①～② 1・2①～② 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 1 1 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 物質科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
21	専	准教授	テラガ ユキカツ 寺田 幸功 <令和4年4月>		博士 (理学)		天体物理学特論Ⅰ【隔年】	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平19.10)	4日
							天体物理学特論Ⅱ【隔年】	1・2①～②		2	1		
22	専	准教授	ヤマグチ カズキ 山口 貴之 <令和4年4月>		博士 (理学)		核物理学特論Ⅴ【隔年】	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平15.12)	4日
							核物理学特論Ⅵ【隔年】	1・2①～②		2	1		
23	専	准教授	スギハラ ヨシキ 杉原 儀昭 <令和4年4月>		博士 (薬学)		有機立体化学特論【隔年】	1・2③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.4)	5日
							基礎化学特別研究	1～2通	12	1	1		
24	専	准教授	フジハラ カシ 藤原 隆司 <令和4年4月>		博士 (理学)		構造錯体化学特論【隔年】	1・2③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.11)	5日
							基礎化学特論Ⅱb【隔年】	1・2③～④		1	1		
25	専	准教授	マエカミ キミノリ 前田 公憲 <令和4年4月>		博士 (理学)		磁気共鳴化学特論【隔年】	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	5日
							基礎化学特論Ⅰb【隔年】	1・2③～④		1	1		
26	専	准教授	イシマル ヨシヒロ 石丸 雄大 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子構造解析特論【隔年】	1・2③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平6.4)	5日
							応用化学特別研究	1～2通	12	1	1		
27	専	准教授	サキハラ ヒトシ 萩原 仁志 <令和4年4月>		博士 (工学)		触媒工業化学特論Ⅱ【隔年】	1・2③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平29.4)	5日
							応用化学特論Ⅲ※	1③～④		0.1	1		
28	専	准教授	オスダ タカヒロ 乙須 拓洋 <令和4年4月>		博士 (農学)		生体分子分光学特論【隔年】	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平27.4)	5日
							応用化学特論Ⅲ※	1③～④		0.1	1		
29	専	准教授	キノシタ ヒデアキ 木下 英典 <令和4年4月>		博士 (工学)		有機合成反応特論【隔年】	1・2③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平21.4)	5日
							応用化学特論Ⅲ※	1③～④		0.1	1		
30	専	准教授	コガマ コウイチ 小玉 康一 <令和4年4月>		博士 (工学)		超分子化学特論【隔年】	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平20.4)	5日
							応用化学特論Ⅲ※	1③～④		0.1	1		
31	専	准教授	スズキ ミチ 鈴木 美穂 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体分子工学特論【隔年】	1・2③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平2.11)	5日
							応用化学特別研究	1～2通	12	1	1		

教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 物質科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
32	専	准教授	セグチ カズヒコ 関口 和彦 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境化学技術特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	2 12 1 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平11.7)	5日
33	専	准教授	ハノケン 幡野 健 <令和4年4月>		博士 (理学)		有機元素化学特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	2 12 1 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.4)	5日
34	専	准教授	フシモリ アツヒロ 藤森 厚裕 <令和4年4月>		博士 (理学)		界面組織体化学特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1～2通 1通 2通	2 12 1 2	2 12 1 2	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平23.4)	5日
35	専	准教授	ホマ シュンジ 本間 俊司 <令和4年4月>		博士 (工学)		化学工学特論【隔年】 応用化学特論Ⅲ※ 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1③～④ 1～2通 1通 2通	2 0.1 12 2 2	2 1 12 1 1	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平1.4)	5日
36	専	准教授	ヤナ イチオ 柳瀬 郁夫 <令和4年4月>		博士 (学術)		無機材料化学特論【隔年】 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1～2通 1通 2通	2 12 2 2	2 12 1 1	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.1)	5日
37	専	講師	サイト ヒロキ 齋藤 英樹 <令和4年4月>		博士 (理学)		結晶化学特論【隔年】 基礎化学特別研究 基礎化学輪講Ⅰa【隔年】 基礎化学輪講Ⅰb【隔年】 基礎化学輪講Ⅱa【隔年】 基礎化学輪講Ⅱb【隔年】	1・2①～② 1～2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 12 1 1 1 1	2 12 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平6.10)	5日
38	専	講師	サイト マサ 佐藤 大 <令和4年4月>		博士 (理学)		天然物化学特論【隔年】 基礎化学特別研究 基礎化学輪講Ⅰa【隔年】 基礎化学輪講Ⅰb【隔年】 基礎化学輪講Ⅱa【隔年】 基礎化学輪講Ⅱb【隔年】	1・2③～④ 1～2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 12 1 1 1 1	2 12 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平6.4)	5日
39	専	講師	オウカ ケイ 太刀川 達也 <令和4年4月>		博士 (理学)		有機合成化学特論Ⅱ【隔年】 応用化学特論Ⅰ 応用化学特論Ⅱ 応用化学特論Ⅲ※ 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1①～② 1③～④ 1③～④ 1～2通 1通 2通	2 1 1 1 12 2 2	2 1 1 1 12 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平5.4)	5日
40	専	助教	エハタ シュウイチロウ 江幡 修一郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		核物理学特論Ⅰ【隔年】 核物理学特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 6 6 3 3	2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.12)	5日
41	専	助教	カツタ タル 勝田 哲 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2通 1・2通	6 6 3 3	6 6 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平29.10)	5日
42	専	助教	コバヤシ タケ 小林 拓矢 <令和4年4月>		博士 (理学)		構造解析特論Ⅰ【隔年】 構造解析特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2④ 1・2④ 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 6 6 3 3	2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.4)	5日

教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 物質科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
43	専	助教	シカ ヒロ 品岡 寛 <令和4年4月>		博士 (工学)		物性物理学特論Ⅰ【隔年】 物性物理学特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.10)	5日
44	専	助教	ホノ シンタロウ 星野 晋太郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		量子物性学特論Ⅰ【隔年】 量子物性学特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通 1・2通 1・2通	2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平29.10)	5日
45	専	助教	カガシマ ヒロキ 長嶋 宏樹 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	5日
46	専	助教	ナカノ リョウ 中田 憲男 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平18.4)	5日
47	専	助教	フルカ シュンスク 古川 俊輔 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平26.8)	5日
48	専	助教	ヤマトモキ 矢後 友暁 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平19.4)	5日
49	専	助教	イハラ ヒデアキ 石原 日出一 <令和4年4月>		修士 (工学)		応用化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平6.4)	5日
50	専	助教	ワケイ WANG Weiqian <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.10)	5日
51	専	助教	コガマ ショウヘイ 小玉 翔平 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令3.4)	5日
52	専	助教	カガチ ミチ 坂口 美幸 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.11)	5日
53	専	助教	ハンダ ユキ 半田 友衣子 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平28.4)	5日
54	専	助教	マツタ カチコ 松下 隆彦 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1～2通	12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.10)	5日
55	兼担	教授	コハヤシ ユウイチ 小林 裕一 <令和4年4月>		経済 学士		技術者のための産業経営特論	1・2①～②・ ③～④	4	2	埼玉大学研究機構 オープンイノベーションセンター 教授 (平27.4)	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 物質科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
56	兼任	教授	カガキ タケシ 長澤 壯之 <令和4年4月>		理学 博士		特別研修A1 特別研修A2 特別研修A3 特別研修A4 特別研修B1 特別研修B2 特別研修B3 特別研修B4	1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通		1 2 3 4 1 2 3 4	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.10)	
57	兼任	教授	アライ マサトシ 新井 正敏 <令和4年4月>		修士 (工学)		課題解決型特別演習A	1・2①～②・ ③～④		8	4	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平27.12)	
58	兼任	教授	テラト ススム 寺本 進 <令和4年4月>		工学士		課題解決型特別演習B	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.12)	
59	兼任	准教授	カガキ マコト 長沢 誠 <令和4年4月>		修士 (教育学)		国際教育特別演習	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学研究所 准教授 (平25.4)	
60	兼任	准教授	オホアサ ユミコ 大朝 由美子 <令和4年4月>		博士 (理学)		観測天文学特論Ⅰ【隔年】 観測天文学特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2通 1・2通 1通 2通 1・2通 1・2通		2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学 教育学部 准教授 (平21.4)	
61	兼任	講師	ヤスカ ミキオ 安武 幹雄 <令和4年4月>		博士 (理学)		有機材料化学特論【隔年】 応用化学特論Ⅲ※ 応用化学特別研究 応用化学輪講Ⅰ 応用化学輪講Ⅱ	1・2①～② 1③～④ 1～2通 1通 2通		2 0.3 12 2 2	1 1 1 1 1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 講師 (平15.7)	
62	兼任	助教	ミヤマ シンジ 道村 真司 <令和4年4月>		博士 (理学)		磁性物理学特論Ⅰ【隔年】 磁性物理学特論Ⅱ【隔年】 物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1・2①～② 1・2①～② 1通 2通 1・2通 1・2通		2 2 6 6 3 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 助教 (平24.4)	
63	兼任	連携 教授	カガキ トモヨ 上坂 友洋 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2通 1・2通		6 6 3 3	1 1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 研究室長 (平23.4)	
64	兼任	連携 教授	ツツキ ユウコ 望月 優子 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2通 1・2通		6 6 3 3	1 1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 研究室長 (平7.4)	
65	兼任	連携 教授	カネ ユキオ 金 有洙 <令和4年4月>		博士 (工学)		界面ナノ分光特論	1・2③～④		2	1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平11.4)	
66	兼任	連携 教授	カシヨウミン 侯 召民 <令和4年4月>		工学 博士		有機金属錯体化学特論	1・2③～④		2	1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平5.4)	
67	兼任	連携 教授	スガカ シノブ 袖岡 幹子 <令和4年4月>		薬学 博士		精密有機合成化学特論	1・2①～②		2	1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平16.4)	

教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 物質科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
68	兼任	連携 教授	カハラ タイ 田原 太平 <令和4年4月>		理学 博士		分光基礎論	1・2	③～④	2	1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平13.4)	
69	兼任	連携 准教授	ニオ マキコ 仁尾 真紀子 <令和4年4月>		Ph. D (アメリ カ合衆 国)		物理学特別研究1 物理学特別研究2 物理学輪講 I 物理学輪講 II	1通 2通 1・2通 1・2通		6 6 3 3	1 1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 上級研究員 (平14.3)	
70	兼任	講師	アリマ モモコ 有馬 百子 <令和4年4月>		博士 (工学)		知的財産権の概要とその活用	1・2	①～②	2	1	栈橋国際特許事務所 代表 (平27.1)	
71	兼任	講師	コバヤシ ヒロリ 小林 寛典 <令和4年4月>		修士 (文化情 報)		科学技術日本語 I 科学技術日本語 II	1・2	①～②・ ③～④ 1・2	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
72	兼任	講師	ヨシダ ミユキ 吉田 美幸 <令和4年4月>		学士 (外国文 化)		科学技術日本語 I 科学技術日本語 II	1・2	①～②・ ③～④ 1・2	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
73	兼任	講師	カシヤマ イヅミ 梶山 いづみ <令和4年4月>		文学士		科学技術日本語 III	1・2	①～②・ ③～④	2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平27.7)	

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。



教 員 の 氏 名 等												
(理工学研究科 数理電子情報専攻)												
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
1	専	教授	キモト タカシ 岸本 崇 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2 代数学特論VI 数学特論I 数学輪講VII	1通 2通 1・2③～④ 1・2①～② 1・2通	6 6 2 2 3	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.1)	5日
2	専	教授	シモカミ コウキ 下川 航也 <令和4年4月>		博士 (数理科 学)		数学特別研究1 数学特別研究2 幾何学特論V 数学特論X 数学輪講XIII	1通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1・2通	6 6 2 2 3	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.10)	5日
3	専	教授	ナガノ タケシ 長澤 壯之 <令和4年4月>		理学 博士		特別研修A1 特別研修A2 特別研修A3 特別研修A4 特別研修B1 特別研修B2 特別研修B3 特別研修B4 数理電子情報特論I※【隔年】 数学特別研究1 数学特別研究2 解析学特論V 数学特論V 数学輪講III	1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2③～④ 1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1・2通	1 2 3 4 1 2 3 4 0.8 6 6 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.10)	5日
4	専	教授	フクイ トシム 福井 敏純 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2 幾何学特論VI 数学特論XIII 数学輪講II	1通 2通 1・2③～④ 1・2①～② 1・2通	6 6 2 2 3	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.10)	5日
5	専	教授	ベズ リチャード ニール Bez Richard Neal <令和4年4月>		Doctor of Philosophy (イギリス)		数学特別研究1 数学特別研究2 解析学特論I 解析学特論II 数学特論VIII 数学輪講I	1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1・2①～② 1・2通	6 6 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平26.1)	5日
6	専	教授	マチハラ シュウジ 町原 秀二 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2 解析学特論III 数学特論VI 数学輪講V	1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1・2通	6 6 2 2 3	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平19.4)	5日
7	専	教授	イトウ カズヒト 伊藤 和人 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究I 電気電子物理学特別研究II デジタルシステム特論 電気電子物理特論I 電気電子物理学輪講II 電気電子物理学輪講III 電気電子物理学輪講IV	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.5)	5日
8	専	教授	ウチダ ヒロカズ 内田 秀和 <令和4年4月>		博士 (工学)		数理電子情報特論II※【隔年】 電気電子物理学特別研究I 電気電子物理学特別研究II 電子応用計測特論 電気電子物理学輪講I 電気電子物理学輪講II 電気電子物理学輪講III 電気電子物理学輪講IV	1・2③～④ 1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	0.6 6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.4)	5日
9	専	教授	カドノ ヒロフミ 門野 博史 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理学特別研究I 電気電子物理学特別研究II 環境応用光学特論 電気電子物理学輪講I 電気電子物理学輪講II 電気電子物理学輪講III 電気電子物理学輪講IV	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭63.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 数理電子情報専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
10	専	教授	カネヨシ 金子 裕良 <令和4年4月>		博士 (工学)		数理電子情報特論Ⅰ※【隔年】 電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 電機制御特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1・2③～④ 1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	0.6 6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)	5日
11	専	教授	カヤマシ 酒井 政道 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 量子化材料物性工学特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平8.4)	5日
12	専	教授	シライバシ 白井 肇 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 薄膜表面工学特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平6.4)	5日
13	専	教授	マツウチ 馬 哲旺 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ マイクロ波回路特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平10.4)	5日
14	専	教授	マエヤマ 前山 光明 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ エネルギー制御特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平5.4)	5日
15	専	教授	ミヨケ 明連 広昭 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 先端計算機工学特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平10.3)	5日
16	専	教授	ヤガチヒロキ 矢口 裕之 <令和4年4月>		博士 (工学)		インターンシップ 電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 光エレクトロニクス物性特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1・2通 1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	2 6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平10.10)	5日
17	専	教授	ヤマノサトシ 山根 敏 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ システム制御特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.4)	5日
18	専	教授	ウチノ 内田 淳史 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 複雑系フォトニクス特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2①～② 1・2通 1①～② 1③～④	6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	5日

教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 数理電子情報専攻)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
19	専	教授	クリキ イチロ 栗木 一郎 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 視覚情報処理システム特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令3.4)	5日
20	専	教授	コバヤシ オシノリ 小林 貴訓 <令和4年4月>		博士 (情報理 工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 画像応用システム特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2①～② 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平19.10)	5日
21	専	教授	コムロ タカシ 小室 孝 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ センシングシステム特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平23.4)	5日
22	専	教授	シマムラ テツヤ 島村 徹也 <令和4年4月>		工学 博士		インターンシップ 情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 信号処理特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1・2通 1通 2通 1・2①～② 1・2通 1①～② 1③～④		2 6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)	5日
23	専	教授	ヨシカワ リアキ 吉浦 紀晃 <令和4年4月>		博士 (学術)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 形式的手法特論 サイバーセキュリティ特論 情報処理特別演習 プログラミング特別演習Ⅰ プログラミング特別演習Ⅱ プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2③～④ 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 4 2 2 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平18.6)	5日
24	専	准教授	ウミノハラ マトカ 海老原 円 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2 代数学特論Ⅰ 代数学特論Ⅱ 代数学特論Ⅴ 数学特論Ⅱ 数学輪講Ⅸ	1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1・2①～② 1・2①～② 1・2通		6 6 2 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.10)	5日
25	専	准教授	サクライ ヨウヘイ 櫻井 陽平 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2 幾何学特論Ⅰ 幾何学特論Ⅱ 数学特論Ⅻ 数学輪講Ⅻ	1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1・2①～② 1・2通		6 6 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (令3.4)	5日
26	専	准教授	サトウ ヨウヘイ 佐藤 洋平 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2 解析学特論Ⅵ 数学特論Ⅶ 数学輪講Ⅶ	1通 2通 1・2③～④ 1・2①～② 1・2通		6 6 2 2 3	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.10)	5日
27	専	准教授	オホハラ マサキ 大平 昌敬 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究Ⅰ 電気電子物理工学特別研究Ⅱ 電磁波工学特論 電気電子物理工学輪講Ⅰ 電気電子物理工学輪講Ⅱ 電気電子物理工学輪講Ⅲ 電気電子物理工学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④		6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平22.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 数理電子情報専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
28	専	准教授	カサキ コウイチ 柿崎 浩一 <令和4年4月>		博士 (学術)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 情報記録材料工学特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平6.7)	5日
29	専	准教授	カシマ ケンジ 神島 謙二 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ ハイブリッド磁気工学特論 マテリアルリサーチストラテ ジー特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 2 1 1 1 1	6 6 2 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平15.4)	5日
30	専	准教授	キハラ コウイチ 木村 雄一 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 電磁界解析特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.4)	5日
31	専	准教授	シオカ タツシ 塩田 達俊 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 光波センシング特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.4)	5日
32	専	准教授	タノ トオル 田井野 徹 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 超伝導集積回路工学特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平14.10)	5日
33	専	准教授	ツグ トシキ 辻 俊明 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 人間支援システム特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平19.4)	5日
34	専	准教授	ハセガワ ヤスヒロ 長谷川 靖洋 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ エネルギー変換材料特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.12)	5日
35	専	准教授	ヒジカタ ヤス 土方 泰斗 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 先端エレクトロニクス材料特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2① 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平11.10)	5日
36	専	准教授	ホンダ センタロウ 本多 善太郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理学特別研究Ⅰ 電気電子物理学特別研究Ⅱ 機能磁性学特論 電気電子物理学輪講Ⅰ 電気電子物理学輪講Ⅱ 電気電子物理学輪講Ⅲ 電気電子物理学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 2 1 1 1 1	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.10)	5日

教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 数理電子情報専攻)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
37	専	准教授	ヤギ シュウヘイ 八木 修平 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究Ⅰ 電気電子物理工学特別研究Ⅱ 半導体工学特論 電気電子物理工学輪講Ⅰ 電気電子物理工学輪講Ⅱ 電気電子物理工学輪講Ⅲ 電気電子物理工学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④		6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平22.4)	5日
38	専	准教授	ヤマノケ ヤスシ 山納 康 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究Ⅰ 電気電子物理工学特別研究Ⅱ 電力工学特論 電気電子物理工学輪講Ⅰ 電気電子物理工学輪講Ⅱ 電気電子物理工学輪講Ⅲ 電気電子物理工学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2①～② 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④		6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.4) 筑波大学 数理物質系 准教授 (平31.4)	4日 1日
39	専	准教授	アヅミ タカ 安積 卓也 <令和4年4月>		博士 (情報科 学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 組込みリアルタイムシステム特 論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平30.4)	5日
40	専	准教授	オホボ シュン 大久保 潤 <令和4年4月>		博士 (情報科 学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 確率の情報処理特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平27.5)	5日
41	専	准教授	ゴトウ ユウイチ 後藤 祐一 <令和4年4月>		博士 (工学)		数理電子情報特論Ⅰ※【隔年】 数理電子情報特論Ⅱ※【隔年】 情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 知識表現特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1・2③～④ 1・2③～④ 1通 2通 1・2①～② 1・2通 1①～② 1③～④	0.6 0.6	6 6 2 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平17.4)	5日
42	専	准教授	ツツミカ ナルマサ 堤田 成政 <令和4年4月>		博士 (地球環 境学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 地理情報科学特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2①～② 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (令3.1)	5日
43	専	准教授	マツタ テツナ 松田 哲直 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 情報理論特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2①～② 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (令3.4)	5日
44	専	准教授	ヤマタ トシノリ 山田 敏規 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 離散アルゴリズム特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2① 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平15.4)	5日
45	専	准教授	ヨシカワ ノブカズ 吉川 宣一 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 情報工学特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.4)	5日

教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 数理電子情報専攻)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
46	専	助教	エカシラ シンジ 江頭 信二 <令和4年4月>		博士 (数理科 学)		数学特別研究1 数学特別研究2 幾何学特論III 幾何学特論IV【隔年】 数学特論XI 数学輪講X	1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1・2①～② 1・2通	6 6 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平6.4)	5日
47	専	助教	カネミツ アキヒロ 金光 秋博 <令和4年4月>		博士 (数理科 学)		数学特別研究1 数学特別研究2 数学特論III 数学輪講XIV	1通 2通 1・2③～④ 1・2通	6 6 2 3	1 1 1 1	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令3.4)	5日
48	専	助教	ジャン ステファン コスキヴィルタ Jean Stefan KOSKIVIRTA <令和4年4月>		PhD in Mathemati cs (フラ ンス)		数学特別研究1 数学特別研究2 代数学特論III 代数学特論IV【隔年】 数学特論IV 数学輪講XI	1通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1・2③～④ 1・2通	6 6 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.10)	5日
49	専	助教	カハシ ユキ 高橋 悠樹 <令和4年4月>		PhD in Mathemati cs (アメ リカ合衆 国)		数理電子情報特論II※【隔年】 数学特別研究1 数学特別研究2 解析学特論IV【隔年】 解析学特論VII【隔年】 数学特論IX 数学輪講VI	1・2③～④ 1通 2通 1・2③～④ 1・2③～④ 1・2①～② 1・2通	0.8 6 6 2 2 2 3	1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.10)	5日
50	専	助教	イシカワ リョウ 石川 良 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理学特別研究 I 電気電子物理学特別研究 II 電気電子物理学輪講 I 電気電子物理学輪講 II 電気電子物理学輪講 III 電気電子物理学輪講 IV	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平25.4)	5日
51	専	助教	イナガキ ユキ 稲田 優貴 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究 I 電気電子物理学特別研究 II 電気電子物理学輪講 I 電気電子物理学輪講 II 電気電子物理学輪講 III 電気電子物理学輪講 IV	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.4)	5日
52	専	助教	シズマ マキ 清水 麻希 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理学特別研究 I 電気電子物理学特別研究 II 電気電子物理学輪講 I 電気電子物理学輪講 II 電気電子物理学輪講 III 電気電子物理学輪講 IV	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	5日
53	専	助教	ナカハタ マサト 成瀬 雅人 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理学特別研究 I 電気電子物理学特別研究 II 電気電子物理学輪講 I 電気電子物理学輪講 II 電気電子物理学輪講 III 電気電子物理学輪講 IV	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平24.4)	5日
54	専	助教	フジカワ サチエ 藤川 紗千恵 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究 I 電気電子物理学特別研究 II 電気電子物理学輪講 I 電気電子物理学輪講 II 電気電子物理学輪講 III 電気電子物理学輪講 IV	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	5日
55	専	助教	マナベ テツヤ 間邊 哲也 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理学特別研究 I 電気電子物理学特別研究 II 電気電子物理学輪講 I 電気電子物理学輪講 II 電気電子物理学輪講 III 電気電子物理学輪講 IV	1通 2通 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	6 6 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平25.4)	5日
56	専	助教	ミヅノ リョウタ 三澤 亮太 <令和4年4月>		博士 (情報学)		電気電子物理学輪講I 電気電子物理学輪講II 電気電子物理学輪講III 電気電子物理学輪講IV	1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.1)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 数理電子情報専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
57	専	助教	ヨシズミ トシロ 吉住 年弘 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学輪講Ⅰ 電気電子物理工学輪講Ⅱ 電気電子物理工学輪講Ⅲ 電気電子物理工学輪講Ⅳ	1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④		1 1 1 1	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.10)	5日
58	専	助教	カノ カズキ 菅野 円隆 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.4)	5日
59	専	助教	キムラ ケイ 木村 慧 <令和4年4月>		博士 (情報理 工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	5日
60	専	助教	シマダ ユカ 島田 裕 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.1)	5日
61	専	助教	スギウラ ヒロシ 杉浦 陽介 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.4)	5日
62	専	助教	ヤスイ ノブコ 安井 希子 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.9)	5日
63	兼担	教授	コバヤシ ユウイチ 小林 裕一 <令和4年4月>		経済 学士		技術者のための産業経営特論	1・2①～②・ ③～④		4	2	埼玉大学研究機構 オープンイノベーションセンター 教授 (平27.4)	
64	兼担	教授	アライ マサトシ 新井 正敏 <令和4年4月>		修士 (工学)		課題解決型特別演習A	1・2①～②・ ③～④		8	4	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平27.12) マレリ(株) テクノロジーオフィサ	
65	兼担	教授	テラモト ススム 寺本 進 <令和4年4月>		工学士		課題解決型特別演習B	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.12) (株)オリジン 調査役	
66	兼担	教授 (研究 科長)	カワカミ ヒロキ 黒川 秀樹 <令和4年4月>		工学 博士		課題解決型特別演習C	1・2③		1	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.9)	
67	兼担	教授	シゲハラ タカヒ 重原 孝臣 <令和4年4月>		理学 博士		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 数値解析特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1①～② 1③～④		6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.4)	
68	兼担	准教授	カガサキ マコト 長沢 誠 <令和4年4月>		修士 (教育学)		国際教育特別演習	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学研究所 准教授 (平25.4)	
69	兼担	准教授	ハチガリ ユキ 長谷川 有貴 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究Ⅰ 電気電子物理工学特別研究Ⅱ スマートセンシング特論 電気電子物理工学輪講Ⅰ 電気電子物理工学輪講Ⅱ 電気電子物理工学輪講Ⅲ 電気電子物理工学輪講Ⅳ	1通 2通 1・2③～④ 1①～② 1③～④ 2①～② 2③～④		6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学 情報メディア基盤センター 准教授 (平14.4)	

教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 数理電子情報専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
70	兼任	准教授	マツナガ ヤスヒロ 松永 康佑 <令和4年4月>		博士 (理学)		情報工学特別研究Ⅰ 情報工学特別研究Ⅱ 生命情報工学特論 プレゼンテーション特別演習 情報工学輪講Ⅰ 情報工学輪講Ⅱ	1通 2通 1・2③～④ 1・2通 1①～② 1③～④	6 6 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学 情報メディア基盤センター 准教授 (平31.4)	
71	兼任	連携 教授	ヒラヤマ ヒデキ 平山 秀樹 <令和4年4月>		博士 (工学)		量子光デバイス工学特論	1・2③～④	2	1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平6.4)	
72	兼任	連携 教授	アベ ヒデキ 阿部 英樹 <令和4年4月>		博士 (学術)		水素変換材料工学特論	1・2③～④	2	1	国立研究開発法人 物質・材料研究機構 主席研究員 (平7.4)	
73	兼任	連携 准教授	アヤマ テツヤ 青山 哲也 <令和4年4月>		博士 (工学)		有機半導体工学特論	1・2③～④	2	1	国立研究開発法人 理化学研究所 専任研究員 (平13.4)	
74	兼任	連携 准教授	クリハラ ヒデキ 栗原 英紀 <令和4年4月>		博士 (工学)		新材料の製品化プロセス特論	1・2①～②	2	1	埼玉県立 産業技術総合センター 研究員 (平9.4)	
75	兼任	連携 准教授	ハンダ カシ 半田 隆志 <令和4年4月>		博士 (工学)		新材料の製品化プロセス特論	1・2①～②	2	1	埼玉県立 産業技術総合センター 研究員 (平15.4)	
76	兼任	講師	アリマ モモコ 有馬 百子 <令和4年4月>		博士 (工学)		知的財産権の概要とその活用	1・2①～②	2	1	棧橋国際特許事務所 代表 (平27.1)	
77	兼任	講師	コバヤシ ヒロリ 小林 寛典 <令和4年4月>		修士 (文化情 報)		科学技術日本語Ⅰ 科学技術日本語Ⅱ	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
78	兼任	講師	ヨシダ ミユキ 吉田 美幸 <令和4年4月>		学士 (外国文 化)		科学技術日本語Ⅰ 科学技術日本語Ⅱ	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
79	兼任	講師	カシヤマ イヅミ 梶山 いづみ <令和4年4月>		文学士		科学技術日本語Ⅲ	1・2①～②・ ③～④	2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平27.7)	

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。

教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 機械科学専攻)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
1	専	教授	アライ ヨシオ 荒居 善雄 <令和4年4月>		工学 博士		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 材料力学特論	1通 2通 1通 2通 1・2③		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.3)	5日
2	専	教授	アライ ヨシオ 荒木 稚子 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 破壊力学特論	1通 2通 1通 2通 1・2④		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	5日
3	専	教授	イケノ ジュンイチ 池野 順一 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II トランスファ・エンジニアリン グ特論 加工物性特論	1通 2通 1通 2通 1・2③~④ 1・2③~④		3 3 3 3 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平11.10)	5日
4	専	教授	オハラ テツオウ 小原 哲郎 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 熱エネルギー特論	1通 2通 1通 2通 1・2③~④		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平4.4)	5日
5	専	教授	カヤマ ケンスケ 蔭山 健介 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 材料工学特論	1通 2通 1通 2通 1・2①		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.4)	5日
6	専	教授	タカサキ マサキ 高崎 正也 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 機械システム制御特論 メカトロニクスシステム特論	1通 2通 1通 2通 1・2①~② 1・2③~④		3 3 3 3 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平13.4)	5日
7	専	教授	カガネ タカオ 長嶺 拓夫 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 機械力学特論	1通 2通 1通 2通 1・2④		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.4)	5日
8	専	教授	ヒラハタ ヒロユキ 平原 裕行 <令和4年4月>		工学 博士		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 気体力学特論	1通 2通 1通 2通 1・2①~②		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭62.10)	5日
9	専	教授	ヤマモト ヒロシ 山本 浩 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 機械要素特論	1通 2通 1通 2通 1・2③		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.4)	5日
10	専	教授	ワタナベ テツヤ 渡邊 鉄也 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 動システム解析特論	1通 2通 1通 2通 1・2④		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平11.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 機械科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
11	専	教授	ワタキ ケイイチ 綿貫 啓一 <令和4年4月>		工学 博士		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II マンマシンインターフェイス特 論 ロボティクス特論	1通 2通 1通 2通 1・2② 1・2②	3 3 3 3 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)	5日
12	専	准教授	カエデ カズノリ 楓 和憲 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II ユーザビリティ工学特論	1通 2通 1通 2通 1・2③～④	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平21.4)	5日
13	専	准教授	カネコ ジュンイチ 金子 順一 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II 生産工学特論 加工学特論 インターンシップ	1通 2通 1通 2通 1・2③～④ 1・2③～④ 1・2通	3 3 3 3 2 2 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.4)	5日
14	専	准教授	カン トシロク 姜 東赫 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II 流体力学特論	1通 2通 1通 2通 1・2①～②	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平30.3)	5日
15	専	准教授	コサキ シノブ 琴坂 信哉 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II バイオロボット工学特論	1通 2通 1通 2通 1・2①～②	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.4)	5日
16	専	准教授	サイ ケニア 坂井 建宣 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II 材料評価工学特論	1通 2通 1通 2通 1・2④	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	5日
17	専	准教授	オノ コロチル 田所 千治 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II 機械システムダイナミクス特論	1通 2通 1通 2通 1・2①	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平28.4)	5日
18	専	准教授	ナルカワ テルマサ 成川 輝真 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II 機械運動学特論	1通 2通 1通 2通 1・2②	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平24.4)	5日
19	専	准教授	ハラ マサユキ 原 正之 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II 認知工学特論	1通 2通 1通 2通 1・2②	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.9)	5日
20	専	准教授	ホシマ リョウイチ 程島 竜一 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II ロボット設計学特論	1通 2通 1通 2通 1・2①～②	3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平22.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 機械科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
21	専	准教授	マエダ シン 前田 慎市 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II 反応性気体力学特論	1通 2通 1通 2通 1・2③～④		3 3 3 3 2	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.4)	5日
22	専	助教	アベ タケキ 阿部 壮志 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学論講 I 機械科学論講 II	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.1)	5日
23	専	助教	テイ エイ 鄭 穎 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学論講 I 機械科学論講 II	1通 2通		3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平16.4)	5日
24	専	助教	ナガノ ヨシノ 成澤 慶宜 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学論講 I 機械科学論講 II	1通 2通		3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	5日
25	専	助教	ヤマダ リキス 山田 典靖 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学論講 I 機械科学論講 II	1通 2通		3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	5日
26	専	助教	ヤマダ ヨウヘイ 山田 洋平 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学論講 I 機械科学論講 II	1通 2通		3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.4)	5日
27	兼任	教授	コバヤシ ヨウイチ 小林 裕一 <令和4年4月>		経済 学士		技術者のための産業経営特論	1・2①～②・ ③～④		4	2	埼玉大学研究機構 オープンイノベーションセンター 教授 (平27.4)	
28	兼任	教授	ナガノ タケキ 長澤 壯之 <令和4年4月>		理学 博士		特別研修A1 特別研修A2 特別研修A3 特別研修A4 特別研修B1 特別研修B2 特別研修B3 特別研修B4	1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通		1 2 3 4 1 2 3 4	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.10)	
29	兼任	教授	アライ マサトシ 新井 正敏 <令和4年4月>		修士 (工学)		課題解決型特別演習A	1・2①～②・ ③～④		8	4	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平27.12) マレリ (株) テクノロジーオフィサ	
30	兼任	教授	テラモト ススム 寺本 進 <令和4年4月>		工学士		課題解決型特別演習B	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.12) (株)オリジン 調査役	
31	兼任	教授 (研究 科長)	クロカワ ヒロキ 黒川 秀樹 <令和4年4月>		工学 博士		課題解決型特別演習C	1・2③		1	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.9)	
32	兼任	准教授	ナガサキ マコト 長沢 誠 <令和4年4月>		修士 (教育学)		国際教育特別演習	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学研究所 准教授 (平25.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 機械科学専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年 次	担 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
33	兼任	講師	アリマ モモコ 有馬 百子 <令和4年4月>		博士 (工学)		知的財産権の概要とその活用	1・2①～②	2	1	栈橋国際特許事務所 代表 (平27.1)	
34	兼任	講師	コハヤシ ヒロリ 小林 寛典 <令和4年4月>		修士 (文化情 報)		科学技術日本語 I 科学技術日本語 II	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
35	兼任	講師	ヨシタ ミユキ 吉田 美幸 <令和4年4月>		学士 (外国文 化)		科学技術日本語 I 科学技術日本語 II	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④	2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
36	兼任	講師	カシヤマ イヅミ 梶山 いづみ <令和4年4月>		文学士		科学技術日本語 III	1・2①～②・ ③～④	2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平27.7)	

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行うとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。

教 員 の 氏 名 等												
(理工学研究科 環境社会基盤専攻)												
調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に 従事する週当たり平均日数
1	専	教授	ウチムラ タロウ 内村 太郎 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 地盤構造学(E) 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ アドヴァンスト・インターン シップ	1通 2通 2通 1・2③ 1通 2通 1・2①～②	6 6 12 2 1 1 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平28.10)	5日
2	専	教授	オキ ヨシアキ 奥井 義昭 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 構造設計と解析(JE) 社会基盤特別講義Ⅰ 社会基盤特別講義Ⅱ 社会基盤特別講義Ⅲ(E) 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ 構造力学Ⅲ 国際工学資格(FE資格)	1通 2通 2通 1・2② 1・2④ 1・2①～② 1・2①～② 1通 2通 1② 1・2通	6 6 12 2 2 2 2 1 1 2 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平1.4)	5日
3	専	教授	ナガタ マサヒコ 長田 昌彦 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 地図デザイン序説(JE) 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ	1通 2通 2通 1・2① 1通 2通	6 6 12 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平1.4)	5日
4	専	教授	カワモト ケン 川本 健 <令和4年4月>		博士 (農学)		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ 地盤環境工学特論 地盤環境工学特論(E)	1通 2通 2通 1通 2通 1・2③～④ 1・2④	6 6 12 1 1 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.4)	5日
5	専	教授	クボタ ヒロシ 久保田 尚 <令和4年4月>		工学 博士		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 交通システム特論(E) 地域・都市計画エクササイズ※ 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ	1通 2通 2通 1・2① 1・2③ 1通 2通	6 6 12 2 0.1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭63.6)	5日
6	専	教授	クニノシロウ 桑野 二郎 <令和4年4月>		工学 博士		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 地盤材料学(E) 地盤地震工学特論(E) 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ	1通 2通 2通 1・2①～② 1・2③～④ 1通 2通	6 6 12 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平17.5)	5日
7	専	教授	サイノウ マサト 齊藤 正人 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 耐震工学特論(E) インターナショナルコミュニ ケーション 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ	1通 2通 2通 1・2③ 1・2通 1通 2通	6 6 12 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平13.4)	5日
8	専	教授	タナカ ノブオ 田中 規夫 <令和4年4月>		工学 博士		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 環境社会基盤国際特別研究Ⅲ 水圏数値解析学(E) 水圏工学実践(JE) 環境社会基盤工学輪講Ⅰ 環境社会基盤工学輪講Ⅱ	1通 2通 2通 1・2① 1・2通 1通 2通	6 6 12 2 2 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 環境社会基盤専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する適当 たり平均日数
9	専	教授	フジノ タケ 藤野 毅 <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 水質管理特論 (JE)	1通 2通 2通 1通 2通 1・2③	6 6 12 1 1 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平8.6)	5日
10	専	教授	マキ タケシ 牧 剛史 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 構造物のための数値解析 (E)※ コンクリート構造物の設計と維 持管理 (E)※ 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1通 2通	6 6 12 0.7 1.3 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.4)	5日
11	専	教授	マツモト ヤスオ 松本 泰尚 <令和4年4月>		Ph.D (イギ リス)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 構造振動論 (E)※ 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1・2① 1通 2通	6 6 12 1.2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平11.10)	5日
12	専	准教授	アサモト シノブ 浅本 晋吾 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 構造物のための数値解析 (E)※ コンクリート構造物の設計と維 持管理 (E)※ 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1通 2通	6 6 12 1.3 0.7 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平18.6)	5日
13	専	准教授	オガチ チアキ 小口 千明 <令和4年4月>		博士 (理学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 地形プロセス学特論 (E) 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1・2①～② 1通 2通	6 6 12 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.6)	5日
14	専	准教授	コジマ アヤ 小嶋 文 <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 地域・都市計画エクササイズ※ 計画数理特論 (JE) 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1・2③ 1・2① 1通 2通	6 6 12 1.8 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平24.4)	5日
15	専	准教授	タニヤマ ヒロシ 谷山 尚 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 地震動特論 (JE) 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 耐震・地震工学※	1通 2通 2通 1・2② 1通 2通 1③～④	6 6 12 2 1 1 1.9	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平3.4)	5日
16	専	准教授	トリキ 党 紀 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 構造振動論 (E)※ 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 土木のためのAIとデータサイエ ンス (JE)※	1通 2通 2通 1・2① 1通 2通 1・2③～④	6 6 12 0.8 1 1 1.6	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.4)	5日
17	専	准教授	フカシキヨカ 深堀 清隆 <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 地域・都市計画エクササイズ※ 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 地域景観特論 (JE)	1通 2通 2通 1・2③ 1通 2通 1・2①～②	6 6 12 0.1 1 1 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平9.4)	5日

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 環境社会基盤専攻)

調査番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配年	担当単位数	年間開講数	現職(就任年月)	申請に係る大学等の職務に 従事する週当たり平均日数
18	専	准教授	モキ ヒデノリ 茂木 秀則 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 振動波動解析学特論 (JE) 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1・2④ 1通 2通	6 6 12 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平6.4)	5日
19	専	准教授	ヤキチ ションジ 八木澤 順治 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 水圏工学実践 (JE) 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 水圏数値解析実践 (E) アドヴァンスト・インターン シップ	1通 2通 2通 1・2通 1通 2通 1・2③ 1・2①～②	6 6 12 2 1 1 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平21.4)	5日
20	専	助教	イカラン ヨシヤ 五十嵐 善哉 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1通 2通	6 6 12 1 1	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.4)	5日
21	専	助教	カリ テッパイ 加藤 哲平 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 土木のためのAIとデータサイエ ンス (JE)※	1通 2通 2通 1通 2通 1・2③～④	6 6 12 1 1 0.4	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.4)	5日
22	専	助教	ゴイト チャンドラ シェカー Goit Chandra Shekhar <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 耐震・地震工学※	1通 2通 2通 1通 2通 1③～④	6 6 12 1 1 0.1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平28.4)	5日
23	専	助教	セナビラタナ ムガリカト ン セニヤ ジャヤサンカ Senavirathna M D H Jayasanka <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II 生物環境応答特論 (E)	1通 2通 2通 1通 2通 1・2④	6 6 12 1 1 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平29.8)	5日
24	専	助教	トガシ ヨウタ 富樫 陽太 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1通 2通	6 6 12 1 1	1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.3)	5日
25	専	助教	ルアン ヤオ Luan Yao <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 環境社会基盤国際特別研究 III コンクリートとその他セメント 系材料 (E) 環境社会基盤工学輪講 I 環境社会基盤工学輪講 II	1通 2通 2通 1・2③ 1通 2通	6 6 12 2 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平25.10)	5日
26	兼任	教授	コハヤシ ヨウイチ 小林 裕一 <令和4年4月>		経済 学士		技術者のための産業経営特論	1・2①～②・ ③～④	4	2	埼玉大学研究機構 オープンイノベーションセンター 教授 (平27.4)	
27	兼任	教授	ナカチ タケキ 長澤 壯之 <令和4年4月>		理学 博士		特別研修A1 特別研修A2 特別研修A3 特別研修A4 特別研修B1 特別研修B2 特別研修B3 特別研修B4	1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通 1・2通	1 2 3 4 1 2 3 4	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.10)	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 環境社会基盤専攻)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
28	兼任	教授	アライ マサシ 新井 正敏 <令和4年4月>		修士 (工学)		課題解決型特別演習A	1・2①～②・ ③～④	8	4	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平27.12)	
											マレリ(株) テクノロジオフィサ	
29	兼任	教授	テラト ススム 寺本 進 <令和4年4月>		工学士		課題解決型特別演習B	1・2①～②	2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.12)	
											(株)オリジン 調査役	
30	兼任	教授 (研究 科長)	クロカ ヒデキ 黒川 秀樹 <令和4年4月>		工学 博士		課題解決型特別演習C	1・2③	1	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.9)	
31	兼任	准教授	カガキ マコト 長沢 誠 <令和4年4月>		修士 (教育学)		国際教育特別演習	1・2①～②	2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学部 准教授 (平25.4)	
32	兼任	講師	アリマ モモコ 有馬 百子 <令和4年4月>		博士 (工学)		知的財産権の概要とその活用	1・2①～②	2	1	桝橋国際特許事務所 代表 (平27.1)	
33	兼任	講師	コバヤシ ヒロリ 小林 寛典 <令和4年4月>		修士 (文化情 報)		科学技術日本語 I	1・2①～②・ ③～④	2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
							科学技術日本語 II	1・2①～②・ ③～④	2	2		
34	兼任	講師	ヨシガ ミキ 吉田 美幸 <令和4年4月>		学士 (外国文 化)		科学技術日本語 I	1・2①～②・ ③～④	2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
							科学技術日本語 II	1・2①～②・ ③～④	2	2		
35	兼任	講師	カシヤマ イブミ 梶山 いづみ <令和4年4月>		文学士		科学技術日本語III	1・2①～②・ ③～④	2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平27.7)	
36	兼任	講師	サイモン リュー Simon Jian-Hong Liu <令和4年4月>		博士 (学術)		建設マネジメント(E)	1・2③～④	2	1	上智大学 非常勤講師 (平23.4)	
37	兼任	講師	ガエタン モロ Gaetan Moreau <令和4年4月>		Ph. D (フラン ス)		科学技術英語特論 I 科学技術英語特論II(E)	1・2③～④ 1・2③	1 1	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平26.4)	

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の内容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。



## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
12	兼任	教授	サカタ イロウ 坂田 一郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平23.4)	
13	兼任	教授	タケナリ ダイスケ 竹澤 大輔 <令和4年4月>		Ph.D (アメリカ合衆 国)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.10)	
14	兼任	教授	タナ シウイ 田中 秀逸 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.2)	
15	兼任	教授	ウハラ シンジ 塚原 伸治 <令和4年4月>		博士 (農学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平21.4)	
16	兼任	教授	ヤマシキヨウ 弥益 恭 <令和4年4月>		理学 博士		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.4)	
17	兼任	教授	スズキ タツ 鈴木 健 <令和4年4月>		理学 博士		物理学特別研究1 物理学輪講 I 物理学輪講 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.4)	
18	兼任	教授	タノ マコト 田代 信 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学輪講 I 物理学輪講 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.9) 国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 特任教授 (平29.4)	
19	兼任	教授	タニ ヨシキ 谷井 義彰 <令和4年4月>		理学 博士		物理学特別研究1 物理学輪講 I 物理学輪講 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭63.5)	
20	兼任	教授	イシ アキヒロ 石井 昭彦 <令和4年4月>		理学 博士		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭62.4)	
21	兼任	教授	ウエノ ケイジ 上野 啓司 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.10)	
22	兼任	教授	サイノウ マサヒ 齋藤 雅一 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平8.10)	
23	兼任	教授	タカヤギ トシユキ 高柳 敏幸 <令和4年4月>		理学 博士		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.4)	
24	兼任	教授	ワカサ マサノブ 若狭 雅信 <令和4年4月>		理学 博士		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.10)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
25	兼任	教授	オウ セイワ 王 青躍 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究 資源循環制御科学 科学技術応用学際特別演習Ⅰ 科学技術応用学際特別演習Ⅱ 科学技術応用学際特別演習Ⅲ 科学技術応用学際特別演習Ⅳ 科学技術応用学際特別演習Ⅴ 科学技術応用学際特別演習Ⅵ	1~2通 1・2③~④ 1・2①~② 1・2③~④ 1①~② 1③~④		12 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.3)	
26	兼任	教授	サイト シンゴ 齋藤 伸吾 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平19.4)	
27	兼任	教授	タケノ ヒロアキ 武田 博明 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.4)	
28	兼任	教授	ネト ナオト 根本 直人 <令和4年4月>		博士 (学術)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	
29	兼任	教授	マツカ コウジ 松岡 浩司 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.9)	
30	兼任	教授	ミナミ カキヨ 三浦 勝清 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.10)	
31	兼任	教授	ヤマカチ ショウイチ 山口 祥一 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平26.4)	
32	兼任	教授	キシモト タカシ 岸本 崇 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.1)	
33	兼任	教授	シモカミ コウヤ 下川 航也 <令和4年4月>		博士 (数理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平14.10)	
34	兼任	教授	フカイ トシスミ 福井 敏純 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.10)	
35	兼任	教授	ベズ リチャード ニール Bez Richard Neal <令和4年4月>		Doctor of Philosophy (イギリス)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平26.1)	
36	兼任	教授	マハラ シュウジ 町原 秀二 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平19.4)	
37	兼任	教授	イトウ カズヒト 伊藤 和人 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究Ⅰ	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.5)	
38	兼任	教授	ウチノ ヒデアキ 内田 秀和 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究Ⅰ	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.4)	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
39	兼任	教授	カドノ ヒロフミ 門野 博史 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理工学特別研究I 光応用技術特論 科学技術応用学際特別演習 I 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別演習 II	1通 1・2③～④ 1・2①～② 1・2③～④ 1・2③～④ 1①～② 1③～④	6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭63.4)	
40	兼任	教授	カネコ ヤスヨシ 金子 裕良 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)	
41	兼任	教授	カワイ マサヒコ 酒井 政道 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平8.4)	
42	兼任	教授	シライ ハジメ 白井 肇 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平6.4)	
43	兼任	教授	マテウチ 馬 哲旺 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平10.4)	
44	兼任	教授	マエヤマ ミツアキ 前山 光明 <令和4年4月>		工学 博士		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平5.4)	
45	兼任	教授	ミヨウレン ヒロアキ 明連 広昭 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平10.3)	
46	兼任	教授	ヤクチ ヒロユキ 矢口 裕之 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平10.10)	
47	兼任	教授	ヤマネ ナトシ 山根 敏 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I 国際電気・環境規格特論 科学技術応用学際特別演習 I 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別演習 II	1通 1・2③～④ 1・2①～② 1・2③～④ 1・2③～④ 1①～② 1③～④	6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.4)	
48	兼任	教授	ウチガ アツシ 内田 淳史 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	
49	兼任	教授	クリイ イロウ 栗木 一郎 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令3.4)	
50	兼任	教授	コバヤシ ヨシノリ 小林 貴訓 <令和4年4月>		博士 (情報理 工学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平19.10)	
51	兼任	教授	コモ カシ 小室 孝 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平23.4)	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
52	兼任	教授	シハラ 孝臣 重原 孝臣 <令和4年4月>		理学 博士		情報工学特別研究Ⅰ プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.4)	
53	兼任	教授	シムラ テツヤ 島村 徹也 <令和4年4月>		工学 博士		情報工学特別研究Ⅰ プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)	
54	兼任	教授	シウラ リアキ 吉浦 紀晃 <令和4年4月>		博士 (学術)		情報工学特別研究Ⅰ プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平18.6)	
55	兼任	教授	アライ ヨシオ 荒居 善雄 <令和4年4月>		工学 博士		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.3)	
56	兼任	教授	アライ リカコ 荒木 稚子 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)	
57	兼任	教授	イケ ジュンイチ 池野 順一 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平11.10)	
58	兼任	教授	オハラ テツロウ 小原 哲郎 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平4.4)	
59	兼任	教授	カゲヤマ ケンスケ 蔭山 健介 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.4)	
60	兼任	教授	タカシ マサキ 高崎 正也 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平13.4)	
61	兼任	教授	チガミネ タカオ 長嶺 拓夫 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.4)	
62	兼任	教授	ヒラハラ ヒロユキ 平原 裕行 <令和4年4月>		工学 博士		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭62.10)	
63	兼任	教授	ヤマモト ヒロシ 山本 浩 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.4)	
64	兼任	教授	ワタナベ テツヤ 渡邊 鉄也 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平11.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
65	兼任	教授	ワサキ ケイ 綿貫 啓一 <令和4年4月>		工学 博士		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)	
66	兼任	教授	ウチムラ タロウ 内村 太郎 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平28.10)	
67	兼任	教授	ウヰ ヨシキ 奥井 義昭 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平1.4)	
68	兼任	教授	ナガタ マサヒコ 長田 昌彦 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平1.4)	
69	兼任	教授	カワムト ケン 川本 健 <令和4年4月>		博士 (農学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.4)	
70	兼任	教授	クボタ ヒロシ 久保田 尚 <令和4年4月>		工学 博士		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭63.6)	
71	兼任	教授	クノ ジョウ 桑野 二郎 <令和4年4月>		工学 博士		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平17.5)	
72	兼任	教授	サイノウ マサト 齊藤 正人 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平13.4)	
73	兼任	教授	タナカ リョウ 田中 規夫 <令和4年4月>		工学 博士		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.4)	
74	兼任	教授	フジノ タツ 藤野 毅 <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 未来デザイン・バックキャス ト論 応用学際インターンシップ 科学技術応用学際特別演習 I 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別輪講 I 科学技術応用学際特別輪講 II	1通 2通 1・2③~④ 1・2通 1・2①~② 1・2③~④ 1①~② 1③~④		6 6 2 2 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平8.6)	
75	兼任	教授	マキ タケシ 牧 剛史 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.4)	
76	兼任	教授	マツモト ケイタロウ 松本 泰尚 <令和4年4月>		Ph.D (イギリス)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平11.10)	
77	兼任	教授	ヒロカ コウキ 広田 幸紀 <令和4年4月>		博士 (経済学)		Public Policies and SGDs	1・2①~②		2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学研究所 教授 (平30.4)	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
78	兼任	教授	アンドウ トシロ 安藤 聡彦 <令和4年4月>		博士 (社会学)		グローバルパートナーシップ	1・2③~④		1	1	埼玉大学 教育学部 教授 (平11.11)	
79	兼任	准教授	カガキ マコト 長沢 誠 <令和4年4月>		修士 (教育学)		国際教育特別演習	1・2①~②		2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学部 准教授 (平25.4)	
80	兼任	准教授	イシカワ トキ 石川 寿樹 <令和4年4月>		博士 (農学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	
81	兼任	准教授	オオカ コウイチ 大塚 裕一 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平30.4)	
82	兼任	准教授	トヨタ マサツグ 豊田 正嗣 <令和4年4月>		博士 (医学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平28.10)	
83	兼任	准教授	フジシロ カン 藤城 貴史 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平27.4)	
84	兼任	准教授	ヤマギチ マサトシ 山口 雅利 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2 植物分子育種学特論 科学技術応用学際特別演習Ⅰ 科学技術応用学際特別演習Ⅱ 科学技術応用学際特別演習Ⅲ 科学技術応用学際特別演習Ⅳ	1通 2通 1・2①~② 1・2①~② 1・2③~④ 1①~② 1③~④		6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平23.8)	
85	兼任	准教授	カミムラ アキノリ 川村 哲規 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平19.10)	
86	兼任	准教授	ツグノ サチコ 津田 佐知子 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	
87	兼任	准教授	ハカヤマ シン 畠山 晋 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.10)	
88	兼任	准教授	コサカ マサシ 小坂 昌史 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平10.3)	
89	兼任	准教授	サトウ コウスケ 佐藤 浩介 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平29.10)	
90	兼任	准教授	サトウ ジョウ 佐藤 丈 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学輪講Ⅰ 物理学輪講Ⅱ	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平14.9)	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 等の職務に 従事する週当 たり平均日数
91	兼担	准教授	タガチ ヒロミ 谷口 弘三 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論講 I 物理学論講 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.4)	
92	兼担	准教授	テラタ ユキカ 寺田 幸功 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論講 I 物理学論講 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平19.10) 国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 特任准教授 (平31.4)	
93	兼担	准教授	ヤマギチ タケノ 山口 貴之 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論講 I 物理学論講 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平15.12) 筑波大学 数理物質系 准教授 (平28.12)	
94	兼担	准教授	オオアサ ユミコ 大朝 由美子 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論講 I 物理学論講 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	埼玉大学 教育学部 准教授 (平21.4)	
95	兼担	准教授	スギハラ ヨシアキ 杉原 儀昭 <令和4年4月>		博士 (薬学)		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.4)	
96	兼担	准教授	フジハラ タカシ 藤原 隆司 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.11)	
97	兼担	准教授	マエダ キミノリ 前田 公憲 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	
98	兼担	准教授	イシマル ヨシヒロ 石丸 雄大 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平6.4)	
99	兼担	准教授	サキハラ ヒロシ 荻原 仁志 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平29.4)	
100	兼担	准教授	オノス タケヒロ 乙須 拓洋 <令和4年4月>		博士 (農学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平27.4)	
101	兼担	准教授	キノカ ヒデノリ 木下 英典 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平21.4)	
102	兼担	准教授	コガマ コウイチ 小玉 康一 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平20.4)	
103	兼担	准教授	スギキミホ 鈴木 美穂 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平2.11)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
104	兼担	准教授	セキグチ カズヒロ 関口 和彦 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平11.7)	
105	兼担	准教授	ハノケン 幡野 健 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.4)	
106	兼担	准教授	フジモリ アツヒロ 藤森 厚裕 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平23.4)	
107	兼担	准教授	ホンマ シュンジ 本間 俊司 <令和4年4月>		博士 (工学)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平1.4)	
108	兼担	准教授	ヤシイノ 柳瀬 郁夫 <令和4年4月>		博士 (学術)		応用化学特別研究	1~2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.1)	
109	兼担	准教授	エヒハラ マトカ 海老原 円 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.10)	
110	兼担	准教授	サクライ ヨウヘイ 櫻井 陽平 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (令3.4)	
111	兼担	准教授	サトウ ヨウヘイ 佐藤 洋平 <令和4年4月>		博士 (理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.10)	
112	兼担	准教授	オヒハラ マサユキ 大平 昌敬 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平22.4)	
113	兼担	准教授	カサヅキ コウイチ 柿崎 浩一 <令和4年4月>		博士 (学術)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平6.7)	
114	兼担	准教授	カシマ ケンジ 神島 謙二 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平15.4)	
115	兼担	准教授	キムラ コウイチ 木村 雄一 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.4)	
116	兼担	准教授	シオカ タツシ 塩田 達俊 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.4)	
117	兼担	准教授	タノ トオル 田井野 徹 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平14.10)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当	単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
118	兼任	准教授	ツツトシキ 辻 俊明 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平19.4)	
119	兼任	准教授	ハセガワ ヤスヒロ 長谷川 靖洋 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.12)	
120	兼任	准教授	ハセガワ キ 長谷川 有貴 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学 情報メディア基盤センター 准教授 (平14.4)	
121	兼任	准教授	ヒシカタ ヤスト 土方 泰斗 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平11.10)	
122	兼任	准教授	ホンダ センタロウ 本多 善太郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.10)	
123	兼任	准教授	ヤギ シウヘイ 八木 修平 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平22.4)	
124	兼任	准教授	ヤマノ ヤスシ 山納 康 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平12.4) 筑波大学 数理物質系 准教授 (平31.4)	
125	兼任	准教授	アヅミ タカ 安積 卓也 <令和4年4月>		博士 (情報科学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平30.4)	
126	兼任	准教授	オホス ジュン 大久保 潤 <令和4年4月>		博士 (情報科学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平27.5)	
127	兼任	准教授	ゴトウ コウイチ 後藤 祐一 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平17.4)	
128	兼任	准教授	ツツミ ナルマサ 堤田 成政 <令和4年4月>		博士 (地球環境学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (令3.1)	
129	兼任	准教授	マツタ テツオ 松田 哲直 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (令3.4)	
130	兼任	准教授	マツカ ヲスヒロ 松永 康佑 <令和4年4月>		博士 (理学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学 情報メディア基盤センター 准教授 (平31.4)	
131	兼任	准教授	ヤマダ トシノリ 山田 敏規 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通		6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平15.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
132	兼任	准教授	ヨシカワ ノブヒコ 吉川 宣一 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究Ⅰ プレゼンテーション特別演習	1通 1・2通	6 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.4)	
133	兼任	准教授	カヅノ カズノリ 楓 和憲 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平21.4)	
134	兼任	准教授	カネゴ ジョウイチ 金子 順一 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.4)	
135	兼任	准教授	カン トシロク 姜 東赫 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平30.3)	
136	兼任	准教授	コトカ シヤ 琴坂 信哉 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.4)	
137	兼任	准教授	カイ タケノブ 坂井 建宜 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	
138	兼任	准教授	オトコ コチハル 田所 千治 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平28.4)	
139	兼任	准教授	ナカガキ テルマサ 成川 輝真 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平24.4)	
140	兼任	准教授	ハラ マサユキ 原 正之 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.9)	
141	兼任	准教授	ホシマ リョウイチ 程島 竜一 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平22.4)	
142	兼任	准教授	マエダ シンイチ 前田 慎市 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究Ⅰ 機械科学特別研究Ⅱ 機械科学輪講Ⅰ 機械科学輪講Ⅱ	1通 2通 1通 2通	3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.4)	
143	兼任	准教授	アサヒ シノブ 浅本 晋吾 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平18.6)	
144	兼任	准教授	コガチ テキ 小口 千明 <令和4年4月>		博士 (理学)		環境社会基盤国際特別研究Ⅰ 環境社会基盤国際特別研究Ⅱ 地球システム科学特論 科学技術応用学際特別演習Ⅰ 科学技術応用学際特別演習Ⅱ 科学技術応用学際特別輪講Ⅰ 科学技術応用学際特別輪講Ⅱ	1通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1・2③～④ 1①～② 1③～④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.6)	

**教 員 の 氏 名 等**

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
145	兼任	准教授	コジマ アキ 小嶋 文 <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平24.4)	
146	兼任	准教授	タニヤマ ヒロシ 谷山 尚 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平3.4)	
147	兼任	准教授	トリキ 覚 紀 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.4)	
148	兼任	准教授	フカヒ キョウカ 深堀 清隆 <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II 地域景観特論 科学技術応用学際特別演習 I 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別輪講 I 科学技術応用学際特別輪講 II	1通 2通 1・2①～② 1・2①～② 1・2③～④ 1①～② 1③～④		6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平9.4)	
149	兼任	准教授	モキ ヒデノリ 茂木 秀則 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平6.4)	
150	兼任	准教授	ヤキチ シュンジ 八木澤 順治 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平21.4)	
151	兼任	准教授	アサキ ケンカ 有賀 健高 <令和4年4月>		Ph. D (アメリ カ合衆 国)		環境経済学	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 人文社会科学部 准教授 (平29.4)	
152	兼任	准教授	アラキ ユウジ 荒木 祐二 <令和4年4月>		博士 (環境学)		農作物栽培技術演習	1・2③～④		1	1	埼玉大学 教育学部 准教授 (平23.4)	
153	兼任	講師	コレエガ シン 是枝 晋 <令和4年4月>		理学 博士		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平3.4)	
154	兼任	講師	マツカ サトシ 松岡 聡 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 講師 (平20.1)	
155	兼任	講師	サイノウ ヒロキ 齋藤 英樹 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平6.10)	
156	兼任	講師	サイノウ オオキ 佐藤 大 <令和4年4月>		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平6.4)	
157	兼任	講師	タカガキ タケ 太刀川 達也 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平5.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
158	兼任	講師	ヤスカ ミチ 安武 幹雄 <令和4年4月>		博士 (理学)		応用化学特別研究	1~2通	12	1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 講師 (平15.7)	
159	兼任	助教	カハシ タイス 高橋 大輔 <令和4年4月>		博士 (農学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	
160	兼任	助教	カハシ トモ 高橋 朋子 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	
161	兼任	助教	カハシ ヒロコ 高橋 拓子 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.3)	
162	兼任	助教	イノウエ ユウコ 井上 悠子 <令和4年4月>		博士 (食品栄 養科学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平24.4)	
163	兼任	助教	タケノ ショウタ 竹見 祥大 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.1)	
164	兼任	助教	ヨシハラ リョウヘイ 吉原 亮平 <令和4年4月>		博士 (農学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平26.4)	
165	兼任	助教	フルダテ ヒロユキ 古舘 宏之 <令和4年4月>		博士 (理学)		生体制御学特別研究1 生体制御学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 助教 (平7.10)	
166	兼任	助教	エバタ シュウイチロウ 江幡 修一郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通	6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.12)	
167	兼任	助教	カツタ サトル 勝田 哲 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通	6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平29.10)	
168	兼任	助教	コバヤシ タケ 小林 拓矢 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通	6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.4)	
169	兼任	助教	シカガ ヒロシ 品岡 寛 <令和4年4月>		博士 (工学)		物理学特別研究1 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通	6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.10)	
170	兼任	助教	ホノ シンタロウ 星野 晋太郎 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通	6 3 3	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平29.10)	
171	兼任	助教	ミムラ シンジ 道村 真司 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通	6 3 3	1 1 1	埼玉大学研究機構 科学分析支援センター 助教 (平24.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任（予定）年月＞	年齢	保有 学位等	月額 基本給 （千円）	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 講 数	現 職 （就任年月）	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
172	兼任	助教	カシマ ヒロキ 長嶋 宏樹 ＜令和4年4月＞		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	
173	兼任	助教	ナカノ リョウ 中田 憲男 ＜令和4年4月＞		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平18.4)	
174	兼任	助教	フルカワ シュンク 古川 俊輔 ＜令和4年4月＞		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平26.8)	
175	兼任	助教	ヤノ トモキ 矢後 友暁 ＜令和4年4月＞		博士 (理学)		基礎化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平19.4)	
176	兼任	助教	イシハラ ヒデアキ 石原 日出一 ＜令和4年4月＞		修士 (工学)		応用化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平6.4)	
177	兼任	助教	ワウ イイ WANG Weiqian ＜令和4年4月＞		博士 (工学)		応用化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.10)	
178	兼任	助教	コダマ ショウヘイ 小玉 翔平 ＜令和4年4月＞		博士 (工学)		応用化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令3.4)	
179	兼任	助教	カガチ ミチキ 坂口 美幸 ＜令和4年4月＞		博士 (理学)		応用化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.11)	
180	兼任	助教	ハンカ ユイコ 半田 友衣子 ＜令和4年4月＞		博士 (理学)		応用化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平28.4)	
181	兼任	助教	マツタ ケイコ 松下 隆彦 ＜令和4年4月＞		博士 (理学)		応用化学特別研究	1～2通		12	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.10)	
182	兼任	助教	エカシラ シンジ 江頭 信二 ＜令和4年4月＞		博士 (数理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平6.4)	
183	兼任	助教	カネミツ アキヒロ 金光 秋博 ＜令和4年4月＞		博士 (数理学)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令3.4)	
184	兼任	助教	ジャン ステファン コスキヴィルタ Jean Stefan KOSKIVIRTA ＜令和4年4月＞		PhD in Mathemati cs (フラン ス)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.10)	
185	兼任	助教	カハシ ユキ 高橋 悠樹 ＜令和4年4月＞		PhD in Mathemati cs (アメ リカ合衆 国)		数学特別研究1 数学特別研究2	1通 2通		6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.10)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
186	兼任	助教	イカガ リョウ 石川 良 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平25.4)	
187	兼任	助教	イナダ ムキ 稲田 優貴 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.4)	
188	兼任	助教	シズマ マキ 清水 麻希 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	
189	兼任	助教	ナカ マサト 成瀬 雅人 <令和4年4月>		博士 (理学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平24.4)	
190	兼任	助教	フジカ サチ 藤川 紗千恵 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令1.10)	
191	兼任	助教	マヘ テツヤ 間邊 哲也 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子物理工学特別研究I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平25.4)	
192	兼任	助教	カノ カズタカ 菅野 円隆 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.4)	
193	兼任	助教	キムラ ケイ 木村 慧 <令和4年4月>		博士 (情報理 工学)		情報工学特別研究 I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	
194	兼任	助教	シマダ ユカ 島田 裕 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.1)	
195	兼任	助教	シギハラ ヒロカ 杉浦 陽介 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.4)	
196	兼任	助教	ヤスイ ノブミ 安井 希子 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報工学特別研究 I	1通		6	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.9)	
197	兼任	助教	アベ タケユキ 阿部 壮志 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学特別研究 I 機械科学特別研究 II 機械科学輪講 I 機械科学輪講 II	1通 2通 1通 2通		3 3 3 3	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.1)	
198	兼任	助教	テイエイ 鄭 穎 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学輪講 I 機械科学輪講 II	1通 2通		3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平16.4)	
199	兼任	助教	ナガサキ ヨシノ 成澤 慶宜 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学輪講 I 機械科学輪講 II	1通 2通		3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
200	兼任	助教	ヤマダ ノブユキ 山田 典靖 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学輪講 I 機械科学輪講 II	1通 2通	3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平31.4)	
201	兼任	助教	ヤマダ ヨウヘイ 山田 洋平 <令和4年4月>		博士 (工学)		機械科学輪講 I 機械科学輪講 II	1通 2通	3 3	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平27.4)	
202	兼任	助教	イハシ ヨシヤ 五十嵐 善哉 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (令2.4)	
203	兼任	助教	カノウ テツペイ 加藤 哲平 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.4)	
204	兼任	助教	ゴイト チャンドラ シェカー Goit Chandra Shekhar <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平28.4)	
205	兼任	助教	セナビラタナ ムタリケ トシ ヒラニヤ シンヤサカ Senavirathna M D H Jayasanka <令和4年4月>		博士 (学術)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II Rural environment and ecosystem 科学技術応用学際特別演習 I 科学技術応用学際特別演習 II 科学技術応用学際特別輪講 I 科学技術応用学際特別輪講 II	1通 2通 1・2③~④ 1・2①~② 1・2③~④ 1①~② 1③~④	6 6 2 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平29.8)	
206	兼任	助教	トカシ ヨウタ 富樫 陽太 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平30.3)	
207	兼任	助教	ルアン ヤオ Luan Yao <令和4年4月>		博士 (工学)		環境社会基盤国際特別研究 I 環境社会基盤国際特別研究 II	1通 2通	6 6	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平25.10)	
208	兼任	連携 教授	イマモト ナホ 今本 尚子 <令和4年4月>		医学 博士		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平10.5)	
209	兼任	連携 教授	スズキ タカシ 鈴木 匡 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 主任研究員 (平19.10)	
210	兼任	連携 教授	タカハシ シュンジ 高橋 俊二 <令和4年4月>		博士 (理学)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 ユニットリーダー (平17.6)	
211	兼任	連携 教授	ドウマエ ナホ 堂前 直 <令和4年4月>		博士 (学術)		分子生物学特別研究1 分子生物学特別研究2	1通 2通	6 6	1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 ユニットリーダー (平5.4)	
212	兼任	連携 教授	ウエカキ トモヒロ 上坂 友洋 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究1 物理学輪講 I 物理学輪講 II	1通 1・2通 1・2通	6 3 3	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 研究室長 (平23.4)	

## 教 員 の 氏 名 等

(理工学研究科 融合教育プログラム 地球環境における科学技術応用と融合プログラム)

調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
213	兼任	連携 教授	ツツキ ユウコ 望月 優子 <令和4年4月>		博士 (理学)		物理学特別研究I 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 研究室長 (平7.4)	
214	兼任	連携 教授	ハチハ ショウイチ 八戸 昭一 <令和4年4月>		博士 (工学)		環境地質学特論	1・2③		2	1	埼玉県環境科学国際セン ター 副室長 (平12.4)	
215	兼任	連携 准教授	ニオ マキコ 仁尾 真紀子 <令和4年4月>		Ph. D (アメリ カ合衆 国)		物理学特別研究I 物理学論議 I 物理学論議 II	1通 1・2通 1・2通		6 3 3	1 1 1	国立研究開発法人 理化学研究所 上級研究員 (平14.3)	
216	兼任	連携 准教授	ヨネグサ テツジ 米倉 哲志 <令和4年4月>		博士 (農学)		環境生物学特論	1・2④		2	1	埼玉県環境科学国際セン ター 主任研究員 (平17.10)	
217	兼任	連携 准教授	シマ イリ 見島 伊織 <令和4年4月>		博士 (工学)		水環境工学特論	1・2②		2	1	埼玉県環境科学国際セン ター 専門研究員 (平20.4)	
218	兼任	講師	アノ マモコ 有馬 百子 <令和4年4月>		博士 (工学)		知的財産権の概要とその活用	1・2①～②		2	1	棧橋国際特許事務所 代表 (平27.1)	
219	兼任	講師	コバヤシ ヒロリ 小林 寛典 <令和4年4月>		修士 (文化情 報)		科学技術日本語 I 科学技術日本語 II	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④		2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
220	兼任	講師	ヨシダ ミキ 吉田 美幸 <令和4年4月>		学士 (外国文 化)		科学技術日本語 I 科学技術日本語 II	1・2①～②・ ③～④ 1・2①～②・ ③～④		2 2	2 2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平29.10)	
221	兼任	講師	カシヤマ イヅミ 梶山 いづみ <令和4年4月>		文学士		科学技術日本語III	1・2①～②・ ③～④		2	2	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平27.7)	
222	兼任	講師	マツノ ノブオ 松野 信夫 <令和4年4月>		工学 修士		国際電気・環境規格特論	1・2③～④		2	1	関東学院大学大学院 工学研究科 非常勤講師 (平16.4)	
223	兼任	講師	ミサキ タカヒロ 三崎 貴弘 <令和4年4月>		博士 (工学)		データ解析学演習	1・2①～②		1	1	(株)建設環境研究所 研究員 (平30.4)	

- (注)
- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
  - 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校に於ける学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
  - 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。



教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 特別教育プログラム (A) 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	担 当 単 位 数	年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数	
1	兼担	教授	クボタ ヒロシ 久保田 尚 <令和4年4月>		工学 博士		社会デザインプロセス論 社会的意思決定論	2・3・4①～ ② 2・3・4③～ ④	2 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (昭63.6)		
2	兼担	教授	ワタスキ ケイイチ 綿貫 啓一 <令和4年4月>		工学 博士		システムデザイン序論	2・3・4③～ ④	2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)		
3	兼担	教授 (研究 科長)	クロカワ ヒデキ 黒川 秀樹 <令和4年4月>		工学 博士		イノベーションとマーケティング 課題解決型特別演習C 海外インターンシップ	2・3・4①～ ② 1・2③ 1・2通	2 1 2	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.9)		
4	兼担	教授	イトウ カズヒト 伊藤 和人 <令和4年4月>		博士 (工学)		電気電子と職業	3③～④	2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平7.5)		
5	兼担	教授	コムロ タカシ 小室 孝 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報と職業※	3①～②	0.4	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平23.4)		
6	兼担	教授	シムムラ テツヤ 島村 徹也 <令和4年4月>		工学 博士		情報と職業※	3①～②	0.4	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平3.4)		
7	兼担	教授	ウチダ アツシ 内田 淳史 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報と職業※	3①～②	0.4	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平20.4)		
8	兼担	教授	カワモト ケン 川本 健 <令和4年4月>		博士 (農学)		技術者と社会デザイン※ 課題探求型演習 I	3①～② 3③～④	0.3 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.4)		
9	兼担	教授	サイトリ マサト 齊藤 正人 <令和4年4月>		博士 (工学)		技術者と社会デザイン※ 課題探求型演習 I	3①～② 3③～④	0.1 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平13.4)		
10	兼担	教授	マツモト ヤスナオ 松本 泰尚 <令和4年4月>		Ph. D (イギリス)		技術者と社会デザイン※ 課題探求型演習 I	3①～② 3③～④	0.3 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平11.10)		
11	兼担	教授	クノ ジロウ 桑野 二郎 <令和4年4月>		工学 博士		技術者と社会デザイン※ 課題探求型演習 I 課題探求型演習 II	3①～② 3③～④ 2③～④	0.5 2 2	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平17.5)		
12	兼担	教授	タナカ リョウ 田中 規夫 <令和4年4月>		工学 博士		技術者と社会デザイン※ 課題探求型演習 I	3①～② 3③～④	0.1 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平12.4)		
13	兼担	教授	アライ マサトシ 新井 正敏 <令和4年4月>		修士 (工学)		産業創成論 課題解決型演習 I 課題解決型演習 II イノベーションとマーケティング 特論 課題解決型特別演習A	2・3・4③～ ④ 2・3・4①～ ② 2・3・4③～ ④ 1・2通	2 2 2 2 8	1 1 1 1 4	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平27.12)  マレリ (株) テクノロジーオフィサ		

教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 特別教育プログラム(A) 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
14	兼担	教授	コバヤシ ユウイチ 小林 裕一 <令和4年4月>		経済 学士		技術者のための産業経営論 技術者のための産業経営特論	2・3・4①～ ②		2	1	埼玉大学研究機構 オープンイノベーションセンター 教授 (平27.4)	
15	兼担	教授	オハラ テロウ 小原 哲郎 <令和4年4月>		博士 (工学)		課題探索型セミナー I	3通		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平4.4)	
16	兼担	教授	テラモト ススム 寺本 進 <令和4年4月>		工学士		課題解決型特別演習B	1・2①～②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令2.12)	
17	兼担	准教授	コシマ アヤ 小嶋 文 <令和4年4月>		博士 (学術)		社会的意識決定論 技術者と社会デザイン※	2・3・4③～ ④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平24.4)	
18	兼担	准教授	カホリ キョウカ 深堀 清隆 <令和4年4月>		博士 (学術)		社会的意識決定論 環境まちづくり	2・3・4③～ ④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平9.4)	
19	兼担	准教授	ゴトウ ユウイチ 後藤 祐一 <令和4年4月>		博士 (工学)		情報と職業※	3①～②		0.3	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平17.4)	
20	兼担	准教授	アヅミ タカキ 安積 卓也 <令和4年4月>		博士 (情報科 学)		情報と職業※	3①～②		0.3	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平30.4)	
21	兼担	准教授	マツカガ ヤスヒロ 松永 康佑 <令和4年4月>		博士 (理学)		情報と職業※	3①～②		0.3	1	埼玉大学 情報メディア基盤センター 准教授 (平31.4)	
22	兼担	准教授	オガチ テアキ 小口 千明 <令和4年4月>		博士 (理学)		技術者と社会デザイン※	3①～②		0.5	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平16.6)	
23	兼担	准教授	ハラ マサキ 原 正之 <令和4年4月>		博士 (工学)		ものづくり創造演習	4通		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.9)	
24	兼担	准教授	マエタ シンイチ 前田 慎市 <令和4年4月>		博士 (工学)		課題探索型セミナー I	3通		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平25.4)	
25	兼担	准教授	コサカ シンヤ 琴坂 信哉 <令和4年4月>		博士 (工学)		課題探索型セミナー II	3③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平13.4)	
26	兼担	准教授	ホシマ リョウイチ 程島 竜一 <令和4年4月>		博士 (工学)		課題探索型セミナー II	3③～④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平22.4)	

教 員 の 氏 名 等													
（理工学研究科 特別教育プログラム（A） 6年一貫型イノベーション人材育成プログラム）													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	当 年 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
27	兼任	助教	ゴイト チャンドラ シェカー Goit Chandra Shekhar <令和4年4月>		博士 (学術)		課題探求型演習Ⅰ	3③~④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平28.4)	
28	兼任	助教	ルアン ヤオ Luan Yao <令和4年4月>		博士 (工学)		課題探求型演習Ⅱ	2③~④		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平25.10)	
29	兼任	講師	カサ マサシ 笠谷 昌史 <令和4年4月>		工学 修士		機械と職業	3①~②		2	1	埼玉大学工学部 非常勤講師 (令2.4)	
30	兼任	講師	ニシオ タク 西尾 拓 <令和4年4月>		博士 (工学)		化学と職業※	3③~④		0.7	1	ライオン株式会社 生産技術研究本部 プロセス技術研究所 (平2.4)	
31	兼任	講師	ヤマダ アキヒロ 山田 明宏 <令和4年4月>		博士 (工学)		化学と職業※	3③~④		0.7	1	日油株式会社 油化学研究所 ポリマー研究GL (平19.4)	
32	兼任	講師	アサヒ ミキ 足立 美紀 <令和4年4月>		学士 (工学)		化学と職業※	3③~④		0.1	1	三菱マテリアル（株） 中央研究所 主任研究員 (平5.4)	
33	兼任	講師	フジワラ カズノブ 藤原 和崇 <令和4年4月>		学士 (工学)		化学と職業※	3③~④		0.3	1	三菱マテリアル（株） 中央研究所 主任研究員 (平9.4)	
34	兼任	講師	カガトモ ヨシキ 長友 義幸 <令和4年4月>		博士 (工学)		化学と職業※	3③~④		0.3	1	三菱マテリアル（株） 中央研究所 上席研究員 (平5.4)	
35	兼任	講師	フルイト ミル 古里 実 <令和4年4月>		工学 博士		技術者と社会デザイン※	3①~②		0.1	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 非常勤講師 (平31.4)	
36	兼任	講師	ミヤウチ マサヒ 宮内 正臣 <令和4年4月>		経営 修士		課題解決型演習Ⅰ 課題解決型演習Ⅱ	2・3・4①~ ② 2・3・4③~ ④		2 2	1 1	埼玉大学工学部 非常勤講師 (令2.4)	
37	兼任	講師	スギノ カズミ 杉岡 真紀 <令和4年4月>		修士 (被服材 料学)		科学技術と知的財産	2・3・4③~ ④		2	1	清水・細井特許事務所 弁理士 (平14.1)	
38	兼任	講師	アリマ モモコ 有馬 百子 <令和4年4月>		博士 (工学)		知的財産権の概要とその活用	1・2①~②		2	1	栈橋国際特許事務所 代表 (平27.1)	

（注）

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。



教 員 の 氏 名 等													
(理工学研究科 特別教育プログラム(B) データサイエンティストとしての素養を備えた理工系人材育成プログラム)													
調書 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
1	兼任	教授	ヒヤマ カル 平松 薫 <令和4年4月>		博士 (情報学)		データサイエンス基礎 機械学習特論 データマイニング特別演習	1①~② 1・2③~④ 2①~②		2 2 2	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (令3.4)	
2	兼任	教授	コムロ タシ 小室 孝 <令和4年4月>		博士 (工学)		確率・統計基礎	2①~②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平23.4)	
3	兼任	准教授	コジマ アツ 小嶋 文 <令和4年4月>		博士 (学術)		確率・統計基礎	2①~②		2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平24.4)	
4	兼任	講師	キッカ ミサコ 吉川 美佐子 <令和4年4月>		博士 (理学)		確率・統計基礎	2①~②		2	1	埼玉大学 工学部 非常勤講師 (平30.4)	

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。



教 員 の 氏 名 等												
(理工学研究科 特別教育プログラム(C) ハイグレート理数教育プログラム6年一貫型 (HiSEP-6))												
調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年 次	担 当 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
1	兼任	教授	ナガサキ タケシ 長澤 壯之 <令和4年4月>		理学 博士		入門セミナー 基礎セミナー HiSEP特別講義 I インターンシップ HiSEP特別講義 II HiSEP特別講義 III	1①～② 1③～④ 1・2・3通 1・2・3・4 通 1①～② 1③～④	2 2 2 1 2 2	1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平15.10)	
2	兼任	教授	タナ シユウイ 田中 秀逸 <令和4年4月>		博士 (理学)		特別研究 I 特別研究 II アウトリーチ活動 I アウトリーチ活動 II	1通 2通 1・2・3通 1・2・3通	2 2 1 1	1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平16.2)	
3	兼任	教授 (研究 科長)	クワカヒ ヒデキ 黒川 秀樹 <令和4年4月>		工学 博士		海外インターンシップ	1・2通	2	1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平9.9)	
4	兼任	准教授	ヤマギチ マサトシ 山口 雅利 <令和4年4月>		博士 (理学)		入門セミナー 基礎セミナー 科学プレゼンテーション I HiSEP特別講義 I 科学プレゼンテーション II 科学プレゼンテーション III HiSEP特別講義 II HiSEP特別講義 III	1①～② 1③～④ 2③～④ 1・2・3通 1①～② 1③～④ 1①～② 1③～④	2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平23.8)	
5	兼任	准教授	ツカサ サチコ 津田 佐知子 <令和4年4月>		博士 (理学)		入門セミナー 基礎セミナー 科学プレゼンテーション I HiSEP特別講義 I 科学プレゼンテーション II 科学プレゼンテーション III HiSEP特別講義 II HiSEP特別講義 III	1①～② 1③～④ 2③～④ 1・2・3通 1①～② 1③～④ 1①～② 1③～④	2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平26.4)	
6	兼任	准教授	エビハラ マドカ 海老原 円 <令和4年4月>		博士 (理学)		特別研究 I 特別研究 II	1通 2通	2 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.10)	
7	兼任	准教授	フジハラ タカシ 藤原 隆司 <令和4年4月>		博士 (理学)		特別研究 I 特別研究 II	1通 2通	2 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 准教授 (平7.11)	
8	兼任	講師	サトリ オオキ 佐藤 大 <令和4年4月>		博士 (理学)		入門セミナー 基礎セミナー 科学プレゼンテーション I HiSEP特別講義 I 科学プレゼンテーション II 科学プレゼンテーション III HiSEP特別講義 II HiSEP特別講義 III	1①～② 1③～④ 2③～④ 1・2・3通 1①～② 1③～④ 1①～② 1③～④	2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平6.4)	
9	兼任	講師	コレタガ シ 是枝 晋 <令和4年4月>		理学 博士		特別研究 I 特別研究 II	1通 2通	2 2	1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 講師 (平3.4)	
10	兼任	助教	エガシラ シンジ 江頭 信二 <令和4年4月>		博士 (数理科 学)		科学プレゼンテーション I 科学プレゼンテーション II 科学プレゼンテーション III	2③～④ 1①～② 1③～④	2 2 2	1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 助教 (平6.4)	
11	兼任	講師	イノウエ ナヲ 井上 直也 <令和4年4月>		理学 博士		基礎セミナー HiSEP特別講義 I HiSEP特別講義 II HiSEP特別講義 III	1③～④ 1・2・3通 1①～② 1③～④	2 2 2 2	1 1 1 1	埼玉大学 シニアプロフェッサー (令3.4)	

教 員 の 氏 名 等													
（理工学研究科 特別教育プログラム（C） ハイグレード理数教育プログラム6年一貫型（HiSEP-6））													
調査 番号	専任等 区分	職位	フリガナ 氏名 <就任(予定)年月>	年齢	保有 学位等	月額 基本給 (千円)	担当授業科目の名称	配 年	当 次	担 単 位 数	年 間 開 講 数	現 職 (就任年月)	申請に係る大 学等の職務に 従事する週当 たり平均日数
12	兼任	講師	ヨシガ 尚孝 吉永 尚孝 <令和4年4月>		理学 博士		入門セミナー 基礎セミナー 特別研究Ⅰ 特別研究Ⅱ 科学プレゼンテーションⅠ 科学プレゼンテーションⅡ 科学プレゼンテーションⅢ	1①～② 1③～④ 1通 2通 2③～④ 1①～② 1③～④		2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1	埼玉大学大学院 理工学研究科 教授 (平2.10)	

(注)

- 1 教員の数に応じ、適宜枠を増やして記入すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は、専任教員のみ記載すること。

専任教員の年齢構成・学位保有状況										
(理工学研究科 生命科学専攻)										
職 位	学 位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	1人	6人	4人	人	人	11人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博 士	人	人	5人	3人	人	人	人	8人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	人	人	人	1人	人	人	1人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	3人	3人	人	人	人	人	6人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	3人	9人	9人	5人	人	人	26人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- 1 この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- 2 この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- 3 この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。
- 4 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。



専任教員の年齢構成・学位保有状況										
(理工学研究科 物質科学専攻)										
職 位	学 位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	人	7人	7人	2人	人	16人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博 士	人	人	6人	13人	1人	人	人	20人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	人	人	3人	人	人	人	3人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	6人	8人	人	人	人	人	14人	
	修 士	人	人	人	1人	人	人	人	1人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	6人	14人	23人	8人	2人	人	53人	
	修 士	人	人	人	1人	人	人	人	1人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。
- 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。



専任教員の年齢構成・学位保有状況										
(理工学研究科 数理電子情報専攻)										
職 位	学 位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	1人	12人	9人	1人	人	23人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博 士	人	2人	8人	11人	1人	人	人	22人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	12人	4人	1人	人	人	人	17人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	14人	13人	24人	10人	1人	人	62人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。
- 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。



専任教員の年齢構成・学位保有状況										
(理工学研究科 機械科学専攻)										
職 位	学 位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	1人	4人	5人	1人	人	11人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博 士	人	人	8人	1人	1人	人	人	10人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	4人	人	1人	人	人	人	5人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	4人	9人	6人	6人	1人	人	26人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。
- 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。



専任教員の年齢構成・学位保有状況										
(理工学研究科 環境社会基盤専攻)										
職 位	学 位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合 計	備 考
教 授	博 士	人	人	人	7人	2人	2人	人	11人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博 士	人	人	4人	4人	人	人	人	8人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講 師	博 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助 教	博 士	人	3人	3人	人	人	人	人	6人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合 計	博 士	人	3人	7人	11人	2人	2人	人	25人	
	修 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学 士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

(注)

- この書類は、申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
- この書類は、専任教員についてのみ、作成すること。
- この書類は、申請又は届出に係る学部等の開設後、当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度における状況を記載すること。
- 専門職大学院若しくは専門職大学の前期課程を修了した者又は専門職大学又は専門職短期大学を卒業した者に対し授与された学位については、「その他」の欄にその数を記載し、「備考」の欄に、具体的な学位名称を付記すること。